
道程

実川渉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

道程

【ZETATE】

Z9993T

【作者名】

実川渉

【あらすじ】

君を思ふ 心はなどか あさからむ 畏玉の緒の あらんかぎり
は

常陸の領主・佐竹義宣は、心を閉ざし寵童との狭い世界に満足していました。

だが、世継ぎが生まれないため家臣のすすめで従妹である吉瀬御台を側室に迎えた。自分の殻に閉じこもるつとする義宣と吉瀬御台は反発するが、徐々に歩み寄り惹かれあうようになる。

岩瀬御台との出会いにより、義宣は自分の過去と向き合って成長していく。

戦国時代末期～江戸時代初期、佐竹義宣の生涯と側室・岩瀬御台とその周りの人々の物語。

この作品は戦国時代末期～江戸時代初期の実在の人物・出来事を題材にしたフィクションです。

「時雨」(<http://tokisame.yaekumo.com/>)掲載作品の転載です。

無垢のナニヤ（一）

無垢の白を染める赤。

白い打掛を染める赤い血痕を義宣はじつと見つめた。打掛を染める血は、乾ききっているはずなのだが、まだ乾いていない血のように赤く鮮やかだった。打掛を手に取って血痕に触れてみると、これが、あの女の血か。

黙つて打掛をなぞる義宣が恐ろしいのか、この打掛を義宣のもとへ持つてきた侍女は、怯えたように平伏していた。義宣が侍女へ視線を投げると、それを感じたのか侍女はますます深く頭を下げた。

「御台は、なぜ死んだ？」

義宣の問いに肩を震わせた侍女は、はい、と答えた声まで震えていた。

「御台さまは、急な病に侵されまして、ご病死なされました」

「病死。御台は急に胸でも患つたのか。それで、吐血をして死んだ。そういうことか？」

「仰せのとおりでござります」

「どうか」

手にしていた打掛を侍女の前に投げた。侍女は、どうすればいいのか戸惑っているようだ。

「あの、じうらはいかがいたしましたよ、つか？」

「燃やせ

「え？」

「跡形もなくなるように燃やしてしまえ。御台の遺品はすべて燃やせ。御台が急な病で死んだのだ。御台の遺品に、その病のもととなつたものがあるかもしないだろ？」

「ですが、すべてでござりますか？ 打掛も、小袖も、何もかも」

「俺がそう言つている。御台の遺品はすべて燃やす。そうだな、鳥山の方角に向けて燃やしてやれば、御台も喜ぶのではないか」

御台が喜ぶ、などということは、御台が生きている間一度も考えたことはなかつた。死んでから初めて口にするなど、笑えてくる。はつ、と自嘲の笑みを漏らすと、侍女は言いくつそくに、あの、と口を開いた。

「実は、この打掛は御台様が殿様にお届けするようになると遺言されたものです。それでも、燃やさなければならないのですか？」

「燃やしたくないのか？」

「あ、いえ、その」

口^じもる侍女は、否定の言葉を口^こしようとしているが、その態度を見れば何を望んでいるかは明らかだ。義宣は立ち上がり、侍女が胸に抱こうとした打掛をむずと掴んだ。

「お前が燃やしたくないというのならば、俺が燃やすまでのことだ。御台は俺に受け取つてほしがつていたのだろう？ならば、俺が手ずから灰にしてやる。お前は御台の遺品を燃やせ。畳も襖もすべてだ。御台の血がついているだろうからな」

御台の血、という言葉をわざとらしく言つてやると、侍女は慌てて義宣の前から立ち去つた。急いで太田城おおたじょうに帰り、ほかの侍女たちと手分けをして御台の遺品を片付けるのだろう。本当に燃やすかどうかは分からない。ただ、義宣の気持ちとしてはすべて燃やしてしまひたかった。

小姓に命じて、庭で打掛を燃やす準備をさせた。小姓たちは、そのようなこと我らが行います、と言つたが、義宣が燃やさなければ意味がないのだ。御台は義宣に渡すよう命じた。ならば、燃やすとしたら、それを受け取つた義宣が燃やすべきなのだ。

準備が整い、赤々と燃える炎の中に打掛を放り投げた。打掛は炎に包まれ、染み込んだ御台の血^じと燃えていく。その様を義宣は目を逸らさずにじっと見ていた。

「どこまでも、那須の女か」

ぱつりと呟いた言葉は炎の音に飲み込まれた。燃え尽きた打掛は灰となり、風に吹かれて空へと舞い上がつた。

御台が死んで一月も経たないうちに、義宣の継室は多賀谷重經の娘と決まった。どうやら、重經が必死に父に頼み込んだらしい。もともと人質として差し出していた娘を側室にしてくれというのならまだ分かるが、当主の継室にしてくれというのは、おかしな話のように思う。義宣が多賀谷の姫を望んだわけでもない。

だが、誰でもよかつた。ただ、義宣に逆らわない女ならばよかつた。その点、人質となっている多賀谷の姫はうつてつけなのかもしない。父から持ち出されたこの話を、義宣はすぐに承諾した。

家中では御台が死んで一月も経っていないのに、もう継室を定めたことを快く思つていらない者もいるようだつた。そのせいか、それとも義宣が御台の遺品を燃やせと命じせいか、御台は病死ではなく義宣が殺したのだとか、自害をしたのだとかいう噂が広まつた。言いたい人間には言わせておけばいい。半年も経つたら、どうせ誰もが御台のことなど忘れてしまつに違ひない。義宣も、あの女のことは忘れてしまつたかった。だが、白い打掛に染み込んだ赤い血が、なかなか義宣の脳裏からは消えてくれない。

「殿」

自分を呼ぶ声に義宣は現実に引き戻された。廊下を歩いていた義宣の後ろには、人見藤道ひとみふじみちが立つていた。

「どうした、主膳」

「実は、殿に推挙したい者がおります」

「ほう」

「一年ほど私のもとに置いていたのですが、なかなか聰明で、共に仕事を任せられた者たちなど神童と呼ぶほどなのです。きっと殿のお役に立ちますよ」

「神童か」

その評判がどこまで本当のことかは分からぬが、藤道がすすめるその神童とやらに会つてみるのもいいかもしない。御台が死に、

その死をめぐって様々な噂が飛び交うこの状況は不愉快だ。何か新しいものを取り入れるのも悪くない。もしかしたら、藤道もそれを考えて義宣に推挙の話を持ってきたのかもしれない。

「いいだろう、分かった。内膳を推挙してきた主膳の目に狂いはないだろう。近いうちに吉日を選んで連れてこい。噂の神童に会おう」
はい、と言つて頭を下げて藤道は去つて行つた。後ろ姿から藤道の意気込みが伝わつてくるようだつた。藤道がかつて推挙した渋江政光まさみつは優秀な人材で、義宣は政光を重用していた。

藤道に小さく苦笑しながら、政光を推挙した藤道が、今度はどのよつた神童を連れてくるのか、義宣は少しだけ楽しみに思つていた。

穿きなれぬ袴の裾に足を取られそうになつて、金阿弥は少しよろめいた。それに気付いたのか藤道が振り向く。恥ずかしくて、何事もなかつたように振る舞つたが、藤道は苦笑していた。

初めて上がる城内は緊張する。藤道の屋敷も立派な屋敷だと思うが、やはり城となると規模が全く違う。歩いている廊下も磨き上げられていて、もしかしたら自分の姿が映るのではないか、と思つてしまふ。先導する藤道の背中を追いかけるので精一杯だった。数日前までは、自分が城に上がるなど考えたこともなかつた。兄の憲忠は城で殿様である義宣の側近くに仕えているが、末っ子の自分は、せいぜい出世して藤道の祐筆ゆひつになればいい方だと思つていた。

それに、いくら兄が殿様の側近くに仕えているといつても、梅津うづ家は浪人出身の新参者だ。金阿弥は藤道に会うことすら滅多にないのでから、まさか城に住むような高貴な人物と会えるとは思つてもみなかつたのだ。

だが、数日前に城から戻つた藤道にいきなり呼び出され、お見見えが許されたことを告げられた。何のことか分からず、ぽかんとしていると、殿様にお会いするのだ、と教えられた。

その日から毎日、城に上がつた時の礼儀作法や、義宣にお見見えしたときの振る舞い方などをみつちりと教え込まれた。兄にもどうすればいいか聞いた。兄は、そう難しく考へることはない、と言つてくれた。父は金阿弥がお見えを許されたことをとても喜んでくれた。

今日は朝から譜代の子弟が着るような質の良い小袖と袴を着せられた。さすがにいつも着ているものでは粗末すぎて、殿様の御前には上がれないのだろう。金阿弥を気遣つて藤道が用意してくれたのだ。だが、こんな立派な格好をした自分は自分ではないような気が

した。それに、似合つていないとと思つ。不釣り合いなのだ。そう思つて、金阿弥は見える範囲で何度も自分の格好を確認した。藤道は似合つていると言つてくれた。それが金阿弥は嬉しかつた。前を歩く藤道の足が止まり、金阿弥も同時に足を止めた。藤道は振り向いて金阿弥の耳元に口を寄せた。

「良いか、教えたことは覚えているな?」

「はい」

「殿はお前の兄の話題も出すだろうが、いつものように『兄上』と呼んではならぬからな」

「分かつております」

本番で失敗しないように、家でも兄のことは通称である「半右衛門^{はんえもん}」と呼んで練習してきたのだ。せっかくお田見えの場が与えられたのだから、失敗してはいけない。失敗したら、目をかけてくれた藤道に恥をかかせることになるのだと父にきつく言わってきた。ぎゅっと胸元^{しょきん}を握りしめると、藤道が、そうか、と呟いた。

「殿、人見主膳にござります」

入れ、という声が襖越しに聞こえて、金阿弥の緊張は一気に高まつた。今聞こえた声が、義宣の声なのだ。大きく息を吸つて落ち着こうとしたが、落ち着かない。襖は開かれ、藤道は室内へと入つて行く。その後ろについて、金阿弥も室内に足を踏み入れた。

緊張で足が自分の足ではないようだ。袴が真新しく穿きなれないものだということも重なつて、とても歩きにくい。廊下でよろめいたときのようになつてはいけない。しゃんと背筋を伸ばし、足を進めた。

だが、ただ足を進めたはずなのに、金阿弥の視界が揺らいだ。あ、と思わず声が出た。その瞬間には、ぐらりと体が傾き既に転んでしまつていた。

「金阿弥」

藤道の驚いた声が聞こえる。恥ずかしい。恥ずかしくてたまらなかつた。顔に熱が集まる。あんなに練習してきたのに、その成果を

発揮する前に転んでしまつなんて、台無しだ。鼻の奥がつんとする。こんなことで泣いてどうするのだ、と思うが涙が滲んだ。

「大丈夫か？」

藤道の声とは違つ声がして、顔を上げると、見知らぬ人が手を差し出してくれていた。恐らく、この人が義宣なのだろうということは分かつた。先ほど聞こえた声と同じだ。だが、まさか殿様が手を差し出してくれるとは思えず、じつと見つめてしまった。

もう一度、大丈夫か、と尋ねられ金阿弥は頷いた。だが、この手を取りつていいものか悩む。それが伝わったのか、ほら、と急かされ、金阿弥はようやくおずおずと義宣の手に自分の手を重ねた。その手をこきなり引つ張られ、驚いている間に義宣に抱き上げられていた。

「殿、お止めください」

「別にいいだろ？、主膳。かわいそうに、まだ本当に子どもではないか。神童と言つても、せめて十三、四になつていると思つていた。泣かなくともいい。緊張したのか？」

義宣は金阿弥が転んだことを怒つていないらしい。それどころか、優しい言葉をかけられて嬉しかった。つい気が緩んでしまい、素直に頷くと、藤道の、「こら」という声が聞こえた。だが、義宣は静かに、「そうか」と言った。

「お前は素直な子じもだな」

「ありがとうございます」

やつとの思いでそれだけ口にするとい、畳の上に下ろされて、ぽんぽんと頭を軽く撫でられた。

「改めて聞こいつ。名は何といつ？」

「は、はい、梅津金阿弥です」

立つたまま頭を下げた後、本当は平伏して、もっと難しい言葉を使わなければならなかつたのだと思い出したが、もう遅かつた。

「では、半右衛門はお前の兄か？」

「はい」

「こいつになる？」

「十一になりました」

「兄と一緒に働きたいか？」

「兄上と一緒に働いてもよろしいのですか？」

ぱつと顔を上げた後に、またしても自分の失敗に気づいた。室内に入る前も藤道に注意されたというのに。あまりの失敗続きに、また泣きそうになってしまった。はつとして口を押さえる金阿弥がおかしかったのか、義宣が笑みを漏らした。藤道はため息をついている。

「主膳、金阿弥を俺にくれ」

「殿、よろしいのですか？」

「ああ、気に入った。金阿弥も半右衛門と共に働くことを望んでいるようだ。いいではないか」

なあ、と話を振られてもどう答えたらいのだろうか。ただ、兄と一緒に働くと嬉しいことは事実なので、義宣の言葉に頷いた。

「分かりました。殿がそこまでおっしゃるのなら、明日からでも金

阿弥は登城させましょう」

「そうしてくれ。ここいつの父親にもお前から話を通しておけ」「はい」

金阿弥が黙っている間に、義宣と藤道の間では話がまとまつたらしい。金阿弥は藤道ではなく義宣の家臣になつたといつこといいのだろうか。

「ではな、金阿弥。明日から、お前は俺のものだ」

先ほど撫でられたときと同じように頭を撫でられる。その手があたたかくて、何だかとても嬉しかった。

「はい、お殿様」

金阿弥が笑うと、義宣も小さく笑ってくれた。

藤道に連れられて退室するとき、一度だけ振り返ると、義宣が軽く手をあげてくれた。それに手を振つてこたえると、藤道に怒られてしまつた。

だが、退室してから藤道が、よかつたな、と言つてくれて、嬉しかつた。

無垢のナニモノ（II）

お田見えの次の日から、金阿弥は人見家ではなく城で義宣に仕えるようになった。

同朋として仕えることになったのだが、同朋がどのような仕事をするのか分からず、城内での作法なども分からず、それらを覚えることで精いっぱいだった。幸いなことに、兄がもともと義宣に同朋として仕えていたため、兄から詳しい話を聞けたのだが、兄はいつも金阿弥の面倒を見てくれるわけではない。だから、分からぬことは同年代の小姓たちに聞いたのだが、小姓たちは何も教えてくれなかつた。

城内の小姓たちは、佐竹家の譜代家臣の子弟なのだと兄に教えられた。譜代の子弟は、金阿弥のような浪人出身の子どもが、いきなり義宣に召しだされたことが面白くないのだそうだ。兄も、いつもその小姓たちの親に「浪人上がり」といわれていると言つていた。慣れない城勤めに、冷たい同僚たち。登城してから家に帰るまで、毎日気を張りつめていなければならなかつた。これならば、藤道のもとにいた方がよかつたかも知れない、と思つこともあつた。

だが、せつかく義宣が直々に金阿弥を召しだしてくれたのだ。だから、同僚たちに冷たくされようと、浪人の子どもだと蔑まれようと、せめて義宣の役に立てるようになりたかった。見様見真似で仕事を覚え、家に帰つてからも寝る間を惜しんで復習をした。その甲斐があつて、三月も経つ頃にはひとりで大概のことはできるようになつた。

ここまで頑張れたのは、義宣のおかげだ。義宣は優しかつた。城に上がらなければ、会うことも声を聞くこともできない雲の上の人だつたのに、浪人の子どもである金阿弥にとても優しかつた。義宣のそばにいられることを思うと、やはり登城してよかつた、と思う。義宣は金阿弥が失敗をしても怒らなかつた。次はうまくできるだ

りつ、と言つて励ましてくれた。暇があればそばに呼んで、家中の話や他家の話などをしてくれた。

菓子を与えてくれることもあった。大事にしまって家に持つて帰るうとするといつもその場で食べるようになつた。義宣がくれる菓子は金阿弥が口にしたことのないものばかりで、思わず、おいしい、と呴いてしまう。そうすると、義宣は、よかつたな、と言つて微笑んでくれる。それが少し恥ずかしかつたが、嬉しかつた。

金阿弥は、義宣から一度聞いた話は忘れないようにした。義宣の話を覚えていると、義宣は褒めてくれるのだ。義宣に褒めてもらえるのが嬉しくて、金阿弥は努力した。そのたびに義宣は褒めてくれた。頭を撫でてくれることもあつた。

ほかにも、金阿弥が知らなかつたことを、義宣はいろいろと教えてくれた。常陸の金山の話や、検地の話など、まだよく分からぬこともあつたが、教わることが嬉しかつたし、知らないことを教えてもらひのは楽しかつた。分からぬことは、兄や兄の同僚の政光に聞いて勉強した。

義宣にはいつも優しくしてもらひてばかりで、教えられてばかりで、今はまだ何も金阿弥には返せるものがないから、ただ懸命に努力した。いつか兄や政光のように、義宣の役に立てるように、と一心に思い勉強した。

だが、そうして義宣の役に立とうとしている金阿弥のことを、譜代の子弟たちはよく思つていらないようだつた。この間は、廊下を歩いていたら足をひっかけられて転んでしまつた。怪我はなかつたが、転んだ時は痛かつた。人気のない部屋に連れ込まれて、いい気にならぬ、と言われたり、いろいろな悪口を言われたりしたこともある。ただ、義宣の役に立ちたいだけなのに、そう言わると悲しくなる。それでも、金阿弥は意地悪をされているということを義宣には言わなかつた。告げ口をしているようで、何となく嫌だつたのだ。それに、義宣に言つと、ますます意地悪がひどくなりそうな氣もしていた。

そのことを知っているのか知らないのか、それは分からぬが、義宣は頻繁に金阿弥を呼んで、色々な話をしてくれた。頭を撫でられるだけではなく、膝の上に載せられそうになつたときは驚いた。

「殿、いけません」

金阿弥がやんわりと義宣の腕を押し返そうとする、義宣は不満そうな顔をした。だが、いくら子どもだからと言つて義宣の膝に載るなど、いけないことだと思つのだ。初めて義宣に会つたとき、金阿弥を抱き上げた義宣に、藤道は、いけません、と言つていたではないか。

「嫌なのか？」

「いいえ、そんなことはありません」

嫌だなど、とんでもない。慌てて首を振ると、体が一瞬浮き、義宣と向かい合つように膝の上に載せられていた。

「嫌ではないのだろう？　じゃあ、いい。俺がこうしたいんだよ」

義宣の腕が背中に回され、優しく抱きしめられた。義宣の体温が伝わってきて、とてもあたたかい。抱きしめられた瞬間は緊張したが、その緊張が解けていく。頭を撫でられるよりも、ずっと嬉しかった。

怒られるかもしれない。だが、もしかしたら義宣は許してくれるかもしない。胸の前で握りしめていた手を、金阿弥はそろそろと伸ばし、義宣の首に抱きついた。義宣の体が一瞬びくりと動いたので、怒られるかと思つて手を元に戻そうとした。

「いい」

「え？」

「そのままでいい」

そのまま、というのは義宣の首に抱きついていてもいいところとだらうか。戻そつとした手をそのままにして抱きつくと、義宣の腕の力が少し強まつた。あたたかい。

義宣に抱きしめられていたのは、短い時間だつたのだと思つ。だが、金阿弥には時が止まつたように長い時間に感じられた。義宣の

腕が離され、膝の上から下ろされても、まだ義宣の腕の中のあたたかさが残っているような気がした。

無垢のトビサモ(四)

金阿弥を側に置くよしになつてから、半年以上が経つた。義宣は金阿弥を側に置いて離さなかつた。時間ができた時は呼んで、とりとめのない話をし、菓子を与えて、たまには金山のことや検地の話をした。

どんなにつまらない話でも、金阿弥は田を輝かせて義宣の話を聞いてくれた。初めて出合つた時と同じ、澄み切つた田で一心に見つめてくる。それが義宣は嬉しかつた。

それだけではなく、金阿弥は勉強熱心で、義宣が話したことは一度聞いたら忘れずにいるようだつた。義宣の言葉をまるで金科玉条のようと思つてゐる節も見受けられる。将来は政光や憲忠のようになるかもしれない。そう思つと、ますます金阿弥を離さなかつた。

そのことを、譜代の連中はよく思つていなかつた。政光や憲忠たち浪人出身の新参が義宣に重用されればされるほど、譜代連中から冷たい目で見られてることは知つていた。それは金阿弥も同じだらう。それどころか、まだ幼い子どもだからこそ、あらぬ疑いをかけられているかもしれない。

まさか義宣の耳に入るとは思つていなかつたのだろうが、浪人出身の者たちをよく思つていない連中が、尻奉公と陰口をたたいていふのを聞いている。十を過ぎたばかりの子どもに、そのようなことはしない。だが、そんなことを言わてしまつほど、義宣は金阿弥を可愛がりすぎてゐるといふことなのだらう。

金阿弥を連れて城内を歩いていると、東義久とすれ違つた。義久は廊下の端に寄り礼をしたが、頭を上げた時に金阿弥を見ていた。

「殿」

「何だ?」

振り向くと、義久は咎めるよつた目で義宣を見ていた。その田に腹が立つた。

「随分と可愛がられているようですね」

「何のことだ？」

「有能な者を、身分にとらわれず重用なさる」とは結構に「いやこますが、少々度が過ぎると」

「何が言いたい？」

「譜代、一門から不満が出ております」

義久の目が金阿弥を睨んだように見えた。金阿弥は怯えたのか、ぎゅっと義宣の袖を握りしめてきた。

「分別が肝要にござります」

それだけ言うと、義久は再び礼をして去つて行った。義久に言われたことは、言われずとも自分でも分かっていることだ。自分でも、これはおかしいと思つていて。金阿弥を可愛がるにも度が過ぎていることは分かつていて。だが、義久に言われると腹が立つ。中立を装つて分別顔をして、一門、譜代のために義宣に忠告するのだ。

義久は佐竹家一門衆筆頭である東家の当主だ。家中では発言力を持つていて。一門、譜代のことを考へていて違ひない。義宣の気持ちなど、考えよつと思つたことすらないはずだ。

「殿」

立ち去る義久の背中をじつと睨みつける義宣の袖を、金阿弥が軽く引っ張つた。心配そうに義宣を見上げる金阿弥を見て、少し怒りが和らいだ。

「気にするな」

そつは言つたものの、金阿弥はまだ何かを気にしているようで、部屋に戻つても浮かない顔のままだつた。義久の言葉をまだ気にしているのだろうか。

「殿」

「どうした？」

「お聞きしたいことがあります」

「何だ？」

浮かない顔をした金阿弥が少しでも話しゃべくなるようになる

べく優しく促してやつたつもりだ。だが、金阿弥はためらひよつて視線をさまよわせ、ようやく口を開いた。

「何故、私をお側に置いてくださるのですか？」

「中務の言つたことを気にしているのか？」

「…」

一瞬、声が低くなつたのが自分でも分かつた。これはいけない、と思つたがもう遅かつた。金阿弥は慌てて、いいえ、と必死に首を振つた。

「以前から、一度お聞きしたいと思つていたのです。私は、まだ子どもで、渋江内膳殿や半右衛門のように殿のお役に立ちたい、元々お役に立てなくて、それでも、殿は私をお側に置いてください全然お役に立てなくて、それでも、殿は私をお側に置いてくださいます。とても嬉しいのですが、いつももどかしい気持ちになるのです」

「そんなことを気にしていたのか」

こくりと頷く金阿弥を見て、義宣は小さく笑つたが、金阿弥にとつては重要なことだつたのだろう。周りからよく思われていなれば、尙更、何故、という気持ちは強まつたに違いない。そんなこと、と言つたのは不適切だつたな、と思つた。

「金阿」

「はい」

「俺は、お前のやつこいつといろが好きだから、側に置いているんだよ」

「やつこいつといろか？」

「ああ。素直で正直で、純粹などいろだ」

義宣の言葉に納得できないのか、金阿弥は首をかしげて、じつと義宣を見つめてきた。だから、そういうところが好きなんだ、と言いたくなつたが、金阿弥には分からぬだらう。

「お前は、初めて俺に会つたとき、恐らく随分練習をしてきたのだろうが、転んでしまつただらう。その時、お前は何も言い訳をせずに、ただ泣いた。その後も飾らずに、そのままのお前でいた。主膳はお前が失敗をしたと嘆いていたが、俺は、そういうお前が好まし

いと思った

子どもでも、自分の保身のためには嘘をつく。もしも譜代の家の子どもが義宣の前で転んだら、袴が悪いのだと、普段はこんな失敗はないだとか、言い訳をするだろう。だが、金阿弥は何の言い訳もせずに、ただ素直に泣いた。それが義宣には好ましく思えた。

「お前なら、偽りなく俺に接してくれると思った」

金阿弥は信じられると思った。義宣を義宣だと知りながらも、義宣に抱き上げられ、じつと見つめてきた真っ直ぐな瞳は、純粋で澄み切っていて、心の奥底まで見透かされそうな気持ちになった。だが、同時にこんなにも真っ直ぐに見つめられたことはなく、この幼い瞳は信じられると思った。

初めて義宣を見つめる目に出会ったのだ。純粋で無垢な子どもの目に惹かれた。期待した。義宣だけを見て、濁りも曇りもない眼差しで、ただ一心に義宣を慕つて、忠誠を誓う存在を期待した。だから、側に置きたいと思った。

そして、側に置いて、義宣だけを見つめ、義宣だけを慕う存在にしようとしている。

さすがに、それを金阿弥に言つわけにはいかなかつたが、このまま見つめられていると醜い心の奥底が覗かれそうな気がして、ごまかすように金阿弥の頭をぽんぽんと撫でた。

「それだけではない。金阿は俺のために努力してくれている。だから、側に置きたいんだ。いずれは内膳や半右衛門を超すかもしれないな。期待している」

「はい。早く大きくなつて、殿のお役に立ちたいです」

「それは楽しみだ」

義宣の言葉ひとつで、心底嬉しそうにこりと笑う金阿弥は可愛い。側に置いて離したくなる。

義久の言う通りだ。分かつていて、度が過ぎている。それでも、期待せずにはいられない。何も知らない子どもを側に置いて、ただ一途に義宣だけを慕うようになつてほしかった。

変わらぬ純粋さと無垢な思いを、奇跡のよつな何かを、義宣は幼い子どもに期待していた。

「いまでも続く海が田の前に広がる。その海に大きな夕日がゆっくつと沈んでいく。夕日を映した海は赤く輝いて、とても美しかった。

「殿、すこいです。」覗くださ。夕日が海にのまれていよいよついです。すこい、すこい」

「の感動を義宣に伝えたいのだが、うまく言葉が出てこない。どの言葉も、この景色を表すには相応しくないよつて思えてくる。それに、感動で胸がいっぱいになつて、言葉が出てこないのだ。

「そんなに身を乗り出したら、海に落ちるだ」

「申し訳ありません」

海の美しさに興奮して、つこはしゃをすきてしまったようだ。義宣に言われたとおり、身を乗り出しきっていた。義宣に心配をさせてしまつた申し訳なれど、幼子のよつこはしゃいでしまつた恥ずかしさから金阿弥は俯いた。その金阿弥の頭に、ぽんと義宣の手が載せられた。

「謝るな。俺は、お前にこの景色を見せたいと想つて連れてきた。お前が喜ぶのなら、俺は嬉しい」

「ありがとうございます、殿。とても嬉しいです」

「そうか、それは良かつた」

義宣の優しさに応えるように、金阿弥は思いをこめて義宣を見上げた。わざわざ名護屋まで連れてきてくれて、こんなにも美しい景色を見せて貰て、本当に嬉しいのだ。その思いが伝わったのか、義宣は頭に置いた手で頭を撫でてくれた。

「常陸では海から朝日が昇るのと、ここでは夕日が海に沈むのですから、面白いです」

「金阿は物知りだな」

「半右衛門から聞きました」

金阿弥が義宣のもとへ来てから、最初の年が明けた。年が明けてから、義宣は秀吉の命に従つて名護屋へ来ていった。金阿弥も一緒に連れてきてもらつた。まだ幼い金阿弥は、自分は常陸に置いて行かれるものだと思っていたので、義宣と一緒に名護屋へ来られて嬉しかつた。

義宣が名護屋へ來たのは、秀吉の唐入りのためだと聞いている。その唐入りのために全国から大名たちが名護屋に集まり、朝鮮へ戦をしに渡つているのだと聞いた。

義宣にはまだ渡海の命は下されていないが、名護屋にいる以上、いつかは義宣も朝鮮へ渡つてしまつ。そのようなことはないと思うのだが、渡海したら、もしかしたら義宣はもう一度と帰つてこないかも知れない。朝鮮の寒さは常陸の比ではなく、水も体に合わないのだと聞いている。異国之地は危険に満ちているのだ。それを思うと、いつまでも義宣に渡海の命が下らなければいいのに、と思つ。

今は名護屋で特にすることがないので、茶の湯や蹴鞠などをして義宣は過ごしている。常陸にいるときよりも義宣と一緒にいる時間が多く、いつもして海に連れてきてもらうこともある。海を渡れば戦が待つてゐるといふのに、穏やかな日々が続いているような気がしてゐた。

こうして過ごす日々を樂しいとか、幸せだとか思つてしまつのは、朝鮮で戦つてゐる人たちに失礼だと思うのだが、金阿弥は幸せだった。それでも、義宣が渡海することを考えると不安で仕方がない。複雑な気持ちになつて、思わず義宣の袖を握りしめてしまつていた。

「どうした、金阿？ 船に酔つたのか？」

「いいえ」

義宣の言葉に首を振り、周りを見渡した。義宣が今日供として連れて來たのは、金阿弥のほかに兄と政光と向宣政の三人だつた。この三人は義宣に最も重用されている。だが、三人の姿はいつの間にか見えなくなつていた。船の上のどこかにはいるのだろうが、姿は

見えない。それならば、三人から義宣と金阿弥の姿も見えていないはずだ。そのことを確認して、金阿弥は義宣にぴったりと寄り添つた。

「殿

「どうした？」

「私は、殿とお会いすることができて、本当に嬉しいと思つています。殿のお側にいらっしゃる、嬉しいのです」

義宣が朝鮮に渡つて、もしものことがあつたら、と思つて、金阿弥は自分の思いを義宣に伝えておかなければならぬと思つた。だから、日じる思つてゐる自分の気持ちを、真心をこめて口にしたつもりなのだが、義宣は驚いた顔をした。もしかしたら、こんなことを言つるのは失礼だつただろうか。

「それは、俺がこの海のように珍しいものをお前に見せたり、お前の興味を引く話を聞かせたりするからか？」

「違います。それは、それも嬉しいですけど、そういうではないのです」「では、何だ？」

義宣に問われて、金阿弥は言葉に詰まつた。「この気持ちをうまく伝える言葉が見つからない。いろいろな言葉を頭に浮かべてみるのだが、どれもしつくりこないので」

「あの、殿は違うのです。今まで出合つた誰とも、殿は違います」「どう違うんだ？」

「うまく言つことができないので、子どもの言ひ方とお笑いになつて構いません。ただ、殿とお会いすることができますが、嬉しい。その気持ちばかりなのです。誰に対する気持ちとも違います」

そうだ、義宣はほかの誰とも違う。この気持ちをどう表現すればいいのだろう。義宣と会えてよかつた。誰にも、こんな気持ちを抱いたことはない。それをうまく伝えられなくてもどかしい。

「金阿

俯いていると、頭上から義宣の声が聞こえた。顔を上げようとしたのだが、一瞬で義宣に抱き上げられていた。義宣の顔が目の前に

ある。なんだか恥ずかしかつた。

「ありがとう、嬉しいよ」

真剣な眼差しで見つめられ、恥ずかしかつたが、それ以上に嬉しくて義宣に抱きついた。義宣が笑つた気配がした。

「殿」

「ん?」

「お慕いしております」

この言葉は事実だが、金阿弥の気持ちを表すには少し違う気がする。それでも、言葉にして義宣に伝えたかつたから、口にした。

「俺のことが好きか?」

「大好きです」

素直に思つたままを口にしたら、義宣に強く抱きしめられた。その腕の温もりが嬉しかつた。心地よかつた。

耳元で小さな声がした。とても小さな声だったが、金阿弥にはしつかり聞こえた。

俺も金阿弥が好きだよ。

この日を、この言葉を、絶対に忘れないと金阿弥は強く思つた。

年が明けても、佐竹家に渡海の命は下されなかつた。昨年は来春渡海の予定だと聞かされていたが、特にその沙汰はなかつた。ただひたすら、名護屋の秀吉の茶会や蹴鞠、狂言などに付き合つばかりだ。この陣中の様子を知つたら、渡海した諸将は何と思うだろうか。このまま渡海せずに済むのだろうか、と義宣は思つていたが、六月に入つて義久たちを渡海させることになつた。だが、義久たちは戦をすることなく帰つてきた。金阿弥は義宣も渡海しなければならなくなるのではないか、と心配していたようだが、結局義宣は一度も渡海することなく、八月に秀吉が大坂へ戻つたのに合わせて名護屋を発つた。

朝鮮へ渡つている諸将へは悪いが、これでしばらくは渡海の心配はない。金阿弥も安心しただろうと思ったが、名護屋を発つ頃から金阿弥は少し元気がないようだつた。もう渡海の心配をしなくてもいいのだと言い聞かせると、安心したように笑つたのだが、やはり元気がない。

「金阿、どうかしたのか？」

「あ、いえ、何でもありません」

長く名護屋にいたせいで体調を崩したのか、それとも何か不安でもあるのか。元気のない金阿弥が心配だったので、一人きりで話を聞こうと思つた。だが、金阿弥は何でもない、と言つ。何でもないはずがない。

「元気がない。何でもないはずないだろう? 僕には話したくないのか?」

「いいえ、そんなことはありません」

必死に首を振る金阿弥が可愛らしくて、思わず笑みが漏れてしまう。相手は十三の子どもだといつのこと。

迷うように視線をさまよわせた後、金阿弥はおずおずと義宣の顔

を見上げてきた。その田は不安そうだった。

「母の命日が近いのです」

予想外の金阿弥の言葉に義宣は驚いた。まさか金阿弥の元気がない理由が、母親の命日が近いことだとは思わなかつた。それに、義宣は金阿弥の母親がすでに死んでいることを知らなかつた。今頃が母の命日だというのなら、昨年も一昨年もこの頃は、金阿弥は義宣のもとにいたはずだ。渡海の噂のせいで、金阿弥を氣遣う余裕が今までになかつた。だから、気づかなかつたのだ。

「子どもだと笑われても構わないのです。自分でも、十三にもなつて「まだに母の命日が近くなると氣落ちするなど、おかしいと思いません」

「おかしいとは思わない」

寂しそうに苦笑する金阿弥の手を握ると、金阿弥は驚きに田を見開いた。手を強く握りしめても、驚いているせいか金阿弥は義宣の手を握り返さなかつた。

「お前がよければ、話してくれないか」

「え？」

「お前と母親の話だ」

なぜ金阿弥が母親の命日が近付くと氣落ちするのか。なぜ母親にこだわるのか。子どもだから、と言つてしまえば片付くかもしれないが、義宣はそれを知りたかつた。金阿弥は再びためらうように視線を彷徨わせたが、しばらくして口を開いた。

「母が亡くなつたのは、私が五つのときでした」

「五つ。そんなに幼いときに母を亡くしていたのか」

「はい。だから、母のことを私は覚えていないのです。どんな顔だったか、どんな声だったか、全くと言つていいくほど分からないのです。たまに、父や兄たちが母の話をしても、私には全く分かりませ

ん

「そうか」

「だからだと思つんです。だから、母の命日が近付くと、今でも元

気がなくなります。もう昔の話なの。覚えてもいない母のことを、思つてしまふんです。すみません、こんな話」

義宣に手を握られたまま金阿弥は俯いた。母親の話をさせたら、ますます元気がなくなってしまったように見えた。そんな金阿弥の姿を見ていると堪らなくなつて、握った手を引いて抱きしめた。

「殿？」

「寂しかったんだな」

義宣がぽつりと呟くと、腕の中で金阿弥がびくんと肩を震わせた。じっと目を見つめると、小さく首を振った。

「そんな、私には父も兄もいて、とても優しくて、だから、寂しいなんて、そんな」

「本当は、寂しかったんだる?」

重ねて問うと、金阿弥の目にじわじわと涙が浮かんできた。いつぱいにたまつた涙が、瞬きをした瞬間に零れ落ちる。頬を伝つ涙を拭つてやると、金阿弥は義宣の首にひしと抱きついてきた。

「寂しかった」

小さな声は震えていた。その声は消え入るように小さかつたが、金阿弥の寂しさは痛いくらいに伝わってきた。

「みんな母上のことを知っているのに、私だけ知らなくて、母上に愛された記憶もなくて、父上も兄上たちも優しかったけれど、本当はずつとずつと寂しかった」

金阿弥の涙が義宣の肩に染み込んでいく。肩に顔を埋めて静かに涙を流す金阿弥の背を、慰めるように撫でた。

「俺もだよ」

義宣の咳きに金阿弥が顔を上げた。涙に濡れた目と視線がぶつかり、義宣はかすかに苦笑を浮かべた。

「俺も、ずっと寂しかった」

「けれど、殿にはお母上様が」

「母上か」

鼻をする金阿弥の顔を、再び肩に埋めさせて頭を撫でた。金阿

弥の目にじつと見つめられると、心が痛む。確かに、母を亡くした金阿弥にしてみれば、義宣の言つ寂しさは違うのかもしれない。だが、義宣もずっと寂しかった。金阿弥の中に、自分と同じ寂しさを見た気がしたのだ。

「愛されなければ、同じだらう」

独り言のように呟いた義宣の言葉が、金阿弥に聞こえたかは分からぬ。ただ、義宣は金阿弥を強く抱きしめた。金阿弥もぎゅっと義宣に抱きついてくる。

「金阿」

「はい」

「まだ、寂しいか？」

「殿がいらっしゃるから、寂しくないです」

金阿弥は更にきつく抱きついてきた。抱きつくといつよりも、首にすがりつかれていくようだ。だが、これは照れているのだ。そのくらいは分かる。金阿弥以外の言葉なら、義宣がいるから寂しくない、ということを信じられないだらう。金阿弥は違う。金阿弥ならば信じられる。

ずつと側に置いてきたのだ。金阿弥は義宣だけを見ている。

「俺も寂しくないよ、お前がいるから」

大人と子どもが抱き合つて、互いに寂しくないと言い合つ姿は滑稽なように思えたが、なぜか自分たちには似合いの姿のような気もした。

寂しいと泣いて義宣にすがり、今は照れて顔を隠す金阿弥が愛しくて、腕の力をゆるめて顔を上げさせた。金阿弥の目は初めて会つた頃と変わらずに澄んでいて、他人に暴かれたくない心の奥底まで見透かされるような気がした。金阿弥の目に映る自分は、醜い大人だ。

いたたまれなくなつて、金阿弥の目を手で塞いだ。そして、そつと金阿弥に口づけた。

無垢のアピール（ナ）（前書き）

男性同士の性的な表現があります。苦手な方は「」注意ください。

無垢の子ひも（七）

鹿島六万石。加藤清正が秀吉に贈つた朝鮮土産の手水鉢。

それが、秀吉から義久が与えられたものだ。名護屋から戻り、大坂城へ秀吉のご機嫌伺いに出向いたら、いきなり秀吉からそのことを告げられた。驚きという言葉では表現できない衝撃だつた。

秀吉が義久に鹿島六万石を与えるということは、義久が大名になるということだ。石高が違うだけで、義久は義宣と何ら変わりない。もはや義久は秀吉にとって陪臣ではないのだ。上杉家における直江兼続と同じだ。兼続は秀吉から直々に領地を与えていた。だが、義久は兼続とは違う。義久は佐竹義久だ。義久には佐竹家の血が流れている。義久がその気になれば、義宣を引きずり降ろして宗家の当主になることもできる。

義久は義宣よりも才覚がある。義宣より年を重ねていているからではない。本当に、持つて生まれたものが違うのだ。見ていれば分かる。義宣は遠く及ばない。このことは、家中の誰もが分かっていることだ。だから、一門、譜代の連中は義宣を若い当主と侮つている。

義久の名が高まるにつれて、自分はお飾りの当主にすぎないのだという気持ちが強くなつていつた。陪臣だった義久でさえ、秀吉に羽柴姓をもらえるのだ。そして、今は秀吉の家臣となつた。義宣が必ず佐竹家の当主でなければならぬ理由などないのではないか。義久が佐竹家の当主でも全く問題はないに違いない。

一門の筆頭で、譜代連中も義久を信頼している。一門、譜代の象徴のようだ。当の義久は、本当は一門や譜代の味方だというのに、分別顔をして中立の立場を取つてゐるように見せてゐる。義久にますます信頼が集まつた。今回も、義久は秀吉に大名として取りたてられたにも関わらず、自分は佐竹家の家臣であることに変わりはないと言つてゐる。

自分が立つてゐる場所を、土台から搖さぶられているような気が

した。腹立たしかつた。一門や譜代の連中も、義久も腹立たしかつた。

だが、それだけではないのだ。義久は命に従つて朝鮮へ渡り、その褒美として秀吉から手水鉢を贈られた。六万石の大名に取り立てられた。

朝鮮へ渡つたのは義久で、義宣ではない。その義久に褒美が与えられるのは当然のことだろう。それに対してもうこう思う義宣のほうがおかしいのだ。それは分かっている。だが、なぜ義久なのだ。なぜ義久は秀吉に六万石を与えられるのだ。まるで、義久は義宣から独立したもう一つの佐竹家のようだ。いずれ、義宣の地位さえ奪つてしまふような気がした。

義宣から佐竹家を取つたら、何が残るのだろうか。何も残りはないだろう。家臣たちは、みな佐竹家に仕えているのだ。浪人出身の家臣たちは、義宣が当主でなくなつたら、また浪人して新たな仕官先を探すのだろう。何も当主は義宣でなくてもいいのだ。むしろ、信頼されている義久の方が相応しいのではないか。そんな考えすら浮かんでくる。

義久という人間は、義宣の存在を根底から揺るがしている。

昔、母の命に従つて政宗を逃がしたのは義久だ。今度は、義宣の地位を脅かすというのか。

そんな事態はありえないと思いつつも、もしかしたら、という思いもある。もしもそうなつた時、義宣を見捨てずにいてくれる存在などいるのだろうか。

ひとりだけ、思い浮かんだ。そのためにそばに置き続けてきたようなものだ。義宣だけを見つめ、義宣にだけ忠誠を誓う存在。ただひたすら、一途に義宣に思いを寄せる存在。

もう、金阿弥しかいないと思った。壊れていきそうな危うい均衡を保つためには、金阿弥しかいない。

全て自分のものにしてしまったかった。義宣だけの金阿弥でいてほしかつた。金阿弥だけだ。

大坂城から屋敷へ戻り、すぐに金阿弥を控えさせておいた部屋へ向かつた。荒々しく襖を開くと、金阿弥が驚いて振り向いた。だが、義宣の姿を見ると嬉しそうに口許に笑みを浮かべた。誰も信じられない。もう、義宣にはこの幼い子どもだけだ。

肩を掴んで畳の上に金阿弥を押し倒した。金阿弥の喉から息が漏れる音がした。小さな体の上に馬乗りになつて、手首を押された。これで、金阿弥は義宣から逃げられない。

金阿弥の顔が強張つた。突然のことに対する驚きでいるのか。そうではない。目が怯えていた。一心に義宣を見つめてくる目が、不安と恐怖に揺れている。

それが苛立たしかつた。怖かつた。金阿弥にまで拒絶されてしまつたら、どうすればいいのだろうか。

「金阿」

名を呼ぶと、金阿弥がびくりと肩を震わせた。体が硬くなつているのが分かる。その金阿弥の唇に口づけた。唇を舌で割ると、きつく食いしばった歯列にぶつかつた。その食いしばられた歯が、義宣に対する金阿弥の拒絶のようで、怖かつた。歯列を舌でなぞつても、金阿弥はますますきつく食いしばるだけだつた。

唇を離すと、ほつとしたのか金阿弥は口を開いて息を吸つた。その隙をついて、義宣は再び口づけた。金阿弥の口内に舌を侵入させる。舌と舌が触れあつた瞬間、金阿弥の舌は逃げるよう奥へ引っ込んだ。だが、その舌を追いかけ、からめとり、逃げることは許さなかつた。

息苦しいのか、金阿弥は義宣の腕を振りほどこうと必死にもがいた。だが、手首を押さえつけられているせいで満足な抵抗はできなかつた。

金阿弥を接吻から解放すると、息を吸つた拍子に唾液を呑み込みきれなかつたのか、むせていた。閉じられた金阿弥の目から涙が流れ落ちた。一筋涙が流れると、堰を切つたように金阿弥はぼろぼろと泣きじゃくつた。

「泣くな」

涙を拭おうと金阿弥の顔に手を伸ばすと、拒絶するように顔を背けられた。初めてだ。初めて、金阿弥に拒絶された。冷たい何かが胸の中へ流れ込んでくるようだった。傷が膿んで、じくじくと痛むようでもあった。

怯える金阿弥の肩をきつく掴んだ。金阿弥は身じろいだが、金阿弥を気遣つてやる余裕などなかつた。気遣つつもりもなかつた。

「俺が怖いか？」

金阿弥は目を瞑つたまま答えようとしなかつた。そのことに、胸の痛みが増した。苛立つた。

「俺に触れられるのは嫌か？泣くほど嫌なのか？泣くほど俺が怖いのか、金阿弥？」

何か言おうとしたのか、金阿弥の口が開かれた。だが、その口から漏れたのは嗚咽だけだつた。そんなにも義宣のことが恐ろしいのか。思わず肩を掴む手に力がこもつた。

「お前は、俺を好きだと言つたよな？俺を慕つていいと言つたよな？俺に会えてよかったです。俺はほかの誰とも違うと。それは嘘か？俺のことを好きなんじゃなかつたのか？」

「好き、です。お、お慕いしています」

震える声。だが、その声は嘘には聞こえなかつた。今まで何度も聞いてきたこの言葉を信じたかった。

「なら、田を開ける」

思った以上にきつい口調で命令してしまつたせいか、金阿弥は更にきつく田を瞑つた。

「田を開ける、金阿弥。俺を見る。俺を見るんだ。俺だけを見る」義宣を見てほしい。曇りのない純粹な眼差しで、義宣だけを見つめてほしい。頼みこむように、縋るように、義宣は金阿弥の肩を搖さぶつた。

涙に濡れた目が開かれる。その目は、まだ怯えてはいたが、その奥底に義宣を信じて縋る光が見えたような気がした。それが嬉しかった。

つた。金阿弥だけは、義宣を見捨てずにいてくれる。

「泣いて、いるのですか？」

予想外の金阿弥の言葉に、義宣は何を言われているのか一瞬分からなくなつた。泣いてなどいない。泣いているのは、金阿弥だ。ただ、胸が痛んで仕方がない。

「いや、痛いんだ」

「痛い？」

「ああ、痛いよ」

心配してくれたのか、金阿弥はそつと義宣の頬に触れた。義宣は金阿弥にひどいことをしているはずなのに、その優しさがあたたかくて、かえつて胸が痛んだ。

堪らなくなつて、義宣は金阿弥を抱きしめた。骨が軋むほど強く、腕にしづき抱いた。

「金阿、俺が好きなんだろう? なら、俺を拒むな。拒むことは許さない」

腕の力を緩めて金阿弥の鎖骨の辺りを吸い上げた。赤い跡がそこに残つた。金阿弥は義宣のものだという証のようだ。

薄暗い満足感が、胸の痛みを和らげた。

無垢のナニモ(ハ) (前書き)

男性同士の性的な表現があります。苦手な方は「」注意ください。

無垢のナニモ（ハ）

怖かった。ただひたすら怖かった。

唐突に現れた義宣にきつくなきしめられたと思つたら、視界が反転していた。目には確かに天井が映つているはずだが、覆いかぶさる義宣しか金阿弥には見えなかつた。その義宣の顔も影になつて、よく見えない。それが余計に金阿弥の恐怖心を煽つた。

なぜ、こんなことになつてゐるのだろう。名護屋から無事に大坂へ帰つてきて、義宣は秀吉のもとへ挨拶をしに出かけた。それだけのはずなのに、帰つてきた義宣はなぜ金阿弥にこんなことをするのだろう。

名護屋からの帰り、母が悲しいと泣いた金阿弥を優しく抱きしめてくれたのは、最近のことではないか。あの義宣が、何をしようとしているのだろうか。

口づけられて、息ができなくて苦しい。怖い。いつもの義宣ではないようだ。

俺が怖いか、と問われる。

確かに今の義宣は怖い。だが、いつもの義宣を知つてゐるから怖くないとも言えるような気がする。義宣が、金阿弥に酷いことをするはずがない。今まで二年以上そばにいて、そのくらいのことは分かつてゐるつもりだ。だから、怖いが怖くはない。

俺を好きだと言つたよな、と言われた。その声は金阿弥を詰つているようだつた。

今まで口にしてきたこの言葉を疑われるのは、とても悲しくて、震える声で義宣が好きだと訴える。真心をこめて言つたつもりだ。義宣が好きだ。その言葉に偽りはない。今までも、今も、何も変わりはない。

目を開けるように言われて目を開けると、涙で視界がぼやけるせいか、義宣は泣いてゐるように見えた。それが不思議だったが、何

だか胸が痛んだ。

俺を拒むな、俺だけを見る、と繰り返す義宣に鎖骨の辺りを吸わ
れた。少し痛かった。胸をはだけられ、手を這わされ、思わず悲鳴
のような声をあげてしまった。それでも、義宣の手の動きは止まら
なかつた。

着物を全て剥ぎ取られ、体を重ねられ、揺さぶられながら、金阿
弥の意識は朦朧として闇に呑まれていった。

かすかに射しこむ朝日を感じ、目を開けると、霞む視界の中に義
宣の背中が見えた。何か書きものでもしているのか、手を動かして
いる。

次第に覚醒していく意識の中、金阿弥は昨夜義宣にされた行為の
ひとつひとつを思い出していた。思い出すつもりなどなかつたのだ
が、意識せずとも脳裏に浮かんでくる。何度も嫌だ、やめてほしい、
と頼んだのに、義宣は離してくれなかつた。いつもの義宣ではない
ようで怖かつた。

だが、義宣よりも行為そのものの方が怖かつた。不安だった。痛
かつた。行為の痕跡は、ところどころに見える痣のような跡だけだ
が、痛みはまだ残つていて、体が軋むようだつた。

今の義宣は、背中しか見えないがいつもの義宣のように見える。
安心して、ほつと息をつくと、義宣が振り向いた。その顔は、昨夜
見た顔ではなく、いつもの義宣の顔だつた。よかつた、と安心する
とともに、なぜか義宣を見ていられなくなり、金阿弥は布団の中に
隠れた。

「金阿」

優しい声で名を呼ばれ、布団をめくられた。義宣は微笑んで金阿
弥の頭を撫でてきた。その手があたたかくて、甘えるよつて目を瞑
つた。

「喉が渴いてはいいか？白湯でも飲むか？」

「ぐり、と頷くと既に用意がされていたのか、白湯が入れられた湯呑が差し出された。体を起こそうとする、義宣が手を添えて支えてくれた。差し出された白湯を飲む金阿弥の様子を、義宣はずつと見ている。義宣に見られていると、何だか恥ずかしい。

義宣に見られていると、昨夜のことを思い出してしまった。今思えば、あの行為は以前に父から見せられた、男女の闇での秘戯を描いた枕絵と同じだったのだろう。赤面して目を逸らそうとした金阿弥に無理やり枕絵を見せて、父は男同士でもできることだと黙つていた。

だが、あくまでも絵を見ただけのことで、何も知らなかつたのだ。ただ、昨夜のことが見せられた枕絵と同じことだということは察しがついた。

たまらなく怖くて、不安で、思い出すと羞恥でいたたまれなくなる。父は、思いを寄せあう者同士のする行為だと黙つていたが、義宣はなぜ金阿弥にあのようなことをしたのだろうか。義宣は金阿弥の主で、金阿弥はただの同朋に過ぎないというのに。

ただ、ほかの家臣たちと比べると、どうやら自分は目をかけられているらしい、ということは譜代の子弟たちからいじめられたことによつて分かつてはいた。それに、今までそばに置いてもらつていて、義宣が金阿弥にとても優しくしてくれていることは、誰に言わねずともよく分かつてゐる。金阿弥が義宣を好きだと黙つたとき、義宣も金阿弥を好きだと言つてくれてもいる。それがとても嬉しかつた。

それでも、義宣と金阿弥はあくまでも主従のはずだ。確かに、小姓の中にはこのようなことを務めるものもいるといふが、もしかしたら同朋も同じだったのかもしれない。父が言いたかったのは、そういうことだつたのだろう。

金阿弥が白湯を飲む間、義宣は、体の具合は大丈夫か、気持ち悪くはないか、と金阿弥の体調を気遣つてくれた。その声はいつにな

く優しい。思わず甘えくなつてしまつ。

「殿」

「何だ？」

「昨夜のことなのですが」

ちらりと義宣の顔を見ると、義宣は少し気まずそつな顔をした。
なぜ、そんな顔をするのだろうか。

「なぜ、あのようなことをなさつたのですか？」

「なぜ、か」

一瞬黙り込んだ後、義宣は金阿弥を抱えて膝の上にのせた。突然のことに驚いて、義宣の肩をぎゅっと掴んでしまつた。

「お前は、俺のことが好きだろ？」「

「好き？」

「ああ。金阿は、俺のことが好きなんだろ？」「

なぜ、こんなことを聞かれているのだろうか。金阿弥は昨夜の行為の理由を聞いていたはずだが、義宣に問いで返されてしまった。そういえば、昨夜もこんなことを聞かれた。そのことを疑問に思つたから、なかなか答えられずにいると、義宣の表情が曇つた。「俺のことを、嫌いになつたか？お前に怖い思いも、痛い思いもさせたのだから、仕方がないか」

「いいえ、嫌いになどなりません」

確かに昨夜の行為は痛かつたし、怖かつた。それでも、やはり義宣は義宣だから、嫌いになるはずがない。

「好きです」

義宣の目を見つめ、好きだと呟くと、義宣は安心したように微笑んだ。

「だからだ。俺も、金阿のことが好きだからだよ」

好き。好き、とはどのような意味だろ？金阿弥が義宣を慕う気持ちと同じなのだろうか。以前、名護屋で言われた意味と同じだろうか。父に見せられた枕絵の男女が抱いているような気持ちだろうか。分かるような気もするし、分からぬような気もする。ただ、

金阿弥と義宣は主従なのだから、枕絵の男女とは違つ氣がするのだ。

「だが、すまなかつたな。無理を強いてしまつた」

謝罪の言葉を口にして、義宣は膝の上にのせた金阿弥を優しく抱きしめてくれた。背を撫でながら、すまなかつた、ともう一度耳元で囁かれ、顔を上げると、そつと口づけられた。昨夜のよつた恐怖はない。少しくすぐつたいような口づけだった。

「俺にはお前だけだよ、金阿。お前だけだ」

「はい、殿」

義宣の真意はよく分からなかつたが、金阿弥は義宣が好きで、義宣もそうだから、昨夜の行為に及んだのだと言われて、そういうものなのかもしけない、と金阿弥は思った。

お前だけ、という言葉の意味も、どう捉えるべきなのか分からなかつたが、金阿弥は義宣を誰とも違う特別な存在だと思うのだから、それと同じかもしけない。そうだといいな、と思いつつ、はい、と頷いた。

無垢の子ひも（九）

金阿弥を初めて抱いた日から一年近く経つた。これまで以上に義宣は金阿弥を離さなくなつた。その一年の間に義宣は、名護屋出陣で遅れていた水戸城の修築を行つたり、秀吉の命で伏見城の普請を行つたり、忙しい日々を送つていた。

もちろん、一門や譜代の連中から義宣の寵を受けていることを理由に、金阿弥がいじめられないように配慮はしている。ただでさえ、浪人出身だ、尻奉公で気に入られているのだ、と言われているのだ。連中の言う尻奉公とは違うが、実際に金阿弥が義宣のお手つきだと知られたら、金阿弥に対する風当たりはますます酷くなるに決まつている。

それに、金阿弥を側に置くのは何も可愛がるためだけではない。もともと神童と評判の金阿弥だったが、成長するにつれてその才には磨きがかかる、特に金山や財政のことには子どもとは思えないほどの能力を見せていく。同じ浪人出身で義宣が重く用いている向右近宣政こののぶまさや渋江内膳政光しぶえないぜんまさみつ、兄の梅津半右衛門憲忠つめつはんえもんのりただとともに使っても遜色はないほどだ。だから、義宣は金阿弥を側に置いて離さなかつた。金阿弥の義宣に対する思いは成長しても変わらず真っ直ぐだつた。

ただ、最近は昔のように可愛がられるのが恥ずかしくなつてきたのか、抱きあげようとする嫌がられるようになつた。だが本気で嫌がつていないうことくらい顔を見れば分かる。素直ではなくなつてきたが、閨事には慣れてきたようで、初めのころのように泣かれることも、嫌がされることもなくなつた。

純粹な子どもをこの手で汚した。それでも金阿弥の本質は変わらず、一途に義宣を見つめてくれている。それが嬉しかつた。

諸将が朝鮮出兵で疲弊している中、義宣は伏見城の普請に追われながらも、まだ平穏な日々を過ごしていた。だが、伏見の佐竹屋敷で事件が起きた。近習の宣政が血相を変えて義宣のもとへやって来

た時、義宣はちょうど金阿弥とともにいるところだった。宣政は、金阿弥の姿を見た瞬間、氣の毒そうな顔をしたが、その理由が義宣には分からなかつた。宣政は、金阿弥に対しても息子を可愛がるようになに友好的だつたはずだが、どうしたのだろうか。

「殿、まことに申し上げにくいのですが、半右衛門がお屋敷の中で喧嘩沙汰を起こしました」

「半右衛門が、喧嘩だと？」

金阿弥の顔が、驚きと恐怖で強張るのが分かる。憲忠は金阿弥の兄だ。兄が喧嘩沙汰を起こしたと聞けば、恐ろしくもなるだらう。喧嘩を起こした者は、どちらも成敗するといつのがならわしだ。

「それで、相手は誰だ、右近？」

「は、はあ。それが、御一門に連なる真崎家の嫡男、孫三まきやまです」

「真崎だと？ 厄介な」

真崎家は宣政の言うとおり、佐竹家の一門だつた。佐竹家五代義重までさかのぼることになるが、その五代義重の三男義澄の子の義連が真崎家の祖にあたる。孫三の家はその真崎家中で分家にあたる家系だつた。だが、一門であることに変わりはない。

一方、憲忠は義宣がここ数年で召し抱えた新参者だ。しかも、浪人出身だつた。金阿弥の父親でもある憲忠の父親の道金は、もともと伊達家臣の家に生まれたが、幼いころに兵乱に遭遇し、それ以降は叔父の僧のもとで世話をになつたのだそうだ。その後、宇都富家の家臣に仕え、そこで憲忠と金阿弥が生まれた。だが、道金は浪人して常陸へ流れてきた。そして、息子たちを佐竹家に出仕させたのだ。憲忠は、もともと義宣の幼なじみでもある一門衆の北義憲きたよしのりに仕えていたが、義宣が義憲に頼んで宗家へ出仕させた。義憲のもとで働く憲忠の姿を見て、宗家で自分の側近として働かせたいと思つたのだ。

その憲忠と真崎孫三の喧嘩と言つたのだから、理由は聞かずとも分かる。一門、譜代は新参者が義宣の側近として働くことを快く思つていなかつたし、新参者は自分たちを蔑む一門、譜代が疎ましかつた。

た。その水面下での争いが、ついに表面化してしまったのだ。

「厄介なのは、相手だけではないのです」

「喧嘩、新参と一門の争い、これ以上に面倒なことがあるのか？」

「孫三は、半右衛門に殺されています」

「何だと」

義宣の声に、金阿弥はびくりと震えた。思っていたよりも、大きな声が出てしまったらしい。だが、それほどまでに義宣も衝撃を受けたのだ。ただの喧嘩ならまだしも、憲忠が孫三を殺したとは。

「右近、すぐに半右衛門を連れてこい。半右衛門は、今どうしているのだ？」

「半右衛門は、内膳が捕らえています。すぐに、連れて来させましょう」「う

慌てて出でていく右近の姿が見えなくなると、義宣はため息をついた。金阿弥は幼い瞳に涙を浮かべて、義宣を見上げている。

「殿、兄が取り返しのつかないことをいたしました。申し訳ありません」

「いや、金阿弥が謝ることではない」

「あの、兄は、これからどうなるのでしょうか？」

「喧嘩は両成敗と決まっている」

「そうですね」

本当は、義宣に兄を助けてほしいと言いたいのだろうが、金阿弥は黙つてうつむいただけだった。兄の今後に心を痛める様子を見ていると、そのいじらしさに義宣も心が痛む。だが、義宣の思考は怒声によつて断たれてしまった。

「お屋形様、梅津半右衛門と真崎孫三の件、お耳に入りましたか」
義宣のもとにやつて来たのは、一門と譜代の連中だった。誰もが半右衛門の起こした事件に怒りが頂点に達しているのが分かる。

「半右衛門を真崎家にお渡しいただけますな？」

「それは無理だ。俺は、まだ半右衛門から何も聞いていない。俺が話を聞き終えるまで、半右衛門の身柄は俺が拘束する

「話など簡単なことですぞ。半右衛門が孫三を殺した。それだけで
はありませんか」

「だから、なぜ半右衛門が孫三と喧嘩になつたのかを知らなければ
ならないのだ。半右衛門は一方的に孫三を殺害したのではなく、喧
嘩の結果として孫三が死んだのだろう?」

「半右衛門が孫三を殺したという事実に変わりはありませんまい」
「まこと、新参者が一門に刃を向けるとは、何を考えているのか」
「これだから、某どもは新参者に対して、これまで苦い顔をしてき
たのだ。お屋形様、此度の件でお分かりになつたでしょう。新参者
の増長は捨て置けぬ」

「喧嘩両成敗に則り、半右衛門に死を命じられるべきですな。切腹
など、某どもは認めませぬ。あの者には斬首がふさわしい」
「いきり立つ一門、譜代連中は、矢継ぎ早に半右衛門や新参者に対
する不平不満を口にした。だが、それは新参者を重用する義宣に対
する不満でもあつた。一門や譜代のこういうところが嫌なのだと、
義宣は言つてやりたかったが、黙つて連中の話を聞いていた。

「とにかく、半右衛門は俺の家臣だ。孫三もそれに変わりはない。
俺が今後どうするべきか決める。今は、お前たちは下がつていろ」
「きつく罰せられることを、我々は願つております」

一門、譜代連中は、去り際に金阿弥の姿を見つけ、睨みつけてか
ら去つて行つた。連中の言いたいことも分かる。喧嘩の結果、死人
が出たのだから、いきり立つのも無理はない。だが、連中の怒りの
おかげで、義宣はかえつて冷静になれた。義宣も半右衛門に対して
怒りは感じたが、連中の相手をしていたら、怒る機会を逸してしま
つたのだった。

「殿、右近です。内膳と半右衛門を連れてまいりました」

宣政に連れられて入つて來た政光と憲忠は、二人とも血に塗れて
いた。憲忠の血は、孫三の返り血だろう。政光は憲忠を取り押さえ
ようとして、その血がついただけだ。憲忠は自分の行いを悔いてい
るのか、義宣の前に出ると、すぐさま両手をついて平伏した。

「まことに申し訳ないことをいたしました。殿に目をかけていただけでいたというのに、恩を仇で返す始末。切腹でも斬首でも、某は謹んでお受けいたします」

「まあ、待て、半右衛門。確かに喧嘩は両成敗。お前には死をもつて償つてもらひことになるが、その前に事情を説明しろ」

憲忠は義宣の言葉に、ただ深々と頭を下げるばかりで、喧嘩の成り行きを説明しようとしたなかった。説明する気がないのでなく、ことの深刻さに言葉が出て来ないのだろう。憲忠の隣に座っていた政光が、憲忠の代わりに口を開いた。

「私が代わりに説明いたします」

「ああ、頼む、内膳」

「半右衛門と孫三は、お屋敷の廊下ですれ違おうとしたところ、互いに肩をぶつけてしまつたようです。孫三は、新参者が廊下の端に寄らないのは、一門に対する侮辱だと怒り、半右衛門に土下座をして謝れと要求したそうです。半右衛門は、土下座をしろと言われる筋合いはない、とそのまま無視をしようとしたのですが、孫三はしつこく絡み、そこで喧嘩となりました。ここまでは半右衛門から聞いた話で、ここからは私が実際に見たのですが、孫三は刀を抜いて半右衛門に斬りかかり、かえつて半右衛門に斬られ、命を落としたのです」

「そこで、内膳が止めに入つたのか？」

「私が止めに入ろうとした時には、すでに遅く、半右衛門の刀は振り下ろされた後でした」

やはり、義宣の思つたとおり、一門と譜代と新参者との軋轢の結果がもたらした喧嘩だった。どちらが悪いと断定することはできない。ここで憲忠の罪を認めなければ、今後新参者はますます白い目で見られるることは明らかだつた。一門、譜代の義宣に対する目も厳しさを増すだろう。

「事情は分かつた。だが、喧嘩両成敗の綻を破ることはできない。

半右衛門は、明日にでも切腹を命じることになるだろう」

「殿、兄に死を命じられるのならば、私ももう殿のおそばにはいられません。私もお家から追放としてください」

「金阿弥は事件に関係がないだろ？」

金阿弥は涙ながらに義宣に訴えたが、憲忠と金阿弥は兄弟とはいえない別の人間だ。憲忠の問題と金阿弥は関係がない。だが、義宣の寵愛を笠に着て、自分を愛しく思つならば兄を助けてほしい、と言えることもできるのに、そつしうつとしない金阿弥に義宣は心が動かされた。

「殿、どうしても半右衛門は切腹でしょうか？」

「ああ。一門や譜代の連中は、真崎家に半右衛門を引き渡せ、斬首にしろ、とうるさい。切腹は、俺の譲歩の結果だ」

「しかし、半右衛門を切腹とすると、殿はますます一門や譜代の方々に縛られるのではありませんか？ 半右衛門は、殺さぬ方が良いと考えます」

「何だと？」

政光は義宣をまっすぐに見つめて、半右衛門は殺さない方が良いと言いつた。政光は、金阿弥と同じく人見藤道の推挙で義宣に仕えるようになつた者だ。もとは下野の小山家の族臣の家系に生まれたが、小山家が滅亡した後は父親に従い各地を流浪し、常陸にやってきた。もとの名を荒川弥五郎あらかわやごろうと言つたが、同じく小山家の家臣で小山家中では名族だつた渋江氏光も常陸で義宣に仕えており、政光は氏光の養子となつて渋江内膳政光になつたのだった。政光も、憲忠や金阿弥と同じ新参者の浪人出身だ。

「殿は、一門や譜代の方々の家柄に縛られた考えがお嫌いで、私どものような新参者を重用なさつたはずです。しかし、ここで彼らの要求を入れて半右衛門を殺してしまえば、せつかくここまで新参者を重用なさつてきた殿のお考えは、振り出しに戻つてしまふのではないか？ 一門、譜代の方は增長し、古い考えに縛られてしまふのではないかと、私は危惧しているのです。時勢を理解できない者の言葉は危険です」

義宣は新しい考え方や能力を持つた者たちをそばに置き、家中の改革ができないものかと思っていた。そのための新参者の登用だつたのだから、政光の言つことは一理ある。もつとも、これは政光が自分の現在の立場を守るために発言でもあるが、このへりのふてぶてしさがなければ、一門や譜代を相手にこれから出世していくことは難しいだろう。政光の賢方に、義宣は思わず口許に笑みを浮かべてしまつた。

「分かつた。内膳の言つことはもつともだ。俺としても、実のところ半右衛門を失うのは痛い」

「殿、まことですか？」

金阿弥の顔がぱつと明るくなつた。憲忠は優秀な人材だ。失うのは義宣にとって痛手ではあるが、金阿弥に悲しい思いをさせたくないという気持ちも多少はある。

「半右衛門、俺はこれから又七郎にあてて書状を書く。お前は、常陸の又七郎のもとへ行け」

「それは、某はどうなるとこ？」とでしょ？^{おきたさま}御北様のもとで、腹を切ればよいのでしょうか？」

「いや、又七郎に匿つてもらえ。俺の方で、お前は出奔したことにしてやる。ほとぼりが冷めた頃に、また呼び戻してやるから、今はとりあえず着替えてすぐに伏見を發て」

「あ、ありがとうございます。このご恩は、決して忘れません」

涙をこぼしながら、再度深々と頭を下げて憲忠は屋敷を去つて行つた。残された金阿弥は、兄の命が助かつたことに涙し、政光は満足そうにしていた。宣政も、安堵の表情を浮かべている。

翌日、憲忠の脱走を聞いた一門や譜代の連中は、義宣のもとへやつてきて文句を言つたが、義宣は知らぬの一点張りで通した。梅津家は憲忠の父の道金の代で断絶、憲忠の扶持は召し上げ、見つかり次第義宣のもとへ送り届けさせ、切腹させる、と約束を取り付けたこと、何とか納得させることができた。だが、義宣はこの約束を守る気などまったくなかつた。

金阿弥や政光、宣政に対する風当たりも以前より厳しさを増したが、義宣は新参者をそばに置くことはやめなかつた。しばらくして、常陸の義憲から書状が届いた。憲忠は深く反省し、義憲と父親の監督下で、日々写経と読書に励んでいるそつだ。

今回は憲忠の追放で事態は収まつたが、いづれ古参と新参の争いには決着をつけなければならないだろう。その時、佐竹家はどうなるのか、今のうちから対策を考えておかなければなるまい、と義宣は思った。

憲忠が佐竹家から姿を消してしばらくすると、一門や譜代も憲忠と真崎孫三の喧嘩沙汰を話題にする者は少なくなっていた。だが、まだ憲忠を呼び戻すことはできない。最低でも、三年ほどは義憲に匿つてもらわなければならないだろう。

だが、金阿弥は兄が生きているだけで嬉しいようで、以前と変わらぬ明るさで義宣に接していたし、義宣に深い恩を感じているようだった。

年の瀬になると、母がしきりに義宣のもとへやつて来るようになつた。先の御台が死んで一月もしないうちに決められた許嫁の多賀谷の姫が、年が明ければ十三歳になる。母は姫が十三歳になつたら正式に義宣と結婚させるつもりらしい。死者が出た悲しい事件を忘れるためには、めでたいことが必要だ、などと言つてくる。

姫は義宣の許嫁と決まってから、伏見屋敷にいる母のもとで暮らしていた。ちょうど今、義宣は秀吉の命で伏見に滞在していて、しばらく国許へ帰る予定はない。年が明けたら吉日を選んで祝言が行わることになった。

新しい妻は、もともと多賀谷家の人質として佐竹家に送られていた姫だ。人質の姫が当主の妻になる。おかしなことのように思えたが、その方がいいのかもしれない。もとが人質の姫ならば、実家を何よりも大事にして手に負えない女ということはないはずだ。

年が明けて、義宣と多賀谷の姫は伏見屋敷で重臣たちに取り囲まれて祝言を行つた。その席には、政光も宣政も出席していない。古参の誇りを傷つけないために、義宣は正月の席にも、新参者は決して出席させなかつた。いくら能力が優れて、義宣に重用されていても、古参でなければ祝いの席には出席できないのだと見せつけることで、古参の連中を満足させようとしていた。

祝いの席に並んだ古参の重臣たちは、名門佐竹家の嫁が人質だつ

た多賀谷の姫であることが不服のようだつた。宴の騒々しさの中、ひそかにかわされる不満が聞こえてきた。

宴が終わり、夜が更け、義宣と姫は禰が整えられた寝所で向かい合つた。頭を下げる幼い少女を義宣は黙つて見ていた。

やはり十三歳はただの少女だ。金阿弥を初めて抱いたとき、金阿弥も十三歳だつたはずだが、少女である分当時の金阿弥よりもつと小さい。

以前、まだ姫が人質だつたころ、太田城の人質を集めて置いておく棟で、この姫を見たことがあつたはずだが、その時は人質の中の一人としか思つていなかつたため、印象など覚えていない。もしかしたら言葉を交わしたこともあるかもしぬないが、それも覚えていない。

この幼い妻のことを、何も知らないからこそ義宣は期待していた。ほんの少し、一握りの小さな期待を抱いていた。

金阿弥を側に置くようになつて、子供特有の純粹さとひたむきさを知つた。金阿弥は一途に義宣を慕つてくる。それは、金阿弥には義宣しかいなかつたからだ。

この姫も、何も知らない子供だ。義宣が妻として側に置いておけば、義宣を一途に慕うようになるかもしぬない。もとが人質ならば、頼るべき相手は義宣だけだと思うようになるかもしぬない。

それに、もしかしたら、そんなことをしなくても、自然と義宣を慕つてくれるようになるかもしれない。

そんな都合のいいことはない、と八割方思いながらも、心の片隅で、今度こそ、と期待をしていた。この姫は先の御台や母とは違うはずだ。

「姫、顔を上げろ
「は、はい」

少し腰を曲げて、視線が同じ高さになるようにした。声もなるべく優しくかけたつもりだ。だが、はい、と返事をしたもの、姫はなかなか顔を上げようとしなかつた。緊張しているのだろうか。

「姫」

もう一度声をかけると、姫は顔を上げず、逆にますます深く頭を下げる。

「た、多賀谷重経の娘、に、『じぞい』ます、『じぞい』ます、たどたどしく、不自然に区切られた言葉で挨拶を述べる姫の声は、かすかに震えていた。その震える声に、義宣は眉をひそめた。

「それは分かっている。姫の名は、何という?」

今もなるべく優しく話しかけているつもりだが、姫は深く下げていた頭をさらに下げた。禪に額がつくのではないかだろうか。

「『じめんなさい』。多賀谷重経の娘、り、琳、に、『じぞい』、ます、『

多賀谷の姫、琳の声は、かすかな震えどころではなく、完全に震えていた。それどころか、涙声にも聞こえる。その声を聞いて、義宣は落胆した。

この状態では、夫婦として初夜を迎えることなど到底できそうがない。琳はこれから行われるはずの行為に怯えているのかもしれない。とりあえず、互いに顔を合わせるくらいはした方がいいだろう、と思い、琳の顔を上げさせようと肩に手をかけると、琳は大げさに肩を震わせた。

「『じ』、ごめんなさい」

謝った瞬間に顔を上げた琳の目には、涙がいっぱいに溜まっていた。それは、義宣への恐怖と怯えによる涙だった。幼い少女の表情は強張つていて、義宣を恐れていいるのだとすぐに分かった。

かすかにしか抱いていなかつたが、そのかすかな期待が消えうせた。涙を目に浮かべて義宣を怖がる少女に、何かを期待することなどできない。

義宣がため息をつくと、琳はまたびくりと震えた。瞬きをした瞬間、涙がぽろぽろと零れ落ちた。

なぜ、ここまでびくびくと怯えられなければならないのだろうか。十三歳も年上の男が怖いのだろうか。それとも、佐竹義宣が怖いのだろうか。

おそらく、琳は佐竹家が怖いのだろう。人質として佐竹家にいたから、佐竹家が怖い。自分の命は佐竹家に握られている。そして、その佐竹家の当主は義宣だ。つまりは琳の命は義宣の手のうちにあることだ。だから、義宣が怖い。涙を流して怯えるほどに、義宣を怖がっている。

結局、ここでもまた佐竹家という名が問題になるのか。

「泣くな」

それだけ言って、義宣は琳のいる寝所を出て行つた。「ごめんなさい、と呟く琳の声が聞こえたような気がしたが、気のせいかもしれない。耳に残つていてるのだ、琳の声が。「ごめんなさい」と言う声が。結婚はしたものの、琳の義宣に対する怯えは消えないようになつた。もとが人質の妻ならばうまくいくような気がしたが、それは間違つたようだ。夫をあれほどまでに怖がつてゐる妻と、うまくやつていける自信などなかつたし、うまくやつしていくつもりもなかつた。

やはり義宣には、金阿弥しかいないのだと思つた。

無垢のナニモノ(十一)

琳を妻に迎えてしばらく経つたが、琳が義宣に慣れる気配はまったくなかつた。琳のもとを訪れるたびに、怯えたようにびくびくされる。そんな琳と夫婦として夜をともに過ごすことなどない。

幼い妻との今後を思うと気が重くなるが、それ以上に、大地震のために普請中だった伏見城が崩壊してしまったことが、義宣の気持ちを重くさせた。秀吉の命で、領内から金を集め普請をしたと、いうのに、崩壊してしまってはすべて無駄になってしまった。ただ、今度は伏見城の再建を命じられないことを祈るばかりだが、佐竹屋敷が地震の被害を受けなかつただけでもありがたいと思うべきなのがもしかれない。頼りない琳に代わり、母が奥の女たちを取り仕切り、屋敷の片づけをしていた。琳がしたことは、秀吉のもとへ向かう義宣の身支度を手伝つただけだ。

地震の直後、準備が整つと義宣はすぐさま秀吉のもとへ駆けつけた。秀吉は、大庭に幔幕を引いてその中にいた。城壁はことごとく崩れ倒れていた。この城壁のどれかは、佐竹が普請したものなのだろう、と思つた。

秀吉としばらく話をした後、屋敷へ戻ろうとするといふと、ちよつて徳川家康が秀吉のもとへ駆けつけてきたといふだつた。

「佐竹殿」

「内府殿」

「殿下にあやまちはあつませんでしたかな?」

「あやまちはございませんでした」

「どちらにいらっしゃいますので?」

「大庭に幔幕を引いていらっしゃいます」

「そうですか。では」

会釈をして去る家康に、義宣も軽く頭を下げた。家康は内大臣で、義宣よりも格上の大名だ。だが、義宣は家康のことを好いていなか

つたため、ただ問われたことにのみ返答をした。あまり深く関わるつもりはない。

家康は源氏を称しているが、何が源氏だ、と義宣は言つてやりたかった。源氏というのは、我が佐竹のようないもんを言つのだ、と。そのことを露骨に露わすつもりはないが、家康がどう感じているのかは分からぬ。

人の良さそうな笑みを浮かべて、何を考えているのか分からぬ男というのが、家康なのだ。

地震から一月ほど経つたころ、明から和議の使節が秀吉のもとへやってきた。その使節が持参した国書を見て、激怒した秀吉は朝鮮への再び兵を向けることを決意した。年明けに加藤清正、小西行長たちが渡海すると決まつたが、義宣は出陣命令が下されなかつた。

そのことに義宣は安堵した。加藤清正、小西行長は年が明けて渡海したが、義宣は伏見に残つていた。渡海せずにすんだ、と安心していたところに、親戚関係にある宇都宮国綱うつのみやくにつなが秀吉の怒りに触れ、領地を没収されてしまつた。国綱は、常陸の隣国、下野国の宇都宮十八万石の領主である。国綱の妻は義久の娘で、父の養女として宇都宮へ嫁いでいる。しかも、国綱の母は父の妹で、国綱は義宣の従兄弟にあたる。

国綱は子がなく、秀吉の義弟の浅野長政の子である浅野長重を養嗣子とし、家督を相続させようとしたが、国綱の弟の芳賀高定が反対したらしい。そのことが、秀吉の怒りを買い、国綱の所領は没收され、宇都宮家は滅亡となつた。

それだけでは秀吉の怒りが收まらなかつたようで、宇都宮家が後継ぎ問題で争いを起こしたのは、隣国であり親戚関係にもある佐竹家の監督が行き届いていなかつたため、と義宣についても処分を行おうとした。

あまりに突然のことで、義宣はどうすればいいのか判断に困つた。宇都宮の争いを止められなかつたことは、義宣も悔いている。だが、秀吉がここまで怒っているのは、自分の妻の妹の夫である浅野長政

の子を、養子に迎えることを芳賀高定が拒んだからだ。これがほかの大名の子だったら、秀吉は何も言わなかつたはずだ。

最近の秀吉は、何かおかしい。養子の秀次を自害させ、自分の子どもを溺愛している。今回のことも、おかしいと義宣は感じた。

秀吉の怒りを免れ、宇都宮と同じ末路をたどらないためにどうすることが最善なのか、義宣は考えた。毎日険しい顔をしている義宣を心配しているのか、金阿弥は義宣のそばにいた。

「殿」

「何だ？」

「あの、差し出がましいよつですが、治部少輔じぶしょくわいさまに」相談なせつてはいかがでしょつか？」

「治部殿に？」

「はい。太閤殿下のお怒りを鎮められるのは、治部少輔さまだけだと伺つております」

確かに、金阿弥のいとおり、最近の秀吉が話を聞くのは、石田三成いしだみつなりだけだ。三成には、小田原以来世話になつており、義宣は三成と懇意にしていた。三成も、義宣を徳川の押さえと期待しているらしかつた。

金阿弥の言つとおり、今は三成に頼るしかないよつだ。そうと決めたのならば、まずは三成のもとへ使者でも行かせよつかと思つたが、渋江政光が来客を告げにやつてきた。

「殿、石田治部少輔さまがお見えです」

「治部殿が？ 分かつた。すぐに参ると伝えておけ」

噂をしていた三成が屋敷に訪れるとは思わなかつたので驚いたが、政光が三成だと言つのだから間違いない。政光は以前、常陸の検地の際に三成と行動をともにしている。

三成のもとへ行くと、三成は余裕があるよう見えた。宇都宮のことで、三成も氣を揉んでいるのではないか、と思ったが、そのような様子は見えない。

「佐竹殿、突然の訪問失礼した」

「いえ、治部殿でしたら、いつでも歓迎いたします」

「今日訪ねたのはほかでもない、宇都宮のことになります」

「は。その件につきましては、私の監督が行き届いていなかつたばかりに、治部殿にはござ迷惑をおかけいたします」

義宣が頭を下げるべ、三成は、気にするな、と喜びよひ笑つて手を振つた。

「佐竹殿の監督不行き届きである、と考えることもできましょ。しかし、親戚であるとか、隣国であるとか、それだけの理由で佐竹殿までを処罰するのは、いかにも痛手が大きい。何と言つても、佐竹殿には江戸の徳川殿を抑え込んでいただからなればなりませんからな」

「では、治部殿」

「殿下には、私の方から話をしておきました。何、佐竹殿まで処罰すると仰せになつた時は、虫のいぢりでも悪かつたのでしょうか。佐竹殿に罪はないことを述べたといふが、すぐにお許しくださいました。ただし、お父上にも早々に上洛していただいた方がよろしかろう。佐竹殿が殿下に頭を下げるより、お父上とお一人の方がなおよろしい。また、浅野長政の側から何か言つてくるかもしれません、関わらないことですな。そうそつ、それから、宇都宮からの荷物は、一切ご領内へは入れないこと。宇都宮とは今後一切関わらぬことを示さなければなりますまい」

三成の言葉は信じても良いものだらうか。義宣も佐竹領を没収、佐竹家は滅亡といつ末路をたどるのかと冷や汗をかいいてただけに、すぐには三成の言葉を信じじことができなかつた。

「治部殿、それはまことですか？」

「ええ。殿下は、佐竹侍従殿は天下の名門、源氏の当主。にわか源氏の誰かとは違う、家を潰すのはまことに惜しい、との仰せ。先ほど私が申しした通りになさつてくだされば、問題ないかと思います。それにしても、佐竹殿にまで累を及ぼそつとなさるとは、正直私も驚きました」

「治部殿、まことに、何とお礼を申し上げてよいが。治部殿の恩に感謝いたします」

再び義宣が頭を下げる。三成は、どうか私の忠告をお忘れなきように、と言い残して去つて行った。豊臣一の能吏は、佐竹と宇都宮の問題にばかり関わっているわけにもいかないのだ。政光に三成を送らせて、義宣は国許にいる父にあてて書状を書いた。

宇都宮滅亡と、義宣の処分についての顛末。三成のとりなしで累をまぬがれたこと。秀吉へのご機嫌伺いのために、父にもはやく上洛してほしいということ。宇都宮からの荷物は、一駄たりとも佐竹領に入れないと。三成から忠告されたことをすべて書き、すべては三成の尽力によるものだといふことも父に伝えた。

筆を置き、ようやく義宣は安堵することができた。伏見大地震、朝鮮への再征、それに今回の宇都宮の事件。いろいろなことが突然襲ってきたようだった。特に、宇都宮の件は佐竹家の存亡に関わる重大な事件だった。

ここ数年、秀吉は少しおかしくなつてきてている。それは義宣だけではなく、当然誰もが感じていることだらう。三成の言葉から察するに、三成も秀吉の今の状態をあまりよく思っていないようだつた。秀吉のせいで滅亡かと思いもしたが、三成には感謝するばかりだ。この恩はいつか返さなければなるまい。三成が義宣の力を必要とした時には、必ず三成の力になろう、と義宣は固く心に決めた。

人見藤道の推挙で義宣に仕えるようになつて、何年が経つただろうか。十一歳の時から仕えているのだから、もう七年になる。金阿弥は十七歳になつていた。

最近、同じ年頃の小姓たちは元服をして新たに名乗りをもらひ、義宣に改めて仕えるようになつっていた。金阿弥ぐらいの年頃ならば、元服していてもおかしくはない。金阿弥もそろそろ自分も、同朋ではなく祐筆あたりに出世して、金阿弥ではなく兄のように新たに名乗りをもらうのだろうと思つていた。だが、義宣からそんな話が出る気配は全くなかつた。

——最近、伏見の大地震や、宇都宮の領地没収にともなう処分の問題など、義宣を煩わせることがかりが続いていたため、金阿弥の元服が遅れているのだろう、と思うことにした。それに、金阿弥の兄はいまだ罪人扱いとなつてゐる。實際、宇都宮の事件は佐竹家にとって非常に重大であった。義宣が処分されなくてよかつた。宇都宮国綱は、結局領地を没収されたあげくに備前に配流になつてしまつてゐる。

義宣の寝所に呼ばれることも、そろそろなくなるだらうと思つていたのだが、そんなことはなかつた。十七歳になつて、初めて抱かれた時のような幼さも可愛らしさもなくなつてゐることは分かつてゐる。だから、そろそろ飽きられると思つていたが、どうやら義宣はまだ金阿弥を手もとに置いてくれるらしい。

それがとても嬉しい反面、少しだけ嫌だつた。

義宣が金阿弥を側に置いて、昔と変わらず可愛がつてくれることはとても嬉しい。いつまでも、こうして側に置いていてほしいと思う。だが、それが叶わないことくらい金阿弥にも分かる。年が明ければ、義宣は繼室を迎えて二年目になる。義宣は、口では、繼室は幼すぎて話にならない、と言つてゐるが、その繼室も今では十五歳

の立派な娘だ。近いうちに、義宣の子を身にもつこともあるだらう。以前に比べると、義宣が継室のもとへ通う回数は増えている。

それに、周りが元服して大人の仲間入りをしていく中で、自分だけがいつまでも金阿弥のまま、義宣の庇護のもとにして、可愛がられているのは恥ずかしかった。

義宣の側にいたい。だが、いざれこの時は終わる。義宣に可愛がられていたい。だが、いつまでも子どものままでいるのは嫌だし、恥ずかしい。

義宣に甘えたい気持ちと、恥ずかしさや不安が心の中でせめぎ合ひ、つい義宣にすげない態度を取ってしまう。

抱き上げられそうになると、嫌だと言ってしまう。頭を撫でられると、子ども扱いするな、と言ってしまう。いつも言つた後に後悔するのだが、義宣は金阿弥の葛藤などお見通しなのか、それとも子どもっぽいと思っているのか、ただ笑つて甘やかしてくれた。それが心地よいから、金阿弥もつい甘えてしまう。

義宣は継室を迎えたのだし、金阿弥もいざれ元服し、妻を迎える家を構える。そうすれば、この曖昧で心地よい関係など終わってしまうのだ。金阿弥は義宣と恋仲にあるわけではない。義宣は一度も金阿弥との関係に名をつけことなどなかつたし、金阿弥も義宣と恋仲だとは思つたことがなかつた。

金阿弥は義宣を好きだと言つた。すげない態度を取つてしまつても、今でもその気持ちに変わりはない。義宣も金阿弥を好きだと言つてくれた。だが、あくまでも主と同朋だ。

もうすぐ終わつてしまふのかもしれない。そう思つていたというのに、義宣に寝所へ呼ばれた。最近は継室のもとへばかり行つて、金阿弥は放つておかれていたのだ。

寝所の前まで来ると、いきなり襖が開いて、義宣の腕が伸びてきた。その腕に腕を掴まれ、倒れるように義宣の腕の中へ収まつた。

「殿？」

「一人の時は、そう呼ばない約束だろ？」「

「義宣様」

初めて抱かれた後から、一人きりの時はそう呼ぶように言われていた。義宣の名を呼ぶと、義宣は満足そうに笑つた気配がした。

「御台様のもとへ行かれなくてよろしいのですか？」

「どうした、やきもちか？」

「そんなことはありません。ただ、思ったことを言つただけで。お父上でいらっしゃる北城さまや、大御台さま、御一門、譜代の方々は、皆さまお世継ぎを期待なさっていますからね」

「可愛くない」とばかり言う。そこが可愛いな、お前は

「だから、やきもちではありません。それに、可愛いこという言葉は、御台様に言つて差し上げればよろしいではありませんか」

またやつてしまつた。昔ならば、素直に礼を述べることができたはずなのに、いらないことを言つてしまつた。義宣は氣を悪くしただろうか。抱きしめられているせいで、義宣の顔は見えない。ただ、ぽんと背中を叩かれた。

「御台のことは口にするな」

そう言つて義宣は、金阿弥の口を塞ぐように口づけてきた。軽く触れるだけで離れていく口づけば、繰り返されるうちに深いものへと変わつていつた。幼いころは怖がっていたが、もう怖くはない。義宣に抱き上げられ、用意されていた褥へ運ばれる。こうなつては嫌がつてみせたところだ無意味だと分かつているから、恥ずかしさはあつたが金阿弥はおとなしく義宣に身を任せた。

行為の後、甘やかすように金阿弥の頭を撫でてくる義宣に、金阿弥はぽつりと本音を呴いた。

「私、もうじつこつ」とはされないので思つていました

「何故だ？」

「だつて

予想外だ、という顔をする義宣に、もう十七歳になつて臺が立つ

てこるし、継室のもとへよく通つてゐるから、とは言えなかつた。先ほど、御台のことは口にするな、と言われている。それに、そんなことを言つたらやきもちをやいて拗ねているようで、言ふのはまずがなかつた。

「継室のもとへよく通つてゐるからか?」

義宣に答えを言い当てられ、どうじょうか迷つたが、素直に頷いた。それを見て義宣は苦笑をもらした。苦笑されて少し恥ずかしい。「俺にはお前だけだと言つたことを忘れたのか?」「まさか、忘れるはずありません」

名護屋で好きだと言われたことも、伏見でお前だけだと言われたことも、忘れるはずがない。片時も忘れたことなどなかつた。それを忘れたのか、と聞かれるのは心外で、思わず必死に否定するような口調になつてしまつた。義宣がまた苦笑した。

忘れるはずがない。その言葉を信じていられるほど子どもでもない。いつまでも搖るぎないものだと信じていられるほど子供でもない。「俺には、お前だけだよ」

言ひ聞かせるように言われ、金阿弥は義宣に抱き寄せられた。

義宣は継室を迎えた。曖昧な関係は終わると思つてゐた。だが、そうではないのかもしれない。義宣は今でも、金阿弥だけだと言ってくれる。金阿弥が義宣を他の誰とも違つと思つ気持ちも、今でも変わらない。

義宣の言葉を信じよつと思つた。今まで何度も義宣は、お前だけ、と言つてくれた。疑つ必要などない。今までの関係は、これからも続くのだ。

「義宣様」

「何だ?」

抱き寄せられたまま、甘えるように義宣の首に腕を回す。昔のように、大好きです、と言いたかったが、恥ずかしくて言えなかつた。ただ、自分の思いをこめて抱きついた。

抱き返してくれる義宣の腕はあたたかくて、昔と何も変わらなか

つた。そのことが嬉しくて、金阿弥は更に元氣づく宣言に抱きついた。

義宣と琳の間に、子どもができる気配は全くなかつた。琳が義宣の側室になつて、もうすぐ三年にならうとしていた。

もともと、琳が義宣の妻になつた時がまだ十三歳の少女だつたのだから、その少女に子どもを期待する方がおかしいのだ。初めの頃など、怯える琳と閨を共にすることすら難しかつたというのに。

だが、琳が幼いことも、琳が怯えて閨事がままならなかつたこともおかまいなしに、譜代家臣の連中は、お世継はまだか、と何度も義宣に言つてくる。先の御台とは六年間の結婚生活だつたが、子どもは一人もできなかつた。琳とはまだ二年だ。年が明けてようやく三年目になる。そう簡単にできはしないだらう。まして、琳は先の御台と違つて、まだ少女だ。先の御台は、義宣よりも一つ年上だつた。

それでも連中は義宣を急かす。父が今の義宣の年の頃には、既に弟の盛重も生まれていたのだと言ひて、義宣にも早くお世継を、と期待する。

連中が世継を望むのは、佐竹家が安泰でなければ我が身も安泰ではいられないからだらう。

毎日のように、直接、または遠まわしに世継をせがまれ、うんざりだつた。御台様にお世継ができるのならば、側室を、とまで言われた。

そこまで言ひのならば、側室の一人でも迎えてやううと思つた。それで、連中の気が少しでも晴れておとなしくなるというのなら、女の一人や一人を側室にすることなど、簡単なことだ。誰か適当な女を側室にしてしまえばいい。

そう思つたが、義宣は琳を側室に迎えた時のこと思い出した。連中は、多賀谷の姫でも文句を言つていた。人質だつた娘を、と。適當な女を側室にすれば、また面倒が起きたらう。だが、どこか

の家の姫を側室にしたところで、家同士の衝突があるに決まっているのだから、それは更に面倒だった。

何をするにも、老臣たちが障害になる。それが昔から嫌だつた。こめかみを押さえつため息をついた時、ある姫の存在を思い出した。あの姫ならば、連中も文句を言わないだらうし、面倒が起るはずもない。

岩瀬の姫。

その姫を、側室にすると決めた。

金阿弥に酌をさせながら杯を重ねていると、金阿弥が首を傾げた。何か気になることでもあつたのだろうか。

「どうした、金阿？」

「いえ、今日の義宣様は、いつもより上機嫌のように見えましたので、良き女性でも見つけられたのかと思いまして」

「良い女を見つけたと言つたら、妬けるか？」

「まさか」

義宣の問いに嫌味なくらいにこやかな笑顔を浮かべて金阿弥は答えた。最近、可愛げがなくなつてきている。思つてゐるであろうことは裏腹のことを言うのだ。可愛くない。今も少しくらいには面白くないと思つてゐるはずだ。もつとも、可愛くないところが可愛いのだが、本人はそれを分かつていなかつた。

「まあ、良い女を見つけたというのは、嘘ではないな」

意地悪く笑つてみせると、金阿弥はあからさまにむつとした。どんなに言葉で本心を偽つても、表情は昔と変わらず正直だ。

「譜代の老臣どもが、俺に世継はまだか、側室を迎える、と言つてるのは、お前も知つていいだらう?」

「はい」

「あつらえ向きの女がいたんだよ」

「そうですか。義宣様にとつて都合のよろしい姫君がいらっしゃる

とは思えませんがね」

「それがいたんだ。誰だと思ひへ？」

「さあ？」

わざと金阿弥をからかうような物言いをするのは意地が悪いと思つが、いちいち義宣の言動に反応する金阿弥がいけない。つい意地悪をしたくなつてしまつ。だが、そろそろからかうのはやめた方がいいだらう。金阿弥が氣の毒だ。

「いわせ岩瀬の姫だ」

「岩瀬の姫君？」

「ああ。母の姉の娘、つまりは俺の従妹だな。すかがわにかいどう須賀川一階堂の姫と言えば分かるか？」

そこまで言ひと金阿弥は、ああ、と呟いて頷いた。ビリの姫のことを言つてこのかよつやく分かつたよつだ。

岩瀬の姫は、義宣の母の姉の養女だ。産みの母親も義宣の母の姉である。血の繋がつた従妹の姫ならば、誰も文句は言わないだらう。譜代連中も何も言わないはずだ。そして、母は恐るべ琳を御台に迎えた時よりも喜ぶだらう。

家柄の問題は、岩瀬の姫が義宣の従妹ということで十分だつた。「それだけではない。あの姫は、俺の伯母にあたる養母ともども佐竹家の庇護のもとに生きる身だ。側室にしても、俺がこの姫に実家のことわざらわされることはないだらう」

「本当に、義宣様にとつて都合のよろしい姫君ですね」

「そう思うだらう?」

義宣がふつと笑つと、金阿弥は大袈裟にため息をついてみせた。どうしたといふのだ。

「それでは、私がこいつして呼び出される」ともなくなるのですね?」「何を言つている?」

「だつて、ご側室を迎えるのですから、私はもう不要でしよう?」

清々しますよ、と続けた金阿弥は、本氣でそんなことを思つてい

るのだろうか。いつものように意地を張った言い方をしているのか

と思ったが、琳を迎えた時もこんなことを聞かれたことを思い出し、

もしかしたら金阿弥は本気で言っているのかもしれないと思った。

「まさか。何度言わせれば気が済むんだ？お前は、俺が好きなんじやないのか？」

「それは、その」

「それは？」

顔を覗きこむと、金阿弥は田を逸らして俯いた。この反応を見れば言われずとも金阿弥の気持ちは分かるが、言葉にしてほしかった。金阿、と名を呼ぶと、金阿弥は恥ずかしそうに義宣を見上げた。

「好き、です」

「俺もだよ」

そう言つて金阿弥の頬に手を当てる、甘やかすように優しく口を吸つた。こういう時の金阿弥は、素直に義宣のことを聞く。子どもの頃から金阿弥は何も変わらない。義宣には、金阿弥だけだった。

岩瀬の姫（一）

戦場の空気が本丸にまで伝わってくる。男たちの叫び声と、女たちの悲鳴が聞こえる。

怖くなつて養母の打掛を握りしめると、祥の手に養母の手が重ねられた。養母の手はかすかに震えていたが、それでも祥はそのぬくもりに安心した。

「後室御前」

家臣の誰かが、本丸に飛び込んできた。険しい表情で養母を呼ぶ。

嫌な感じがした。

「何ですか、落ち着きなさい」

「長禄寺に火を放たれました」

「まさか。長禄寺のあたりは筑後が守っているではありますか」
筑後は聞いたことのある名前だ。確かに、守屋筑後守。二階堂家に代々仕えている者で、二階堂四天王の一人なのだそうだ。養母も信頼している家臣のはずだ。

「その筑後守殿が、かねてより伊達に内通していたようで、長禄寺に火を放ち家臣二百人と共に我が二階堂家を裏切りました」

養母や祥とともに本丸に詰めていた侍女たちが、この家臣の言葉を聞いて色めいた。子どもの祥にも、これがいかに大変なことが分かる。長禄寺は本丸のすぐ近くだ。直にこの本丸まで火が回るに違いない。それに、代々二階堂家に仕えた家臣が裏切ったのだ。他の家臣も守屋に同調して裏切るかもしれない。

「お養母さま」

養母の手を握ると、養母は祥に向かつて微笑んでくれた。そして立ち上がり、恐怖と混乱に陥りそうになつている侍女たちと、急を告げに来た家臣を見据えた。

「二階堂の人間が見苦しいですよ」

「ですが後室御前、このままでは伊達勢がここへやってくるのは時

間の問題です。いかがなさるのですか?」「

「自害すればよいのです」

養母の言葉に、本丸は静まり返った。養母の言葉に迷いはない。須賀川城の女城主として、養母は伊達と戦うと決めた時から、敗れた場合のことを考えていたのだろう。伊達はすでに祥の実家の蘆名家を滅ぼし、その勢いで須賀川に迫っている。奥州で伊達政宗にかなうはずがない。それでも、一階堂家の誇りをかけて、養母は伊達と戦うことを決断した。その時と同じ顔を養母はしている。

夫の死後、ひとりで須賀川城を守り続けた養母の姿は力強かつた。「私は女の身ですが、須賀川城の城主です。この城から逃げようとしたところで、政宗に捕まり殺されるに決まっています。ならば、私は自害を選ぶ。それだけのことです。お前たちはこの子を連れて逃げなさい。いくら政宗と言つても、力ない女を無碍には扱わないでしょう」

背中を押されて、祥は侍女たちのもとへとやられた。侍女たちの中には泣き崩れている者もいる。祥の頬にも涙が伝った。養母に逃げるよう言われても、侍女たちは誰も逃げようとしなかった。祥も養母を置いて逃げられるはずがないと思つた。

「お養母さま」

養母に駆け寄ろうとしたが、侍女の鏡田(かがみだ)に後ろから抱きしめられて動けなかつた。

養母が懷から短刀を取り出した。何の細工も施されていない質素な短刀。その短刀が鞘から抜かれ、刃がきらりと光つた。

自害の刃が養母の胸に刺さる。その瞬間を目に焼き付けなければならぬと思いながらも、祥は目を瞑つてしまつていった。

侍女たちが息をのんだ。後室御前、という悲鳴が聞こえた。

恐る恐る目を開けると、短刀は畳の上に転がっていて、養母の腕は見知らぬ兵に掴まれていた。

「亡き一階堂盛義殿の奥方、阿南殿でいらっしゃいますね」

養母の腕を掴んだ兵が口を開いた。養母は落ち着いた顔で頷いた。

「私が一階堂盛義の妻です」

「我が主、岩城常隆様がお呼びです。『同行願います。輿の用意も整つております。さあ、姫さま方もお早く』

岩城からの迎えだと聞いて、その場は明るくなつた。岩城常隆は、いわきつねたか養母の甥、つまりは祥の従兄弟にあたるのだと、鏡田が祥にそつと教えてくれた。養母は、本当に岩城からの迎えなのか迷つたようだつたが、侍女たちの喜ぶ姿に気が緩んだのか、静かに、はい、と言つた。

兵たちに言われた通り、用意された輿に乗つたはいいが、進むうちに養母の顔が険しくなつた。何故だろうか。祥には分からなかつたが、養母はいきなり、輿を止めるように要求した。だが、その声を無視して輿は進んだ。

「お養母さま？」

「お祥、この輿は岩城のものではありません。伊達の陣へ向かっています」

養母の言つとおり、輿は止まることなく伊達の陣へと進んで行つた。政宗に捕まるこことを拒み、一階堂の誇りを胸に自害しようとしました。養母は、結局のところだまされて伊達の兵に捕らわれてしまつた。祥と侍女たちも、養母とともに伊達の兵に捕まり、政宗のもとへ連れて行かれた。

政宗は、伯母である養母のことを敬うような態度を取り、本当は戦などしたくはなかつた、伯母上のために新たに館を作ろう、と言つてきた。養母は政宗の申し出を断り、政宗が用意した豪華な食事にも、菓子にも手をつけようとしなかつた。ただ、侍女に持たせた小袋に入った白米だけを食べていた。祥もそれにならつた。

政宗は須賀川城を攻め落とした敵だ。蘆名も滅ぼしている。政宗は祥の家と実家を滅ぼした。祥にとつて政宗は憎むべき敵だつた。敵の施しは受けない、という養母の気持ちは祥にも分かる。

そうした日がしばらく続いた。まるで、養母と政宗の根競べのようだつた。負けたのは政宗の方だつた。

政宗は、養母と祥たちを須賀川城から連れて来た伊達の兵九人全員を無残にも殺したのだ。この兵たちは、須賀川落城の時から敵だというのに、祥たちに随分と親切してくれていた。それが政宗の反感を買つたらしい。伊達の兵でありながら、二階堂に味方するとは許せない、という理由で殺されたのだそうだ。

このことがあって、養母は完全に政宗と決別した。そもそも、初めから養母は政宗の世話になるつもりなかつたのだ。だが、政宗は自分の顔に泥を塗られたと思い、激怒したようだつた。

その後、養母は祥を連れて甥の岩城常隆を頼つて岩城へ落ちて行つた。だが、常隆は太閤秀吉に従い小田原へ赴いた帰りに、命を落としてしまつた。頼りにしていた常隆亡き後、養母も祥も岩城家にはいられなかつた。

「お養母さま、わたしたちこれからどうするのですか？」

「そうですね、常陸へ行きましょう」

「常陸？」

「ええ。私の妹が常陸の佐竹家に嫁いでいます。ですから、今の当主の義宣殿は、お祥の従兄にあたるのですよ。きっと、私たちの面倒を見てくれます」

「須賀川からは、また離れてしまうのですね」

「寂しいかもせんが、大丈夫。私がついています」

「それに、侍女たちも一緒です。お前が懐いている、鏡田も一緒ですよ」

「はい」

須賀川を離れ、親類を頼つて生きるしかない身の上に不安を覚えないと言つたら嘘になる。だが、養母がいてくれるから、祥は平気だつた。

養母はいつも、あたたかい手で祥を守り、導いてくれる。養母がいてくれるなら、どんなことがあろうとも平気に違ひない。

岩瀬の姫（一）

祥は蘆名家の次女として黒川城に生まれた。父は養母である阿南の息子の蘆名盛隆あしなもりたかで、母は阿南の妹だった。

阿南は祥にとつて祖母でもあり、伯母でもあった。父の盛隆は二階堂家の嫡男おきなむすこだったが、阿南の夫の一階堂盛義が蘆名家に降伏した時、その証として父は蘆名家の人質になつたのだそうだ。母は伊達家の娘で、もともと蘆名盛興あしなもりおきの妻めだったが、世継ぎがいないまま盛興が死んでしまつた後、人質だった父が母の婿となり、蘆名家の当主になつた。盛興と母の間には、祥の異父姉にあたる一人娘しかいなかつたのだ。

そして、祥が生まれた。父も母も優しくて、とても幸せだつた。妹も生まれ、弟も生まれた。だが、弟が生まれてすぐに、父が家臣に殺された。理由は分からぬ。ただ、悲しくて、辛かつた。

父が死んでしばらくして、母から一階堂家の養女となる話を持ちかけられた。その頃、一階堂家では当主の盛義が病死し、跡をついだ父の弟の行親ゆきちかも戦死し、誰も跡を継ぐ人間が残つていなかつた。残された未亡人の阿南が、須賀川城の城主となつていた。その阿南が、祥を養女に欲しいと言つてきたのだそうだ。

行親が戦死した時点で、この話は既に両親と阿南の間では進められていたらしいのだが、両親は最初渋つていたらしい。行親が戦死した頃は、まだ蘆名家には子どもが姉と祥しかいなかつた。だから両親は渋つたのだ。その後、妹が生まれて、念願の世継ぎとなる弟も生まれた。そこで、両親は祥を養女にする話を承諾したそうなのだが、父が家臣に殺された。この事件によつて、祥の須賀川入りは年明けにまで延期されたのだ。

そして年が明け、母から養女に言つてくれと頼まれた。本当は行きたくなかった。祖母でもあり伯母でもあると言われても、顔も見たことがない人の所へ行くのは怖かつた。何よりも、母に見捨てら

れたような気がしてたまらなく悲しかった。この時、祥はまだ六歳だった。

だが、泣きながら祥を抱きしめ、何度も、「ごめんなさい」と繰り返す母を見て、祥は嫌だとは言えなかつた。泣かないで、と母に言うと、母はますます酷く泣いたので、困惑したことを覚えている。

その後、須賀川へ出立する準備が整えられ、祥は家族と離れてひとり須賀川へ向かつた。祥を出迎えた二階堂家の家臣たちは、口々に父のことを懐かしみ、鼻が父に似ているとか、いや口元が似ているのだとか、言うので、少しだけほつとした。二階堂家の家臣たちにとつて、祥は亡き主の忘れ形見なのだ。

本丸に通され、阿南に挨拶をした。緊張していく、怖かつた。夫と息子の死後に城主となる人は、どのような女丈夫なのだろう、と思つた。だが、顔を上げて見た阿南の顔は、姉妹である母とはあまり似ていなかつたが、母に似た強さと優しさが感じられたので、怖くなかった。

今日から私がお前の養母です、と言われ、阿南に優しく抱きしめられた時から、阿南は祥の養母になり、祥は養母の養女になつた。それから五年が経つた。その間に、弟は病死し、佐竹家の次男が姉と結婚して蘆名家を継いだ。だが、蘆名家は政宗によつて滅ぼされた。そして、同じく政宗によつて二階堂家も滅ぼされたのだった。その結果、祥は養母と共に佐竹義重に嫁いだ養母の末の妹を頼り、佐竹家にやつってきたのだ。

廊下の軋む音が聞こえた。大御台様がいらっしゃいます、という侍女の言葉を聞いて、ようやく養母の妹である佐竹家の大御台との対面がかなうのだと知つた。祥と養母は、しばらく部屋の中待たされていたのだ。

すつと襖が開くと、養母によく似た女性が入つてきた。この人が佐竹家の大御台。祥があわてて頭を下げようとすると、大御台はそれを手で制した。その手は爪の先までぴしつと真っ直ぐで、養母と似てゐる顔立ちも、似てゐるはずなのに、よく見ると冷たい印象を

受けた。

一階堂家へ養女に入った時のことを思い出し、祥は緊張で硬くなつた。

「阿南姉様、お久しぶりです」

「此度は、義重殿にもお前にも迷惑をかけることになつてしまつて、申し訳ありません」

「どうか、お気になさらないでください。夫の義重も義宣も、姉様と姫を歓迎しております」

養母と話をしていた大御台の視線が祥に移つた。目が合つた瞬間、どうしていいか分からず、小さく笑みを浮かべると、大御台もかすかにほほ笑んでくれた。

「姫、私とそなたの養母上は姉妹。そなたと義宣はいとこ。気兼ねせずともよい」

「ありがとうございます」

「世話になります」

「できれば姉様や姫のために何かしたいのですが、私は義重殿と共に上洛せねばなりません。何でも、今後大名の妻子は京で暮さねばならぬようとして」

「そうですか」

「『安心ください。姉様と姫には心安くお過ごしいただこうと、下河辺に新たに館を作りました。そこでお暮しください』

新たに館を作ったということは、城ではなくそこで、養母や侍女たちと暮らすということなのだろうか。そうなれば、ありがたかつた。城の中で暮らすのは、息苦しそうな気がしたのだ。城の奥は大御台と義宣の御台のもので、そこに側室でも侍女でも何でもない祥は居づらいと思つ。

大御台に礼を述べて、養母と祥は佐竹家に用意された館に移り住んだ。そこでの暮らしは平穏で、表の世界でのことも、自分たちにはまるで関係のないことのように思えた。ただ、佐竹家で義宣の御台が死んだ後、祥が新たな義宣の妻になるのではないか、という噂

が立つた。鏡田は噂に期待していたようだが、それは思いすゞしに過ぎなかつた。多賀谷の姫がいづれは継室になるのだと聞いた。

祥が嫁入りに適した年齢になつても、祥たちの暮らしは変わらなかつた。平穏すぎて、この今までいいのだろうか、とさえ思つほどだつた。養母も、祥が十四、五歳になつたら、義宣は祥を自分の養女にでもして、どこかの家に嫁がせるか、義宣の側室にするのだろうと思つていたらしい。実際、義宣は祥が十四歳になつた時、一度この館へ足を運んでいる。だが、そのような気配は全く見えなかつたので、養母はもしかしたら祥に婿を取らせて一階堂家を再興させてくれるのか、と期待したようだが、その気配も全く見えなかつた。このまま養母や鏡田たちとこの館で暮らし、年を取つていくのかと思つていたが、年が明ければ十九歳になるという年の瀬に、京にいる義宣から文が届いた。義宣からの、初めての文だつた。

何が書かれているのだろう、と思い広げてみると、そこには養母とともに京見物でもしてみてはどうか、というようなことが書かれていた。だが、これが義宣の伝えたい真意ではないことくらい、祥にも分かる。もう子どもではない。

義宣は、祥を側室にするために京の屋敷へ呼んでいるのだ。

岩瀬の姫（II）

年が明けて、祥は義宣に言われた通り、養母と共に京へ向かった。少し京見物をした後、佐竹屋敷へ行くと、大御台に出迎えられ、義宣は祥を側室にするつもりだと告げられた。やはり、京見物というのは口実で、そちらが本当の目的のようだ。

いざれ義宣から呼び出されるだろうから、それまではゆっくりしていればいいと大御台に言われた。しばらくはこの屋敷にいることになるのだから、義宣の御台に挨拶をした方がいいとも言われたので、養母とともに御台へ挨拶を行つた。御台は祥よりも三、四歳年下だと聞いていたが、年よりも少し幼く見えた。おとなしそうな少女だった。

義宣は、祥を側室にするつもりだと大御台から聞いたが、京へ着いてから数日、義宣は祥の元へはやつてこなかつたし、正式に側室にするという話も祥のもとへはこなかつた。もしかしたら、側室にするというのは、大御台や祥の勝手な考案で、本当に義宣は京見物をさせようと思つただけなのだろうか、と思い始めた頃、義宣の渡りがあると告げられた。

突然義宣がやつて来ると言われても、どうすればいいのか分からず、養母に助けを求めたが、養母は、義宣に任せていればいい、とかか言つてくれなかつた。

結局、どうすればいいのか分からぬまま、祥は寝所で義宣の渡りを待つていた。廊下の軋む音が聞こえ、慌てて頭を下げた。

「岩瀬の姫か」

「はい」

襖が開く音と同時に男の声が聞こえた。これが義宣の声なのだろう。五年前にも聞いてはいるが、忘れてしまつている。顔を上げろ、とその声に促されて顔を上げると、目の前にいたのは確かに義宣だった。声は忘れたが、顔は覚えている。

「京は見て回れたか？」

「お屋形さまのおかげで、楽しい時を過いせました。ありがとうござります」

「それは良かつた。伯母上はお元氣か？」

「はい。大御台さまとお会いすることができて、嬉しそうでした」

「どうか」

人当たりのいい笑みを浮かべながら、義宣はその後も、下河辺での生活はどうだったか、この屋敷には慣れたか、などと世間話のような話しかしながら。祥は義宣に問われたことに答えるだけで、これから義宣と闇をするよつた雰囲気とは思えなかつた。

当たり障りのない話をしばらくした後、では、また、といつ言葉を残して義宣は去つて行つた。寝所にひとり残された祥は、一体義宣は何のためにやつてきたのだろう、と首を傾げたくなつた。

だが、それから義宣は頻繁に祥のもとへやつて来るようになつた。側室にするという話は一切せず、ただ当たり障りのない、上辺だけのものとしか思えないような話をして、帰つて行く。

義宣は何がしたいのだろうか。養母か鏡田に相談したかつたが、養母も鏡田もすっかり祥には義宣の手がついているものと思つてゐるようで、何もないのだとは言いにくかつた。それに、祥に義宣の手がついていると思つているのは養母たちだけではなく、家中の人間も同じようだつた。祥に義宣の渡りを告げに来る佐竹家の侍女は、祥のことを「岩瀬御台様いわせみだい」と呼ぶ。どういうことか尋ねてみると、祥は岩瀬の一階堂の姫で、義宣の側室だから「岩瀬御台」なのだという答えが返つてきた。

祥の知らないところで、祥は義宣の側室として認識されていた。

これはどういうことなのだろう。今度義宣がやつて来たら尋ねてみよう。そう思つていたところに、ちゅうゞ義宣の渡りがあると告げられた。

義宣が祥のもとへやつてきて、いつものよつに当たり障りのない話を始める前に、祥は思い切つて自分から義宣に話しかけた。

「お屋形さま、お聞きしたいことがあるのです

「何だ？」

「わたしは、お屋形さまの側室ですか？」

「ずっと気にかかっていたことを尋ねると、義宣は躊躇うように黙り込んで、眉間にしわを寄せた。聞かれたくなかったのだろうか。

「家中では、そのような認識が広まっているようだな」

「そのことはわたしも知っています。ですが、わたしが聞いているのは、あなたの認識です」

はぐらかされた。義宣は祥の問いに答えたくないのか、祥が重ねて問うと、不機嫌そうな顔をした。これまで祥に見せていた人のよさそうな笑みが崩れていく。

「俺も、姫を側室だとは思つている」

「では、なぜ正式にその話をなさらないのですか？なぜ、いつも当たり障りのない、中身のない世間話しかなさらないの？」

わたしは何のために呼ばれたの、と言葉を続けたが、義宣の声が祥の言葉を遮った。

「面倒だらう」

「面倒？」

「俺は、口うるさい譜代連中に、世継ぎはまだかと言われることにうんざりしたから、姫を側室にしようとした決めた。連中は、御台に子ができるのなら、側室を迎えるとうるさくてな。だが、姫を側室にしたのは連中を黙らせることが目的だ。だから、姫のもとへ足繁く通つて、世継を儲けようとしているように見せかけた。連中は、俺が姫を側室に迎えて、うまくやつてしているとも思つてているようだ。何も言わなくなつた」

義宣は何を言つてているのだろう。随分と、自分勝手なことを言つているような気がする。譜代に世継ぎをせがまるのが嫌だから、祥を仮初の側室にして、その問題から逃げようとしていると言つているのだろうか。

「それは、わたしを利用するとこうことですか？」

「そういうことになるだろうな。だから、姫には正式に話をしなかつたし、闇も共になかった。連中を黙らせることができればそれでいい。姫も、俺に何もされずとも側室として扱われ、良い暮らしができるのだから、悪い話ではないだろう?」

本人を目の前にして、利用しているとはっきり告げ、その上、祥にとつても悪い話ではないだろう、とはいうことだ。義宣は自分が自分勝手な話をしていると分かっているのだろうか。祥がどんな思いで京へやってきたか分かっているのか。いや、分かっていたら、こんなことは言わないだろう。

側室として迎えられたのだから、義宣が祥を、世継ぎを儲けるためだけの存在、と思つていても仕方がないとは思つていた。だが、まさか譜代家臣を黙らせるためだけの道具として扱われるとは思つてもみなかつた。

嘔然とする祥を見て、義宣はため息をつき、そういうことだ、と呴いて部屋を出て行つた。

ため息をつきたいのはこちらの方だと、遠ざかる背中に面つてしまつてやりたかった。

岩瀬の姫（四）

義宣は、祥に側室にじょうとした真相を話してからも、頻繁に祥のもとへ足を運んでいる。それは、義宣が話していたように譜代家臣たちを黙らせるために必要なことなのかもしないが、ただ利用されているだけの祥にとっては、空しい日々だつた。

これならば、義宣の側室ではなく、他のどこかの家に嫁に出された方がよかつたかもしれない。できることならば、婿を取らせてもらつて、一階堂家を再興したかったのだが、それが過ぎた願いだということは分かつている。

祥に真相を話した義宣は、もつ人のいいふりをする必要はないと思ったのか、祥のもとへ来ると、一門衆や譜代家臣に対する愚痴ばかり言つようになつた。

譜代連中は俺を当主とは思つていない。一門衆は自分の血筋を鼻にかけている。誰も彼もが佐竹という飾りにしがみついているのだ。そう言つて義宣はため息をついていた。だが、そんな話ばかり聞かされて、ため息をつきたいのは祥の方だ。

「お屋形さまは、どうしてそのような考え方をなさるのですか？」

愚痴ばかり聞かされていても、祥には義宣が何故そのような考えに至るのが分からなかつた。祥が佐竹家について知つていることはわずかでしかないが、義宣は十七歳で家督を継いだと聞いている。初めの頃は、年若いせいでの義宣の言葉のとおり、主と思われなかつたかもしれないが、祥の見る限りでは、今の家臣たちは義宣を主と思つているよう見える。

「側室を迎えるように家臣たちが勧めたのも、あなたのことを見つてのことではないのですか？」

「違う。連中は、俺のことを思つてているのでない。俺に世継ぎが生まれなければ、佐竹家が危うくなるだろ？ さつすると、自分の身が危ういから、そう言つてはいるだけだ」

「そうでしょうか？」

「そうだ。一門の奴らも、俺に世継ぎを期待している。俺が養子を迎えることは望んでいないだろ？ 佐竹の血が途絶えることを恐れているに決まっている」「誰かが、そのように言われたのですか？」

「いや、だが言われずともそのくらい分かる」「そうでしょうか？」

「そうだ。特に中務など、そう思つていて違いない。母はそれ以

上に、養子を迎えることを嫌がるだろ？」

「御東殿と大御台さまがどうかなさったのですか？」

「お前には関係ない」

祥の問いに義宣は答えたが、最後の問いただけは答えなかつた。何か、義久と大御台に思うところがあるのかもしれないが、義宣の今の話を聞いていても、祥には義宣の考えが、ただの思い込みのようにしか思えなかつた。

義宣は誰かに何かを言われたわけではない。ただ、ひとりで勝手にそう思つているのだ。中には、本当に義宣の言うとおりに思つている家臣もいるかも知れない。だが、そうではない家臣のほうが多いと祥は思う。そうでなければ、義宣は今まで十年以上も当主の座に着いていらるだろうか。

家臣たちの言動を、自己保身のために佐竹家を守らうとしていると捉えるのではなく、本当に自分のことを思つてのものだと思えば、もう少し明るい考え方持てるのではないか。

「では、浪人出身の家臣はいかがですか？あの者たちは、お屋形さまがお取立てになつて今があるのでしよう？」

「あいつらとて、同じだ。譜代や一門と違い、何の権もなく、新たな考え方を持った有能な人材ではある。だが、昔からの家臣ではないのだから、俺に何かがあつたらすぐに離れていくに違いない。まあ、口づぶるさい老臣どもよつは、よほど信用できるがな」「そうですか？」

今まで何度も聞かされてきた愚痴と今日聞いた話で、おぼろげではあるが義宣の考え方というものが分かつたような気がする。

義宣は、愚痴を言う時いつも卑屈なのではないか、と思うような言い方をする。だが、義宣は自分が取るに足らない人間だと思つているから卑屈になるのではない。その逆だ。義宣は自分が可愛いのだろう。傷つきたくないのだろう。だから、わざと卑屈な物言いをして、そういうものだと思い込んで自分を守ろうとしている。

それで他人が傷ついても、恐らく義宣は気付かないのだろう。他人の痛みに気付けるのなら、祥を側室であつて側室ではないようなこんな中途半端なままでいたせられるわけがない。家臣たちを黙らせるためだけに祥を側室にしたのとしても、そのことを祥に言わなければまだ良かつたのに。

何という人なのだろう。今まで義宣に愚痴を聞かされて、苛立ちを覚えたことはあつたが、今日はいつも以上だ。苛立ちを抑えて、祥は深いため息をついた。

「それにしても、わたしにこのよくなお話を色々としてくれたるなんて、思つてもみませんでした」

ため息とともに吐き出した言葉に、祥は少しだけ嫌味を混ぜた。いつも義宣の愚痴を聞かされているのだ。このくらいは許されるだろ。

祥の言葉に、義宣は口の端に笑みを浮かべて答えた。その笑みは、祥を見下しているように見えた。

「姫のことは、いつでも離縁ができるからな」「え？」

「姫を側室に迎えたのは、家臣どもを黙らせるため、ということは以前にも話したな。だが、それだけではない。姫は俺の伯母にあたる養母ともども、佐竹家の庇護のもとで生きている。俺が見限れば、姫たちの命運は尽きる。姫は俺の掌中に収まっているようなものだから、姫は俺に絶対に逆らわない。そんな女を俺は探していたのだ。姫はその条件にふさわしかった」

義宣が祥を側室にしようとした本当の真相を聞かされ、祥は言葉を失つた。義宣の声が遠くに聞こえるような気がする。

「姫は俺に逆らえない。何か面倒が起きた時は、姫に子ができなかつたことを理由に、離縁すればいい。姫は、その俺の決定に逆らえないだろ?」

義宣は自分勝手だ。自分が酷いことをしているという自覚すらないのだ。今まで義宣の愚痴に苛立ちを覚えてきたが、今の祥の胸を占める感情は、苛立ちという言葉では表現しきれなかつた。

「いい加減にしてください」

祥の声に反応して、義宣がこちらを向いた。その瞬間、ぱん、と乾いた音が室内に響いた。

右の掌が熱くなつてきた。それで祥は自分が義宣の頬を叩いたのだと自覺した。義宣は呆然としている。

じわじわと痛みを感じ始めた右手と、赤く腫れ始めた義宣の頬を、祥はじつと見つめた。

岩瀬の姫（五）

何といふことをしてしまったのだろう、とは思つた。側室という立場を考えれば、ここは謝罪をするべきだということも分かつていい。だが、祥は義宣に謝るつもりはなかつた。突然頬を叩いたのは悪いと思うが、それだけのことを義宣は口にしたのだ。

「あなたは、どうしてそのような考え方しかできないのですか？もしかして、自分は不幸だとでも思つていらつしやるの？」

祥の問いに義宣は答えなかつた。ただ呆然としているだけだった。突然のことにして、まだ思考が追いつかないのだろうか。

「あなたが、家臣たちにはがしろにされていると感じて、それを不幸だと嘆いていらっしゃるのだとしたら、それはあなたに問題があるからだわ」

「何だと？」

義宣の目が祥を捉えた。その目は険しかつたが、全く恐ろしくなかつた。ただ虚勢を張つてゐるようだつた。

「俺のどこに問題がある？連中が、俺を認めないだけだろうが」

立ち上がつた義宣は扇を取り出して、その扇で祥の顎を上向かせた。視線が真正面からぶつかる。祥は決して義宣から視線を逸らさなかつた。

「違います。あなたが自分以外の人間を認めていないのです」

「生意気な女だ。二階堂の養女だからと少し甘い顔をしてやれば、すぐにつけあがる」

甘い顔。義宣のどこが祥に甘かつたというのだろうか。最初から義宣は祥を道具として扱い、利用しているだけではないか。義宣が認めてるのは、祥が二階堂家の養女であるという部分だけだ。それ以外は、すべて認めていない。だから、義宣は祥に対してあんな態度が取れるに違ひない。

「お前は、俺が自分を不幸だと思つてゐるのか、と聞いたな。俺は

自分を不幸だとは思っていない。お前の方こそ、自分の境遇と俺を比較して、自分が不幸だと思っているのではないか？だから、俺は不幸ではない。そう思っているのではないのか？」

「いいえ」

確かに、祥を憐れみ、不幸だと言う人はいた。だが、祥は自分を不幸だとは思わない。仮に不幸だと思っているとしても、他人とどちらがより不幸か比べるなど、空しいだけだ。

「どうか。だがな、お前に俺の気持ちなど分かるものか」

義宣が鼻で笑つた。祥の否定を信じていないのだろう。本当は不幸だと思っているくせに、と言いたげだった。

「ええ、分かりません。でも、あなたもわたしの気持ちが分かるはずはないわ」

人と自分の境遇を比べているのは義宣の方だ。義宣は自分のことを不幸だと思っているのではないだろうか。

義宣は今まで一度も落城を経験したことがない。肉親を失つてもいない。実家は義宣が当主として治め、安泰している。当主には当主としての苦しみもあるのだろうが、恵まれてているはずの境遇を、義宣はなぜこれほど悲觀するのだろうか。なぜ、他人を信じず、認めず、苛立つているのだろうか。

家臣たちに対する愚痴以外、義宣の気持ちなど聞かされたことがない。だから、それ以外のことは分からぬ。義宣も、祥がどんな思いで側室になつたかなど知らないではないか。

祥も養母も佐竹家の庇護下で生きている。義宣に見限られるわけにはいかない。義宣の言つた通りだ。そのような状況にあるから、自分たちの身を守るために、祥は義宣の側室になつたのだ。本当は二階堂家を再興したかった。養母もそれを望んでいたはずだ。その望みを捨てて、義宣の側室になつたのだ。そんな祥の思いを、義宣は考えたことなどないだろう。

「お前は、自分の立場を分かつてているのか。俺は佐竹家の当主だぞ」「分かつていてる。分かつてているから、側室になつたのではないか。」

だが、今の祥の言動を考えれば、立場の自覚がないと思われても仕方がないかもしない。それでも、義宣には言われたくなかった。

ため息をつくと、胸のうちにくすぶつっていた怒りも一緒に吐き出されたような気がして、少し落ち着いた。落ち着くと、今の義宣の言葉にはつとした。

「あなたは、寂しい方ですね」

「俺を馬鹿にしているのか？」

「いいえ」

そのようにしか考えられないところも寂しいのだ、と心の中で呴きながら、祥は言葉を続けた。

「あなたは、佐竹という名門にしがみついた家臣たちにうざりなさいているのでしょうか？」

「そうだ。それがどうした。今の話と何が関係している」

「寂しい方」

「まだ言つか」

「だって、あなたは佐竹という名門にしがみつく家臣たちがお嫌いなはずなのに、佐竹とこの名門が誰よりも何よりも誇りで、それにしがみつかなければ生きていけないのは、家臣たちではなくあなたなのですもの」

だから、義宣は祥を側室に選んだのだ。一階堂の姫ならば文句は言われない、そう思ったのは義宣が自分で家門を気にしているからだ。かつて名門と言われ、血縁もある一階堂家ならば、名門である佐竹家にふさわしいと思ったのだ。新参の家臣を信じられないと言った時、義宣は彼らが古参ではないから信用できないと言った。そして、先ほどの言葉。俺は佐竹家の当主だぞ。この一言に、義宣の意識の全てが集約されている。

「黙れ」

祥の顎を上向かせていた扇が、祥の顎から離れた。扇を握った義宣の手が振り上げられる。叩かれるかもしない。いや、ここまで義宣を怒らせ、身の程をわきまえずに無礼を重ねたのだから、殺

それでもおかしくないかもしない。

養母のことを考えると、今更ながら後悔の念がこみあげてくるが、もつどうにかできるものでもない。

覚悟を決めて祥は目を開けた。だが、何も起きなかつた。そつと目を開けると、義宣は振り上げた扇を畳の上に投げつけた。扇が跳ねて転がつた。

「あいつと同じことを、お前も言つのか」

小さく呟いて、義宣は部屋を出て行つた。その声は弱々しく、なぜか痛々しいと感じた。

義宣はなぜ怒らなかつたのか。確かに怒つていたはずなのに、なぜあの言葉を残して部屋を出て言つたのか。あの言葉の意味は何なのだろう。

義宣に対して怒りを覚えていたはずなのに、義宣の言葉が気にかかり、祥も廊下に出て立ち去つた義宣の背中を田で追つた。その背中は、なぜか初めて見た時よりも小さく見えた。

岩瀬の姫（六）

感情に任せて荒々しく襖を閉めると、思つていたより大きな音がしてしまい、部屋の中で控えていた金阿弥がびくりと肩を震わせた。じつと義宣を見上げる金阿弥の目を見て、深くため息をつきながら、義宣は金阿弥を抱き寄せた。

「金阿」

「今夜は、岩瀬御台様のもとへは行かれないのでですか？」

「ああ」

「そうですか」

「嬉しかった？」

「さあ？」

口では色々と言しながらも、義宣の首に回された金阿弥の腕からは、金阿弥の嬉しさが伝わってくるようだつた。岩瀬の姫のもとへ足を運んでいる間は、世継ぎを儲けようとしていると見せかけるために琳のもとへは何度か通つたが、金阿弥のことは一度も呼んでいなかつたのだ。久々の逢瀬に、金阿弥が喜んでいなはずがない。じゃれるように抱き合ひ、口を吸うと、金阿弥がじつと義宣を見つめた。

「義宣様」

「何だ？」

「岩瀬御台様と何かがあつたから、私を呼ばれたのでしょうか？顔に書いてありますよ」

金阿弥の口調は義宣をからかっているようだつたが、その目は真剣だつた。昔から、この目には弱いのだ。義宣の心の奥底まで見透かしそうな、澄んだ黒い目に。

参つたな、とため息をついて、義宣は金阿弥を解放した。金阿弥は心配そうに義宣を見つめている。

「岩瀬の姫に打たれた」

「え？」

既に腫れの引いた頬を指差してみせると、驚いた声を上げた金阿弥が、そつと義宣の頬に触れた。

「何なのだろうな、あの女は。俺に逆らえない女を選んだはずだつたのに、生意気な女だ」

岩瀬の姫の言葉を思い出すと、金阿弥に会つて和らいだ心に、再び怒りがわき起つた。何なのだ、あの女は。

「あの女、俺に自分を不幸だと思つていいのか、と言つたんだぞ？ 本当は自分こそが不幸な、悲劇の姫君だとでも思つていいくせに」

「それは、すごい姫君ですね」

「佐竹家の当主に向かつて、よくもあのような口がきけたものだ」金阿弥は義宣の言葉に頷きながら話を聞いている。金阿弥といふと心が休まる。

岩瀬の姫は、義宣が自分以外の人間を認めていないと言つたが、それは違つ。金阿弥との関係は違つ。金阿弥は義宣を認めているし、義宣も金阿弥を認めている。

ただ、ほかの人間が義宣を認めていないだけだ。誰も義宣のことなど見ていない。それを岩瀬の姫は、何を言つているのだろうか。あのようなことを義宣に言つた人間は初めてだ。しかも、岩瀬の姫はあの女と同じことを言つた。

岩瀬の姫のことなど忘れてしまおうと思つて金阿弥を呼んだというのに、思い出すのは岩瀬の姫のことばかりだ。

「あの女、次に俺が会つに行つた時に、どんな顔をするのか楽しみだ」

「また、岩瀬御台様に会つに行かれるのですか？ 離縁なさればよろしいのに」

「離縁はしない。あの女を離縁したら、老臣連中に何を言われるか。俺が世継ぎを儲けようとしているみたいだろ？」

「お世継ぎを儲けようとなさつて見せかけたいのなら、御台様のもとへ熱心に通われればよろしいのではありませんか？」

「老臣どもは、御台に期待できないから側室を作れと言つたんだ。

御台では、駄目だ」

「やうですか

老臣どものことを思つと、また腹が立つてきて、義宣は、ふん、と鼻を鳴らした。それを見た金阿弥は、義宣の頬を撫でながら小さくため息をついた。

「どうした？」

「いいえ

何でもありません、と続けよつとした金阿弥の口を塞ぎ、再び金阿弥を抱きしめた。金阿弥はおとなしく義宣の口づけを受け入れ、義宣に全てを委ねている。

やはり、金阿弥だけだ。金阿弥は義宣の全てを受け入れてくれる。義宣には金阿弥だけだ。そして、金阿弥にも義宣だけなのだ。

褥に金阿弥を組み敷き、金阿弥の帯を緩めようとした。だが、そこで手が止まってしまった。それ以上先に進もうといふ気が起きない。義宣に組み敷かれ、瞑っていた金阿弥の目が開かれ、義宣を見上げている。

「どうなさつたのですか？」

「そういう気分じゃなくなつた」

緩めようとした帯を直し、金阿弥の隣に横になり、褥の中で金阿弥を抱きしめた。

「今日は、このまま眠りたい

「はい、義宣様」

金阿弥の体温を腕の中に感じながら、義宣は目を瞑つた。なぜか、といえば若瀬の姫の名前を自分はまだ知らないのだ、と頭の中に浮かんだ。知る必要などないと思っていたため、一度も聞いたことがなかつたのだ。いつまでも、若瀬の姫、では呼びにくい。いずれ、聞いてみようかと、ぼんやりと思つた。

庭を飛び交う鳥のつがいを見ながら、祥はため息をついた。

鳥でも、あのように睦まじくいるといふのに、祥は今後義宣と睦まじい関係を築けるとは思えなかつた。

側室に迎えられて、相手の頬を叩く女などいなくなるだらうか。これは、近々離縁されるだらう。未だにこゝして佐竹屋敷にいられることの方が不思議だ。

だが、後悔はしていない。義宣は卑屈で悲観的で、見ていて腹が立つたことに変わりはない。あれは言つべきことだったのだ。

「どうしたのですか、お祥」

「お養母さま」

考え事をしていて、養母が隣に来ていたことも気づかなかつた。義宣とのことを相談するのは、養母しかいないうだらう。養母には心配をさせたくなかつたのだが、祥は口を開いた。

「お養母さま、わたくしお屋形さまと上手くやつていける自信がありません」

「何故?」

「あの方は、他人を認められない方だから。」自分を不幸だと思つて、殻に閉じこもろうとなさるから」

さすがに、義宣の頬を叩いたことは言えなかつたが、養母はこの話を聞いてどう思つただろうか。窺つよつて見ると、養母は小さく苦笑していた。

「お祥」

「はい」

「人は誰しも、自分の腹が一番痛いものですよ」

「え?」

「ですから、義宣殿は自分の境遇が一番辛いと思つてゐるのです。他人の腹がどれほど痛いのかなど、本人でなければ分かりません。お前も、知らず知らずのうちに自分の腹が一番痛いと思つてゐるでしょう」

「わたしは、自分が不幸だとは思つていません」

「やうだとしても、どこかに義宣殿を羨んでいるところがあるのです。自分と比べて、義宣殿は恵まれた環境にいるといふのに、それを不幸だと義宣殿が思つてゐる。だから、お前は義宣殿に苛立ちを覚えて、上手くやつていけない、と思つたのではないですか？」

やはり、そうなのだろうか。他人と自分の境遇を比べるつもりも、自分を不幸だと思うつもりもなかつたが、もしかしたらどこかでいつもそう思つっていたのかもしれない。

「お前は、義宣殿のこと何も知りません。まずは、義宣殿と話をすべきです。」

義宣は何も言わないのだ。義宣のことを知ることは難しい。それに、祥のしたことを考えれば、今後義宣の渡りがあるとは思えない。だが、義宣が寝所を出て行く前に残した言葉が、祥の胸の中に引っ掛かっていた。あれは、どのような意味を持つのだろうか。それを見つと、養母に言われたとおり、義宣と話をしたいと思つた。

岩瀬の姫（七）

義宣の頬を叩いてから、義宣の渡りがない。それならば、離縁されるかと思ったが、その気配もない。

養母に義宣のことを知るべきだと助言され、祥も少しその気になつたのだが、義宣が現れないのならば話にならない。今の立場を考えると、祥の方から義宣に来てほしいと言えるはずもない。それに、どうしても義宣と会つて話がしたいというわけでもない。

義宣に対する苛立ちと、義宣への興味が祥の胸の内でせめぎ合っていた。今は、離縁されずにすんでよかつた、と思っていればいいだろう。

義宣の渡りがないまま、養母と平穏な時を過ごしていると、突然大御台が祥と養母のもとへやってきた。大御台の顔はどこか嬉しそうで、このような顔を見るのは初めてだつた。大御台はいつも、どこか冷たい空気をまとっていた。今日は機嫌がいいらしく、祥にも柔らかな笑みを向けた。

「阿南姉様、政宗殿が上洛するそうですよ」

「それが、どうかしましたか」

嬉々として政宗の名を口にした大御台に対し、養母は感情の見えない声で答えた。政宗の名を聞いた瞬間、祥もどきりとした。

「会いに行きませんか？甥に会いに行くのですから、義重殿も反対しないでしよう。政宗殿から、懐かしい伊達の話など聞きましょうよ。姫も、従兄に会いたくはないか？」

大御台は楽しそうだ。なぜ、楽しげに政宗のことを話すのだろう。政宗は蘆名も一階堂も滅ぼした人間だというのに。そのことが不思議だつたが、大御台から悪気は感じられなかつた。本当に、楽しそうなのだ。

「お芳^{よし}」

楽しげな大御台に反して、養母の声は冷たかつた。養母が大御台

の名を呼ぶと、部屋の中の空気が、冷たく張り詰めたものに変わった。その中で祥は、大御台の名は芳というのか、などと場違いなことを思っていた。

「お前は、本気で私たちにその提案をしているのですか？」

「阿南姉様？」

「私が政宗と戦つたのは五年以上前のことです。それでも、私は政宗と戦いました。須賀川の城は政宗に攻め落とされました。私は政宗に保護されましたが、それが嫌でお前を頼つて佐竹に参つたのです。その私が、どうして政宗に会いましょう。それに、政宗は妹が亡くなつた途端に蘆名家を滅ぼしている」

養母の口から実母の話が出た。養母の話を聞きながら、大御台は何も言い返せないようだつた。祥も何も言えなかつた。ただ、養母と大御台の会話を聞いているしかなかつた。聞きながら、養母の静かで深い怒りが伝わつてくる。

「そして、その政宗を助けたのはお前です」

「そんな、阿南姉様は私が姉様を死に追いやつたとおっしゃるのですか？」

「何もそんなことは言つていません。政宗は憎いけれど、お前のことを憎むつもりはありません。ただ、お芳、お前は愚かな女ですか？」

「そうです。お前は末娘で、伊達にいる頃から我儘で甘える子でしたが、それは今も変わらないようです。私は、二階堂に嫁ぐ前にお前に教えたはずですよ。女は帰る家などないのだと。嫁いだ瞬間から、女は嫁家の人間になるのだと。帰る時は、夫が実家に殺される時しかないので。私はそのような覚悟をして二階堂に嫁ぎます、お前も佐竹に嫁ぐときはその覚悟をなさい、と私はお前に言いました」

「はい」

「あの子は私と同じ覚悟をして、蘆名を守ろうと必死でした。最期まで、あの子は蘆名の女でした。そして、私は二階堂の女です。今

までもこれからも、私は一階堂の女です。それに比べて、お前はどうですか？お前は今でも伊達の末娘の気持ちが抜けないのですね」「確かに、確かに姉様のおっしゃる通り。けれど、阿南姉様も伊達が滅んでしまうのは嫌ではありませんか？恐ろしくはありませんか？米沢が恋しくはありませんか？私は、伊達家が滅んでしまうなんて恐ろしくてたまりませんでした」

「だから、お前は愚かな女だと言つのです」

養母は大御台を一喝した。大御台は目を見開いた。

「お前はもう少し、義宣殿の気持ちや、蘆名の人間の気持ち、私たち一階堂の人間の気持ちを考えるべきです。私は政宗のもとには行きません。お祥はどうしますか？」

「わたしも、参りません」

突然話を振られて驚いたが、祥もはつきりと政宗には会いたくないと告げた。今でも、落城後に会った政宗の顔を覚えている。幼かつた祥には、片目の青年が自分の従兄ではなく、自分たちを苦しめた悪鬼にしか見えなかつた。だから、会いたくなどない。

それに、養母の言葉が気にかかる。何を意味しているのだろう。大御台が、政宗を助けた。それは、どうということだ。

養母にも祥にも誘いを拒まれた大御台は、何か言いたげな顔をしながらも、黙つて部屋を出て行つた。だが、大御台が部屋を出ですぐには、あ、と呟く声が聞こえて、祥は部屋の外の様子を窺つた。そこには、大御台の目の前に立つ義宣の姿があつた。その義宣と、一瞬目が合つたような気がした。

「義宣」

義宣にとつて母親である大御台が義宣の名を呼ぶと、義宣は何も言わずに踵を返して、その場から立ち去つた。大御台も何も言わなかつた。

義宣が去り、大御台も去つた後、入れ替わるように鏡田がやつてきた。

「姫さま、今夜お屋形さまのお渡りがあるそうにござります」

「あら、そうなの？」

「ええ。突然お屋形さまに呼ばれたのですから、わたくしは驚きました。わたくしが姫さまにお伝えすると申し上げたのですが、お屋形さまは「自分で姫さまにお伝えなさるとおっしゃいまして」「え？」

「ですが、やはりお前が行けと、先ほどわたくしに命じられたのです。まつたく、お屋形さまは氣まぐれなお方ですね」

「そう、分かったわ。ありがとう、鏡田」

義宣があそこにいたのは、祥に会いに来たからだったのか。なぜ、わざわざ自分で足を運んだのだろう。義宣は、養母と大御台の話を聞いていたのか。聞いていたならば、どこからどこまで。

助けを求めるように養母の方を見ると、養母は、自分で考えない、としか言つてくれなかつた。

何も言わずに立ち去る義宣と、何も言わずに立ちつくす大御台。政宗を助けたのはお前です。養母の声が脳裏で響いた。

おぼろげだが、義宣を形作る何かが少しだけ見えた気がした。

岩瀬の姫（八）

寝所にやつてきた義宣は、祥のことを怒るかと思ったが、何も言わずに布団に入り、そのままひとりで寝てしまった。

仕方がないので祥もそのまま寝たが、義宣はわざわざ何をしに来たのだろうか。渡りがあることを、祥に直接伝えようとしていたのに、背中を向けてひとりで寝てしまうとは。

その後も、三日から五日に一度は義宣の渡りがあった。だが、義宣はいつも何も言わず、何もせず、ただひとりで寝るだけだった。義宣が背を向けてしまって、祥は何も言えず、ただ義宣の隣で寝るしかなかつた。義宣と話がしたいと思っていたが、それは叶わなかつた。

離縁されるわけではなく、自分の身にも養母の身にも害が及ばないのなら、義宣の好きにすればいい。恐らく、世継ぎを儲けようとしていると見せかけるために、祥のもとへ来るのだろう。だが、自分を叩いた祥のことを許したわけではないから、背を向けて寝ているのだ。

そうだとしても、祥は心の片隅で、義宣が直接祥に会いに来ようとしていたことが引っ掛かっていた。その時、養母が大御台に言つた言葉も忘れない。

眠る義宣の背中を見ながら、祥は養母の言葉を考えていた。養母は、佐竹の大御台に、政宗を助けたのはお前です、と言つた。言葉どおりに受け取れば、義宣の母は甥の政宗の命を救つたのだろう。だが、それが何を意味するのか考えなくてはならないのだ。

大御台と顔を合わせた途端、引き返した義宣。政宗を助けた大御台。大御台を叱つた養母。

祥の中で、ぼんやりと見えていた糸が繋がつた。

あの時、養母が怒つたのは当然だつた。養母の言つたとおり、政宗は須賀川城を攻め、二階堂家を滅ぼした。伯母である養母を攻め

た。政宗の命がなくなっていたのなら、須賀川城は政宗によつて攻め落とされることはなかつたのだ。蘆名家もそうだ。

蘆名と二階堂が政宗に攻められた時、佐竹は援軍にかけつけてくれていた。その戦で、佐竹の大御台が政宗の命を間接的であつても救つたのだとしたら、それは佐竹に対する裏切りだろう。政宗が助かつたことによつて蘆名は滅び、二階堂は滅んだ。政宗は佐竹を攻めるために、邪魔になる須賀川城を攻めたのだから、佐竹が政宗によつて攻められて、もし敗北していれば、今の佐竹家はなかつた。佐竹の大御台は、佐竹よりも実家の伊達家が大事なのだろう。だから、養母と祥に政宗と会わないかと誘つたのだ。恐らく、悪気はないと思うが、少し無神経だと思つた。夫亡き後でも、嫁いだ家を守ろうとした養母や蘆名の母とは違う。祥は、母や妻というものは、養母や実母のようなものだと疑つたことはなかつた。だが、そうでないのが大御台なのだ。

そのことに思い至ると、悲しいような寂しいような気持ちになつて、眠つてゐる義宣を起こさないように、そつと背中に寄り添つた。それから、義宣の渡りは、途絶えずに半月ほど続いている。今日も侍女から義宣の渡りがあると告げられた。

夜になり、義宣は寝所にやつてきた。いつもと同じように、何も言わずに布団に入ろうとする義宣を引き留めるために、祥は声をかけた。

「お屋形さま」

義宣は動きを止めて、ちらりと祥を見た。だが、返事はない。

「お話したいことがあります」

義宣の反応はなかつたが、気にせず祥は言葉を続けた。返事はないが、聞いている気配はある。

「あなたのことを、わたしは知りたいのです」「必要ない」

「大御台さまと養母の話を聞いて、あなたと大御台さまの様子を見て、わたしは」

「それがどうした。それがお前に何の関係がある。それ以上、その話はするな」

祥の言葉を遮って、義宣が祥の方を向いた。義宣の目は怒りに燃えているようだつたが、寂しそうな目でもあつた。

「何も知らないくせに、分かつたようなふりをして、その話をするな。お前には、俺の気持ちなど分からぬくせに」

怒りを込められた低い声は、恐ろしさなど全くなく、ただ寂しさだけが伝わってきた。口では祥を拒みながらも、目が寂しいと訴えているように見える。

「俺のことを何も知らないくせに、俺の母のことも知らないくせに、知つたような口を聞いて、お前は優越感にでも浸つてゐるのか？」

優越感に浸つてゐるつもりはない。ただ、養母から義宣と大御台の話を聞いて、義宣と大御台の様子を見て、義宣のことを知りたいと思ったのだ。養母に言われたとおり、祥は義宣のことを何も知らない。だから、話をして義宣を知りたい。

「お前は何も知らない。お前に分かるはずがない」

「知らないから、分かりたいと思いまして」

義宣の気持ちが分かるはずない、と言われてしまえば確かに分からぬのだろう。だが、察することはできるはずだ。

「お前は、以前俺が他人を認めないと言つたな。それは間違いだ。誰も俺を認めなかつた。俺は佐竹の当主としての飾りだ。信じていたものには裏切られた。母親に愛されて育つたお前には、この気持ちは分からぬだろうな。俺の母親は、お前の母親とは違う。お前の産みの親とも、養い親とも姉妹のはずなのに、全く違う。お前の母親を基準に考えるなよ」

自分の母親を基準に考えるな、と言われても、祥にとつて母親というものは自分の母親たち以外にいないのだから、どうしてもそれが母というものだと思つてしまつ。だが、大御台はそうではないのだとは思つていたし、この義宣の口ぶりからもそれがうかがえた。

「俺は」

それ以降の言葉が続かない。恐らく一瞬だったのだろうが、祥には長い沈黙が訪れたような気がしていた。

「母親に愛されなかつた」

沈黙を破つた義宣の言葉に、祥は胸が痛んだ。なぜ、義宣は自ら愛されなかつた、などと悲しいことを言つのだろうか。大御台が政宗を助けたからか。そのことが、義宣を苦しめているのか。

眉を寄せ、苦しげな顔で、愛されなかつたんだ、と義宣は呟いた。愛されなかつた、と口にするたびに、義宣は自分の言葉に傷ついているようだつた。それはそうだろう。母親に愛されないということは、子どもにとつてとても悲しい。祥には想像することすらできない。

「だが、俺は」

再び沈黙が訪れた。義宣は眉間に深い皺を刻んでいる。

「母上に愛されたかつた」

ぱつり、と呟くように言われた一言が、胸に刺さつた。愛されなかつた、という言葉よりも深く、生々しく、祥の胸の柔らかい部分を抉るように突き刺さつた。

「本当は、ずっと愛されたかつた。母上に、愛されたかつた」

絞り出すよくな義宣の声から、義宣の痛みを痛切に感じた。愛されなかつた、と言つた時以上の痛みと渴望を感じた。まるで、血を吐くような言葉だつた。

祥にとつては、今まで何の疑問も抱かず、当然のものだと思つていた母親の愛情を渴望して、愛されたい、と願う義宣の姿は、痛々しく、悲しく、寂しかつた。

祥には想像もつかない苦しみと悲しみの中、義宣はずつと愛に飢えていたのか。母親に愛されない苦しみが、祥には分からぬが、初めて垣間見た義宣の心の内を察するだけで、祥は泣きたくなつた。蘆名の母にも、二階堂の養母にも愛されていなかつたら、自分はどうなつっていたのだろう。

俯いて、布団を握りしめる義宣の頭を抱きよせ、胸に抱いた。体

勢を崩した義宣の体が祥にもたれかかってく。その重さを支えるよつこ、きつく義宣の頭を抱きしめた。義宣は祥に抱きしめられて、体を強張らせた。

「お屋形さま」

義宣を抱く腕の力をゆるめ、義宣の顔をじっと覗きこんだ。拒絶と期待が入り混じったような目が、不安げに揺れてい。その目は、幼い子供のようだった。

「わたしがあなたを愛すわ」

祥の言葉を聞いた瞬間、義宣は目を見開いた。信じられない、と言いたげだった。そして、祥から離れようとすると、だが、拒みながらも、すがるように義宣の心が手を伸ばしてきたような気がして、祥は義宣の腕を掴んだ。

もしかしたら、義宣の言つ通りなのかもしない。優越感に浸っているのかもしれない。義宣は哀れだと、同情しているのかもしれない。だが、愛されたい、と願つた義宣の心は純粹で、とても愛しいと思つたから、義宣の腕を掴んだのだ。

「大丈夫、怖がらないで」

掴んだ腕を撫で、拒もうとする手を握り締める。じつと祥を窺うようにして見つめる義宣に対し、微笑んでみると、逆に腕を掴まれ、義宣に抱き寄せられた。

義宣の胸に顔を埋める。愛を求める義宣の心の声が聞こえるような気がした。義宣の背に腕を回して、そつと撫でると、祥を抱きしめる義宣の腕の力が強くなつた。

静寂が訪れる。祥には何も聞こえなかつた。ただ、義宣の悲しみと寂しさを、抱きしめられた腕の中で感じていた。まるで、この時だけはこの世に祥と義宣の一人しかいないう�だつた。

岩瀬の姫（九）

義宣の涙が、祥の肩を濡らした。

大人が寂しいから泣くということを、考えたことがなかった。人の男が泣くということを考えたことがなかつた。だが、いくら年を重ねても、寂しさや辛さを感じなくなるわけがないのだから、人が泣くのも当然だつう。

そのことを今更感じた自分は、どうしようもない子どもなのだと思つた。義宣の胸に顔を埋めて、祥も泣いた。なぜ泣いているのか、そんなことは分からなかつた。

そのまま寄り添いあつて眠り、祥が目を覚ました時には、義宣は祥の部屋からいなくなつていた。

義宣がいなくなつてから、出会つてから今まで、義宣に言つたことを思い返していた。義宣に自分を不幸だと思っているのかと言つた。自分以外誰も認めていないのだと言つた。思い返すと、随分と無神経なことを言つて、義宣の心の内側を踏みにじらうとしたものだ。

義宣の言つたとおりだ。祥は何も分かつていなかつた。自分が正しいと思つたことを義宣に押し付けていただけだから笑える。

境遇を比較していたのは義宣ではなく祥だつた。その人が辛いと思つたのならば、それはその人にとって誰よりも辛いことだというのに、そのことに気づかなかつた。

少しだけ義宣の心に触れた今、祥が義宣に言つたことは、義宣を傷つけたのかもしれないと思うようになつた。だが、だからと言つて義宣の言動の全てを許せるわけではない。それは別の話だ。いくら、母に愛されなかつた、愛を知らなかつたと言つても、祥を目の前にして道具のように利用するつもりだと言つたことは許せなかつたし、卑屈な態度や性格もどうしたものかと思つ。

「お祥、また何か悩んでいるようですね」

「お養母さま」

「義宣殿のことはどう?」

部屋に入ってきた養母の言つとおりなのだが、素直に認めるのは恥ずかしく、祥は何も言わなかつた。養母はただ頷いて、祥の隣に座つた。

「お養母さま、わたし、あの方のことを理解したいと思います。それはとても難しいことかもしれないけれど、あの方の心を理解したい」

「そうですか。けれど、他人のことを完全に理解することは不可能です。いいえ、できなくていいのです。ただ、完全に理解することはできずとも、思いやることはできますよ」

「人の腹の痛みを察することはできる、ということですね」

「ええ。大事なことは、相手の聞いてほしい話を聞いて、相手の望む言葉をかけること。お前が相手の言葉を聞いて、相手のことを思つて、心が感じたことを言葉にすれば、きっとそれは相手の望む言葉になるでしょう」

「はい」

義宣が聞いてほしい話。義宣がかけてほしい言葉。それは一体何なのだろう。もっと義宣の心に近づきたい。

それを知つて、義宣の心に近づいてどうするのか。自分でも上手く説明できない気がする。愛を求める義宣は愛しいと思つたから。それは義宣に近づきたいと思う理由にならないだろうか。義宣のことを愛しいと思う気持ちと、義宣の言動を許せない気持ちが胸の内で入り混じつてゐる。それでも、義宣の思いに触れて、確かに祥の心は動いた。

義宣が愛を知らないと言つのなら、愛されたいと願うのなら、祥は義宣の愛になりたかった。

岩瀬の姫が言つた言葉を、そつくりそのまま信じてゐるわけでは

なかつた。

だが、信じたいという気持ちがあつた。初めてだ。他人にあんなことを言われたのは。

わたしがあなたを愛すわ。

何度も胸の内で、岩瀬の姫に言われた言葉を繰り返す。正直なところ、嬉しかつた。光が差し込んだような気がした。

義宣は今まで、暗闇の底で膝を抱え込んでいるようなものだつた。愛されたいと願いながら、何もしてこなかつた。それでも愛されたいと願うことをやめられず、幼い子どもを同じ暗闇に引き込んだ。

何も見えない暗闇の中、手探りで金阿弥を抱きよせ、腕の中に閉じ込めた。必死にすがつた。自分には金阿弥だけだと思つていた。

金阿弥は義宣が自ら選んで、暗闇の中に連れ込んだ。逃げ出さないように、義宣だけを見るようにしてきた。だから、金阿弥は信じることができた。金阿弥は義宣を愛してくれた。認めてくれた。義宣も金阿弥だけは認めていた。愛していた。そう思つていた。

だが、岩瀬の姫は違う。側室に選んだのは義宣だが、姫は義宣を拒んだ。おとなしく義宣のものにはならなかつた。だが、正面から義宣を見てくれた。金阿弥のように義宣の囮いの中からではなく、外の世界から義宣を見てくれた。そして、きつい言葉で義宣の内面に踏み入ろうとした。義宣の言動に本気で怒つっていた。そんな人間は初めてだつた。

だからだろうか、義宣も初めて自分の気持ちを他人にぶつけた。姫はそれを受け止めてくれた。

わたしがあなたを愛すわ。そう言って、義宣に微笑みかけた。義宣の腕の中で、涙を流した。その涙は、義宣の胸に沁みこむようだつた。

今夜は、姫の所へ行く予定はない。昨日の今日で、どのような顔をして会えればいいのか、何を話していくのか分からなかつた。だが、なぜか足が姫の寝所へと向かつた。姫と伯母が母と話をしていたところに出くわした時も、侍女に頼めばよかつたのに、なぜか足が姫

のもとへと向かつたのだった。

知らせも何もなく出向いたといいで、姫は寝ているだろ。そのことは分かつてゐるといふのと、なぜ自分は姫のもとへ向かつてゐるのだろ。

姫の寝所の近くまで来て、義宣は足を止めた。驚いた。姫が、寝所の外で空を見上げていた。それを見て、義宣も空を見上げた。今夜は満月か。道理で明るいはずだ。

「お屋形さま」

義宣の存在に気づいた姫は、驚いたようだつた。姫のもとへ歩いていき、隣に腰を下ろした。姫はまだ驚いてゐるのか、じつと義宣を見つめているようだつた。

「眠れないのか」

「ええ。ですから、外へ出てみたら、満月でしょ? とても綺麗でしたので、見ていました」

「そうか」

義宣が黙ると、姫も黙つた。確かに、月は姫の言つたとおり、美しかつた。だが、心がざわめいた。波紋が広がるように、静かに。

「姫」

「はい」

月を見上げたまま、姫を呼んだ。姫が義宣の方を向いた気配がした。

「話したいことがある」

何を言つてゐるのだろう。何を話すと、このまま、おかしい。姫のもとへ勝手に足が動いた時から、自分ではないようだ。だが、言葉は止まらなかつた。自然と口からこぼれていた。

「聞いてくれるか?」

義宣も、ようやく姫の方を向いた。姫の目と義宣の目が合つた。姫は、昨夜と同じように微笑んで頷いた。

「では、お部屋の中で。ここでは、体が冷えてしまつます」

「ああ」

姫に手を取られ、義宣は寝所の中へ招かれた。姫の姿を月が照らしていた。あたたかい光だと思った。

那須の女と伊達の女（一）

城内は朝から騒々しかった。出迎えの支度は整つたのか、婚儀の準備に抜かりはないか、家臣たちや侍女、女中たちは慌ただしく駆け回っていた。

その騒がしさの中、義宣は自室でひとり黙つて座つていた。義憲や義久が様子を見に来だが、追い返した。ひとりでいたかったのだ。義宣の許嫁である那須家の姫が、今日佐竹家へ輿入れする。

那須の姫は、義宣が三歳の時に許嫁と決められている。那須家との和睦の証の婚約だつたそうだ。その時、那須の姫は五歳だつたと聞いている。義宣よりも一歳年上の姫だ。

義宣と那須の姫の婚約が成立した時に、父は盛大な結納を那須家へ送つたとも聞いている。だが、その後十三年もの年月が経ち、那須の姫の父は死に、義宣も自分の許嫁のことなど忘れてしまいそうになつていて今更になつて、正式に結婚が決まった。

許嫁と言つても、義宣は那須の姫のことなど何一つ知らない。那須家へ婚儀の取り決めの使者として赴いた家臣は、那須家の末娘として大層可愛がられた美しい姫だと聞いていると言つていた。

どのような姫がやつてくるのか。しかも相手は年上だ。緊張する。だから、誰にも会いたくなかった。緊張している姿を見られたくないかつた。

「若殿

声をかけられ思念が途切れた。振り返ると、義宣の傳役であつた

山方久定やまがたひさだがいた。久定は嬉しそうににこりと笑つた。

「那須の姫君がご到着なさいました」

「分かつた」

胸の鼓動が速くなつた。分かつた、と言つた声が上ずつていたような気がする。久定とともに、那須の姫を出迎えに行つたが、歩いている感覚がなかつた。

「どうやら、輿渡へ出向いた者の話によりますと、那須家からの護衛の者はこちらまでついてきたそうござります」

「そうか」

「何でも、那須の姫君が、帰ろうとする者たちを引き留め、一ひらまでつれてこられたとか」

「そうか」

花嫁の嫁行列は、領地の境目など婿側の家と嫁側の家で定めた場所で、実家から婚家へ引き渡されることになつてゐる。そうすることとで、両家の婚姻は対等の立場で行われたものだと主張するのだと父が言つていた。

輿渡が済むと、嫁行列の護衛はそのまま婚家までついてくるが、実家へと帰るか、どうするべきと決められてゐるわけではないのだから、那須家の者がこの城までついてきても問題はないのではないか。

「わざわざ引き留めてまでこいらっしゃるとは、那須の姫君は寂しがりなのでしょうか」

「そうかもしだんな」

「若殿」

「何だ」

「いいえ」

久定の言いたいことは分かる。緊張しているのか、と聞きたいのだろう。確かに緊張している。久定の話に返事はしてゐるが、どれも生返事になつてしまつた。

緊張しているせいで早足になつてしまつたのか、思つていたよりも早く輿の前に到着してしまつた。義宣の姿を見て、家臣たちが頭を下げた。それを見て、輿のすぐそばに控えていた少女が、輿の中に囁きかけた。その少女は、恐らく那須の姫が実家から連れてきた侍女なのだろう。

少女は頷くと、輿の前に履物を揃えた。輿から細い足が覗いた。すつと目の前に那須の姫の姿が現れた。だが、姫は頭を下めたので、

髪に隠れて顔は見えなかつた。

一瞬の間の後、姫が顔を上げた。隠れていた顔が見えた。視線がぶつかつたが、姫の表情は硬かつた。

それでも、美しい姫だと思った。このように美しい女を見るのは、初めてだつた。

その後、婚儀の準備が行われた。義宣も衣装を婚礼用に改められ、白無垢を着た姫と二人並んで座つた。

仲人に酒を注がれ、三三九度を行い、夫婦の契りを誓つた。これで義宣と姫は正式に夫婦となつたのだが、杯を重ねただけで夫婦になつたのだと言われても、全く実感はなかつた。

家臣たちは義宣と姫の婚礼を喜んでいるようだつた。父も嬉しそうだつた。義宣に結婚をしたという実感はなかつたが、宴は盛り上がりがつた。だが、その騒々しさの中、母の顔だけはいつまでも険しいままだつた。

婚礼の宴が終わり、義宣と那須の姫は寝所へ向かつた。婚儀は終わつた。これからは、この那須の姫と夫婦として生きていくのだ。

今宵が明けて初めて、義宣と姫は夫婦になる。

「那須資胤の娘、八重にございます」

「佐竹次郎義宣だ。よろしく頼む、八重殿」

「はい、次郎様」

二人の間に沈黙が流れる。八重はにこりともしなかつた。輿から下りた時と変わらない、硬い表情のままだ。あの時は八重も緊張しているのかと思ったが、今もまだ緊張しているのだろうか。それとも、笑うのが苦手なのだろうか。

家と家同士の政略結婚に、大きな期待をしていたわけではないが、ここまで堅苦しいとは思わなかつた。八重の表情が硬いままなので、義宣も緊張してしまつ。寝所の空気は重苦しかつた。

「八重殿」

八重の細い手首を掴むと、八重の肩が震えた。八重の表情が硬かつたのは、やはり緊張のせいだったのか。

そのまま手を引き、八重を抱きしめた。腕から義宣の緊張が伝わつて、八重に笑われてしまふかもしない。手が震えそうだ。

ぎこちない動きで八重を褥に横たえる。八重はおとなしく義宣のなすがままになっていた。八重の白い肌が薄暗い部屋の中に浮かび上がる。美しいと思った。

義宣と八重の影が重なり、二人は夫婦になった。

だが、最後まで八重の表情は硬い今まで、緊張ではない冷たさを感じた。その冷たさは、母に似ていると思った。

那須の女と伊達の女（一）

佐竹義重は那須に勝てぬと思ったから、自分の嫡男の妻に八重を迎えたといい出し、和睦を願つたのだ。

八重が佐竹義重の嫡男の妻と定められた五歳の時から、父は何度もこのことを八重に言い聞かせた。

佐竹義重は、義重の父である義昭^{よしあき}が父ととりかわした盟約を破つてから、ずっと父との戦いに明け暮れ、一度も父に勝つことができなかつた。結城義親の協力を得て父に挑戦した時も、義重は勝利を得ることができなかつた。那須の三倍近くの兵力を持ち、物量も那須にはるかに勝る佐竹が、那須には勝てなかつたのだから、これは実質的に佐竹の敗北だ。

いつまでも那須と戦つているわけにもいかないと判断した義重は、嫡男の妻に八重を迎えると父に申し出、数多くの神々に誓つて和睦を結んだ。

父は佐竹がついに那須に屈服したのだと、このことを誇りに思つていた。八重がいざれ義重の嫡男と正式に結婚し、佐竹家に輿入れすることになつても、相手が申し出た婚姻なのだから、下手に出る必要はないと聞かされていた。

だが、義重は父と和睦を結んで半年足らずで、那須に兵を向けた。何度戦つても、結局佐竹は那須に勝てなかつた。父は良い気味だと言つていた。和睦の約束を反故にされても、最初は、こちらにとつて都合の良い条件で八重を嫁がせることができるかもしれない、と思つていたようだが、次第に父は怒りだし、八重を佐竹に嫁がせるつもりはなくなつたようだつた。

八重には、もっとふさわしい男を探そう、と言われた。父は八重に甘かつた。兄も八重に優しかつた。八重は末娘で、八重が生まれた頃、一人の姉はすでに嫁いでいたし、兄とも十一歳年が離れていた。年を取つてからの子どもだから、父は八重に特別甘かつたのだ

う。兄も年の離れた妹を可愛いと思っていたのだと思つ。

八重の下には腹違いの弟がいたが、異母弟は寺に預けられており、

父も母も、兄も八重が独占しているようなものだつた。

父も母も好きだつたが、八重は特に兄のことが好きだつた。

八重が物心ついた時から、兄は父に従い出陣し、華々しい活躍をしていた。八重が将来嫁ぐかもしない佐竹との戦いでも、兄はいつも勇ましく戦い、佐竹を退けてきた。そんな兄が幼い八重には眩しく見え、その分佐竹は取るに足らない存在に思えた。父は八重を佐竹に嫁がせる気はなくなつていたが、八重も兄に負け続ける佐竹になど、いくら相手から望まれても嫁ぎたくないと思つた。

兄が城にいる時は、いつも兄の後ろをついて歩いていた。兄はどんなに忙しくとも、八重には優しかつたし、可愛がつてくれた。兄のことが大好きだつた。

兄が妻を迎えた時は、もう八重の兄ではなくなつたようで、悲しかつた。落ち込む八重を気遣つてくれたのか、兄は家臣の娘で八重と年の近い吉野よしのを八重の側に置いた。

吉野は明るく素直で、すぐに仲良くなつた。だが、八重の口から出るのはいつも兄の話ばかりで、吉野には笑われてしまつていた。

八重が十六歳の時、父が死んだ。義重と和睦を結んだ父が死に、義重の嫡男の許嫁になつて十年以上が過ぎても結婚の話が出ないのだから、結婚の話は自然と消滅したものと思っていた。父の死後、佐竹との婚姻について、父の跡を継いだ兄も何も言わなかつた。

だが、父が死んで一年ほど経つた時、突然兄から、年が明けたらいつでも佐竹家に嫁げるようにしておくように、と言われた。

「何故ですか？父上は、わたくしを佐竹に嫁がせる気などないと仰つていたのに」

「その父上が亡くなり、私の代になつたから、佐竹は改めて和睦を結べると考えたのだろう。頻繁に使者を寄越して、那須との和睦を願っている」

「父上にも兄上にも勝てぬ佐竹など、また兄上のお力で追い払えばよろしいではありますか」

「八重、私は確かに佐竹に負けない自信はある。だが、勝つことはできないだろう。このまま争いを続ければ、いずれこちらも危うくなるかもしれません。ならば、相手が下手に出ているこの時に、和睦を結ぶべきだと思うのだ」

「わたくしは、佐竹に嫁ぐのは嫌です」

兄の言うことは分かるが、佐竹に嫁ぐのは嫌だった。我が儘を言うと、兄は困ったような顔をして、幼いころにしてくれたように、八重の背中を撫でてくれた。

「八重、耐えておくれ。相手からの申し出だから、下にも置かぬもてなしを佐竹はするだろう。私も、お前が嫁いだら決して佐竹は攻めぬと約束する。それに、輿入れには吉野も連れていい。吉野がいれば、少しは気が晴れるだろう？」

兄の説得に、八重は頷かざるを得なかつた。幼い頃から八重を可愛がってくれた兄は、おそらくこの結婚に乗り気ではない。だが、那須家の将来のことを考えれば、佐竹との縁組は悪いことではないと判断したのだ。仕方がない。兄は、幼いころの昔のように、八重だけの兄ではない。那須家の当主なのだ。

「分かりました。兄上のためならば、わたくし佐竹に参ります」

八重の返事を聞くと、兄は輿入れの準備に取り掛かつた。準備は順調に進み、年明けにはいつでも輿入れできるようになつていた。吉野と一緒に佐竹に来てくれるようになると、常陸はどのようなくろか楽しみだ、と吉野は無邪気に笑つた。嫁いでも吉野がこうして笑つてくれたら、心が休まると思つた。

両家の準備が整い、八重は佐竹に輿入れすることになった。兄に別れを告げる時は、泣きそうになつた。

国境近くで佐竹からの出迎えが、八重の花嫁行列を待つていたが、八重は那須からついてきた者たちを常陸まで連れて行つた。相手から望まれて、八重が輿入れをしてやるのだから、そのくらいは許さ

れて当然だろう。

城に到着し、八重を出迎えた義重の息子に、形ばかりの挨拶として頭を下げた。顔を上げた時、わずかに義重の息子の顔を見たが、兄とは全く違う男だという印象しかなかつた。

婚礼の宴は源氏の名門を誇っているせいか、無駄に盛大で、格式張つていて、嫌気がさした。家臣たちは、表面上は喜んでいるようだつたが、その中に、なぜ那須の姫などと、と八重を馬鹿にする視線が混じつていることにも気付いた。誰よりも、姑の冷たい眼差しが八重を認めていなかつた。

宴が終わり、夜が更け、夫婦として初めての夜を過ごしても、夫である義宣はつまらない男だと思つた。いくら兄のためとはいえ、これから死ぬまでこの佐竹の中で暮らすのかと思うと、気が滅入つた。

夜が明けて、八重の身支度を整える吉野に、那須に帰りたい、と言いたくなつたが、吉野に笑われると思い、言わなかつた。だが、それは八重の本心だつた。

那須の女と伊達の女（三）

佐竹に輿入れをしてから、まだ義重とその妻へ挨拶に行つていなかつた。義宣は、八重がとうに挨拶は済ませていると思つてゐるか、何も言わなかつた。八重といる時の義宣は口数が少なく、いまだに緊張しているようだつた。だが、吉野が毎日早く挨拶に行くよう勧めてくるので、仕方なく吉野を連れて挨拶に行くことにした。

「私がお屋形様やかたと大御台様に、姫様がご挨拶に伺われるとお伝えしたら、お一人ともお喜びでしたよ」

「吉野、そなたあの夫婦に騙されているのではないの？」

「そんなことありませんよ。もつ、姫様。姫様は御台様になられたのですから、もう少し佐竹の方々と仲良くなさつても

「嫌よ」

「そんな、せめてお殿様とはもう少し仲良くなさつてくださいよ。お殿様は姫様のことがお好きのようではありますか。頻繁に姫様のもとへいらっしゃいますし、私が見てゐる限りでは、いつも姫様のことを見つめていますし」

「年上の女が珍しいだけでしそう」

もし吉野の言うとおり、義宣が八重に好意を抱いてゐるのだとしても、八重は義宣と仲睦まじい夫婦になるつもりなどないのだから関係ない。それに、八重に対しても緊張してゐる義宣のことは、つまらない男としか思えない。夫婦になつてからまだ一月も経つていいないが、八重の義宣に対する印象は、つまらない男でしかなかつた。

吉野と話をしながら歩いていると、義重と大御台の待つ部屋の近くまで来ていた。吉野に下がつてゐるようだと手で合図をし、部屋に近づいた。

「私は那須の姫など認めません」

部屋の中から聞こえた女の声に、八重の動きが止まつた。この声

は姑の声だらう。その声の後に、ため息も聞こえた。これは、義重か。

「何を言つてゐる」

「私は義重殿が、義宣の許嫁に那須の姫を選んだ時から反対でした。義重殿はそれをご存知でしたのに、なぜ今さら那須の姫を義宣の妻に迎えられたのですか」

「それは、近くの那須と和睦を結ばなければ、遠征の時に危ういからだと何度も説明しただらう」

「しかし、もっと名門の姫を迎えるべきだつたと私は思います。那須家など、源氏に従つた那須与一の末裔ではありませんか。なぜ源氏の名門が那須の姫など」

「芳」

「私は、義宣には伊達の姫を妻に迎えさせたかつた。しかし、今の伊達家には姫がおらぬ。ですから、蘆名の姫を迎えるべよろしかつたのに。確か、義宣よりも七、八歳年下の姫が蘆名にはいたはずです。その姫は、私の姉の子ですから、伊達の血を引いていますし」

「その話は聞き飽きた。大体、対馬が言つていたではないか。義宣は那須の姫を美しいと言つていた、気に入っているようだ、とな。義宣が姫を気に入っているのなら、それで良いのではないか？お前も姫を認める」

「あの女は、佐竹の人間ではありません」

「いい加減にしないか」

義重が姑を怒鳴りつけたのと同時に、失礼いたします、と声をかけて八重は部屋の中に入つた。

その場の空気が凍りつくのが分かる。義重は少しうるたえているようだつたが、姑は全く動じることなく、八重を見ようともしなかつた。

「ご挨拶に伺うのが遅くなりまして、まことに申し訳ございません。那須資胤の娘、八重にございます。佐竹家の和睦がかない、兄、資晴も喜んでおりました」

八重がにこりと笑つてみせると、義重は安心したのか、笑みを浮かべた。

「わしも資晴殿と縁を結べたこと、嬉しく思つておる。どうか、義宣と睦まじく暮らしてくれ」

義重の言葉に笑みを返し、それ以上は何も言わず、八重は姑の方を向いた。

「大御台様」

声をかけても、姑は八重の方を向かなかつた。

「わたくし、先ほどのお言葉嬉しく思いますわ」

「姫？」

「だつて、わたくし嫁いできてから今まで、一度も自分を佐竹の人間だと思ったことなどありませんもの。貴方が実家の伊達家を大事に思うように、わたくしも那須家が一番大事です。ですから、わたくしこれからも佐竹の人間になろうとは思いません。わたくしは、那須の女です」

にこりと微笑んだまま姑に向かつてそう言つと、ずっと八重を見ていなかつた姑がようやく八重を見た。八重を拒む冷たさを体全体から感じさせていたが、目だけは燃えるように八重を睨みつけていた。

「姫、すまぬな、こいつの言つたことは気にしないでくれ」

「ええ、わたくし気にしておりません。事実ですから」

慌ててこの場を取り繕おうとする義重に頭を下げて、八重は部屋を出た。部屋の外で待っていた吉野が声をかけてきたが、それに答えず足早に自室へ戻つた。

やはり、姑は八重を認めていなかつた。義重も口では八重を喜んで迎えているように言つていたが、白々しく聞こえた。本心では、義重も那須の姫は迎えたくなかつたのかもしれない。

佐竹がどうしてもと望むから、わざわざ嫁いでやつたというのに、この扱いは何なのだ。

吉野も対馬とやらも義宣は八重を氣に入つてゐるようだと言つて

いたが、そんなはずはない。義宣はあの姑の息子だ。義宣も恐らく八重を馬鹿にしているに違いない。

源氏が何だ。佐竹が何だ。那須とて那須と一緒に続く下野の名族だ。わたくしは那須の女。佐竹の人間などにはならないわ。

「姫様、どうなさつたのですか？」

「吉野」

部屋の中で座り込んでいる八重の顔を、吉野が心配そうに窺った。吉野は部屋から離れたところで待たせていましたから、姑の言葉を聞いていなかつたのだろう。

「吉野、わたくしは那須の女よね？」

「え？ええ、姫様は那須家の姫様です」

「そうよね」

八重は那須の女だ。佐竹に嫁いだとこりで、その事実に変わりはない。姑の言うとおり、八重は佐竹の人間ではないのだ。

嫌みのつもりで、義重と姑に笑顔で告げた言葉は全て八重の本心のはずだ。姑の言ったことなど気にしてはいない。事実だ。それなのに、なぜ息が詰まるような思いがするのだろう。

「那須に帰りたい」

涙が手の甲に落ちて流れた。なぜか涙が止まらなかつた。

姑が憎い。姑の息子である義宣も嫌いだ。義重も嫌だ。佐竹という堅苦しい名門が嫌で憎くてたまらなかつた。

那須に帰りたい。だが、帰れない。兄の為に嫁いできたのだ。八重が実家に戻りたいと言い出せば、また那須と佐竹は争いを始めるかもしれない。兄に迷惑をかけるのは嫌だ。

「姫様」

八重が泣きだしたのにつられたのか、吉野の声も涙声だった。

大丈夫、八重には吉野がいる。佐竹が八重を認めないと云うのなら、八重も佐竹を認めない。八重は那須の女として、好きに振る舞わせてもらつ。死ぬまで、八重は那須の女だ。

那須の女と伊達の女（四）

八重が佐竹家に嫁いできてから半年以上が経つた。半年以上が過ぎても、八重の態度はかたくなで冷たいままだつた。

初めは、実家を離れて不慣れな生活を送ることに対する不安が、八重の態度を冷たくさせていたのかと思っていたが、そうではないようだ。八重は義宣に心を開こうとしていない。八重は体を重ねることを拒みはしないが、義宣の腕の中では心のない人形のようだつた。

義宣は八重が嫁いできてから、時間のある時は頻繁に八重のもとへ足を運んだ。特に何か話があるわけではなかつたし、話をするわけでもなかつたが、八重の顔が見たかつた。いつかは、八重の笑つた顔が見られるのではないかと思っていた。那須家から同行している吉野という侍女と話している時の八重は、義宣には見せたことのない柔らかい顔をしていたのだ。

いつか、八重が義宣にも吉野に見せるような顔を見せてくれるかもしれない。まだ一年も経っていないのだ。

最近は、出陣中の父の留守を任されているため、以前のように八重のもとへ足を運ぶことはできていないが、父が戻つたらまた会いに行こう。来るなど言われてはいいのだから、完全に嫌われているというわけではないと思う。

父の留守中、義宣が父の代わりを務めているが、まだ頼りないと思われているのか、老臣たちは色々と口出しをしてきてうるさかつた。義宣が何か一つ決めようとするたびに、忠告といつ名の指図をしてくるような気がする。父が今の義宣と同じ十六歳の時には、義宣の祖父である義昭から家督を譲っていたのだと、父と比べるようなことも言われた。まるで、父が十六歳だった頃に比べ、義宣は不出来だと言われているようだつた。

中には、御台様にご懐妊の兆しは見えますか、と言つてくる家臣

もいた。お前には関係のないことだと怒鳴りつけたくなった。八重が義宣に心を開いていないことを指摘されたような気持ちになった。老臣たちに口出しをされながらも、黙々と父の代わりを務めて毎日を過ごしていたが、出陣中の父が血相を変えて城に戻つて来た。義宣が留守を預かっていた太田城の、目と鼻の先にある水戸城の江戸重通が安房の里見義頼と手を組み、佐竹を攻めてくるという知らせを受け、一夜のうちに兵をまとめて帰陣したのだと父は言った。だが、江戸と里見が攻めて来る気配は全くない。留守を預かっていたのだから、そのような気配があれば義宣も家臣たちも気がつくはずだ。父の話に首を捻るしかなかつた。

「義宣、わしは急を告げるお前の書状を見て、太田へ戻つて来たのだぞ」

「私の書状ですか？」

「そうだ。お前が、江戸と里見が攻めて来る、急ぎ帰られたし、と告げたのではないか。明日は政宗の首を討ち取らん、と意気込んでいたところに、この書状が来たのだ。この書状で、勝利を逃したようなものなのだ」

「私は、そのような書状知りません」

父と家臣たちの視線が刺さる。父は書状を取り出して義宣に見せたが、全く心当たりがなかつた。義宣の筆跡に似せて書いたようだが、義宣が書いたものではない。だが、事実その書状が届いたせいだ、父は勝機を逃し、政宗の命を長らえさせてしまつたのだ。

「義重殿、」「無事の」帰還、何よりでござります

緊迫した空氣を破るように、母の声が響いた。にこりと微笑んだ母と、握りしめた書状を交互に見て、父は母を睨みつけた。

「話がある。お前も来い」

父に連れられ、母の部屋に三人で集まつた。父が義宣から送られたという書状を、母に突き出すと、母の表情が能面のように冷たくなつた。

「これは、お前が書いたものだろう?」

「義重殿、私は女です。何故この書状のように男字を書けましょ
うか。義宣からの書状なのですから、義宣が書いたものでしょ
う」

「義宣は知らぬと言つた。大体、太田の留守を預かつてゐる義宣が、
江戸や里見が攻めて来るなどといふ馬鹿げた嘘の書状を、戦場に送
るはずがない」

父の言葉に母は黙り込んだ。父の言つことはもつともだ。義宣は
何も知らない。だが、この書状を本当に母が書いたというのか。何
のために。義宣は、父と母のやりとりをただ黙つて見ているしかな
かつた。

「お前は、いつも何かあれば伊達のことを口にする。今回の戦も、
政宗と戦わないでほしい、と出陣前に言つていたな。この書状が届
く前に、小野崎が死んだ。陣中で刺殺された。我が軍は、小野崎の
無念を晴らす意味も込めて、伊達との決戦に意気込んでいたとい
うのに、この書状だ。まさか、小野崎のことも、お前が仕組んだこと
ではないだろうな」

小野崎というのは、今回の戦で将として軍を任せられていた小野崎
義昌のことだ。その小野崎が陣中で刺殺された。その後に、あの書
状が届いた。話が上手く出来過ぎてゐる。だが、まさかいくら母が
伊達家の出身だとしても、そこまで露骨なことはしないはずだ。

母の表情を窺うと、母は冷たい顔のまま小さくため息をついた。

「義重殿の言うとおり、この書状は私が出したものです。私の手で
は男字が書けませんので、東義久に命じて書かせました」

「お前は、自分が何をしたのか分かっているのか。お前のせいであ
野崎は死に、勝機を逃した」

「確かに私は書状を出しました。それは政宗殿の命を助けようとし
て行つたことです。しかし、小野崎のことは私の関与する所ではござ
いません。偶然です」

母の言葉に義宣は愕然とした。母は何を言つてゐるのだろう。政
宗を助けようとした。しかも、義宣の名をかたつて、偽の書状を出
した。

父は怒りを露わにして立ち上がつた。手を振り上げ、母を打つのかと思ったが、父は母を打たなかつた。ただ、深いため息をついただけだつた。握りしめた拳は、怒りで細かく震えていた。

「お前が、政宗を助けたい、伊達家を助けたい、という気持ちは、わしが佐竹を守りたいと思う気持ちに置き換えれば、理解できないこともない。今回の戦は、政宗にとつては亡き父親の仇討ちだつた。お前にとつても、兄の輝宗殿を死に追いやつた畠山は憎かつたのだろう。それに味方したわしを憎いとも思つただろう。だが、お前の兄も今回の戦で政宗と戦つているのだ。お前の気持ちだけで、戦を左右する行動を取るな。分かつたな」

母は何も言わなかつた。黙つて父の話を聞いているだけだつた。自分の行動を後悔しているのか、正しかつたと思っているのか、母の表情からは読み取れなかつた。

今回の戦は、もともと伊達家と畠山家の確執が原因だつた。畠山義継は伊達家との和睦の際に、政宗の父親である伊達輝宗を拉致した。政宗は義継を討つたが、輝宗も命を落とした。その仇討ちとして、義継の子どもである国王丸を攻め、国王丸に助けを求められた父や蘆名家が、母の兄である石川昭光たちと手を組み政宗と戦つたのだ。

「中務は、わしの妻であるお前の頼みを断れなかつたのだろう。今後、自分の立場を利用して家臣に馬鹿げた命令もするなよ」

母が義久に書かせた書状を丸めて畳の上に投げ捨て、そのまま部屋を出て行つた。黙りこむ母をちらりと見たが、義宣も部屋を出た。

母は義宣の名をかたつてまで政宗を助けたかつたのか。それほどまでに伊達家が大事なのか。女とはそういうものなのだろうか。八重にも聞いてみたくなつた。お前も実家が大事なのか、実家と俺とどちらが大事なのか。

八重のもとへ向かう途中、義久が前から歩いてきた。義久は、母に協力をした。断れなかつたのだろうが、義久が政宗を助けたようなものでもあつた。それに、あの書状を実際に書いたのは義久だ。

「中務、小野崎が死んだそうだな。小野崎は、お前の舅だつたはずだが」

「小野崎殿のこととは、残念なことでした。まさか、陣中で奴婢に殺されるとは」

「母が、お前に命じたのではないのか？」

「大御台様のお言葉が全てにござります」

自分の妻の父親が死んだというのに、義久は驚くほどに冷静だつた。母は否定していたが、母が義久に命じて小野崎を殺させたと言われても納得できるような気がした。

「ご用がないのでしたら、失礼いたします」

義久は頭を下げて去つて行つた。義久の向かつている方向には母の部屋がある。もしかしたら、母に呼ばれているのかもしれない。母は、何を考えているのだろうか。

八重のもとへ行つても、なかなか八重に実家が大事なのかどうか聞くことはできなかつた。当たり障りのない話をし、襖に横になつてから、ようやく聞くことができた。

「八重、俺がもし那須家と戦をしたら、お前は資晴殿を助けようと思つか？」

しばしの沈黙。八重は義宣の問いに答えたくないのだろうか。八重の方を見ると、八重は静かに口を開いた。

「思いません」

「そうか」

八重の答えに義宣はほつとした。八重は、母のように義宣を放り出して実家を取ることはないということか。

「兄上は負けませんもの」

「え？」

「それに、兄上が、わたくしがいる家と戦をするはずがありませんから」

「そうか」

八重の答えは、どこかずれている。義宣が期待したものとは何か

が違う気がする。だが、そのずれと違いを義宣は考えようと思わなかつた。考えてはいけない。考えてしまえば、認めたくないものが見えてくるような気がする。

母のことも、八重のことも、考えないようにはすればいい。問題の真相を考えなければ、見えないものは見えないままにすることができるはずだ。

義宣はそのまま目を瞑つた。だが、なかなか眠れなかつた。頭の中で、何かがざわめいていた。何がざわめいていたのか、義宣は

那須の女と伊達の女（五）

年の瀬に、義宣は突然父に家督を譲ると言われた。義宣は八重を妻に迎え、初陣も果たしたのだから、自分は隠居すると言いだしたのだ。

突然のこと驚いたのは義宣だけではなかつた。家臣たちは口を揃えて、義宣はまだ若すぎると言つた。義宣が父の留守を任せられた時は、父は十六歳の時には家督を譲られていた、と言つて義宣を父と比較していくといふのに。やはり、義宣では頼りないと思つていいのだなう。

だが、父は考えを変える気はないよつだつた。自分が家督を譲られた時も、家臣たちは同じことを言つていたと義宣に言つた。家臣たちの言葉は気にするものではない、と励ましてくれたのだろうか。八重に家督相続の話をして、八重はただ、兄に報告の文を書く、としか言わなかつた。形だけでも、祝いの言葉を述べてくれるかと思つたが、期待はずれだつた。

年が明けた元日、義宣は主殿の上段に父と共に座つた。下座には新年の挨拶に登城した家臣たちが並んでいる。一門の北家、東家、南家を筆頭に譜代たちが続き、父に従つている多賀谷重経や、八重の兄である資晴の使者、親戚関係にある宇都宮国綱からの使者などが座つている。見なれた者ばかりだつた。

新年の挨拶と、皆の挨拶や去年の働きに対する礼を述べた後、父は咳払いをした。その場が静まり返る。空気が重くなつた気がした。「家督相続については、すでに皆に伝えてあるが、この場で正式に告げることにしよう。義宣も十七歳になり、去年のうちに初陣を果たし、妻も迎えている。そこで、わしは隠居をして家督は義宣に譲ることとした」

「僭越ながら申し上げます。お屋形様の「隠居は、まだ早いのではないか」と

一門を代表するかのように、北義斯が父に意見した。家臣たちの田が義斯に集まる。義宣は未熟だと、家臣の誰もが思っていることを改めて思い知られた。義斯の言葉は家臣たちの思いに違いない。「何を言つか、わしも家督は十六の時に譲られた。義宣に譲るのが早すぎるといふことはない。お前も、息子の又七郎に家督を譲つて、隠居暮らしをしてはどうだ?」

父が笑いながら答えたからか、義斯も苦笑した。義斯の息子の義憲は、義宣と同一年だ。元服も共に十三歳の時に済ませている。「それに、隠居と言つたところで、完全に表へ出ぬわけではない。家督と本丸は義宣に譲り、わしは北ノ郭に移るが、必要な時は義宣を支えよう。皆も、わしと同じように義宣に仕えてほしい」

父に田で促され、義宣も父の言葉に続けて口を開いた。

「至らぬところ多かるうが、皆で私を支えてほしい。よろしく頼む」

「我ら、新しきお屋形様のために力を尽くす所存にござります」
義久がそう言つて頭を下げる、他の家臣たちも義宣に頭を下げた。

義久の言葉は、白々しいとしか思えなかつた。母の命令で義宣の名をかたつたくせに、よく言つ。

ほかの家臣たちも同じだ。父が隠居をしても義宣を支えると言つた時、あからさまに安心していた。家臣たちは誰もが、新しい当主となつた義宣に頭を下げているのではなく、父に頭を下げているのだ。

祝い酒が振る舞われたあと、ささやかな宴が催され、家臣たちはそれぞれの屋敷へ戻つて行つた。義宣は、挨拶をしに母のもとへ向かつた。宴の席に、母は招かれていなかつたのだ。

いくら、母が実家を大事にしていると言つても、息子の家督相続は喜んでくれるだろう。そう思いつつ母に新年の挨拶と家督相続のことを述べると、母は嬉しそうに微笑んだ。その笑みに、義宣は安堵した。

「義宣、家督相続おめでとう。そなたも、従兄の政宗殿のようにならぬ当主になるのだよ」

嬉しそうに微笑みながら、政宗のようになれ、と母は言った。恐らく、母に悪気はない。本気で言っているのだ。だが、その言葉を聞いて、期待していた自分が愚かだったと思った。こんなことを言われるのなら、父のような立派な当主になれ、と言われた方がよっぽど良かつた。

「はい。政宗殿に負けぬよう、努力いたします」

母の言葉に笑顔を返し、今度は八重のもとへ向かった。資晴からの使者には、八重に会つて行くように勧めた。懐かしい那須の様子を聞けば、八重が喜ぶと思ったからだ。

八重の部屋の前まで来ると、部屋の中から明るい声が聞こえた。八重と吉野の声だ。こんなに明るい八重の声は、聞いたことがない。部屋に入るのが躊躇わられて、義宣はそのまま部屋の前で八重たちの話を聞いていた。

「まあ、本当に？ 兄上のお子が、今年中には生まれそうだなんて、わたくしも嬉しいわ。念願のお世継だもの。ねえ、吉野、お祝いには何を送りましょう？」

「お世継ぎのご誕生はおめでたいことですけど、姫様が勝手にお祝いを送られてもよろしいのでしょうか？ 今回、お殿様が家督を譲られるということは、佐竹家から那須家へ正式にお知らせがあつたのですよね。だから、こうして兄上様のご使者がいらっしゃったわけです。私なんかが口出しすることではないと思いますが、お殿様にご相談なさらなくてよろしいのですか？」

「そんなことは知らないわ。わたくしは、わたくしの気持ちとして兄上へお祝いの品を送りたいのだから」

「でも、姫様」

「吉野、わたくしは那須の女なのよ。どこへ行つてもわたくしが兄上の妹である」とに変わりはないのだから、いいではないの

「でも」

「そんなことより、那須の様子が知りたい。もっと聞かせてちょうだい」

八重に促された使者の話を聞きながら、八重は楽しそうに笑っていた。八重が義宣の妻になつてもうすぐ一年が経つ。だが、こんなに楽しそうな八重は知らない。吉野といふ時も、ここまで楽しそうに笑つてはいなかつた。

八重は、一体どんな顔で笑うのだろうか。見てみたい。わずかに障子を開けると、八重の顔が見えた。義宣の見たことがない笑顔だつた。気持ちが沈んだ。見なければよかつた。

障子を閉めてその場を去ろうとするが、背後に人の気配を感じた。振り向くと、吉野が立つていた。

「どうした？」

「あの、さつき、お殿様、お部屋の中を見ていらっしゃいましたよね？私、御台様をお呼びしましたよ？」

「いや、いい。那須の話で懐かしさに浸つているところを邪魔したくはない」

どうせ、義宣の姿を見れば、八重はあるの笑みを消して、いつもの冷たい顔しかしないのだ。そんな顔を見るくらいなら、八重の顔を見ない方がいい。それに、八重は資晴に世継ぎが生まれることに対する祝いの品を送らうとしているが、義宣には祝いの言葉ひとつ寄せざらないのだ。

惨めな気持ちになる。使者は早々に帰してしまつた方が良かつたのかもしれない。

「使者は今夜、城に泊まつていいく。今夜は昔話に花を咲かせればいい」

「でも」

義宣は氣を遣つて立ち去らうとしているのだが、吉野はそれが心苦しいらしい。どうすべきか迷つてゐるのが伝わつてくる。

吉野、と八重が吉野を呼ぶ声が聞こえた。吉野は八重に返事をしつつも、まだ義宣を見て困つた顔をしている。その様子に苦笑しな

がら、早く部屋へ戻ることと手で合図をした。吉野は頭下げて、部屋へ戻つて行つた。

どうやら、吉野は八重と義宣の中を取り持とうとしているらしい。だが、吉野に気を遣われるとかえつて義宣の気持ちは暗く沈んだ。侍女に気を遣われるほど、八重との仲は悪いのだ。誰よりも八重の側にいる吉野だからこそ、八重の気持ちが分かる。八重の気持ちは義宣に向いていない。だから、吉野は何とか仲を取り持とうとするのだ。

家臣には未熟者だと思われている。母には政宗のようになれと言われた。八重は那須の女のままで、義宣に心を開こうともしない。家督を父に譲られたところで、何も変わらない。それどころか、父の後見があつてこそその家督相続は空しく、義宣はただ佐竹家の飾りとなつたような気がした。

那須の女と伊達の女（六）

義宣が家督を継ぎ、佐竹家の当主となつてから初めての年が明けた。

家督を継いでから、この一年の間に義宣がしたことと言えば、父が決めたことを承諾することくらいだった。あとは、義宣が当主として家臣に書を授ける程度で、家督を継ぐ前と特に変わりのない一年だった。

義宣が承諾した父の決めたこととは、弟の義広を蘆名家の後継ぎにすることだ。義広は五歳の時に白川家の養嗣子として太田城を出て行った。母が大層悲しんでいたことを覚えている。

蘆名家は、当主である蘆名盛隆あしなもりたかが家臣に殺されるという事件の後、生まれて一月しか経つていなかつた嫡男である亀王丸が後を継いで当主となっていた。その亀王丸が病で急死したのが去年の十一月のことだ。わずか三歳という幼さだった。

亀王丸の死後、蘆名家の当主の座を巡り、伊達家と佐竹家の間で争いになつた。伊達家の政宗は自分の弟の小次郎を当主にしようとしていた。父は、白川家の養嗣子になつていた義広を推した。蘆名家の重臣は義広をぜひ当主に迎えたい、と言つてきたが、政宗も引かなかつた。義広は若輩であるため、弟の小次郎のほうがふさわしい、と言つのだ。

父と政宗の争いはなかなか決着がつかなかつた。だが、蘆名家の重臣である金上盛備が、須賀川城から亡き蘆名盛隆の母親を呼び寄せたことから流れが変わつた。須賀川の女城主となつてゐる盛隆の母は、伊達家の出身だつた。母の姉で、阿南おなみの方かたと呼ばれてゐる。義宣や義広にとつては伯母にあたる人物だ。

阿南は、反蘆名と思われる行動を取り続けている政宗は信用できない、義広を当主に迎えるべきだ、と主張した。

その主張を金上盛備が支持し、最終的に義広が盛隆の娘を妻にめ

とり、蘆名家の当主となることに決まった。

佐竹家の代表として、この当主争いに参加し、物事を決定してきたのは義重だ。当主である義宣ではない。

ほかにも、父は妹のなすを江戸重通の嫡男に嫁がせることを決めた。この縁談は義宣が家督を継ぐ以前から江戸家と話があつたことだが、家督を継いだ後も最後に決定を下したのは父だつた。

江戸家は佐竹家の支配下にあるといって間違いないのだが、たびたび佐竹家を攻めようとする姿勢を見せてきた。江戸家の居城である水戸城は、佐竹家の居城の太田城の目と鼻の先にある。危うい江戸家をそのままにしておくよりも、なすを嫁がせて支配を盤石にするべき、と父は考えたのだ。

昨年の時点では、年が明けたら吉日を選んで嫁がせる、という約束を取り付けた。それを承諾したのは義宣だ。なすは、年が明けた現在、ようやく七歳になつたといふのに、嫁がせてしまうのは哀れだとも思つたが、父の決定を拒むだけの力が、義宣にはなかつた。

一体、佐竹家の当主は誰なのだ、と言いたくなる。

家臣たちも、父が当主のように重要なことを決定する」とに、何の疑問も抱いていないようだ。それもそうだろう。家督を継いだばかりの義宣よりも、長年仕えていた父のほうが、頼りがいがあるに決まっている。中には、未だに義宣を「若殿」と呼ぶ者もいるくらいだ。

義宣は深く溜め息をついた。ちらりと視線を横に移すと、涼しい顔をした八重がいる。夫が溜め息をついても、どうしたのか、とう一言もないのだ。

八重との関係も、義宣を悩ませる原因だつた。

八重が佐竹家に嫁いできて今年で一年目。未だに、八重に懷妊の兆しは見えない。世継ぎはまだか、と遠回しに義宣も言われているのだから、八重も言われているに違いない。

八重の義宣に対する態度は冷たいが、義宣との闘を拒むことはほとんどないのだ。今まで何度も禱をともにしてきた。それでも子が

できないのは、義宣に問題があるのか、それとも八重に問題があるのか。側室を迎えるべきかもしれないし、実際側室をすすめてくる家臣もいるが、義宣は今のところ八重以外の女を側室として迎える気はなかつた。

義宣が生まれた時、父は一十四歳、母は二十歳だった。母が佐竹家に嫁いできて、七年目のことだつたと聞いている。今、義宣は十八歳で、八重は二十歳だ。まだ一年しかともに過ぎない。可能性は、まだまだある。

世継ぎについて考えを巡らせていると、ぱたぱたと廊下を走る音が聞こえた。

「兄上」

足音とともに顔を見せたのは、なすだつた。義宣以外に、部屋の中に八重がいることに気付いたなすは、八重に頭を下げた。

「義姉上、こんなには」

「ええ、こんなには」

わずかに笑みを浮かべて、八重もなすにこたえた。八重は、義宣以外の人間には愛想笑い程度はするのだ。

「あ、兄上、今日なすの婚礼衣装ができあがりましたの。とてもきれいで、なすはお嫁に行くのが待ち遠しくなりました。兄上が用意してくださいましたのでしきう？ありがとうございます」

「そうか、それは良かつた。俺も、なすの花嫁姿が楽しみだよ」

「宣通殿も喜んでくださると嬉しいのですけれど」

「きっと、喜ぶだろ？」「

義宣の言葉を聞くと、なすは嬉しそうに笑つた。この七歳の妹が、間もなく江戸宣通の妻となるのだ。義宣は、明るい言葉しかかけられなかつた。

なすを呼ぶ母の声が聞こえる。なすは、あ、と声を上げた。

「嫁入り道具を見ている最中に、抜け出してきたのです。兄上にお礼が言いたくて」

「母上に怒られる。早く戻りなさい」

「はい」「

部屋に来た時と同じように、ぱたぱたとなすは戻つて行った。なすの足音が遠のく中で、ぱつぱつと小さな呟きが聞こえた。

「白々しい言葉」

「八重？」

「あの姫の嫁入りを祝福する人間など、本当はどこにもいないのでしょう。女たちが、なぜ江戸などに、と噂をしているのを聞きました」

「確かに、そうだろうな」

八重の言つとおり、城内でなすの婚儀を喜んでいる人間はないだろ。この縁談を決めた父も、仕方がなしになすを嫁に出すのだ。母も家臣たちも、佐竹の姫をなぜ江戸家の嫁に、と憤つている。皆、幼いなすを哀れだとも思つてゐるのだろうが、名門である佐竹の姫を、支配下にある江戸家にくれてやることに怒りを感じているのだ。

それに、江戸家のほうでも、佐竹の姫を迎えると言つことは、佐竹の支配が一層強くなることを意味してゐるのだから、喜ばしい話ではないだろ。

もちろん、義宣にも佐竹の姫がなぜ、といつ氣持ちはある。だが、声高に名門を主張する家臣たちには嫌気がさす。

名門という名にしがみつく古臭い、頭の固い家臣たち。これだから、義宣のことも年若い当主だと侮つてゐるのだ。

「家中には困つたものだ。何も知らないなすは、嫁入りを楽しみにしているのだから、祝いの言葉をかけてやればいいのに。名門、名門とそればかり。辟易する」

「次郎殿は、この家を名門だと思つていませんか？」

「そういうわけではないが、家臣たちとは違う。この家はあまりにも古い。譜代の家臣たちは、佐竹という家しか見ていない。自分たちの祖先の栄光を自慢するばかりで、自尊心が強い、頭の固い連中ばかりだ。それを変えたいと思ったから、俺は牢人出身の有能な者

を新たに取り立てたんだ」

梅津半右衛門、荒川弥五郎、向宣政たち牢人出身の者を義宣はそば近くに置いている。

「それにもしても、家中にも相手方にも祝福されないなすが不憫だ」
独り言のように呟いた義宣の言葉に、八重が小さく笑つた。顔を上げて八重の顔を見ると、その笑みは、吉野に見せるものとも、先ほどなすに見せたものとも違っていた。

冷たい笑み。ただ冷たいだけではなく、どこか義宣を嘲笑うかのような冷たさがあつた。

「八重」

「いいえ、何でもありません」

八重の笑みは一瞬で消え、すぐにもとの涼しい顔があらわれた。
だが、義宣は確かに見た。あのような八重の顔は初めて見た。

一体、八重は何を考えているのだろうか。分からぬ。今日だけではない、八重の考えていることは、この二年間何も分からぬ。
分かるのは、八重が実家の那須家を大事にしていること。そして、
義宣には心を開いていないということだけだ。

那須の女と伊達の女（七）

蘆名家の当主となつた義広から、ともに政宗を討たないか、と父に書が届いた。

政宗は蘆名家の領地である会津をたびたび侵攻しており、そのことに対する蘆名の重臣、氏族たちが憤つてゐるのだそうだ。その重臣たちに請われて、義広は父に書を寄こしたらしい。

義広にとつて父は隠居をしたといえども頼りがいのある父なのだろう。その気持ちは分かる。だが、今の当主は兄である義宣なのだと言つてやりたい気持ちもあつた。

義宣が当主になつてから、当主らしいことなど何もしていない。当主として、なすを江戸に嫁がせたくらいだ。なすを迎えた江戸も、大掾清幹に攻められた時は、父に援軍を要請している。義宣もともに出陣したが、終始父の指示に従うだけだった。

江戸と大掾の問題が一段落つき、帰陣して少し後に、義広からの書が届いたのだ。

家臣たちを集めて評定を開くと、父は義広の要請に応え、政宗を討つつもりだと皆に告げた。義宣も父の考えに異存はない。弟が助けを求めてきたのだから、援軍を出すのは当然だ。それに、現在の蘆名家は当主である義広が幼い上に佐竹の出身であるため、佐竹に属するような同盟関係にある。その蘆名を見捨てるわけにはいかない。

ほとんどの家臣は、父の方針に賛同しているようだが、義久がひとり異を唱えた。

「北城様、政宗は若輩にして、北城様はすでに老練の方。今、北城様が政宗を討つたところで、勝ちを收めても功とする事はできませんまい」

「何を言つてゐる、中務。わしは蘆名の要請に応えて出陣するのだ。そこでの勝利は、わしの功ではなく、義宣や義広のものとなる。わ

しは初めから功など狙つてはいない」

「ならば、北城様のご出陣はおやめください。新たなお屋形様にお任せになればよろしいかと。此度の戦には、岩城殿や石川殿もご出陣とお聞きしました。の方々に、お屋形様と蘆名様をお任せになつてはいかがでしょうか？」

「ならん。蘆名はわしに援軍を要請した。わしが不在ならば、蘆名は佐竹に見くびられたと思い、義広の指示を聞かなくなるかもしけん」

「北城様のご出陣に加え、岩城殿、石川殿も加勢なさるのであれば、伊達の滅亡は決まったようなもの。その一戦においては、岩城殿も石川殿も北城様のご指示に従いましょうが、この方々はもともと伊達の方。実家が滅ぼされて、北城様へ怨みを持つよつにならぬとも限りません」

「中務、お前は何が言いたいのだ」

義久の言葉に父はいら立つていていた。確かに、今日の義久の言葉はおかしい。岩城常隆や石川昭光が出陣するのだから、父は城に残つてもいいのではないか、と言つたかと思えば、岩城も石川も危ないと言つ。確かに、石川は伊達家の出身だ。だが、今までも佐竹とともに伊達と戦つてきた。それに、岩城常隆の父は伊達の出だが、母は父の妹だ。大体、伊達との繋がりならば佐竹にもある。母が伊達の娘ではないか。

三年前、畠山の要請で伊達と戦つた時も、岩城や石川はいた。

三年前の戦。あの時、義久は母の頼みを聞き、偽の義宣の書状を作り上げ、政宗を間接的に助けた。

まさか、今も義久は母に頼まれて、父に戦を思いとどまらせよつとしているのか。

「私はただ、北城様、お屋形様のことを思い申し上げたのみ。北城様がご出陣なさるのならば、私に先陣をお命じください」

「そうか。だが、お前には義宣のそばで戦の指南をしてもらいたい。それが東家当主としてのお前の役目だ」

「しかしながら、北城様がいらっしゃるのですから、お屋形様には北城様が直々にご指南なさればよろしいかと。私は、北城様、お屋形様に対する無礼を詫びるべく、先陣を務めさせていただきたいと存じます」

無礼。ほかの者たちは、この場での義久の出すきた諫言のことだと思うだろう。だが、義久はそれだけではなく、三年前の戦のことを含めて言つてはいるに違いない。江戸と大掾の戦の時も、義久は率先して先陣を務めた。

「分かつた。ならば、先陣は中務とする。義宣もそれで良いか？」

「はい」

父の言葉に義宣がうなずくと、その場は解散となり、皆戦の準備に取り掛かった。

準備が整い、岩瀬の須賀川へ行くと、すでに義広は到着していて、義宣と父の姿を見つけると嬉しそうに駆け寄ってきた。岩城常隆、石川昭光は援軍を寄せただけで、自身の出陣はなかつたが、白川義親は兵を引き連れ出陣していた。

「義広、蘆名はどうだ？」

義宣が声をかけると、義広は眼を伏せて苦笑いを浮かべた。

「なかなか、難しいものです。関白に従い、長年不仲であった上杉と和睦もする、と関白に誓いの書状を出しましたが、それも重心の金上が提案してきたこと。私はそれに名前と花押を書いたくらいです。まあ、関白は大層お喜びで、私に太刀を贈つてくるほどでしたが。でも、兄上も佐竹の当主は大変でしょう？ 当主といつのは、大変なものだと割り切つて、私は私でいるだけです」

「そうか」

「兄上もいすれ、関白にそのような誓いの書状を送らねばならないのかかもしれませんね」

「ああ、そうだな」

関白、秀吉の名は義宣も聞いている。父のもとに何度も書状を寄こしているのも知っている。だが、未だに関白から義宣への書状は

何も来ていません。今は、関白よりも政宗のほうが重要な問題だ。

義広の言つように、義宣も割り切つてしまえばいいのかもしれないが、父と比較されること、当主として認められない感じてしまう」とは、どうすることもできない。五歳年下の弟のほうが、よほど大人びているのかもしないと感じた。

会津勢と合流したのち、一本松まで兵を進め、そこで伊達と対陣した。

睨みあいは十田ほど続いたが、政宗が出馬するという噂で戦場の空気が変わった。佐竹の先陣である義久の指揮で、政宗の兵を五十騎以上討ちとることに成功した。

その流れに乘じ、政宗の先手の陣所を打ち破り、兵八十余騎、歩兵千余りを討ちとった。佐竹も兵を二百人近く討ちとられはしたが、流れは完全に佐竹と会津勢にある。

伝令の報告では、政宗が自ら戦場に現れ戦つたが、家老に諫められたそうだ。母は実家の政宗を大層誇りに思つていてようだつたが、自ら戦場に出て家臣に諫められるなど、匹夫の勇と紙一重ではないか。

采配を手に、ふん、と政宗を鼻で笑うと、伝令が駆け込んでくるのが見えた。申し上げます、と言つ伝令の声は震えていて、何があつたのかと思う。父は一切動じることなく、伝令に続きを促した。

「先陣の御東様とともに行動なさつていた岩城様の家臣、上遠野と申す者が、伊達の大将、政宗を生け捕りにしたことです」

「何だと、それは嘘ではないな?」

「は、確かに政宗であると」

「中務に、ここへ連れてくるように伝えよ」

「はい」

父と伝令のやりとりを、義宣はただ黙つて見ていた。政宗が生け捕りにされた。それが事実であるとは信じがたい。だが、確かに政宗であると伝令が断言するのだから、義久は政宗だと確信したのだ。

伝令が去った後、父は黙り込んだ。義宣も黙っていた。義久を待つ間の時間が、いやに長く感じられた。

「北城様、お屋形様」

「中務か」

「は」

陣所にやつてきた義久を、義宣はじつと見つめた。政宗がどのような顔をしてここへやつてくるのか、目に焼き付けてやろうと思つた。

だが、義久はひとりだった。

「中務、政宗はどうした?」

父の問いに、義久は膝をつき、頭を下げた。

「申し訳ありません。私が田を離した隙に、政宗には逃げられてしましました」

政宗が逃げた。せつかく生け捕りにすることができた敵の大将に、逃げられてしまった。

政宗の首が胴についているか、いないか、それは何よりも重要なことだと義久が分かつていなければはずがない。それにも関わらず、逃げられただと。

義宣は義久に対して怒りが湧いてきたが、父はまだ大きく溜め息をついただけだった。頭を下げる義久を、義宣はじつと睨みつけていた。

那須の女と伊達の女（ハ）

政宗に逃げられてしまった義久を、父は厳しく叱責した。だが、いくら義久を責めたところで、政宗の首を取れるものではない。義久が政宗に逃げられなければ、今頃この戦は終わり、城に戻つて祝杯をあげていただろう。佐竹を脅かす伊達という存在がなくなり、佐竹のためにもなつていたはずだ。首を取る、ということは関白の意向に背くかもしれないのに、実際は領地割譲の約定を取り付けて伊達へ返すくらいにとどまつただろう。

結局、政宗に逃げられた後、戦いらしい戦いはなく、佐竹も伊達も互いににらみあつて陣を動かなかつた。いつまでもにらみ合いを続けていても無駄だと、岩城と石川が間に入つて話をまとめ始めたので、岩城と石川の調停で政宗は自領へと戻つて行き、義宣も父とともに太田城へ帰陣した。

伊達の兵は討ち取つたが、佐竹の兵も討ち取られ、勝利と言える勝利を收めることができず、しかし敗北らしい敗北もしていい。出陣した兵の数から考えれば、佐竹の敗北とも見えるかもしない。中途半端な出陣に終わってしまった。

政宗を捕えたということを知つているのは、義宣と父と一部の重臣だけだが、このことを知つている者の顔には悔しさが浮かんでいた。

城へ戻り、重臣たちと今後の方針について話し合ひ、今回の戦は終わつた。義久は終始申し訳なさそうにうつむいていた。

政宗を捕え、逃げられてしまつた義久。まさか、義久は母に命じられて政宗を逃がしたのではないか。出陣前にも感じたことだ。出陣しようとする父を諫め、出陣を思いとどまらせようとしたのは義久だ。三年前のこともある。

三年前、母の命で義久は自分の舅である小野崎を殺したのではないか、と疑つた。あれはあまりにも信じがたい話だったので、小野

崎の死は偶然だと思ったことにしたが、今回のことは三年前を思えば、あり得ない話ではない。

あり得ない話ではない。だが、あり得ないと思いたかった。いくら実家大事の母でも、甥の政宗を息子である義宣、義広よりも大事に思うことはないだろう。

母は義宣の実の母だ。そのようなことはあり得ない。だが、あり得ない、と何度も言い聞かせるように考へるということは、母を信じていないということにはならないだろうか。

真相を確かめるため、義宣は母の部屋へと向かつた。真相を確かめるのは怖い。だが、義宣は母を信じているのだ。恐れる必要はない。

母の部屋の前、声をかけようとすると、部屋の中から母と、母の侍女の小大納言の声が聞こえてきた。

「それにして、よ「う」ざいましたね。中務殿があそこまでやってくれるとは思いませんでした」

「ああ、政宗殿が此度の戦で討ち取られ、伊達家が滅亡」などということになつては堪らないからね。実家がなくなるのは恐ろしいよ」「わたくしも、伊達家がなくなるのは恐ろしいです」

「できれば、戦そのものを避けたかったのだが、中務もそれは難しかつたようだ。それでも、三年前も此度も中務はよくやつてくれた」やはり、母が義久に命じて政宗を助けさせたのだ。義久が戦に反対していたのも、すべて母に頼まれたからだった。胸が締め付けられるように苦しい。心臓を握りつぶされたような感覚だ。どきりとする。震える手で、義宣は母の部屋の障子を開けた。母と小大納言が驚いた顔で義宣を見る。

「義宣、どうかしたのかい？」

何も知らないような顔をして、母が義宣に声をかけてきた。母は義宣が何も知らないと思っているのだろう。腹が立つた。

「母上」

「何？」

「政宗を助けたそうですね。中務に命じて」

母の表情が強張った。小大納言は慌てているようだ。事実だからだ。強張った母の顔を見て、暗く冷たい感情がじわじわと胸に広がつていった。

母は政宗を助けた。佐竹よりも政宗を選んだ。政宗を助けるといふことが、どういうことか分かつてゐるのだろうか。母は伊達家のことばかり考えていて、佐竹のことどころか、義宣の気持ちも考えてはいないのだ。義広のことも考えていないに違いない。

実の息子だというのに。息子よりも母は甥の政宗を選んだのだ。これは、明確な裏切りだった。

母は何か言い訳をしたそくに、口を開いたが、母の言い分けなど聞きたくなかった。どんな言葉を並べられても、母が政宗を助けた事実に変わりはない。母は義宣よりも政宗を選んだのだ。

「失礼します」

もう母の顔を見たくない、逃げだすように母の前から去つた。信じていた。母が義宣よりも政宗を選ぶことを信じたくない、母の愛を信じていた。だが、本当は愛されてなどいなかつたのだ。かすかな愛情を信じて、自分に言い聞かせていたというのに、その小さな希望も消えてしまった。

母は義宣より政宗を愛していた。戦場で敵である政宗を助けると、ということは、いずれ義宣を窮地へ追い込むようなものだ。義宣のことを愛していないから、母はそんなことができるのだ。

思えば、義宣が家督を継いだ時、母は何と言つた。政宗殿のように立派な当主に。いつも母の心は実家の伊達家に向いていたのだ。何故、そのことに気付かなかつた。

家臣に主として認められなくても、母だけは義宣を愛してくれると思っていた。母のだから、息子を愛してくれるものだと信じていた。誰に愛されなくても、母に愛されればそれだけでよかつた。だが、裏切られた。実の母に愛されていなかつた。それは、絶望だつた。実の母に愛されないのなら、もう誰にも愛されないよう

気がした。

義久も義久だ。母の頼みを聞いて政宗を助けるなど、宗家の裏切り以外の何物でもない。義宣を当主として軽んじてはいるから、母の頼みを聞くことができるのだ。三年前、義久は義宣の名をかたつて偽りの書状を書いたような人間なのだ。一門の義久がこうなのだから、佐竹という名門にしがみつく家臣たちは、もう誰も信じられない。

その後は、どうしたのかよく分からぬ。胸にぽつかりと穴が開いたような感覚がして、足もとが崩れ落ちるような感覚がした。どこを歩いているのか、城内を歩いているのに全く分からぬ。気付いたときには、八重の部屋の前に来ていた。

「八重」

「次郎殿、お帰りでしたの」

「八重」

夫が帰陣しているかどうかも分かつていぬ妻。分かつていても、このような態度を取るのだろう。それでも、八重は義宣の妻だ。すがりたかった。義宣と八重は夫婦なのだ。誰にも愛されないかもしない。だが、八重に愛されるのではないか、という思いがまだ胸に残つている。

八重を胸に抱くと、八重はわずかに抵抗した。その時、八重の小袖から書状が落ちた。かな文字で書かれた、八重へ宛てられた書状。義宣が拾うと、八重は血相を変えてその書状を義宣の手から取り返した。

「これは、わたくしのものです。触らないでください」

「那須の、義兄上からのものか」

「ええ、そうよ。わたくしの甥にあたる藤王丸が三歳になつたので、そのことなどが書かれていました」

甥の藤王丸。そうだ、分かつてはいたはずだ。八重も母と同じ、実家が大事な女なのだと。義宣が家督を相続した時、那須の使者の前で見せた笑顔を忘れない。

抱きしめた八重を突き飛ばして、義宣は立ち上がった。何をするのか、と八重は義宣を睨みつけた。

これが、八重なのだ。今、八重が義宣に向いているこの田が、八重の気持ちを物語っている。

母と同じだ。分かつていただろう。義宣が認めよつとしていなかつただけだ。

八重の部屋を出て城内を歩く。目的があるわけではない。何もかもが嫌になつて、ただ歩いていた。空を見上げると、月は雲に隠れて見えなかつた。

どすん、と何かにぶつかつた感覚と、女の小さな悲鳴が聞こえたのは同時だつた。視線を声の聞こえたほうへ向けると、女が尻もちをついていた。どうやら、空を見上げながら歩いていて、この女にぶつかつてしまつたらしい。女は義宣を見ると、慌ててその場に平伏した。

「も、申し訳ありません、お屋形様」

「いや、いい」

この女は奥で働いている女なのだろう。義宣よりいくつか年下といつたところか。

「お前、名は何といつ?」

「はい。小糸と申します」

「そつか」

小糸と名乗つた女の手を取り、義宣は再び歩き出した。小糸は、突然のことにつだ驚くばかりのようすで、おろおろしながら義宣の後ろを歩いている。

誰でもよかつた。母にも八重にも見いだせなかつたぬくもりを、女の柔らかい体に求めていた。

那須の女と伊達の女（九）

徳寿丸様、と自分のことを呼ぶ声が聞こえる。この声は、乳母のおしばだ。今日は昼から、一門の義久、又七郎、三郎と一緒に弓の稽古をすることになつていて。それが終わつたら、義久が何かの講義をするとも言つていた。おしばが徳寿丸を呼んでいるのは、そのためだ。

「徳寿丸様、こんなところにいらっしゃったのですね。さあ、一門の皆様がお待ちですよ。」準備なさいてくださいませ

「分かつていい」

おしばに急かされながら弓の準備をする。三郎も自分が準備をする時に、徳寿丸に声をかけてくれればよかつたのに。三郎の父親は、父の弟でもう五年以上前に亡くなつていて。父は三郎を哀れに思つて、太田城で徳寿丸と一緒に暮らさせていた。年の近い従兄とは、よく城内で一緒に遊んでいた。今日も朝は一緒にいたはずなのに、自分だけ先に準備を整えるのはずるい。顔を見たら文句を言つてやう。

はいできました、とおしばに背中を軽く押され、徳寿丸も稽古場に向かつた。稽古場にはおしばの言つていた通り、すでに皆がそろつていた。三郎は徳寿丸を見てにやりと笑つた。それに少し腹が立つたので、徳寿丸は三郎を無視して又七郎に話しかけた。

「又七郎、すまない、待つたか？」

「いいえ

「そうか、良かつた」

又七郎は一門筆頭である北家の嫡男だ。徳寿丸と同い年で、一門の中では一番徳寿丸と仲が良い。

「徳寿丸様、それでは弓の稽古を始めますが、よろしいですか？」

「ああ、始めよう」

本当はもう少し又七郎と話がしたかったのだが、義久に遮られた。

義久はどうも苦手だ。 同い年の又七郎や、年が近い三郎と違つて、十六歳も年上だからかもしれない。 苦手だから、義久の言つことはいつも首を縦に振ることしかできなかつた。

弓や槍の稽古を始めるといふや生き生きしているのが三郎だつた。三郎は徳寿丸よりも正確に的を射るし、槍も刀も手合わせをすると徳寿丸よりも上手だつた。 三郎のほうが三歳年上だから仕方がないのかもしれないが、三郎に負けるのはいつも悔しかつた。 今も、三郎は的のほぼ真ん中を射ることができた。 徳寿丸は、真ん中からは外れてしまつた。

だが、又七郎の矢は徳寿丸よりももつと外側を射ていた。 又七郎は武芸があまり得意ではないらしく、いつも徳寿丸が又七郎に武芸を教えていた。 その現場を見られると、からかわれるのだ。 今日も又七郎に弓の扱い方を教えたかったのだが、義久がいるので徳寿丸の出番はない。

徳寿丸と又七郎に、的の中心を射るには何に気をつけるべきか口で説明した後に、義久は手本として矢を放つた。 義久の矢は的のぴつたり真ん中に刺さつた。

さすがは御東殿、と三郎が茶化すように手を叩いた。 又七郎も目を丸くして義久を見上げている。 義久は涼しい顔で、徳寿丸と又七郎に稽古を続けるように告げただけだつた。

その後何度も徳寿丸は矢を的の中心にあてることができた。 又七郎は結局、最後まで真ん中にあてることはできなかつたが、最初に比べればかなり上達したと思う。

稽古の後は場所を移して、義久の講義だ。 三郎は、武芸は得意だが手習いや講義は苦手なので、あからさまに嫌な顔をした。 だが、義久に冷たい目を向けられ、首をすくめて徳寿丸の後ろをついてきた。

三郎とは正反対に、又七郎は手習いや講義は得意だし好きなので、とても楽しそうだ。 又七郎は徳寿丸と一緒に受ける義久の講義のほかに、わざわざ常光院に通つて和尚から教えを受けているというの

だから、学問好きと「いふ」ということがよく分かる。

今日の義久の講義は孟子だった。この前は、確か墨家の話だった。その前は孔子。よく義久の頭の中にはそれだけ多くの知識が詰まっているものだと思つ。徳寿丸は義久の話を聞いていても、分からぬところが多くある。三郎はもつと分かつていいようで、大きなあくびをしている。又七郎は義久の話を理解しているようで、目を輝かせながら話を聞いている。

「ここまで話で、分からぬところはありますか？」

「よく分からなかつたが、孟子の教えでは、謀反を起こしても良いということなのか？ 殷の紂王は家臣に討たれたのだろう？」

「いいえ。明では皇帝というものは、天から天命といふものを受けて天子となるのです。殷の紂王は天命を失い、天子ではなく一夫になり下がつていた。そのため、周が殷を討伐したことは、謀反にはならないのです」

「では、どうすれば天命を受けたとか、失ったとか、そういうことが分かるんだ？ 天命は見えるのか？」

義久の講義は分かるようで分からぬ。今日の話は、明の国で皇帝が変わるのは何が原因なのか、という話だった。天命を言われても分からぬ。殷と周の話を聞いていると、まるで謀反が認められているような気がして、徳寿丸は少し恐ろしくなつたのだ。

「徳寿丸様、天命は見えないのです。天の意志は、民が示すのですよ」

「民が？」

「又七郎殿はよく『存じです。御北様も又七郎殿のよつな』『嫡男がいらっしゃつしゃつて、ご安心なさつて』いるでしょう」

珍しく義久に褒められて、又七郎は照れて笑つた。義久は滅多に人を褒めないので。徳寿丸は褒められた覚えがない。

「あの、『民貴しと為す、社稷これに次ぐ、君軽しと為す』という教えでして、天下に良い政治を行つて、天下の民の帰服を得るもののが王となるのだそうです」

「又七郎は物知りだな」

「和尚様に教わりましたから」

「これは遠い明の国の話ですが、徳寿丸様のご参考にもなりますよ。皇帝や天子や王を当主に置き換えてお考えください」

「それは、えーと、天命というものは民が示すのだから、つまり、民に好かれる良い当主にならねばならない、ということか?」

「はい。民だけではなく、家臣たちにも好かれるお屋形様におなりください。御父上のように」

「それは、民に恩恵を与える仁政を敷く政道で、王道といつものなのだそうです」

「王道か。では、俺が王道を実行することができず、父上のような良い当主になれなかつたら、殷の紂王のように一夫になり下がつて、又七郎に討たれるかもしれないということか?」

「大まかに言えばそういうことです。それに、徳寿丸様には喝食丸様という弟君もいらっしゃいますし、今後新しい弟君がお生まれになるととも限りません。その場合、家督を継がれるのは徳寿丸様には限らないかもしだれないということをお忘れなく」

「義久は俺よりも武勇に優れ、学もある。お前がその気になつたのならば、佐竹の天命は俺ではなくお前に移りそうだ」

「お戯れを」

徳寿丸は半ば本氣で言つたのだが、義久は子どもの戯れと思つたのか、一瞬目を伏せただけだつた。だが、徳寿丸は義久ならば本気を出せば天命を受けることができると思った。もし明の国にある天命というものが、この佐竹にも存在するとしたらの話だが。そう思うと、面白くない。

「義久、孔子だの墨家だの孟子だの、こいつの話はもういい。それよりも『孫氏』や『六韜』、『三略』などの兵法を学びたい」「俺も、兵法がいいなあ。今までの話は難しくてよく分かんなかつたし」

「では、次からはそちらの講義をいたしましょう。明の古の教えは

参考にしていただければ

三郎の言葉に義久は眉をしかめたが、徳寿丸の希望通り次回からは兵法の講義になった。講義の後、義久は表へ戻り、これから常光院に行くという又七郎も別れ、三郎は気づいた時にはどこかに行っていた。

ひとりになつた徳寿丸は、おしばのもとへ行つた。おしばは、針仕事をしている最中だったので、抱きつくのはやめにした。それに、もし三郎にそんなところを見られたら、からかわれるに決まつている。

「徳寿丸様、御東様の講義は終わりましたか？」

「今終わつたところだ」

針仕事の手を止めたおしばにぴたりと寄り添うように、隣に座つた。おしばは徳寿丸の顔を見て、ちゃんと話を聞いてくれている。「今日は、孟子の勉強をしたんだ。もし俺が良い当主になれなかつたら、又七郎や義久に討たれるかも知れないのだそうだ」

「まあ、それは恐ろしい」

「うん。俺も恐ろしいと思つた」

「でも、徳寿丸様ならば大丈夫。必ず良いお屋形様になられます」

「そうだろうか。俺は、俺よりも義久のほうがふさわしいと思つた。だって、義久は俺よりも武芸もできるし、知略も優れている。俺は、武芸は三郎できないし、学は又七郎には及ばないし」

「もう、何を弱気におなりですか。わたくしから見れば、徳寿丸様ほどのお子はいらっしゃいませんのに。御東様は徳寿丸様よりずっとお年が上ですし、三郎様とも又七郎様とも違つて良いのですよ」

「本当に?」

「ええ。わたくしにとつては、徳寿丸様が一番のお子なのです」

そう言つておしばは、徳寿丸を抱きしめてくれた。少し照れくさくはあるのだが、おしばにこうして抱きしめてもらつのは好きだ。安心する。おしばはどんな徳寿丸でも受け止めてくれる。おしばのそばにいる時が、一番心が安らぐのだ。

おしばの胸に頭を預け、徳寿丸は目を閉じた。あたたかくて、とても気持ちがよかつた。

はつと目を開けると、目の前に広がるのは見慣れた天井だつた。夢を見ていた。懐かしい夢。もう十年近く前のことだ。今では南義種と名乗り南家を継いだ三郎、北義憲として父親とともに宗家を支える又七郎。何よりも、今となつてはもう会うこともないおしば。幼いころ、徳寿丸の周りには一門の三人がいつもいた。今思えば、あれは父が年の近い三郎、又七郎を徳寿丸のそばに置いて、互いに競い合わせようとしていたのだと思う。そして、三人の目標として義久がいた。その思惑通り、徳寿丸は三郎と又七郎と競い、誰よりも義久を意識していた。

おしばには、元服してからというもの一度も会つていない。元服してからもおしばがそばにいれば、義宣はおしばに甘えてしまう。それを防ぐために、おしばは義宣の前から姿を消したのだ。今は母の侍女のひとりになつていてる。だが、義宣と顔を合わせたことはない。

夢に見た幼いころの記憶の中に、母は登場しなかつた。それは当然だ。義宣の思い出の中に、母との思い出など存在しないのだから。母親のように愛してくれたのは、おしばだけだつた。

これが武家のならいと言われば、確かにそのとおりなのかもしれないが、母に愛された記憶は存在しなかつた。それで、よく今まで母の愛を感じようと思い続けてきたものだ。笑つてしまふ。

あれは幼いころの夢だが、今でも義宣に変わらず根付いている気持ちがある。武芸は義種にかなわない。知略は義憲にかなわない。すべてが義久には及ばない。幼いころから今までずつと思つてきた。義久にはすべてがかなわない。武芸も知略も、家臣たちの期待も、母の信頼もすべてが義久のものだ。佐竹家御一門、東家当主、佐竹義久。幼いころ感じたように、義久が宗家の当主になつてもおかしく

ないかもしれない。

隣に視線を移すと、小糸と名乗った女が眠っていた。八重の部屋を出て、この小糸とぶつかって、そのまま義宣は小糸を寝所に連れて来ていた。

名前しか知らない。ただ廊下でぶつかつただけの女を抱いた。誰でもよかつた。女の柔らかさとあたたかさを求めていた。だが、満たされることなどなかつた。女を抱いている時だけは、何も考えずにただ体に溺れることができた。あたたかさも柔らかさも感じた。ただ、それだけだ。

満たされない心は、ただむなしく乾いていくだけのようだった。

那須の女と伊達の女（十）

小糸と寝たのは、これで何度目になるだろ？か。まだ片手で数えられるだけの数のような気がするし、それよりも多いような気もする。だが、一度は越していないと思つ。

初めのうち、当主である義宣と闇を共にすることが恐ろしかったのか、男に犯されることが恐ろしかったのか、それとも義宣の妻である八重に見つかることが恐ろしかったのか、何に怯えているのかは分からなかつたが、小糸は震えて小さくなつていた。

「数を重ねる」とに震えは收まり、最近では甘えるような態度も見せるようになつてきた。八重ならば絶対に見せないような姿だ。

小糸を抱くよになつてから、八重のもとへは一度も足を運んでいない。

今も小糸は義宣にしなだれかかるよつて甘えている。甘えられて悪い気はしないが、最近の小糸の態度は甘えを通り越して、義宣に媚びているよつてに見えた。

「お屋形様」

「何だ？」

「あの」

義宣を見上げる小糸の目は、まどわりつくような媚びを感じさせた。不快だと思った。

「何か言いたいことがあるのか？」

ええ、でも、と焦らすように小糸はなかなか話を切り出さない。話したいことがあるから声をかけたのだろ？早く言えばいい。何だ、ともう一度催促すると、小糸は義宣の肩にぴたりと寄り添い、呟いた。

「いつ私を側室にしてくださいのですか？」

「側室？」

小糸の言葉はあまりにも予想外で、思わずそのまま聞き返してし

まつた。だが、小糸の方は聞き返されたことに驚いたようだつた。

「はい。あの、お屋形様は私を側室になさるおつもりなのではないのですか？」

「違うな」

「え？」

小糸を側室にするつもりなどない。小糸を抱いたのは、小糸を側室にするためではない。女の柔らかさ、あたたかさを求めていただけで、誰でもよかつた。側室にするつもりもなかつた。何度も小糸を抱いたのは、新しく女に手をつけるのも面倒だと思つただけで、別に小糸を気に入つてゐるわけではない。

「で、ですが、私はもう七度もお屋形様の闇に呼ばれて」

「それがどうした」

小糸の顔が強張つていぐ。田には涙がたまり、わっと泣き出してしまつた。

「私は、お屋形様の側室になれると思い、お屋形様にこの身を差し出したのです。お屋形様と初めて闇を共にした時、私には許嫁がありました。ですが、お屋形様のお情けを受けた身では、もう許嫁のもとへ嫁ぐわけにはまいりません。許嫁と一緒にになれないのならば、お屋形様の側室にと思つたのです。浅はかな考え方といふになるかもしれませんが、私にはもうそれしか考えられなかつたのです」「そうか、分かつた」

「では」

涙で濡れた小糸の顔が明るくなつた。小糸の話を聞いて、最近媚びるような態度を取つていたのは、側室にしてくれとねだるためだつたのかと納得した。納得すると、小糸に対する気持ちも一気に冷めていつた。もともと気持ちなどないのだが、もう顔も見たくないと思つた。

「勘違いするな」

「え」

「お前の事情は分かつた。だから、お前の嫁ぎ先を手配してやる。

家の臣の子弟の中に、ちょつとお前に見合つた年の者がいるだらう。

「そんなん、相手の方に、私がお屋形様のお情けを受けた身と知れた

ら

「何も言わないだらうよ。俺の家臣だからな」

一門や譜代などの家臣の子弟ではなく、もつと力のない末席の子弟にくれてやればいい。文句は言わないだらう。

小糸はただ泣きじゃくるだけだった。目の前でずっと泣かれても鬱陶しいだけだったので、侍女を呼んで小糸を連れていかせた。侍女は、義宣と小糸を見て目を丸くしていた。

その後、小糸の嫁ぎ先を手配し、小糸の父親には金を一粒くれてやつた。それで、小糸の問題は終わらせた。

小糸との関係が終わってから、義宣はひとりの女を何度も抱っことはやめた。多くとも、関係を持つのは三度までと決めた。あまり何度も闇に呼ぶと、小糸のように側室にしてくれと言いだしかねない。そのような面倒な事態は避けたかった。

ひとりの女との関係は薄くなつたが、代わりに複数の女を相手にするようになつた。一、二度闇に呼んで相手をさせて、女が甘えて媚びないうちに、嫁ぎ先を決めるか、金を払つて関係を終わらせた。最近では、義宣が八重ではなく侍女などの奥で仕えている女ばかり相手にしている、という噂が女たちの間で流れ始めたようで、自ら義宣のもとへやつてくる女もいた。あわよくば側室に、という魂胆が見え透いていて嫌気がさした。

母や八重に見いだせなかつたものを、女たちで埋めようとしたはずだったのに、何度も同じことを繰り返すたびに、心はますます冷たく空しくなつていくばかりだった。

あの女たちは、義宣が佐竹家の当主であるから、体を義宣に差し出すのだ。

今夜も、女に金を握らせて追い返した。ひとりで天井に視線を向けていると、襖の向こうから、お屋形様、と声をかけられた。

「何だ？」

「お見送りいたしました」

「そうか」

今日追い返した女は、無事に送られたらしく。そういうえば、義宣が追い返す女をいつも送つていくのは、同じ女だった。

襖を開けると、女は驚いて顔を上げたが、急いで頭を下げた。なぜか、この女を相手にしようとと思ったことは一度もなかった。この女からは、義宣に媚びる態度が見えないのだ。

「次の相手はお前にする、と言つたらどうする？」

女は考へているのか、深く俯いたまま動かなかつた。しばしの沈黙の後、顔を上げて義宣の顔を見つめ、口を開いた。

「尼になりとひびきだいします」

「尼？」

「冗談だらう、と思つたのだが、女の田に迷いはなく、言葉もまつすぐだつた。夜の闇のように、女の田は深く、それが少し恐ろしかつた。

「お屋形様がおなじ」の心を弄ぶことも、おなじがお屋形様のお情けにあらぬ期待をかけることも、業のなせることなのでしょう。このむなしく悲しき連鎖を断ち切るために、私は尼となつて仏に祈りを捧げて生きたいと思います」

「お前は、俺を蔑んでいるのか？」

「いいえ」

「では、何だ」

「ただ、お屋形様もおなじたちも、悲しいと」

悲しい。何を言つてゐるのだろうか。確かに、義宣自身もこの行為に何の意味もなく、空しいだけだとは思つてゐる。だが、女たちも結局は金を握られ、嫁ぎ先を決めれば誰も文句は言わないではないか。

仏に祈られるほどのことはしていなければ、だが、女の田は義宣を責めていたようだつた。

失礼します、と言つて去つて行つた女は、一度と義宣の目の前に現れなかつた。もしかしたら、本当に尼になつたのかもしれない。だが、義宣は女たちを闇に呼ぶことをやめよつとは思わなかつた。

那須の女と伊達の女（十一）

義宣がいろいろな女に手をつけているところ噂が、奥にいる女たちの間で広まっていた。

初めてのころ、それは噂に過ぎないのではないか、と芳は思つていたが、小大納言の話は具体的で、これが事実なのだと確信するに足りるものだった。

義宣は、侍女だろうが家臣の娘だろうが、気に入った女がいれば手をつけて、それなりの金を渡して家に帰しているらしい。中には気に入られてしばらく側に置かれた女もいるようだが、それも側室というわけではなく、義宣が飽きたらほかの女と同じように金を渡して実家に帰しているそうだ。ほかにも、家臣の妻として嫁がせた女もいると聞いている。

そういういろいろな女に手をつけるくせに、御台のもとには全く足を運んでいないらしい。

義宣は何を考えているのだろう。女たちを自分の意のままに操れる道具だとでも思つてゐるのだろうか。

侍女も家臣の娘も、義宣に呼ばれたら断れるはずがない。そして手をつけられてしまえば、嫁に行くのも難しくなりはしないだろうか。義宣の世話をしている侍女に手をつけるならば、まだ理解できる。それ以外の女にも手をつけて、責任を果たそうともしないのはどうかと思う。

女たちの世話を見るのが嫌ならば、黙つて御台のもとへ行けばいいのだ。義宣は、今まで側室をひとりも置こつとしなかつたではないか。だが、義宣がどのような意図で側室を置いていないのかは分からぬが、芳の目から見て、義宣と御台の中が睦まじいようには見えなかつた。だから、義宣は御台を相手にしないのかもしれない。芳としても、あの御台の産んだ子どもが嫡男になるのかと思つと、溜め息をつきたくなるが、御台との不仲の結果がこれなのならば、

びうしたものかとも思つ。

本当に、義宣は何を考えているのだろうか。突然、女漁りに目覚めたのか。分からぬ。だが、これは注意すべき行為だ。義重もいろいろな女に手をつけていた時期はあつたが、今の義宣ほどではなかつた。同じ女として、義宣に手をつけられた女たちが不憫だ。

「義宣」

廊下で芳の姿を見かけた途端、きびすを返そつとした義宣を呼び止めた。義宣は渋々といった様子で振り向いた。

「お前は、いろいろな女に手をつけているそつだね。そして、飽きたら実家に帰しているそうではないか」

「生活に困らないだけの金は渡してあります。何か問題でもありますか？」

「もし、その女がお前の子を身じこもつていたらびうする？」

「その時は、俺の子ではないと言えばいいでしょう。事実、本当に俺の子かどうか、そんなことは分からぬではありませんか。俺以外の男とも寝ているかもしませんからね」

「義宣、お前」

何と自分勝手な言い草だらうか。これでは、手をつけられた女たちがあまりに哀れだ。今のところは、義宣の子を身じこもつた女がいるという話は聞いていないが、もし今後そのような事態が起こつたら、と思うと寒くなる。その子どもが女ならば、まだいい。だが、男だとしたら、御台に子ができぬ以上、その子どもが嫡男となるのだ。

「義宣」

「何ですか」

「お前は、手をつけられた女たちの気持ちを考えるべきだ。もっと、女を大切にすべきだよ」

芳の言葉を聞いた瞬間、義宣の目が見開かれた。そして、はつ、と乾いた笑いを義宣は漏らした。嫌な笑い方だと思った。

「母上がそのようなことをおつしやるのですか」

「義宣」

義宣の顔に暗い陰が見える。怒りと諦めが入り混じったような田で、義宣は芳を見ている。

「母上にだけは、言われたくありませんでしたよ」

そう言つて立ち去る義宣の背中を、芳はただ黙つて見ていた。義宣の背中は、無言で芳を拒絶していた。

なぜ、義宣がそう言つたのか、芳には分からなかつた。

義宣が奥の女たちに手を出して『うらしい』、『うう』話で奥は持ち切りだつた。誰が情けを受けた、誰が誘われた、『うう』ばかりで、八重は『うんざり』していた。

八重はほかの女にばかり手を出して、自分のもとへは一向に足を運ばない義宣に対し『格氣』を起こして『うらしい』わけではない。ただ、あきれて『うらしい』だけだ。

別に、義宣が女に手を出すことはかまわない。側室を置きたければ好きなだけ置けばいい。だが、誰かれかまわずに手をつけて歩いているということには、あきれて言葉も出ない。とりあえず、吉野は義宣に何もされていないようなので安心した。

はあ、と溜め息をつくと、吉野は八重を見て苦笑した。

「姫様、格氣ですか？」

「まさか。なぜ、わたくしがあの男のためにそのよつな気持ちにならなければならぬの？」

「まあ、格氣は七去の一つですし、格氣を起こされないことはようしいことだとは思いますが、姫様はお殿様に対して無関心すぎです」吉野の言つ七去は、妻を離縁できる七つの事由のことだ。その中には、嫉妬をすることも含まれていた。

「源氏だから、光源氏の真似事でもしているのかもしけないけれど、わたくしからすれば、ただあきれるばかり。穢らわしい。それに、七去と言えば、わたくしは子もなしていないし、舅と姑に従順でも

ない」

那須の兄も、正室以外の女に手は出していた。だが、兄は義宣と違い、手を出した女は側室にしていたし、責任を持つて世話を見ていた。父もそうだった。義宣は違う。つまみ食いでもするように、好き勝手に手を出して、捨てている。

「では、お殿様が光源氏ならば、姫様は藤壺といったところでしょうか？」

「次郎殿の初恋の相手がわたくしだと言いたいの？」

八重が光源氏を例えに出したからか、吉野は無理やり藤壺の名前を出したような気がする。藤壺といえば、光源氏の初恋の相手で、永遠の理想ではないか。義宣にとつての藤壺が、八重のはずがない。「私はそう思いますけど」

「吉野、そなたはあの男の肩を持つのが好きね」

「肩を持つわけではありません。姫様とお殿様が睦まじくなさったらしいなあ、と思っているだけで」

それは無理な話だ。八重は義宣と睦まじくする気などまったくない。八重はあくまでも兄のために佐竹家に嫁いだのだ。そして、八重が義宣を拒んだのではなく、佐竹家が八重を拒んだのだ。だから、八重も義宣と睦まじくする気がない。義宣のことなど、どうでもいいのだ。

だが、最近の義宣の行為と、兄が佐竹と同盟を結んでいる宇都宮を攻めたことで、八重の気持ちは無関心から、義宣を忌む方へ傾いていた。

「それにしても、次郎殿に手をつけられた女の中で、次郎殿が初めて契つた男だという女がいたのなら、その女が哀れ」

「なぜですか？」

溜め息をつきつつ眉をしかめる八重に、吉野は首をかしげてみせ

た。その姿に、今度は八重が苦笑した。

「その女が死んだ時、三瀬川を渡るためには、次郎殿に背負われなければならぬのだもの。ほかに恋い慕う男がいたとしても、死後

の世界で待っているのはあの男。一体、あの男は何人の女を三瀬川の向こう岸へ運ばなければならないのかしら」

女が死んでから往生するためには、男に背負われて三瀬川を渡らなければならぬ。その男は、女が初めて情を通じた男でなければならぬのだそうだ。だから、義宣がその女にとつて初めての男だとしたら、死後に愛しい男に会いたいと切望しても、義宣の背に乗らなければならない。女にとって、それは苦痛以外の何物でもないだろう。愛しい男がいるのならば、その男に会いたいはずだ。

「確かに、死後の世界で待っているのは、恋い慕う殿方が嬉しいです」

「やはり、吉野もそう思うでしょう?」

「はい。ですが、姫様もお殿様に背負われるのですよね」

「わたくし?わたくしはある男に背負われたくないわ」

「ですが、お殿様に背負われなければ往生できないではありますか」

嫌だなんておっしゃらないでくださいよ、と八重を心配する吉野に、八重はただにこりと笑つてこたえた。

那須の女と伊達の女（十一）

岩城常隆が兵を発して田村を討つところの、義宣は父と、弟の義広とともに常隆に協力すべく、兵を須賀川に進めた。母が義久に政宗を助けさせてから、そろそろ一年が経とうとしている。

この一年の間に、政宗との間に戦はなかつたが、またいつ戦があるか分からぬ。天下を統一しつつある秀吉は、私的な戦をやめさせようとしているようだが、政宗に攻められた場合、こちらも黙つているわけにはいかない。

佐竹と蘆名は太平城を攻め取ることになつたが、守りは固く、そう簡単に攻め落とせるものではなかつた。だが、佐竹と蘆名が協力すれば、落とせないものではないだらう、と思つていたのだが、蘆名は城を囲んだまま動こうとしなかつた。

そのまま数日が過ぎ、義広は何をしているのか、と父が怒り始めたころ、ちょうど義広が佐竹の陣へやつてきた。父は義広を怒鳴りつけようとしたようだったが、義広の顔が強張つてゐるのを見てやめていた。

「父上、兄上、申し訳ありません。蘆名の兵は何をしているのだとお思いでしよう。しかし、数日前から、家中に伊達へ通じてゐるものがいるとの噂があり、動けずにいました。先ほど、城から知らせがあり、政宗が我が黒川城へ攻め寄ろうとしているのです」

「そうか」

「このままで、黒川城を落とされてしまうかもしません。申し訳ありませんが、私は城へ戻り、城を守りたいと考えます」

「それでは仕方がなからう。急いで帰陣し、守りを固めるべきだ」「ありがとうございます」

父は渋い顔をしていたが、蘆名勢の帰陣を認めた。義広は急いで兵をまとめ、黒川城へと戻つて行つたが、なぜ父がその許可を出すのだろうか。佐竹としての許可を出すのならば、当主である義宣が

出すのが当然ではないのか。

だが、弟の危機にそのような小せいことは言つていられない。この思いは、胸の内で留めておくことにした。

義広が黒川城へ戻つてからも、義宣は父と太平城攻めを続けていた。もう少しで城は落ちるだろう。太平城を抜くことができれば、佐竹が蘆名の助けに向かうこともできるはずだ。

義宣は太平城を抜いた後、義広を助けようと思っていたのだが、義広から届いた知らせに義宣は愕然とした。父も言葉を失っていたようだった。

義広が黒川城へ帰つた時には、すでに蘆名家の族臣である猪苗代盛国が政宗に応じて、義広に背いた後だつた。猪苗代盛国は自分の守る猪苗代城へ政宗ら伊達の軍勢を招き入れ、蘆名との鬭いに備えていたのだそうだ。

義広はこれを討つべく、その日の夜のうちに摺上原へ兵を進めた。そして、翌日に伊達勢と戦い、四百騎余りで政宗の本陣であるハケ森へも迫つたそうだが、ついには政宗に敗れてしまった。義広は、かくなるうえは腹を切るしかない、と死のうとしたそつだが、佐竹家から義広に従つて蘆名へ行つた者たちに止められ、黒川城へ帰陣した。

義宣たちと別れて義広が黒川城へ戻つたのは、確か三日ほどまえだつたはずだ。わずか二二、三日の間で、蘆名は伊達に惨敗してしまつたといふのか。

義宣は父と相談し、急いで太平城を攻め落としたが、蘆名の救援には間に合わなかつた。義広は黒川城を捨て、蘆名を継ぐ前に養子となつていた白川へ出奔したのだそつだ。

義広が政宗に敗れ、黒川城へ戻つた段階で、蘆名家の宿老二人とその息子が政宗に内通していた。宿老が政宗に応じてしまつた以上、城を保つことはかなわず、義広は城を政宗に明け渡してしまつたのだ。

白川から佐竹の陣へたどり着いた義広は、佐竹家から従つて行つ

た大繩、羽石と、白川家にいた頃から世話をなつていた舟尾父子、それに妻を連れただけだった。ほかの家臣たちは散り散りになつており、再び集まることがかなうかどうかも分からぬ。

「私の力が至らないせいで、城を保つことすらかなはず、父上にも兄上にもご迷惑ばかりおかげして、申し訳なく思つております」

「今となつては、どうすることもできない。生きていれば、いつかは蘆名家を再興することもできるだらう。今は、佐竹へ戻り、再起の時を待つしかあるまい」

「兄上、私は佐竹へ戻つてもよいのでしょうか？」

「俺はかまわない。父上は、いかがお思いですか？」

「わしも、今は佐竹へ戻るしかないとゆう」

「ありがとうございます。妻のためにも、いつか必ず蘆名家を再興したいと思います。その時まで、お世話になります」

義宣と父の言葉を聞いて、義広は涙を流しながら頭を下げた。義広の妻も、泣きながら頭を下げている。義広の妻は蘆名家の娘だ。蘆名盛隆の嫡女を義広が妻に迎えて、蘆名家を継いだ。義広の妻は、自分の実家が政宗に滅ぼされてしまい、さぞ苦しい思いをしているだろう。義広も、自分が継いだ家を滅亡に追いやってしまい、苦しんでいるに違ひない。

そんな弟たちの姿を見ていると、義宣も胸が痛む。だが、同時に母への怒りがこみあげてくる。母が義久に政宗を助けさせなければ、義広がこのよくなつ目にあつことはなかつたかもしれない。それに、今政宗に家を滅ぼされたのは義広だが、明日は我が身かもしれないのだ。

会津恢復をはかり、しばらく兵を須賀川に留めていたところに、秀吉と景勝からの書状が届いた。秀吉の書状は父にあてられたもので、景勝の書状は義宣にあてられたものだつた。

秀吉の書状は、景勝から政宗が会津を攻めていることを聞いた、政宗には兵を退くように書状を送つたので、それに背いた場合はこちらが兵を差し向けるつもりでいる、蘆名のことは悪いようにはし

ない、出陣の場合は景勝とよく相談するように、という内容だつた。義広は以前から秀吉と好を通じていたため、このような書状が送られてきたのだろう。佐竹でも秀吉とは好を通じている。

景勝の書状も、内容は秀吉と同じようなもので、いざとこう時に援軍にかけつけるつもりでいる、と書いてあつた。

ただ違うのは、秀吉は父に書状をあて、景勝は義宣に書状をあてているということだ。上杉家とは、先代の謙信の頃から親交がある。そのため、景勝は義宣が家督を継いだことを知っているのだ。だから、義宣にあてて書状を書いた。秀吉は、義宣が家督を継いだことを知らなかつたのだろう。いまだに当主は父と思っているため、父に書状を出したに違いない。

上方では、いまだに佐竹家の当主は父だと思われているのだと思うと、溜め息をつきくなつた。

秀吉と景勝からの書状が届いたことによつて、佐竹は兵を退くことにした。これ以上留まつていっても、会津を政宗から取り返すことは難しいだろうし、秀吉が出陣の際は景勝と相談するようだ、と言つていい以上、今はおとなしく帰陣するしかない。

太田城へ戻ると、義広が佐竹へ戻ると聞いていたのだろう、母が出迎えに現れた。

「義広、そなたが無事で本当に良かつた。慣れぬ会津の地で、どれほど心細い思いをしていたかと、母は心配していたのだよ。これからは、父上や義宣と一緒に、佐竹のために尽くしておくれ」

義広の手を取り、無事で何より、と嬉しそうに繰り返す母を見て、義宣は怒りを抑えるのに必死だつた。母は何を考えているのだ。何が、無事で良かつた、だ。母が可愛い甥を助けたせいで、わが子は国も城もすべて失つたというのに。そのことを理解していないのだろうか。この場には、義広の妻もいるのだ。義広もその妻も、何と思つてていることか。

その後十月になり、政宗は兵を須賀川に進めた。須賀川は、亡き一階堂盛義の妻である伯母が、女城主として守つていた。伯母は母

の姉にあたる伊達家の長女だった。

義宣としては、出陣して須賀川を助けたかった。須賀川が抜かれれば、政宗が次に攻めるのは佐竹に違いない。だが、秀吉は書状で、出陣の際は景勝と相談するように、と言つてきている。つまりは、出陣するなと言つてているようなものだ。

仕方なく、義宣はわずかの兵を援軍として須賀川へ派遣した。だが、須賀川城の城内では、二階堂四天王と呼ばれた守谷や族臣が政宗に内通しており、戦が始まる前から負け戦と決まっているようなものだつたらしい。

伯母は宿老の須田盛秀とともに、最後まで政宗に抵抗したが、ついに政宗に捕らわれてしまい、須賀川城は炎に包まれ落城した。二階堂家に最後まで忠節をつくした須田盛秀は、戦の後に佐竹家へやつてきたので、義宣が召し抱えた。

母が政宗を助けたせいで、今度は母の姉が憂き目を見た。実家を助けるために、自分の身内がどのような目にあつているのか、母は理解していないのだろう。なぜ、母は「う」なのか。考えれば考えるほど、腹の虫がおさまらなかつた。

那須の女と伊達の女（十一）

那須の資晴から届いた文を、八重は嬉しそうに何度も眺めていた。一体何が書いてあるのだろうか、と覗こうとするといつも隠されてしまい、吉野は八重と顔を見合させて笑った。

「姫様は、本当に那須の兄上様がお好きです」

「ええ、もちろんよ。甥の藤王丸が順調に大きくなっているようで、わたくしも嬉しい」

「まあ、藤王丸様が。それでは、姫様の頬も緩むといつものですね」「それだけではないのよ、吉野」

八重が見たこともない甥の成長を楽しみにしていることを、吉野はよく知っていた。資晴からの文には、いつも藤王丸のことが書かれているはずだが、今回の文はそれだけではなかつたらしい。

「兄上は、伊達や北条と通じて佐竹を討つつもりなのですって」

「え、姫様、それは」

それが八重の嬉しいことなのだろうか。吉野にはよく分からぬ。首を傾げると、八重が口許に笑みを浮かべた。

「北条は伊達と結んで佐竹を討ちたがっている。伊達が佐竹を滅ぼしたいのは、今までの戦を見てくれば分かるわね？兄上は、そのことを知つて伊達に頻繁に書状を送つているようよ」

「そして、三方から佐竹家を討つと？」

「ええ。その時には、必ずわたくしを那須に連れ帰つて貰ふと、この文には書いてあるわ」

「姫様は、そのことが嬉しかったのですね」

「当然じゃない。この家を出て、兄上のもとへ帰ることができるのだから」

八重は、佐竹家に嫁いできた時から、今でも佐竹家を嫌っている。そして、那須の実家が何よりも大事で、兄を慕つている。その八重にとって、佐竹が滅んで那須に帰ることができることのは、嬉しい

いことなのがもしけない。だが、そう上手くいくものだらうか。

「しかし、姫様。最近、天下は関白のものになつたそうではありますか？」

「それは上方の話でしょう？あの北条と伊達と、兄上が組めば佐竹など取るに足らない。次郎殿は、この間も伊達に負けたばかり。戦に負けて弟が実家に帰つてくる始末なのだから、笑つてしまふわ」

「私も詳しくは知らないのですけど、大御台様のお話によれば、佐竹家はその関白と好を通じていて、いざれば関白の命で上洛もするのだとか。いざれば北条も関白に屈するのだと伺いました」

「そなた、あの女の言うことを信じるの？そもそも、わたくしの知らない間にあの女のところへ行つていたとは」

本当は大御台のところへ行つたわけではなく、大御台の侍女の小大納言に、ねちねちと愚痴を聞かされただけなのだが、これ以上大御台の話題には触れないでおいたほうが良いだろう。

「まあ、いいわ。関白がどれほどのものかは知らないけれど、近いうちにわたくしは、きっと那須に帰れるのだもの」

八重が嬉しそうにしていると、吉野も嬉しい。だが、八重の那須大事の気持ちは、少々行きすぎではないか、とも思う。佐竹家に嫁いできて、もうすぐ五年になるのだから、もう少し佐竹家に馴染んでも良いのではないだろうか。その方が、八重の立場もずっと良くなるはずだ。義宣の子を産んでいない八重の立場は、佐竹家中では非常に危うい。

どうしたものだらうか、と吉野が内心首を捻つていて、御台様、と八重を呼ぶ声がした。八重が入るように促すと、部屋に入ってきたのは、朝霧あさぎりだった。朝霧は、ここ一年ほどで八重に気に入られた侍女だ。吉野とともに、八重の側近くで仕えている。

「御台様、今夜お屋形様のお渡りがあるそうです」

「断りなさい」

「しかし、姫様、先日もお断りなさつたではありますか。今夜は、お迎えなさつてはいかがですか？」

「嫌」

断言する八重に、吉野と朝霧は顔を見合させた。ここ数カ月、八重は一度も義宣に会つてすらいない。

八重の義宣嫌いには困る。一時期、義宣は家臣の娘や侍女、女中など誰彼かまわらず手をつけていた。そのことを八重は憎んでいるようだった。汚らわしい、とまで言つてゐる。それが憤氣などではなく、八重の本音なのだから困るのだ。もともと義宣に关心がなかつた八重が、無関心から嫌悪の感情を抱いてしまつた。ほかの女たちに手を出している間は、八重のもとに義宣が来ることはなかつたのだが、最近また義宣が八重のもとへ来るよくなつた。だが、八重は義宣を徹底的に拒もうとしている。

以前は、義宣のことを嫌つていても、褥は共にしていたというのに、いまは最後に共寝したのがいつなのかも分からいくらいだ。「御台様、お屋形様のお渡りをお迎えください。大御台様に怒られてしまします」

「あの女がどう思うと関係ないわ」

つん、と顔を背ける八重に、朝霧は困り果ててしまつてゐる。これから、朝霧は義宣に断りを入れに行かなればならない。それが憂鬱なのは吉野も分かる。今まで断りに行つてているのは吉野だ。朝霧は、今回初めて断りに行く。朝霧が目で吉野に助けを求めているのが分かる。仕方なく、吉野は朝霧とともに義宣のところへ行くことにした。

「吉野殿、申し訳ありません。わたし、ひとりでお屋形様のところへ行くのが怖くて」

「いいんですよ、朝霧。私だって最初は怖かったものです。今は、慣れちゃいましたけど」

「それにもしても、どうして御台様はあんなにもお屋形様や大御台様がお嫌いなのでしょう?」

「姫様は、確かに大御台様のことはお嫌いですけど、お殿様に関しては、お嫌いと言つつか、何と言つつか」

八重が義宣のことをどう思つてゐるのか、眞実は吉野にももちろん分からぬが、朝霧の言つとおり嫌つてゐることは確かだ。だが、なぜ嫌いなのか。気づいた時には、八重は義宣も大御台も佐竹家も何もかもが嫌いだつた。那須に帰りたい、と泣いていたこともあつた。

「うまく言えますが、姫様は、初めからお殿様のことも、大御台様のことも、佐竹家のことも好きになるつもりがなかつたように思えます。しいて言えば、初めからこのお家のすべてを拒んでいらっしゃつたのでしよう。姫様は、実家の那須家が何よりも大事なので」

「それでは、お屋形様もお氣の毒ですね。お屋形様が何をお考へなのがも分かりませんが、お屋形様は少なくとも御台様を拒んでいらっしゃるわけではないようですから。ただ、一時期の、あの、奥の女たちとのことは、どうかと思いますけど」

「そうなのです。今も、お殿様はいくら断りを入れても必ず姫様にお会いにならうとなさいます。昔から、お殿様は姫様を嫌つてはない、むしろ好いていらっしゃるよう私は思うのですよ」

「吉野殿があつしゃるならば、そつなのかもしぬませんけど、わたしにはよく分かりませんわ」

「それが問題なんですよね。朝霧と同じよつて、姫様自身がそういう思いではないのだから」

ため息をつきつつ苦笑すると、義宣が待つ部屋の近くまでたどり着いてしまつた。吉野は朝霧とふたり、やうに深いため息をついてから、義宣に声をかけた。

那須の女と伊達の女（十四）

須賀川城が政宗に攻め落とされ、来春には政宗によつて佐竹討伐が行われるか、と家中は動搖していたが、義久と北義斯宛てに秀吉からの書状が届いた。

その書状によれば、来春には小田原征伐に向かうため、佐竹も出陣するように、とのことだつた。秀吉は以前も、富士山を見に行きたい、と小田原征伐を匂わせる書状を父に送つていたが、来春ようやくそれが果されることになったようだ。

この小田原討伐についての書状は、関東の領主には送られているようで、宇都宮国綱からどうするつもりか、と尋ねられた。義宣は江戸や大掾にも小田原参陣について書状を送り、八重の実家の那須家にも書状を送つた。だが、どこからも良い返書は来なかつた。

年が明けて、いよいよ秀吉の出陣が迫つてきた。だが、義宣は間もなく赤館まで出陣しなければならない。伊達の兵が赤館近くまで迫つてきているのだ。私戦は秀吉に禁じられているが、領地を守るために仕方がない。

出陣前の慌ただしい太田城に、下妻城の多賀谷重経が訪ねてきた。重経は父が当主だつた頃、父のもとへ来て旗下に属すると約束していた。娘が生まれたら、必ず人質として差し出すとも誓つていたらしい。多賀谷家のもとの主家は結城家で、今も重経は結城家に従つているが、佐竹の旗下にも属したいらしい。何とも不安定な立場だと思う。そのため、父は重経の娘を人質として差し出せることにしたのだ。

重経が連れてきた娘は、まだ幼かつた。十歳にもなつていないだろう。重経に促され、娘はたどたどしく頭を下げた。

「下妻から参りました。多賀谷重経の娘、琳と申します」

「そうか、姫はいくつになつた？」

「八つになります」

八歳というと、弟の能化丸と同じ年だ。今は実家に戻っている義広は、他家に養嗣子として迎えられ、実家を出て行つたが、心細かつたことだろう。この姫は人質としてやつて来たのだから、不安も大きいことと思う。

だが、義宣は人質として差し出された幼い姫に割ける時間も、余裕も今はなかつた。

「佐竹殿、ふつつかな娘ですが、何卒よろしくお願ひいたす」

「多賀谷殿のお気持ち、承知いたしました。父にも伝えておきましょう」

「どうか、お頼み申します」

深々と頭を下げ、重経は太田城を去つて行つた。今度は結城家へ顔を出すのかもしれない。差し出された姫は、奥を取り仕切る母に預けた。人質を集めて置いている棟に連れて行かれることになるだろう。

正月十日、正月を祝つこともなく義宣は赤館へ出陣した。赤館で伊達とにらみ合つていると、宇都宮国綱から小場義成にあてて書状が届いた。国綱の弟の芳賀高継からも小場義成に書状が送られてゐる。赤館に出陣している義宣に不安を覚えたらしく、小田原へともに参陣するという話を忘れないように、と念を押されてしまった。しかも、上方の様子があやしいから急いで帰陣した方がいい、とのことだ。

その書状を見て、義宣は兵をまとめて太田へ帰つた。日先の赤館のことなどどうでもいい。以前国綱も、北条との小競り合いから上洛を渋つていたが、秀吉の家臣である石田三成から、所領のことなど後から秀吉がどうとでもしてくれる、献上物も何もいらない、とにかく急いで上洛するように、と言われている。それならば、おそらく佐竹も今政宗に多少領地をかすめとられたところで、何とかなるのかもしれない。

太田へ帰陣した義宣は、賀茂社へ小田原参陣の起請文を捧げた。

家臣たちには、手柄を立てたものは直参だけではなく、家中、百姓

などまで褒美を『えること』、手柄の評価に依怙贔屓はしない」と、討死したものの妻子は粗末にしないこと、などを約束した。

宇都宮とは頻繁に連絡を取り、互いに小田原へむけて出陣する時期を話しあっているが、那須家とはまったく連絡が取れない。八重の兄、資晴はどうするつもりなのだろうか。那須家は宇都宮と戦を繰り返しており、それだけで秀吉の心象はよくないはずだ。しかも、最近は伊達や北条に通じているという噂まである。もしその噂が事実ならば、那須家の女である八重を妻にしている義宣の立場は危うくなる。それは何としても避けたかった。

その真相を確かめたい、という思いもあって八重のもとへ足を運んでいるのだが、体調がすぐれないとか、月のものせいだとか、様々な理由をつけられて、八重には闇を拒まれている。義宣も昨年は摺上原での蘆名と伊達の戦以来慌ただしかったため、しつこく八重に迫ることはなかつた。だが、今は状況が違う。八重ならば真相を兄から聞いているかもしれないのだ。それに、何力も八重の顔を見ていない。八重の顔が見たかつた。

八重の侍女の朝霧に話をすると、あっさりと今夜は義宣を迎えるとの返事がきた。もしかすると、吉野が八重を説得したのかもしれない。吉野は昔から、義宣と八重の仲を何とか改善させようとしている。

日が暮れて八重のもとへ行くと、しばらくぶりに会つたというのに、八重は相変わらず冷たい顔をしている。その表情は、以前よりももつと冷え冷えとしているようだった。

「八重、久しぶりだな」

「ええ」

「ところで、那須の資晴殿から何か聞いていることはないか？ 北条や伊達のことについて、いや、聞いていることならば何でも構わない」

「わたくし、何も存じません」

「何も知らないということはないだろう？」

「では、言い方を変えます。仮にわたくしが何かを知っているとしても、あなたにお話しさることは何もありません」

それきり、八重は黙り込んでしまった。八重が母のように実家大事の女であることは重々承知している。義宣に話せば実家の立場が悪くなるという話を知っているのならば、八重は話したがらないだろう。この態度は、小田原参陣に関する那須家の去就を知っていると言つていいようなものだ。

「八重、お前が実家大事なのは分かる。だが、これは佐竹だけの問題ではなく、那須家の存亡にも関わる問題なのだ。何か知っているならば教える」

「那須家の存亡? それはあなたが決めることではなく、兄上が決めることです」

「いや、天下は関白秀吉のものとなる。俺は関白殿下に臣従するため小田原へ向かう。資晴殿も小田原へ参られた方がいいと言つているんだ」

「そんなことを言つて、わたくしの実家が関白に刃向つことが怖いだけでしょうか?」

確かに、八重の言つことは当たつている。那須が秀吉に刃向つことは恐ろしい。義宣の立場が危つくなる。

「ご安心ください。兄上は負け知らず。関白に負けるはずがありません」

「何を言つている? まさか、資晴殿は本氣で小田原へ参陣しないつもりなのか?」

「さあ?」

「八重、資晴殿を説得しろ。小田原へ参陣するようだ。このままでは、那須家は潰されるぞ」

「そのようなこと、次郎殿に指図されたくありません」

「お前、那須家取り潰しと引き換えに、佐竹も道連れにしようといふのか? お前は佐竹を、俺を、恨んでいるようだったからな。兄をそそのかして、佐竹を潰すつもりか? 妻の実家が関白の怒りを買え

ば、俺も連座するだろうからな

「何を言つてゐるのですか？」

八重はとぼけたように首を傾げるが、おそらく義宣の推測通りに違ひない。八重は初めから、佐竹を潰す氣だったのだ。だから、義宣に心を開かない。義宣の両親にも従わない。那須の兄を慕い続け、兄すらも欺いて、佐竹を潰そうとしている。そうでなければ、義宣が秀吉の怒りを買わないように細心の注意を払つてゐるといふのに、資晴が閑白に負けるはずがない、などと言うものか。

「那須与一の末裔が何だ。佐竹は源氏の名門だぞ。源氏に従つた那須氏の女の分際で、佐竹に楯突く氣か」

叫ぶように言葉をぶつけた義宣を、八重は冷たい目で見つめていた。義宣がこれほど怒りに燃えているのに、八重はますます冷やかになつていいくようだつた。

「愚かな方」

ぼつりと呟いて、八重は笑つた。静かなその笑みは、明らかに義宣を蔑むものだつた。

那須の女と伊達の女（十五）（前書き）

直接的ではあつませんが性的な表現があります。

那須の女と伊達の女（十五）

八重の言葉と田に、義宣はますます腹が立つた。何が、愚かな方、だ。蔑むような目で義宣を見て、八重は一体何が言いたい。

「あなたは、昔おっしゃいました。そう、確か妹君がお興入れなさる前のことだったかしら。譜代連中は、過去の栄光にしがみつく、自尊心の強い頭の固い奴らばかり、と」

「ああ、確かにそんなことを言つたな。俺は今でも連中は好かない。だが、それとこれと何の関係があると言うのだ？」

八重がにこりとほほ笑んだ。何を考えているのか分からぬ。八重の笑顔を見たいと思っていたが、このような笑みは見たくなかつた。

「あら、おかしいわ。今のあなたは譜代の連中と何も変わらないじやありませんか」

「何だと？」

義宣は眉間にしわを寄せた。それがおかしいのか、八重は小さく声をあげて笑つた。その笑いは義宣をますます苛立たせた。

「あなたは、誰よりも佐竹といつ名門を誇つている。源氏の名門というのがあなたの誇りなのよ。譜代の連中と一緒に。いいえ、それよりもたちが悪いわ。譜代の連中を嫌いながら、あなたも結局佐竹にしがみつかなければ生きていけないのだもの」

「何が言いたい？」

「過去の栄光にすがつてゐるのはどなた？自尊心が強いのはどなた？佐竹という名門にしがみつく家臣を憎みながら、あなたが佐竹家の当主だから体を開く女しか相手にできないのはどなた？滑稽のこと、あの女たちはあなたが佐竹家の当主でなければ、あなたのいいなりになるはずがないのよ」

八重の言葉が胸に刺さる。義宣が手をつけてきた女たちは、城の奥の女たちだ。女の温もりに癒しを求めて、ただむなしくなつただ

けだつた。義宣が譜代家臣を憎むこと、佐竹を誇りに思うこと、女たちに手をつけたこと、何が関係しているというのだ。そつ怒鳴りつけたかつたが、八重の言葉が胸に突き刺さり、言い返すことができなかつた。

「それに、わたくしへの言葉。よほど佐竹家が誇りと見えます。佐竹に傷がつくのは嫌なのでしょう？名門に傷はふさわしくありませんものね。あなたは結局佐竹の人間なのよ。佐竹が何よりも大事で、誰よりも誇りに思つているのです。ふふ、おかしな方。佐竹のお飾りは嫌だ、と佐竹という名門を呪いながら、誰よりも佐竹という名門を誇りに思つていいのだから」

義宣を馬鹿にするように笑つた後、八重はきつゝ義宣を睨みつけた。怒りと憎しみに燃えるような目だった。

「佐竹家の過去の栄光をふりかざして、我が那須家を貶めるのでしたら、わたくし許しません」

「お前に、俺の何が分かる」

小さく咳いて、義宣は八重の肩を掴んだ。八重は逃げようとするとが、逃げさせはしない。

「お離しなさい」

「誰が離すものか」

必死に抵抗する八重の手を、空いている方の手で掴み、肩と手を掴んでそのまま八重を押し倒した。八重は怯えるどころか、ますます怒りを燃やしたようだつた。

八重の夜着を肌蹴ると、薄暗い部屋の中でもはつきりと分かる白い肌が現れた。いろいろな女たちと関係を持っていた時も、常に思つていたが、改めて目の前にして義宣は思つた。八重よりも美しく白い肌をした女を、義宣は知らない。

八重よりも美しい女など、この世にはいないのだ。

八重は、なぜ義宣を拒むのだ。なぜ義宣に心を開こうとしなかつたのだ。なぜ佐竹家を憎むのだ。

なぜ、八重は義宣を愛さなかつたのだ。

「八重」

憎らしい。義宣を愛さず、認めず、心を開かず、ひたすら実家を大事に思つてきた八重が憎らしい。母に似た女。那須の兄のことばかり口にして、義宣のことなど見ようともしない。腹立たしい。憎い。

八重を組み敷き、そのまま抱こうとしたが、八重は抵抗をやめない。だが、体の自由を奪われた状態での抵抗など、あつてないようなものだつた。

八重の抵抗を無視して、嫌がる八重の体を無理やり開かせた。部屋には衣擦れの音と、荒い息だけが響く。義宣は何も言わなかつた。八重も無言だつたが、必死に抵抗した。悲鳴をあげようともしない。それが、また義宣の苛立ちを増させた。

体だけ力ずくで奪つて抱いても、奥の女たちに手をつけた時以上に、むなしいだけだつた。

ぐつたりと横たわる八重を置いて、義宣は八重の部屋を出た。何をしに来たのだ、自分は。もともと、八重に那須家の去就を聞きに来ただけだつたはずだというのに。

新たな情報は得られず、八重との夫婦仲の決裂は決定的なものになつてしまつた。八重は義宣をますます厭わしく思うだろう。義宣も、八重が憎かつた。

義宣が部屋を出て行つた後、八重は暗い部屋の中でひとり涙を流していた。

最低の男だ。汚らわしい。悔しい。あの男に、この体を弄ばれた。蹂躪された。体にまだ義宣の感覚が残つている。それが不快でならなかつた。

佐竹など滅んでしまえばいい。愚かな当主が道を誤ればいい。その時には、八重は那須へ帰るのだ。図星を刺されただけで逆上するような男、夫だとしてももう一度と肌を許したくはない。今まで

妻として最低限の務めだろうと耐えてきたが、もう耐えられない。
那須の兄が恋しい。

「姫様、吉野です。お殿様が退出なさったようですが、何かありますか?」

吉野の声に、八重は肩を震わせた。まさか、吉野は八重と義宣のやうりとりのすべてを聞いていたのだろうか。そう思つたが、吉野の言葉と様子から判断すると、それは違うようだ。八重が義宣に手籠にされたと知つていたら、吉野は冷静でいられるはずがない。

「吉野」

「はい」

「子流しの薬があつたでしょ? へはやく持つて来て」

「え、姫様?」

「はやく」

八重が怒鳴りつけると、吉野は慌てて薬を探しに行つたようだ。ばたばたと立ち去る足音が聞こえる。

「あの男の子など、産んでたまるものか」

八重の小さな咳きは、闇の中へ溶けていった。

那須の女と伊達の女（十六）

八重を無理やり抱いてから、一度も八重の顔を見には行かなかつた。会いに行つたところで、八重が義宣に会つとは思えなかつたし、会いに行く時間がなかつた。

急いで小田原参陣の準備を整え、宇都宮と連絡を取り合ひ、すぐに宇都宮へ向けて兵を発した。宇都宮国綱と合流し、ともに北条方の城を攻め落としながら小田原へ向かつたためだ。今回の出陣には、弟の盛重も加わっている。義広は名を盛重と改め、今回の参陣で蘆名家再興を狙つてゐるのだ。

八重に構つている時間も余裕もなかつた。だが、本當は八重に会うのが恐ろしかつた。あのようなことをして、八重はどんな目で義宣を見るのか。考えただけで、恐ろしかつた。

国綱と合流してからは、少しでも秀吉の心象をよくしようつと、下野、壬生、鹿沼の城を攻めた。それに少し時間がかかり、小田原へは思つていたよりも遅く到着してしまつたが、城攻めをしていたのだから、遅参だと叱責を受けることはないだろう。まだ小田原へ到着していないものもいると聞いてゐる。政宗は、まだ参陣していなによつだつた。

政宗がいまだ到着していないことに安心していると、義久が書状を持つてやつてきた。

「お屋形様、石田治部少輔様からの書状にござります」

「そうか。石田殿は何と？」

秀吉の側近中の側近である石田三成からの書状に、義宣は驚いた。まさか、安心していたが、秀吉は義宣が遅参したと思つてゐるのだろうか。だが、書状を持ってきた義久の表情を窺うと、そこまで深刻な内容ではないようだ。

「関白殿下へのご進物が見苦しくては、お屋形様のためにならない」と。ほかにも、細々と注意が書かれておりました。殿下への謁見は

明日とのこと」

「それは、我らの進物では見苦しいといつことか？」

「おそらくは、そのような意味かと」

「今更言われても、どうすることもできないな。仕方がない。明日の謁見で頭を下げるしかないだろう。今日は休むぞ」

「承知いたしました」

義宣に三成からの書状を渡し、義久は去つて行つた。義久に渡された書状には、秀吉がいかに義久を高く評価しているかが書かれていた。

秀吉は、義宣が若いゆえに佐竹家中の仕置きは義久に任せようと思つていた、とか、秀吉が佐竹家中で知つてているのは義久だけである、とか、義久を賛美することばかり書いてある。

その内容に、義宣は義久を呼びつけて、これはどういうことか説明させたかった。だが、義久を怒つても仕方がない。秀吉は、気に入つた者がいれば破格の条件で引き抜こうとするのだと聞いたことがある。おそらく、これもそうなのだろう。そもそも、秀吉が佐竹の中で義久しか知らないということはありえないのだし、ここで義久に腹を立てては秀吉の思うつぼだ。

義久もそれを分かつていて、義宣に書状を渡したのだろう。だが、そこまで考えて如才無く振舞う義久に腹が立つた。

やはり、幼いころから変わらず、今でも義宣は義久に劣つたままだなどと痛感させられる。

翌日、国綱と連れ立ち、一門衆の義久、義憲、義種らを連れて秀吉の陣へ向かおうとすると、佐竹の陣所の前で立つてゐる者たちがいた。秀吉が寄こしたのだろうか。

「お初にお目にかかります。関白、豊臣秀吉が家臣、石田治部少輔三成と申す。佐竹殿、宇都宮殿でござりますか？」

「私が、佐竹義宣にござります」

「宇都宮国綱でござる」

義宣と国綱が返事をすると、三成は丁寧に頭を下げた。昨日の書

状では、少々高圧で冷たい印象を受けたのだが、本人にそのような印象は抱かなかつた。

「関白殿下がお待ちです。」案内いたしましょう」

案内する、と言つて三成は歩き出した。国綱と顔を見合わせ、義宣たちはその後をついていくことにした。

「佐竹殿、昨日の書状、こゝ気分を害されましたかな？」

「昨日の書状とは、我が臣、東義久への書状のことでしょうか？」

「左様です。殿下の命に従つて書いた部分と、私の独断で書いた部分があつたのですが、佐竹殿にしてみれば、不愉快な内容だつたかと思ひまして」

「はあ」

三成が言つているのは、義宣の進物が見苦しい、と書いたことと、義久を賛美したことについてだらう。おそらく、前者は三成の独断で書いたもの、後者が秀吉の意をくんで書いたものに違ひない。

「申し上げにくいのですが、殿下は本日の謁見でも、東殿を我が家中へ加えようとなさるでしょう。しかし、それは遊びのようなもの。自分の見こんだ者が、どの程度の器が見極めようとなさつてているだけなのです。どうか、お怒りになりませぬよつ」

「心得ました」

三成に言われずとも、たとえ秀吉が義久を褒めちぎつても、義宣はその場で怒りはしない。怒れば、義宣の器が小さいと思われるだけだ。殿下お戯れを、くらいで留めておけばいいのだらう。

「進物につきましても、正直などいふ、これだけでは少々見劣りしてしまうのですが、そこは、関東武士は質実ゆえ、進物までは気が回らなかつた、とでも申し上げればよろしいでしょう。そこに、殿下への忠誠を誓つ言葉があればなおよろしい」

「は、はあ」

三成は親切で義宣に忠告をしているのかもしけないが、これでは自分は田舎者のため進物が見苦しくて申し訳ない、と言えばいいと言われているようなものだ。義久に宛てた書状や、義久についての

忠告もそうだが、眞面目すぎてかえって反感を買う人間なのかもしない。本人に悪気がないのは、話している表情を見れば分かる。

「さあ、佐竹殿、宇都宮殿、こちらが殿下の本陣です」

秀吉の本陣に集まる物資、鉄砲、兵士、武将たちを見て、義宣は言葉が出なかつた。それは国綱も同じだろ。今まで関東で繰り広げていた戦では、このような大量の物資も、兵士も見たことがなかつた。これが、天下の戦というものなのか。三成の言葉は誤りではなかつた。この規模の違いを見せつけられては、関東武士は田舎者と言わざるを得ないだろ。

「殿下、常陸の佐竹義宣殿、宇都宮の宇都宮国綱殿が参られました」

「そうか」

三成の言葉にこたえたのは、小柄な皺の多い男だつた。唐織の羽織を着て、諸将を従え座つてゐる。この男が、関白豊臣秀吉のだろ。思つてゐた人物像とは違つていて、義宣は驚いたが、秀吉に向かつて平伏した。

「常陸から参りました。佐竹次郎義宣にござります」

義宣に続いて、国綱も平伏し、その後に義久、義憲、義種が続いた。三成に見苦しいと言わた進物だが、献上すると、秀吉は笑みを浮かべ喜んでいるようだつた。天下人はこのくらいの芝居など、訳ないのである。

「我ら関東の者は田舎者ゆえ、見苦しい進物しか用意できず、まことに申しわけなく思つております。殿下の軍門に加わつたからには、家中一同殿下の御為戦いましょう」

「いやいや、立派な進物の数々嬉しく思ひます。しかし、それ以上に佐竹の武勇期待しておる。何せ、坂東太郎、鬼義重とうたわれた常陸介の軍であるからの」

「ありがたきお言葉」

今は父の軍ではなく、義宣の軍なのだが、やはり佐竹といえど父の武勇なのか。

「ところで、そちの後ろにある者が、東義久か?」

「は。某が東源五郎義久にござります」

「そちの名は聞いておるだ。さて、源五郎。此度の戦、我らと北条とその優劣を何と思つ?」

「はい。関八州は由来、武を用いる地にござります。北条は雄を天下に称しておりますが、寡君義重、義宣の寡兵をもつてすら負けたことはありません。殿下は天下に威を誇り、天下の大兵をもつて戦に臨むのですから、北条を破ることとは、掌をかえすが如きことでしょう」

「おう、よつ言つた、よつ言つた」

義久の言葉を聞いて、秀吉は呵々大笑し、着ていた唐織の羽織を脱いで義久の肩にかけた。

「佐竹には、源五郎のよつな優れた者がある。羨ましい限りじゃ。その才を称えて、わしから褒美を授けるだ」

「ありがたき幸せ。殿下の御為にも、義宣に及ぶ所存にござります」

「ま」と、佐竹には惜しい逸材よ。そちは幸せ者じやの、次郎」笑いながら義宣に話を振つた秀吉に、義宣は義久とともに頭を深く下げた。三成は遊びのようなものだと言つたが、秀吉はどこまで本気で言つているのか分からぬ。

義久が何を思つて、秀吉の問ひに受け答えしているのかも、義宣には分からなかつた。義久の考えは分からぬiga、義宣はこのやり取りに少し苛立ちを覚えた。

「そういうえば、次郎の弟は蘆名家の当主だつたか」

「はい。今は名を改め、蘆名家平四郎盛重と名乗つております」

「ほう。まあ、そちの弟のこととは忘れておらぬゆえ、安心するよつ伝えておけ」

「かたじけなく存じます」

義広という名から、蘆名家の通字である盛の字を入れた盛重に改名していたことが、秀吉に好印象を与えたのかもしれない。蘆名家の再興が許されたと決まったわけではないが、盛重にとつて悪くは

ない結果になりそうで、義宣も安心した。

一通り挨拶がすむと、義宣と国綱は兵を率いて三成の麾下に加わるよう命じられた。三成とともに館林城を攻めることが、秀吉に臣従した義宣に最初に与えられた命令だった。

那須の女と伊達の女（十七）

三成、大谷吉継、増田長盛らとともに、佐竹と宇都宮の兵は館林城攻めを行つた。秀吉の軍勢をもつてすれば館林城など簡単に落とすことができ、改めて秀吉への臣従を誓つてよかつたと安堵した。その分、今回の小田原攻めに参加していない那須家や、江戸、大掾が気にかかる。長く佐竹を苦しめていた政宗も、ようやく世の流れを認めたのか、秀吉のもとへ参陣したと三成から聞いた。政宗が遅参だと咎められたのだから、今後那須や江戸が参陣したところで、処罰は免れないだろう。江戸も大掾も佐竹の支配下にあるというのに、義宣や父の言つことを聞こうとしない。特に江戸は義宣の妹のなすを、重通の息子に嫁がせているといふのに。

江戸も大掾も義宣に従つて小田原へ参陣しないと分かつた時、秀吉に自分の領地を申告する際の書状に、それらの家の領地も佐竹家の領地として書いて申告した。父に既成事実を作つてしまえばいい、と言わされたのだ。秀吉に、義宣が常陸一国の主であると認められれば、義宣に従わない連中を始末する口実ができる。

その書状を差し出した時、受け取つた三成は何も言わなかつた。中央にいる三成たちは田舎の常陸の現状など、詳しくは知らないのだろう。そのまま秀吉が認めてくれることを祈るばかりだ。

館林城を落とした後、勢いに乗じて三成らは忍城攻めに取り掛かつた。佐竹も宇都宮も三成や吉継らの兵の後方に陣を構え、指示を待つてゐるだけだ。どうやら三成には、秀吉からの命令があるらしく、忙しそうに陣の間を駆け回つてゐたが、佐竹の兵は特にやることがなく、士気が下がりかけていた。

これが上方の戦というものだろうか、と思つてゐると、三成に軍議を開くから来るよに、と呼ばれた。陣を義久に預け、軍議へ参加すると、三成は忍城の絵図を広げて待つていた。

「此度の忍城攻略は、水攻めを行いたいと思います」

「水攻めですか？」

「はい。殿下が高松城攻めで水攻めを行つたこと、佐竹殿も宇都宮殿もご存知でしよう?」

「ええ、関東にもその噂は聞こえています」

国綱が答えると、三成は絵図を指した。

「これから城を囲む土堤を皆さまには築いていただきます」

「しかし、忍城の周りは湿地に沼。水害でも水を被らない城だと聞いておりますが」

「その難攻不落の城を、あえて水攻めにすることによって、殿下のご威勢を関東だけではなく広く天下に示せるというものののです。土堤の計画は、ここ数日のうちに立てました。この計画通りに動いてください」

三成は事細かに、どの兵がどの堤をどこまで築く、とこうことを説明していった。三成の計画は驚くほど詳細で、ここまで細かく計画を立てるのならば、陣の間を駆け回らなくてはならないだろう、と思った。これが上方の戦というものか。

陣に戻り、三成の指示通りに義宣が命令すると、命令を聞いた家臣たちは眉をしかめた。戦に来て、ひたすら堤を築くだけなのか、と言いたいようだ。それは義宣にも分かるが、これが指示なのだから従わざるを得ない。

三成の指示に従い、佐竹の持ち場で堤工事の監督をしていくと、三成がやってきた。

「佐竹殿」

「石田殿、いかがなさいました?」

「せつか坂東太郎の戦を拝見できるかと思っていたのですが、佐竹殿や宇都宮殿にこのような工事ばかりさせてしまつて、申し訳ないと思いまして」

「いえ、私たち田舎者は上方の戦を拝見できて参考になつております。伊達と戦つている時は、このような戦はありませんでしたからね」

「そう言つていただけだと助かります。殿下に従うとこうことは、これまでの佐竹殿のやり方を貫くことができないということでもあります。今後もこのようになると多くありますようが、」承知ください

「心得ました」

義宣が頷くと、三成は忙しそうに去つて行った。実際、忙しいのだろう。おそらく三成はすべての持ち場を見て回つてゐるのだ。感心する。

連日工事を行つていたが、ちょうど梅雨の時期のせいだ、土堤はなかなか完成しなかつた。ようやく完成したころには、三成はすっかり瘦せてしまつたようだつた。だが、雨は降りやまらず、せっかく完成した土堤もところどころ崩れ落ちる箇所が出てきた。見つけるたびに修復しているのだが、雨の勢いに修復作業が追いつかない。雨はその後も降り止むどころか勢いを増し、大雨が降るようになつてしまつた。大雨のせいで土堤は決壊し、濁流が味方の陣に押し寄せた。被害は甚大で、佐竹家でも死者が出た。

その後の軍議で、三成はすべての責任は自分にあるのだと皆の前で深々と頭を下げた。軍議が終わつた後は、立ち去る諸将をひとりひとりつかまえて、自分の失敗を詫びていた。

「佐竹殿にも多大なご迷惑をおかけいたしました。申し訳ありません」

「いいえ、石田殿の責任ではないでしょ。雨さえ降らなければ、水攻めは成功していたでしょ。私には石田殿のような土堤の計画すら立てられません」

「佐竹殿、そういうわけにはいかぬのです」

「どうじうことですか？」

「殿下は私の才を評価してくださっています。ならば、私はいかなる条件においても、水攻めを成功させなければなりません。過程が評価されるのではありません、結果のみが評価されるのです」

「水攻めは殿下の『命令』だったのですか？」

「いいえ、私の考えです。余計なことは考えないでいただきたい」

三成の言葉から、もしかしたら忍城の水攻めは秀吉の発想で、三成はただそれに従つただけなのかもしれない、と思つたが、そういうわけではなかつたのか。三成は、義宣の言葉を冷たく否定した。

「とにかく、能力と結果が評価されます。それが殿下のやり方です。だから、私のようなものでも出世することができたのですよ。佐竹殿も頭の片隅に留めておいた方がよろしいでしょう」

「能力と結果がすべて、ですか」

義宣には信じられなかつた。佐竹家でももちろん能力のある者は評価しているが、それは一門衆か譜代家臣であることが前提だ。身分の低いものや、新参の浪人者を評価しようとしても、老臣たちはそれに反発する。義宣はそれが嫌で、試しに浪人者を側に置いてみたのだが、老臣たちは、それでは家中に人がいよいよだ、と言つていた。

だが、三成の言つとおり能力と結果だけで評価をするというのならば、義宣が側に置いている浪人者たちも、結果さえ残せば重臣に抜擢できるのだ。三成の言葉は、義宣に新たな考えをもたらした。忍城はその後、力攻めをしても落ちることではなく、かえつて味方にましても死者を出してしまつた。睨み合いは続いたが、こちらには決め手がなく、忍城も救援を得られず動くことはできなかつた。月が明けて七月に入り、小田原城が落ちたという知らせが忍城攻めの陣に届いた。忍城は小田原城開城後、ようやく三成らに引き渡された。

秀吉の待つ本陣に戻つた三成を待つていたのは、城一つ満足に落とせない戦下手、計算しかできない頭でつかち、という諸将の冷たい評価だった。だが、義宣は三成の戦と人柄を間近で見ていて、その評価は間違ひである、と思つていた。

三成は、真面目で優秀な人物だ。ただ、おそらく真面目すぎるだけなのだ。

那須の女と伊達の女（十八）

小田原落城後、秀吉は奥州征伐を発表し、義宣は宇都宮国綱とともに、会津への先導と宿舎の用意、食糧の調達を命じられた。

宇都宮に到着してから、義宣は秀吉に呼び出された。義宣の申告した常陸一国と下野の一部について、すべて佐竹領と認める朱印状を渡されたのだ。これで、佐竹家の所領は安堵され、常陸一国は名目上佐竹家のものとなつた。だが、実質は独立した江戸や大掾らがいまだ存在している。常陸は佐竹家のものではない。

だが、秀吉の朱印状さえあればこれからは違う。大義名分を掲げて討伐することができるのだ。しかも、秀吉から父は常陸の旗頭に任じられた。父は隠居の身であることを理由に、義宣を旗頭にしてほしい、と秀吉に書状を送つたため、義宣が常陸の旗頭だと秀吉に認められることになった。

政宗に攻められ、所領を失っていた弟の盛重も、秀吉のおかげで江戸崎を与えられ、大名として返り咲くことができた。だが、所領の大きさは会津とは比べ物にならないほど小さい。それでも、再び大名になれただけでもありがたいと思うべきだろう。

一番目の弟の能化丸は、此度の小田原攻めの道中に病死した岩城常隆の後嗣として、岩城家に入ることになった。常隆の母は父の妹で、義宣の従兄弟にある。常隆のもとに、先年政宗に城を攻め落とされた須賀川の伯母が養女とともに身を寄せていると聞いていたが、二人は母の伝手を頼つて佐竹家にやつってきたがつているらしい。父からの書状で知つた。義宣もそのことには賛成だった。母の良いようにはすればいい。

これで、義宣の頭を悩ませていた所領の問題は解決したが、その代わりに秀吉に叛いた織田信雄を預けられてしまつた。信雄のことは父に任せ、太田城に幽閉することにした。常陸の旗頭となつたのだから、江戸重通に水戸城を明け渡すように通達したが、重通は義

宣の通達を無視した。いずれ、どうにかしなければならないだろう。妹のなすが嫁いでいることもあって、穩便にことを済ませたいのだが、そうはいかないかもしない。

秀吉からの命令は次々と義宣のもとへ舞い込んでくる。今度は、早々に妻子を上洛させなければならなくなつた。まずは、父と母を上洛させなければならない。まだ幼い末の弟の彦太郎も連れて行かなければならぬだろうし、多賀谷重経から預かっている姫も連れて行つた方がいいだろう。重経も大名なのだから、その娘を常陸に置いておくわけにはいかない。

義宣も近々、八重を上洛させなければならないだろう。八重にこの話をしなければならないのかと思うと、頭が痛い。八重が義宣の話を聞いて、黙つて上洛するわけがないのだ。そもそも、義宣の話を聞くかどうかもあやしい。

秀吉は京へ戻つて行つたが、戦の後始末のために奥州に残つている義宣のもとに、父から書状が届いた。京は見るものすべてが珍しく、想像とはまったく違つたらしい。秀吉とも謁見したが、父の態度が横柄で、周りの大名たちは憤慨したらしいが、秀吉は武辺者の父は富中の作法など知らないのだから仕方がない、むしろ好ましい、と笑い飛ばしたそうだ。いかにも父らしいが、義宣が上洛する際には、富中の作法を徹底的に身につけてから秀吉に謁見しなければならないと思つた。

結局、義宣が常陸へ戻つたのは十月に入つてからのことだった。だが、すぐに秀吉から、父に代わつて義宣と義久が上洛するよう命じられた。上洛の際は、義宣の妻子も連れてくるように、と書状には書かれている。

そのことを八重に告げようと、まず吉野を呼び出したが、やつて来た吉野は浮かない表情をしていた。

「お殿様、無事のお帰りお祝い申し上げます」

「ああ。お前も知つてゐるだろうが、此度大名の妻子は上洛して、京の屋敷に住むこととなつた。父が母と弟を連れて上洛しただろう

? 同様に、八重にも上洛してもらわなければならない。ところで、俺が留守中、八重は息災だつたか?」

「それが」

「どうした?」

「御台様は、お殿様がご出陣なさつてから、体調を崩されまして、今もよくなつたり悪くなつたりを繰り返しているのです。吐き気が酷く、起きているのも苦痛という日もあつたほどで。しかも、その原因も分からぬものですから、御台様のおそばには、わたくしと朝霧以外は近づかないようにしております。北城様も大御台様もご心配くださつたのですが」

「そんな話、聞いていいぞ」

八重が原因不明の病で、何ヶ月も寝込んでいたことは知らなかつた。病身をおしてまで上洛せよ、とはさすがに秀吉も言わないだろう。病の原因が分からぬことは、人にうつる病かもしぬれない。八重を上洛させるわけにはいかないようだ。

「医師にはみせたのか?」

「もちろんです。ですが、ただ首を振るばかり。氣鬱の病というわけでもないようで」

「では、お前と朝霧という者以外、八重とは顔を合わせていないのか?」

「その通りです。もし、北城様や大御台様に万が一のことがあつては、一大事ですの」

「だが、お前たちには何もないよだな」

「しかし、今後何が起こるかは分かりません。ですから、お殿様も御台様にはお会いにならないでください」

昔から、比較的義宣に対し友好的だつた吉野が、ここまで食い下がるのだから、八重の病というのは事実なのだろう。父や母に確かめられないため、吉野の言葉を信じるしかないが、今回は八重の病を信じることにしよう。

「分かつた。此度の上洛、八重は常陸に残して行く。だが、必ずハ

重に伝える。次回は上洛してもうひ、と

「承知いたしました」

吉野に八重のことを託し、義宣は上洛に向けての準備を整えた。念のため、八重を診察した医師にも話を聞いたが、吉野と言つてることは同じだった。義久とともに上洛すると、確かに京は父の言つていた通り、想像とは違つた場所だった。いくら関東が田舎だと言われても、ここまで違うとは思わなかつたのだ。

父は義宣と入れ替わりで常陸に戻つてゐるため、屋敷には母と彦太郎、それに多賀谷の姫しかいなかつた。母に挨拶をすると、三成からの書状が届いた。内密に相談したいことがあるのだそうだ。

三成から内密の相談、と言われても義宣には思い当たることがない。八重を連れてきていなことを咎められるのかと思ったが、書面から察するにその話ではないようだ。急いで三成の屋敷を訪れると、義宣を出迎えた三成の表情は硬かつた。佐竹にとつて、良い話ではないことだけは確かだ。

「佐竹殿、お家の一大事です」

「私が、妻を上洛させなかつたことについてですか?」

「いいえ。そうですか、佐竹殿は奥方を此度の上洛にお連れではないのですね。それは、かえつて好都合でしそう」

「それは、どういう意味でしそうか?」

「佐竹殿の奥方のご実家、那須家が改易処分となりました」

三成の言葉に、義宣は言葉が出なかつた。頭の中に様々な考えが浮かぶが、どれもまとまつたものとはならない。ただ、佐竹家が連座処分とならないことを祈るしかなかつた。

那須の女と伊達の女（十九）

三成の話によると、八重の兄の資晴は、秀吉からの再三の出陣要請にも応じず、結局小田原へ参陣することはなかつたらしい。そのことに秀吉は怒り、那須に戦うつもりがあるのならば攻め込もう、とまで言つていたそうだ。

資晴は秀吉に対抗するために寺に立てこもり、ますます秀吉の怒りを買ったのだと三成は言つた。

「では、我が義兄は今後どうなるのでしょうか？」

「鳥山城は明け渡し、現在は佐良土に妻子とわずかの家臣を連れて蟄居となつております」

「何ということだ」

これを八重が聞いたらどう思つだろうか。それよりも、佐竹家はどうなつてしまふのか。急いで常陸への帰路についている父にも書状を送らなければなるまい。

「佐竹殿、大事なのは改易された那須家の今後よりも、あなたの今後でしよう」

「はい、まったくその通りです。しかし、突然のことで、私には良い考えが浮かばないのです」

「離縁なさるしかありますまい」

三成の言葉が義宣の胸に突き刺さる。離縁。つまりは、八重を離縁して那須へ帰せということか。改易され、城を失い、佐良土の館で蟄居をしている資晴のもとに。

「離縁ですか。しかし、石田殿、実は此度の上洛に妻を伴わなかつたのは、妻の体調がすぐれず、上洛には耐えられそうにないと判断したからでして」

「佐竹殿、あなたは家臣、領民すべてがかかつた父祖伝来の地と、奥方どちらが大事なのですか？」

「それは」

「よろしいですか？殿下はお怒りなのです。那須家に対して。殿下は那須に連なるものすべてに怒りの矛先をお向けになるでしょう。あなたの奥方もその対象なのですよ。その奥方を離縁せずに側近く置き続けることが、どれだけ危険かお分かりか」

三成の言つことは正論だ。八重を離縁しなければ、佐竹家にも墨が及ぶだろう。三成はそのことを心配して、義宣に助言を与えてくれているのだ。秀吉に長く仕えている三成が言つのだから、そうしなければなるまい。

「幸い、奥方にはまだお子がありませんでしたね。もし嫡男がお生まれになつていたら、嫡子ではなく庶子とするか、養子に出すかしなければならなかつたでしよう」

三成の言葉は正しい。分かつてゐる。だが、あまりにも正しすぎて、そこまで言わざとも良いではないか、とも思う。だが、三成が正しいことも、三成に悪意がないことも分かつてゐる。そもそも、なぜ八重を離縁することに対する抗議を感じるのか、義宣は不思議だつた。

八重はこれまで義宣に従順な妻だつたことは一度もない。子も産んでいない。そして、改易された家の娘だ。離縁すべき条件はそろいすぎていると言つても過言ではないだろう。それに、義宣は小田原征伐の前に八重との不仲を決定的にした。八重は自分を那須の女だと言い張り、義宣を心底嫌つてゐる。それなのに、なぜ義宣は三成の助言に素直にうなづけないのだろうか。

「しかし、石田殿、確か細川殿の奥方は明智光秀の娘であつたにも関わらず、殿下は細川殿に幽閉していた奥方を連れ戻すようにとおつしゃつたはずです」

「あの時は、殿下の温情を示す良い機会だつたのです。細川殿の奥方のような例外を持ちだされても困ります。佐竹殿、此度の殿下の小田原征伐での狙いは、殿下の武威を天下に示すことでした。逆らうものをねじふせてこそ、殿下のご威光が広く関東、奥羽まで届くところの。ご理解くださいぬか。殿下は佐竹殿のことは好ましく

お思いのですから、殿下に命じられる前に先手を打つて離縁なさいませ」

「しばらく、お待ち下さりませぬか？」

「承知いたしました。しかし、早めに離縁なさることをおすすめいたします」

「石田殿、ご厚意感謝いたします」

義宣が頭を下げようとすると、三成は手でそれを制した。今まで硬かつた三成の表情が少し和らぐ。

「悪い知らせはここまでとしましょう。実は、佐竹殿にはもう一つお伝えせねばならないことがあります。こちらは良い知らせだと思いますので、『安心を』

「は、はあ」

八重の実家が改易され、佐竹家も連座の可能性があるため八重を離縁しろ、という話以上に悪い知らせなどないようになつ。ならば、どのような知らせだろうと良い知らせだ。

「常陸の旗頭である佐竹家に逆らう、江戸、大掾、そのほかの国人を征伐しても良いと殿下からのお許しが出ました」

「まことですか？」

「はい。今や常陸は佐竹殿の領地。旗頭に従わない者は、殿下に逆らい天下の平和を乱すものと同類と見なし、征伐せよ、とのことです」

「これは、石田殿のお取り成しでしょうか？」

「私は、殿下に少しばかり口添えをしたのみです」

「かたじけなく存じます。さっそく、国許へ向かつた父に知らせます」

三成に深く感謝を述べ、義宣は急ぎ屋敷へ戻った。屋敷にいる母に那須家改易のことを告げると、母はあからさまに眉をしかめた。ともに上洛している義久にもそのことを告げると、義久も三成と同じことを言った。八重を離縁した方がお家のためだと。

「だが、俺は御台を離縁するつもりはない。御台は原因不明の病で

臥せつてゐるのだ。今離縁するのはあまりに忍びない

「では、どうなさるおつもりですか？」

「ひとまず、御台の病が癒えるまで、太田城の御台の部屋から一步

も外に出さないようにしようかと思つ

「城内で蟄居させると？」

「ああ。そのことは父に頼もうと思う。それに、殿下から反抗的な国人を征伐しても良いとお許しをいただいた。石田殿のおかげだ。御台のことも、石田殿は大層心配して下さった」

「では、國人たちの征伐も北城様にお任せなさいますか？」

「隠居の身である父には申し訳ないが、そういうことになるな」

口では申し訳ない、と言つたが、父は久方ぶりの戦に意気込むことはあっても、煩わしく思うことはないだらう。これが、常陸での最後の戦になるかもしれないのだから、父は意氣込むはずだ。もちろん、父にばかり戦を任せてしまい、情けない息子だという思いもある。

義久と相談の結果、まずは最も佐竹家に反抗的だった大掾を討つことに決めた。その次は江戸だ。なすを迎えながら、佐竹に従おうとしない。江戸は佐竹の家臣となつていることを理解していないのだ。常陸を治めるのに都合が良い水戸城を明け渡すように要請しても、一向に受け入れる気配がない。

父には書状で、那須家改易のことと、国人征伐のことを知らせた。それと同時に、八重にも実家が改易されたことを告げる書状を、吉野に宛てて送った。

実家が何よりも大事だと言いきつた八重は、この知らせを聞いてどうするのだろうか。義宣にはまったく予想がつかなかつた。

那須の女と伊達の女（一）

義宣を見送り、八重のもとへ向かう間、吉野は義宣の命を八重にどう伝えたらいいのか、思い悩んでいた。だが、それ以上に、義宣は納得して戻つて行つたようだつたが、本当に吉野の言葉を信じたのかどうかが気にかかる。

「姫さま、吉野です」

「お入りなさい」

「失礼いたします」

吉野が部屋に入ると、八重は脇息にもたれかかつて座つていた。八重の腹は、大きく膨らんでいる。八重は、義宣の子を身ごもつていた。

義宣には、八重は原因不明の病で臥せつていると伝えたが、それは吉野が考えた嘘だ。医師にも金を握らせて、口を割らないようにきつく口止めしているため、医師から義宣に情報が漏れることがないだろう。

「吉野、あの男は何と言つていたの？」

「それが、姫さまにも上洛をしてもらわねば困る、とのことでして」

「もちろん、承知しなかつたでしようね？」

「もちろんです。前々から決めていた通りに申し上げました。お殿様は、納得して下さつたようです。ただ、この次の上洛の際は、必ずご同行なさるように」と

八重の妊娠が分かつたのは、義宣が小田原へ向けて兵を発した後だつた。もともと八重の月のものは安定している方ではなかつたが、こない月が続き、体調不良とひどい吐き気を訴えるようになつた。吉野も朝霧も八重より年若く、妊娠の経験はなかつたが、間違いなく話に聞いていた妊娠の症状だと分かつた。

医師に口止めをし、八重の診察をしてもらつた。医師の見立ては、吉野の思つたとおりだつた。八重は義宣の子を身ごもつた。おそらく

く、八重が泣きながら子流しの薬を持つてくるよつた夜に、できた子なのだろう。

八重に医師の見立てを告げると、八重の顔から血の気が引き、その事實を否定するよつた。首を振つた。産みたくない、と繰り返し呟く八重を、吉野はただ抱きしめることしかできなかつた。どうすればいいのか、まったく分からなかつた。大御台に告げることが一番良いのだろう、とは思つたが、それは八重の望むところではないことは分かつてゐる。医師以外には、ともに八重の側近く仕える朝霧にだけ、八重の妊娠のことを打ち明けた。朝霧もただ驚くばかりで、どうすべきか良い考えは浮かばないよつだつた。八重は体調がすぐれず、妊娠の衝撃からも立ち直れず、寝込んでしまつていた。

八重は義宣のことを心底嫌つてゐる。名門の当主であることを振りかざし、那須家のことも八重のことも義宣は侮辱してゐる、と八重は思つてゐるようだ。妻を手籠にするような男の子ども、しかも手籠にされた時にできた子どもを八重は産みたくないのだ。

八重の気持ちを吉野にも理解できる。吉野も八重と同じことをされたのならば、産みたくないと思うだろう。だが、八重は佐竹家の当主である義宣の妻だ。八重が産む子は、男でも女でも佐竹家の嫡子となる。

八重の気持ちを思うと、子を流した方が良いのだろうか、と思うが、八重の立場を思うと、軽はずみなことはできないとも思つ。それに、せつかく授かった命を、こちひらの都合で流してしまつのは忍びない。

八重が寝込んでゐる間に、吉野は最善の策を考えた。最善は、すべて大御台と義重に告げることだろうが、それを避けて一番良い道はないものか。考えた結果吉野は、八重に子を産むよつて説得した。八重には、生まれた子どもは吉野が必ず那須家に送り届ける、と約束し、八重の兄の資晴の子として育ててもらつたのだと説明した。八重は、吉野の説得に何とか頷いてくれた。那須の子になるのならば、

産んでもいいと思つてくれたようだ。

妊娠のことは吉野と朝霧、そして八重の診察をした医師のみで留め、ほかの人間には伝えない。八重を含めた四人だけの秘密とし、八重は原因不明の病で臥せつていることにすると決めた。そうしているうちに、大御台と義重は秀吉の命令で上洛し、太田城からいなくなつた。それは、八重にとつては非常に好都合だった。

だが、吉野は本当に那須家に子どもを送り届けるつもりなどなかつた。八重を騙すことになつてしまつが、産まれた子どもは大御台に預けるつもりだ。その時に大御台にすべてを話し、義宣にも告げてもらうつもりでいる。当然、大御台も義宣も、子の存在を隠して八重を責めるだろう。その責めは吉野がすべて負う。命を差し出せと言われたら、吉野はそれに従う。このことは朝霧にも教えていない。朝霧に教えたのは、八重の子を那須に連れて行くつもりだとうところまでだ。

この吉野の考えが最善なのかどうかは分からぬ。だが、佐竹家の嫡子を産んでほしい、と言えば八重が頷かないことは分かつてゐる。ならば、八重も佐竹家の人間も騙して、子を産んでもらうしない。女の浅知恵に過ぎないかもしれないが、これが吉野の考え方得る八重の気持ちと八重の立場を守る策だつた。

子が生まれるまでの間、誰にも八重の妊娠を知られてはならない。だから、上洛前に八重のもとを訪れようとした義宣が、吉野のことを探つていなかどうかが気がかりだつた。

「上洛。わたくしに大御台と同じように人質になれと言うのね、あの男は。どこまで、このわたくしを侮辱すれば気が済むのか」

「御台様、お怒りになつては、お腹のお子に障りましよう」

「そう、そうね、朝霧。あの男は憎いけれど、この子には罪はない。那須の血が流れる子なのだから、慈しまなければ」

そう言つて、膨らんだ腹を撫でる八重は、母親の顔をしていた。それを見ていると、何としても八重も腹の子も守らなければならぬ、と思う。

その後、義宣は吉野の言葉を信じたらしく、東義久を伴つて上洛した。八重の腹は順調に大きくなり、胸も張つてきている。間もなく、八重の子が生まれる。吉野の考えを知らない朝霧は、純粋に子の誕生を待ち望んでいる。吉野も、いろいろな思いはあるが、八重の子が生まれることは嬉しかつたし、楽しみだつた。

だが、義宣と入れ替わりに義重が間もなく帰国するという知らせが入り、吉野たちの間には緊張が走つた。この状態の八重を見られたら、誤魔化しようがない。もしかしたら、義重が帰国中に子が生まれるかもしね。そうなれば、赤子の声ですべてが知られてしまうだろう。

すっかり失念していたが、子が生まれれば泣き声がするのだ。出産の時もそうだろう。出産の際に城内の人間にはすべてが知られてしまふかもしね。これは、吉野の策の大きな穴だ。

どうしたものか、と思っていたところに、京の義宣から吉野に宛てた書状が届いた。吉野宛てということは、八重に宛てて書かれたものだ。書状の内容を確かめるべく目を通したが、読み進めるうちに吉野の指は震え、書状を落としてしまつた。

八重に何と言えばいいのだろうか。那須の兄が改易されたなど、到底言えるはずがない。しかも、城内に蟄居とは。それに、那須にいる吉野の父と母はどうなるのだろう。

「吉野、どうしたの？」

「あ、姫さま」

「そなた宛てにあの男からの書状？」

吉野に用事があつたのか、吉野のもとに現れた八重は、足許に落ちている書状に目を留めてしまった。八重の手が書状に伸びる。その書状を八重に見られるわけにはいかなかつた。

「姫さま、どうか、ご覧にならないでください」

「どうしたの、そななに慌てて。まさか、そなたわたくしに見られては困るようなやりとりを、あの男としているというの？」

「いえ、違います。違います、姫さま。ですが、それをご覧にな

つてはなりません」

吉野がいくら止めても、八重は書状を手に取り、目をそちらに向けてしまった。八重の顔がどんどん青白くなる。このままで倒れてしまいそうだった。八重が倒れる前に、吉野はしっかりと八重の体を支えた。

「兄上が、改易。佐良土に蟄居。まさか、兄上が、こんなこと」

「姫さま、お気を確かに。姫さま」

八重は資晴の改易に呆然としていたが、急に眉をしかめて座り込んだ。座り込み、腹を抱えて苦しげな声を漏らしている。

実家の改易という衝撃のせいでの子に影響が出てしまったのか。吉野には、苦しむ八重を前にどうすることもできない。医師を呼びに行こうにも、八重を置いて行くわけにはいかない。誰か来てはくれないかと思ったが、八重は原因不明の病ということにして、この局には誰も立ち入らないようにしているのだから、誰かが来るはずがない。

「御台様、吉野殿」

小さな悲鳴とともに、朝霧の声が聞こえた。八重と吉野の姿が見えなかつたため、探しに来てくれたのだろう。助かった。

「朝霧、早くお医師を呼んできてください」

「は、はい」

朝霧が駆けていく足音を聞きながら、吉野は必死に八重を励ました。だが、八重の苦しみは一向に和らがないようで、八重は腹を押さえながら苦悶の表情を浮かべるばかりだった。

那須の女と伊達の女（一一一）

朝霧は急いで医師を呼んで来た。医師の指示に従い、朝霧と一緒に八重が赤子を産めるように準備をした。だが、ただ手を動かしているだけのような感覚で、頭は麻痺してしまったようだつた。

那須家の改易、八重の出産。どれも目の前で起こつてゐる現実だが、信じられなかつた。どうすればいいのか、見当もつかない。朝霧は、吉野の隣でうろたえるばかりだ。

その朝霧の様子を見て、ここは吉野がしつかりしなければ、どうにもならないのだと思った。産みの苦しみに耐える八重の手を握り、吉野は八重を励まし続けた。

八重は何とか、赤子を産むことができた。女の赤子だつた。無事に赤子が産まれたことに、吉野と朝霧は手を取り合つて喜んだが、医師の表情は険しいままだつた。医師の顔と赤子を見て、吉野も異変に気づいた。朝霧も気づいたようだつたが、八重は疲弊していてまだ気づいていない。赤子は、産声を上げていないので。

朝霧の腕に赤子を預け、医師は吉野に耳打ちをした。赤子は、自分で息をすることができないようで、もう間もなく死んでしまうだろう、ということだつた。朝霧に支えられながら、自分の腕に赤子を抱こうとする八重を見ると、何と言えばいいものか、言葉につまる。だが、八重も気づいたようだ。

「吉野、赤子が泣かないのは、どういふこと？」

「姫さま」

「なぜ、泣かないの？なぜ」

八重の涙が、赤子の顔を濡らす。医師は赤子を見て、首を横に振つた。八重の子は、すでに死んでいた。

それから、八重は臥せつてしまつた。義宣の子は産みたくないと言つていたが、那須の血を引く子だと思えば愛しいと言つていたし、何より自分の子を亡くすのは辛いのだろう。八重の妊娠は知られぬ

ようにしてきたため、佐竹家の姫として葬儀を出すこともできない。涙を流す八重を、吉野は慰めていた。

だが、いつまでも悲しんではいられなかつた。悲しみに暮れる八重に、那須家の改易の話をするのは酷かもしれないが、赤子のことも、八重の今後のことも、はやく手を打たなければならぬ。もうすぐ義重が京から帰国する。その前に、すべてを片づけなければならなかつた。

義宣の書状によれば、義宣は那須家改易を理由に八重をすぐさま離縁するつもりはないらしかつた。ひとまず、八重には城内の局から出なによつにさせ、謹慎をせるとのことだつた。望みは薄いが、秀吉の怒りが収まることを、義宣は期待しているのだらう。

「姫さま、お辛いでしそうが、私の話をお聞きください。朝霧もしつかり聞いてくださいね」

「何、吉野？」

「お殿様からの命で姫さまは、この局から出なよつとせできません。

姫さま、よろしいですね？」

「ええ、むしろ願つてもないことだわ。誰にも会なよつない」

「お殿様の命なのですから、必ず守つてくださいね。それが、今の姫さまにとつて最善なのです」

「分かつてゐるわよ、吉野。そなた、様子がおかしいのではなくて？」

「そうですよ、吉野殿。どうかなさつたのですか？」

今後どうすべきか、わずかの間に吉野は寝る間も惜しんで考えた。考えた末に出した答えを告げるべく、八重の手を取つて、吉野は顔を上げた。

「私は、この城を出奔します。」と姫君をお連れして

「吉野、何を言つているの。そなた、正氣か？」

「もちろんです。姫君を、佐良土の兄上様のもとへお連れしたいと思ひます」

もともとは、八重が産んだ子は京の大御台のもとへ連れて行くつ

もりだつた。だが、那須家が改易となり、八重が蟄居謹慎となつた今となつては、那須の姫である八重の産んだ子は、大御台にとつては邪魔な存在でしかないだろう。しかも、産まれた子はすでに死んでいる。連れてこられても、義宣も大御台も迷惑なだけだ。

だが、この城にいては葬儀すら出すことはできない。墓を建てて弔つることもできないだろう。ならば、八重の兄の資晴を頼つて、佐良土へ行くしかない。そこで、密やかに葬儀を行つてもらい、小さな墓を建ててもらうつもりだ。吉野は尼となつて、亡き姫君の菩提を弔つて生きていく。

それに、このままでは八重の妊娠と出産を隠し続けることは不可能だ。

そのことを告げると、八重は首を振つて吉野の手を握り返してきた。目には涙が浮かんでいる。

「吉野にまで去られてしまつたら、わたくしはどうすれば良いの？ 幼いころから、ずっと一緒にいたというのに」

「だからこそ、私でなければならぬのです。那須の方々に受け入れていただくには、朝霧ではいけません」

「吉野殿、しかし、その計画は危険なのではありますか？ 佐良土までの道中、何があるか分かりません。御台様のご実家は、改易なされたのですし」

「ならば、朝霧にはもつと良い考え方があるのでですか？」

朝霧も八重も黙り込んでしまつた。ほかに考えが浮かばないのだろう。このままでは、近々義重に八重が身ごもつていたことが知られてしまう。それを隠していたこともだ。八重が咎められないはずがない。ただでさえ危うい八重の立場を、さらに危うくしたくなかつた。

「しかし、そながいなくなつてしまつたら、あの男が気づかないはずがない。そなたには、表と奥を取り次いでもらつていたのだから

「私のことは、原因不明の病で急死したことにしてください。そう

すれば、姫さまがご病気だつたことを疑う者はいなくなることでしょう。あとのことは、朝靄がいれば大丈夫です」

「それしか、方法はないのか」

「はい、私はこれが最善と思います」

「分かつたわ。吉野に、すべてを任せましょ」

涙をぬぐい、八重はまっすぐ吉野を見つめた。八重のこうした毅然とした眼差しは、久しぶりだつた。吉野がいなくなつた後、八重が佐竹家の中でどうなるのか心配だつたが、もう吉野は出奔すると決めたのだ。それに、いくら吉野が心配したところで、義宣の決定に口をはさめるわけではないのだから、今自分にしかできないことをする。

「長い間、お世話になりました。お暇をちよつだいいたします」

「吉野、わたくしに尽くしてくれて、ありがとうございます。そなたは、わたくしの妹のようだつた」

「もつたいなきお言葉です。私の方こそ、姫さまにお仕えできて、幸せでした」

「吉野殿、行つてしまわれるのですね」

「朝靄、姫さまを頼みます。それでは、失礼いたします。どうか、お元氣で」

手をついて深々と頭を下げ、吉野は八重の子を抱いて、八重の部屋を出た。八重との別れは辛かつたが、不思議と涙は出なかつた。

一旦、自分の部屋に戻り、必要最低限の荷造りをし、夜が更けるのを待つた。夜が更け、城内が静まり返つた頃、吉野は部屋を出て、城を抜け出そうとした。月が出ていなければ、吉野の姿を闇が隠したのだろうが、あいにく今夜は月が明るかつた。だが、月の明るさを気にしていれば、義重が帰国してしまう。

人目を避け、奥を抜け出すことはできた。次は、表を抜けなければならない。物音をたてないように、そつと足を進めた。だが、落ちていた小枝を誤つて踏んだ時、ぱき、と枝の割れる音が響いた。

吉野の体は緊張で固まつた。この音を聞きつけて、誰かここに駆

けつけるだらうか。そんなに大きな音は鳴らなかつたはずだが、不安になつて視線を動かし辺りの様子を探つた。人の気配は感じないような気がする。念のために振り向いた瞬間、吉野は叫びそうになつた。だが、口を手で押さえられたため、声は出なかつた。

吉野の背後には、義重が立つていた。信じられない。義重は、まだ帰国していないはずだ。

「北城様」

「こんな夜更けに、何をしていろ。お前は、確か御台の侍女だつたな」

「はい、吉野と申します」

「吉野、ここで何をしていた。しかも、お前が抱いているのは、赤子ではないか。どういうことか、ここに御台を呼んで説明させるか」

「それは、お止めください」

「なぜだ？ 御台は、そなたの主であろう」

「御台様は、このことを存知ないです。正直に申し上げます。わたくしは、お城を出奔しようとしておりました。この赤子は、わたくしの子です。生まれてすぐに死にました」

この場で思いついた嘘を口にすると、義重は驚いたのか目を見開いた。だが、その表情はすぐに険しいものへと変わつた。それにしても、なぜ義重がここにいるのだろうか。帰国の知らせは、まだ奥に届いていなかつたというのに。予想外の出来事に、吉野は胸がざわめき、動悸がしたが、頭は妙にさめていた。

「ならば、その赤子は不義密通の子だと？」

「その通りです。御台様にお仕えする身でありながら、不義の子を産みました。ですから、わたくしは出奔しようと思つたのです」

「そなたは御台の一番近くにいたはずだ。御台は、そなたの不義に気づかなかつたのか？」

「御台様は臥せつておられました。お殿様はござ上洛の最中。その間、御台様とお殿様の目を盗み、不義を働きました。病で臥せつておいで御台様は、わたくしの身の変化など、お気づきにはなれません」

「相手は誰だ？」

「申せません。どうか、お許しくださいませ」

「まさか、義宣ではなかろうな？義宣は、一時期奥の女とも関係を持つていたようだが」

「それは違います。それだけは、違うと誓えます。わたくしが、御台様の夫であるお殿様と関係を持つはずがありません」

必死に言い募る吉野に、これ以上問いただしても口を開くことはないと思ったのか、義重はため息をついた。

「本来ならば、お前の相手も同罪だが、奥を取り仕切る御台は病で臥せり、当主である義宣は上洛中。隠居のわしが、あまり出しゃばつてもの」

「御台様は、何もご存知ないです。どうか、御台様には『内密』に。わたくしは、いかなる罰でも受けます」

「分かった。相手のことも見逃してやろう。本来、わしはまだ上洛中だ。わしの帰国を知っているのは、城内の表の者のみ。奥の者は知らぬはずだ。お前も、わしがまだ帰国しておらぬと思って、出奔に踏み切ったのだろうが、惜しかつたな。わしは昨日帰国したばかりよ。だが、義宣にはこのことを報告せねばならん。それから、いくらわしが本来はここにいないはずだったとしても、お前まで見逃すことはできん」

「それは、承知しております。ただ、どうかこの子を弔つてくださいませ。お願いいたします」

「子に罪はない。儂く散つた命、墓を建てるくらいのことはしてやう」

「かたじけなく存じます」

何の目的があつて義重が帰国を奥に隠していたのか、それは吉野には分からなかつたが、義重は吉野が知らない間に帰国していたのだ。あと一日早く出奔に踏み切つていれば、吉野はつまく佐良土まで逃げおおせていたかもしない。それも、今となってはどうしようもできないことだ。義重は墓を建てる約束してくれた。それだ

けで、十分ではないか。

おとなしく吉野は膝をつき、義重に首を差し出した。不義を働いた女が出奔しようとしていたのだ。しかも、その女は改易処分を受け、蟄居謹慎を命じられた那須の姫の侍女。討ち首となつてもおかしくはない。

義重の抜いた刀を、冬の月が照らしだす。視界の端で、白刃が光つた。八重と過ごした月日を思い、吉野は静かに涙を流した。

那須の女と伊達の女（二十一）

義重は義宣と入れ替わる形で京から帰国していたが、それを奥には知らせずにいたのは、江戸と大掾に知られないためだつた。今回の義重の帰国の目的は、江戸と大掾を攻めることだ。奥の女に知られたところで、情報が漏れるとは考えにくかったが、義重も義宣もまだ上洛中だと相手に思わせることが今回の要なのだから、義重の帰国を知っている者は少ない方がいい。

三成から正式に江戸と大掾の征伐許可をもらつたことを義宣から知られ、表の留守役たちにも告げると、皆は久々の戦に興奮しているようだつた。今、城に残つているのは義重の家臣である老臣たちばかりだ。久々の戦に興奮する気持ちも分かる。

帰国してすぐに作戦を話し合い、まずは江戸から先に攻めることにした。江戸には義重の娘のなすがいる。先に大掾を攻めた場合、残された江戸がなすを殺してしまつかもしれない。なすは、まだ十歳の幼子だ。父や兄の都合で江戸に送つたが、命を散らすにはあまりにも幼すぎる。できることならば、佐竹に戻したかつた。母親である芳もそれを望むだろうし、義宣もなすの命は助けたいと思つてゐるはずだ。

義重がなすを救出したいという旨を伝えると、家臣たちも賛同した。佐竹の一人娘だ。死なせたくないという思いが一番だが、まだ十歳なのだからこれからまた違う家に嫁がせることもできるだらう、とも考えていた。家臣たちも、それは分かっているだらう。

作戦が決まつた頃には、すでに夜は更けていた。家臣たちを自分の屋敷に帰した後、義重は何となく散歩に出た。久々の城を歩いて見てみたいと思つたのかもしれない。冬の夜風は冷たかつたが、このくらいの冷たさが義重には心地よかつた。

散歩の途中、女を見つけたのは偶然だつた。枝の折れる音と人の気配を感じ、その場に行つてみると、義宣の御台付きの侍女が、赤

子を抱えていた。吉野と名乗った侍女は、その子どもは自分が産んだ不義の子だと言つた。御台は病に臥せつていて何も知らないのだから、内密にしてほしい、と言われたが、本当に御台が何も知らないということはないだろ？

吉野は義重が問い合わせたとしても、決して相手の男が誰かを明かさなかつた。義宣ではないと吉野は言つたが、ここまで必死に隠そうとし、しかも御台には内密にしてほしい、と言つのだから、義重はこの赤子は義宣の子なのだろう、と思っていた。奥に入れる男は、義重と義宣を除けば、義久くらいだ。その義久も、芳が用事を言いつける時に限り、特別に奥に入るのだから、ほかの男と吉野がいつどのようにして不義を働いたのか疑問だつた。だが、義宣の子だとしても、もう赤子は死んでいる。今更、どうしようもないことだ。だから、相手の男の罪を問うことはやめたのだ。

吉野と赤子のことは、本人の希望通り御台には内密にした。吉野は御台付きの侍女なのだから、御台との間に本人同士で話がついているのだろうし、出奔しようとした侍女のことをわざわざ教える義務は義重ではない。義宣が帰国をした際に、義宣に報告すればいいだろう。その時、御台にも告げるかどうかは、義宣と御台の問題だ。江戸、大掾攻めが近づくにつれ、義重は吉野のことも御台のことも忘れて行つた。密かに兵を集め、義重は江戸の居城である水戸城を急襲した。義重の思惑通り、江戸の連中は義重も義宣も親子そろつて上洛中とばかり思つていたらしく、義重の急襲に大した反撃もできずに水戸城は陥落した。城が落ちる前に、なすだけは家臣が助け出し、義重のもとへ連れて来ている。

なすの夫であつた宣通は、父親の重通とともに城を捨て、結城家を頼つて逃げ出したようだつた。逃げ出した者の命まで奪おうとは義重は思つていない。江戸が滅亡し、水戸城が手に入れば問題はないのだ。今の太田城より、江戸の居城であつた水戸城の方が交通も商業も利便性が高い。

なすは、突然のことに事態を理解できていないのか、義重にすが

つて泣くばかりだった。娘のそのような姿を見るのは辛いが、義重にはどうすることもできない。

江戸を攻めた三日後、今度は府中城の大掾を攻めた。大掾は水戸城陥落の知らせを受けていたためか、江戸よりは抵抗らしい抵抗を見せたが、その抵抗も空しく一日のうちに府中城は落ち、大掾清幹は自害して果てた。

これで、佐竹家の常陸統一はほぼなったが、まだ江戸や大掾の配下だつた者が多い南方では、佐竹に従おうとしない者が多い。それに、江戸と大掾の滅亡を受け、佐竹に対して反発する者も出てきた。義宣が帰国次第、南方の諸豪族も始末しなければならないだろう。

上洛中の義宣から、帰国は年明けの閏一月になると知らせが来た。常陸一国は佐竹家の所領であるという既成事実はできているため、南方も好きなように攻略して構わないらしい。義宣の帰国まで、義重は南方攻略の方法を考えていた。その合間に、なすの顔を見に何度も足を運んだのだが、なすは義重と顔を合わせても、口をきこうとはしなかった。こんな時に、母親がいればまだよかつたのかもしれないが、あいにく芳は上洛中だ。男ばかりの城内にいても、なすの気が晴れることはないだろう、と下河辺の館にいる芳の姉である阿南とその養女の岩瀬の姫に、たまに相手をしてもらうことにした。岩瀬の姫はなすと年があまり変わらないと聞いていたので、話も合うだろうと思ったのだ。だが、なすの機嫌は一向によくならなかつた。

年の瀬が迫つた頃、義宣は義久とともに秀吉から呼び出された。

そして、義宣は従四位下・侍従に、義久は従五位下・中務大輔に任せられ、一人とも羽柴姓を賜つた。義久はそれに加えて秀吉から桐の紋まで賜つている。義宣は、義久にだけ桐の紋の下賜があつたことが気に入らなかつたが、今はそれよりも秀吉が那須改易と義宣の妻が那須氏であることをどう思つているかの方が気がかりだつた。

義宣と義久が任官の礼を述べ、金を差し出すと、秀吉は嬉しそうに笑っていた。どうやら機嫌がよさそうに見える。にこにこと笑つたまま、秀吉は口を開いた。

「ところで、常陸侍従の妻は那須の女だつたな？」

「は、左様でござります」

「此度の上洛には連れて来なかつたようじやのう」

「妻は病で臥せつておりましたので。しかし、今は城内の局にて蟄居、謹慎させております」

「何と、まだ離縁してなかつたのか。病だらうが何だらうが、那須の女などさつやと離縁してしまえばよかるうに。代わりの女などいくらでおる。常陸侍従になれば、もつと良い女を儂が手配してやつてもよいのだぞ。関東の田舎女ではなく、京の美人など良いのではないか？」

秀吉のこの言葉で、義宣はいづれ秀吉の怒りも解けるのではない、といつ期待は幻想にすぎないと知らされた。義宣は、黙つて秀吉に頭を下げた。それを義宣が妻を離縁することを了解したものだと思つたらしく、秀吉は大きく頷いていた。

だが、秀吉の考えを知つても、義宣は八重を離縁しようとは思わなかつた。

秀吉の謁見が終わると、三成が義宣のもとへやつて來た。三成の話によると、那須資晴は徳川家康を通じて、嫡子の藤王丸を当主とし、大名として返り咲こうと画策しているらしかつた。なぜ、妹婿の義宣ではなく家康を頼つているのだ。それが、義宣には酷く不快だつた。

義宣が帰国すると、父から江戸と大掾攻めの詳細を聞かされた。隠居の父に頼つてばかりで情けない思いはあつたが、どちらも首尾よく運んだようで安堵した。なすが父と口をきかないというのは、義宣も気がかりだつたが、それ以上に父から見せられたものに義宣は驚いた。父が義宣に差し出したのは、女のものに見える長い髪だった。

「父上、これは一体？」

「御台付きの侍女の吉野という女を、お前も知つていいだろ？」

「吉野ならば、私も存じておりますが」

「その女のものだ。お前の留守と御台が病で臥せつてることをいいことに、吉野は不義を働き、子をなした。そして、その子を連れて出奔しようとしていたのだ。もつとも、その子は生まれてすぐには死んだそうなのだが。それをわしが見つけ、秘密裏に始末した。御台の実家が改易された上に、侍女の不義騒動が表沙汰になつてはまずかろううと思つてな」

「それは、大変申し訳ありません。父上にはご迷惑ばかりおかけしてしまつて」

義宣は、ただ父に頭を下げるしかなかつた。吉野が不義を働き出奔しようとしていたなど、信じがたい話だ。義宣は吉野のことを詳しく知つてゐるわけではないが、義宣が見る限りの吉野は、眞面目で八重のことによく思つてゐる良い侍女だつたはずだ。その吉野が、この時期に八重を裏切り見捨てるようなことをするだろうか。

父に迷惑をかけたことを詫び、義宣は奥へ向かつた。八重に事態の真相を問わなければならぬし、那須家改易のことも話し合わなければならぬ。八重と顔を合わせるのは、一年ぶりに近い。小田原参陣や会津征伐、上洛が重なり、八重の顔を見ていなかつた。八重の方も、義宣には会おうとしなかつた。だが、いい加減話し合わなければならぬ時がやつて來たのだ。

八重のもとへ向かおうとすると、なすが立つてゐた。義宣を出迎えてくれてゐるのだろうか。それにしては、なすの表情は暗い。

「兄上、お久しごります」

「なす、心配していたぞ。父上と口をきかないそではないか。父上も心配している」

「だつて、父上は宣通さまとなすを引き裂いたのです。確かに、江戸家の方々はなすに冷たかつたけれど、宣通さまはなすを大事にしてくださつていたのに」

大粒の涙をこぼすなすに、義宣は何と言葉をかけていいのか分からず、膝をついて視線を合わせた。だが、今はなすに構っている場合ではない。はやく八重と話をしなければならないのだ。

「兄上も父上と同じです。兄上は、義姉上のところへ行かれるのでしょうか？ 義姉上の『実家が改易されたから、義姉上はもういらっしゃる』とお考えなのでしょう？」

「そんなことはない」

「嘘。兄上も父上も、自分のことしか考えていないの。なすや盛重兄上や能化丸のことなんて、道具としか思っていないのです。義姉上のことも同じ」

なすの涙ながらの訴えが胸に刺さる。義宣は、弟や妹たちを道具だとは思っていない。だが、幼くして他家に養子に出され、嫁がされてきた弟、妹のことを真剣に思つて来たかと言わると、そうではないのかもしれない。八重のことも、心配しているのは八重ではなく、自分の身と家のことだけなのか。確かに、一番心配なのは家の行く末だ。それは、八重を道具としか思っていないということなのだらうか。

「兄上はするい」

そう叫んで、なすは義宣の前から走り去つた。幼いなすの言つ葉は、子どもだからこそ偽りがない。だから、義宣の胸に深く突き刺さるのだ。

義宣が八重を離縁したくないのはなぜだ。秀吉や三成の言つように、はやく離縁した方が良いに決まつている。八重は義宣を憎んでいる。義宣も、八重に拒まれたあの時から、八重が憎いと思つているはずだ。実家が大事で、義宣のことを一度も見よつとしなかつた八重が、憎いと思ったのではなかつたか。

なすの言つとおり、義宣が八重を道具としか思っていないのならば、ここまで悩まずとも、とっくに離縁しているはずだ。今の八重は、義宣にとつて脅威ではあるが、利用価値などまったくない。

義宣となすのやりとりが聞こえたのか、八重が自室から顔を出し

た。義宣を見た瞬間、八重の目には蔑みと嫌悪が浮かんだように見えた。その表情を見ると、資晴が家康を頼りにしているという話も思い出し、八重のことが酷く憎らしく思えた。だが、離縁しようといふ気持ちにはならないのだった。

那須の女と伊達の女（二十一）

義宣の姿を認めると、八重はすぐに自室へと顔を引っ込んだ。だが、義宣は八重が障子を閉める前に、閉めかけた障子を開け放つた。八重は義宣を睨みつけるように見上げている。なすと話している時は、自分が八重を道具としか思っていないのか、なぜ離縁したくないと思うのか、と考えていたが、八重の顔を見ると、そのような考えは頭の中から消えてしまった。

「久しぶりだな、八重。病は癒えたようで何よりだ」

「心にもないことぬけぬけと。よくも、わたくしの前に姿を見せられたものだこと」

「夫が妻を訪ねて何がおかしい？」

「夫？妻ですって？笑わせる」

「ところで、いつもお前に付いている吉野の姿が見えないが、どうしたんだ？」

吉野という名を口にすると、八重の表情にわずかに動搖の色が見えた。八重は父も知らないことを知っているに違いない。吉野の死には、何か隠しておかなければならぬ秘密があるはずだ。

「吉野は、わたくしの病がうつって死にました。氣の毒に、わたくしにずっと頼ってくれていたというのに」

八重の言つていることは嘘だ。吉野は父に殺された。これで、八重と吉野は共謀していたことが分かる。おそらく、八重も吉野の赤子のことは知っていたはずだ。今となつては、本当に八重が病で臥せつていたのかどうかもあやしい。吉野の不義が知られぬように、口占を合わせていたのかもしれない。

「八重、お前は本当に病で臥せつっていたのか？」

「いきなり、何を言うかと思えば」

「お前が臥せつしている姿を誰も見ていない。吉野ともう一人の朝霧とかいう者しか見ていないはずだ。本当に病だつたという証はある

か？」

「吉野は、わたくしの看病をしていて、わたくしの病がうつって死んだのです。それが証ではありませんか」

「吉野は、出奔しようとしていたところを父に見つかり、父の手で殺されている」

父から渡された吉野の切られた髪を八重に突き付けると、八重は小さく悲鳴を上げて吉野の遺髪を義宣の手から奪い取った。八重の目にようつすらと涙が浮かんでいる。

「事実はどうなんだ？お前は、なぜ俺とともに上洛しなかった？吉野の子の父親は？俺が家のために駆けずりまわっている間、お前たちは奥で何をしていたというんだ」

吉野の遺髪を握り締めたまま、八重は俯き小さく笑った。何がおかしいというのだろうか。義宣が不在の間、この城の中で何が起つていたのだ。小田原参陣に会津征伐、上洛と上方の情勢についていくのが精一杯だった義宣は、奥で何が起こっていたのかまったく分からぬ。しかも、今は八重の実家が改易され、義宣の立場は危うくなりかけている。その那須の女である八重は、何がおかしくて笑っているのだ。八重の態度に、義宣は苛立つた。

「わたくしが、なぜ上洛をしなかつたのか？そんなことも分かりませんの？あなたののような男ともに京になど、行きとうなかつたからに決まつていてはありますんか。しかも、わたくしの可愛い吉野が身重とあらば、吉野を置いて行くことなどできるはずもありませんし。あなたが留守の間、わたくしたちは吉野の子を無事に産ませようとしていた。それだけのことだわ」

八重が上洛しなかつたのは、義宣とともにに行くのが嫌だつたからだと言うのか。笑みを浮かべる八重が憎く思えた。

「お前は、奥を取り締まる御台という立場にありながら、侍女の不義密通を見逃すどころか、それを祝つてやるうつとしていたのか？」
「何が悪いの？たとえ、どんな事情でできた子であろうと、その子に罪はない。子には、何の罪もないというのに」

吉野の子は、父の話によれば生まれてすぐに死んだはずだ。そのことを思い出したのか、八重はさめざめと涙を流している。義宣のことと一緒にかけたことなどないというのに、死んでしまった吉野とその子のためには、八重は目を赤く腫らして涙を流す。そのことも、義宣の苛立ちを増させた。

八重には、これ以上吉野の出奔のことを聞いても口を割りそうにはない。それに、吉野の証言と父の見た吉野の姿、八重の言葉から考えるに、吉野の出奔は間違いなく不義の子をなした故のことだろう。八重が上洛しなかったのは、義宣についてくるのが嫌だったことと、吉野が心配だったことが理由だとも分かつた。

那須家改易の上に、侍女の不義密通、更には八重が病ではなくただの我が今まで上洛しなかったことが明るみに出れば、ただでさえ不安定になりつつある義宣の立場は一層悪くなる。ここは、父と同様に目を瞑るしかないだろう。

「分かつた。吉野の不義密通は不問にしてよい。八重も、次回から上洛すれば問題はないはずだ」

「上洛？」

「ああ。今は、殿下のお怒りが解けるまでお前を蟄居、謹慎させるが、いざれ許されたら、上洛してもらつからな」

「わたくしを離縁なさらないのでですか？」

「ああ」

「信じられないわ。わたくしを上洛させて、関白の慰み者として差し出すおつもり？ 改易された家の女にはそれが似合いでどうも？ わたくしを差し出して、少しでも関白の機嫌を取るおつもりなのかしら？」

「誰も、そんなことは言つていない」

八重の物言いに義宣は思わず怒鳴ってしまった。義宣が八重を離縁しないのは、そのように下衆な考えがあるからではない。八重を秀吉に差し出すなど、考えたこともなかった。だが、八重を離縁しないとしたら、八重に残された利用価値は、その程度のものだ。

那須家との同盟の証としての意味は、八重にはすでにはない。那須家は義宣ではなく家康を頼りに復興の道を探っている。もづ、那須家と佐竹家の間で同盟が交わされることはないだろう。人質としての意味もない。資晴が義宣ではなく家康を選んだ時点で、八重は資晴に見捨てられたようなものだ。

離縁しない理由など、どこにもない。秀吉には離縁するように言われているし、資晴は義宣の顔に泥でも塗るように家康に媚びている。

義宣とともに上洛したくなかった、と言い放った八重が憎らしい。だが、離縁はしたくない。なすの言うとおり、八重を道具としか見ておらず、まだ何か利用価値があるとでも思っているのか。そんなことはないはずだ。ならば、なぜ八重を離縁しない。八重は、こんなにも憎しみをこめて義宣を睨みつけていると言うのに。

だが、約一年ぶりに見た八重は、たとえ憎しみに燃える顔であっても、秀吉のすすめる京女の誰よりも、美しかった。

「とにかく、八重は太田城の奥の局で謹慎だ。奥の局から出ることは、決して許さない」

「分かりました。あなたがそのつもりならば、わたくしは自分の力で那須へ帰るわ。わたくしは、那須の女ですもの」

最後にもう一度謹慎のことを告げ、義宣は奥を後にした。背後から八重の叫びが聞こえる。一年前ならば、吉野が後を追つて来て、何とか義宣と八重の仲を取り持とうとしていたものだつた。まだ一年前のことのはずなのに、ひどく遠い昔のように思える。

八重のもとを去つた義宣は、まっすぐ父の部屋へ向かつた。父は、義宣の留守中に残された南方の豪族たちを一網打尽にする計略を練っていたのだ。あとは、義宣が父と相談を重ね、実行に移せばいい。とりあえず、あの間は八重には謹慎をさせておけばいいだろう。八重をどうするかは、次の上洛までに決めればいい。今は、まず南方の豪族を片づけることが先だ。

義宣は、父との相談の結果、南方の豪族たちを太田城に招くこと

にした。ちょうど、城内の梅が見ごろになつてゐる。梅見の宴を開き、その場で佐竹への追従を誓わせる。書状には、梅見の宴を楽しむみたい、ということだけを書いたが、佐竹への追従を誓わせられる

といふことくらい、豪族たちは理解しただらう。

一月九日、南方の諸豪族を招いた盛大な梅見の宴が太田城で開かれた。豪族たちの表情は暗い。江戸と大掾を討つた佐竹を警戒しているのがよく分かる。居並ぶ豪族たちの前に、義宣は父とともに現れた。その後ろには、義久、義憲、義種ら一門衆が続いている。「皆よく集まつてくれた。私は、常陸一国は佐竹家のものと関白殿下から朱印状をいただいている。それにも関わらず、江戸や大掾は我らの命を聞かず、むしろ逆らつた。それ故に、今日のような結果となつたのだ。皆には、よく分別をしてもらいたい」

義宣の言葉に、豪族たちは渋々頭を下げた。だが、中には頭を下げようとしない者たちもいた。それを義宣は見逃さなかつた。後ろに控える義久に目配せをすると、義久は黙つて頷き、姿を消した。「皆の決意、佐竹は嬉しく思う。では、今日は我が城内の梅を存分に楽しんでもらおう。ちょうど、紅梅が見ごろになつてゐるからな」義宣が言い終わると同時に、庭に張つていた幕が一斉に上がつた。幕の向こう側には、刀を手にし、襷がけをした家臣たちがそろつてゐる。豪族たちは、突然のことに対する反応が遅れてゐるようだつた。

「小高治部少輔、相賀詮秀、手賀高幹、武田信房、貴様らはお屋形様への追従を誓わなかつた。よつて、この場で死をもつて従つてもらおう」

家臣たちとともに幕の陰に移動していた義久が、先ほど頭を下げなかつた四人を指差し、後ろに控えている家臣に合図を送つた。家臣たちが四人に斬りかかる。だが、さすがに事態を理解した豪族たちが大人しく斬られるはずがなかつた。小高らは家臣とともに佐竹家に刃向つたが、多勢に無勢では、抵抗の時間は短かつた。四人は家臣ともども斬られ、その血は城を赤く染めた。

小高らに刃が向かうと、その場にいた者たちは我先にと逃げ出そ

うとした。それを、義憲と義種が指揮を取り追いかけて行った。ある者は諦めておとなしく縛につき、ある者は自害して果てた。また、ある者は城外まで逃げおおせたものの、結局捕まり殺害された。おとなしく縛についた者たちは、命だけは助かるのではないか、と期待に満ちた眼差しで義宣を見上げていたが、義宣は義久にその者たちも殺させた。

梅の咲く庭は血で赤く染まり、白梅もまるで紅梅のようだつた。城の壁も豪族たちの血で赤く染められている。城内には、血のにおいが充満していた。もしかしたら、八重も奥でこの騒動を聞きつけ、血のにおいを嗅いでいるのかもしない。

「お屋形様、此度の梅見の宴に招いた豪族は、すべて始末いたしました」

「そうか」

「これで、常陸一国は名実ともに我らが佐竹家のものとなりました」「ああ。俺の威勢も常陸中に広まるというものだ。これで、佐竹に逆らおうとする者は、この常陸から消え失せただろう」

義久の報告に義宣が頷くと、父も感慨深げに頷いていた。父や祖父の念願だった常陸一国の統一が、義宣の代でなつたのだ。秀吉といつ権力者の後ろ盾があつてこそその成果だが、常陸が佐竹家のものになつたことに変わりはない。梅見の宴に豪族を呼び、その場で暗殺するという計略は、父の考えに義宣が考えを加えてできたものだつた。父は、見せしめに何人か殺せばいいと言つたが、義宣は集まつた者すべてを殺すこととした。それによって、佐竹家の威勢を示したかつたし、自分自身の権威も示したかつた。

義宣は、来月居城を太田城から水戸城へ移すこととした。血濡れた城は佐竹家の新体制にはふさわしくなかつたし、何より水戸城の方が、利便性がいい。城替えとともに、義宣は口うるさい老臣たちからの脱却を目指していた。それがうまくいくかどうかは、まだ分からぬ。父はわずかな老臣たちとともに太田城に残ることになった。

太田城の奥の局で謹慎させていた八重は、そのまま太田城で謹慎させることにした。那須家の問題が何となるまで、義宣は八重を太田城で謹慎させ、水戸城に呼ぶつもりはなかつた。

那須の女と伊達の女（一十四）

父に太田城をまかせ、義宣は家臣を引き連れて水戸城へ移った。八重は予定通り太田城に蟄居させたままにしている。しばらくは水戸城の改築や城下の整備に専念したいが、三成からは近々秀吉が九戸征伐を命じるだろうと知らせがあった。またすぐに国許を離れなければならぬかもしれない。

三成の書状は、九戸征伐のことだけではなく那須家のことにも触っていた。資晴が家康を通じて復興を目指していることは知つていたが、秀吉が資晴の息子である藤王丸に知行地を与えることを検討し始めたらしいのだ。秀吉の怒りは収まったのかと思ったが、それと八重のことは別の問題らしく、早々に那須の女は離縁した方が良いと三成にまた忠告されてしまった。

その書状を太田城から水戸城へ来ていた父に見せると、父は渋い顔で義宣に書状を返した。

「御台は、太田城ではなくどこかの寺にでも幽閉した方がよいのではないか？」

「寺に幽閉ですか？」

「そうだ。いくら蟄居、謹慎させているとはいって、御台はまだ城内に住んでる。それよりは、寺に幽閉した方が殿下の心証は良くなるのはないかのう。お前が、あくまでも離縁をしたくない、と言いうならばな」

父の言葉には少しどげがあるようだ。父も、八重のことは離縁した方が良いと思っているのだろう。それは当然だ。義宣の方がおそらくおかしいのだ。だが、現在の当主は義宣だからか、父は離縁しろとは言ってこなかつた。

「父上は、母上が政宗を助けたと知つた時、母上を離縁なさりませんでしたね」

義宣は嫌みを言いたい訳ではなかつた。ただ、母が義久に命じて

政宗を助けた時、父はなぜ母を離縁しなかつたのだろう、と思い、この問いをしてしまつた。その理由を聞けば、義宣が八重を離縁したくないとと思う気持ちにも説明がつくかもしれない。

「あれはお前たちの母親であったことだし、此度のよつて実家が改易されたわけでもないからな」

「では、もし小田原で伊達家が改易されていたら、母上を離縁なさりましたか？」

「せんだらう。わしひとりが伊達の女を離縁したとこりで、伊達にゆかりのある女はほかにいくらでもある。それに、お前の母は政宗の叔母でしかない。だが、御台は違う。改易された当主の妹だ」確かに、父の言つとおり父と義宣では置かれた状況が違う。そのためか、義宣が納得するような答えは得られなかつた。

「父上は、一度も政宗を助けた母上を、憎いと思つたことはないですか？なぜ、側室を置かれないのでですか？」

この問いに、父は面食らつたようだつた。息子を前に、その母親のことなどをどう言えばいいものか、迷つてゐるらしい。眉間にほくつきひとつ皺が刻まれてゐる。だが、この問いの答えが聞ければ、義宣は今度こそ自分の感情にも説明がつくような気がした。

「憎いと思つたことがないと言えば嘘になるかもしれん。だが、憎いといふ感情だけでは、お前たちは産まれておらんのだぞ。それに、あれはああ見えて、嫉妬深い。表には出さぬが、わしが女に手をつけたと知ると、内心は烈火のごとく怒るのだ。そういうところが、まあ、可愛いと思えなくもない。何より、長年連れ添つておれば、情もつづるものよ」

「そうですか」

「わしも、昔のお前のように女中に手をつけた」とへりいある。だが、あれを怒らせると恐ろしくてな。孕ませるような失敗だけはせぬように、あれには知られぬように手をつけておるのだ」

父の話を総合すれば、父は母を憎らしこと思つたことはあるが、結局のところ母を愛しく思つてゐるようだ。それが、夫婦の絆、夫

婦の情というもののなのだろうか。義宣と八重の間に、そのようなものが存在しているとは思えない。八重とは、連れ添つて六年だ。六年しか経っていないのか、と思うが、もう六年も過ぎたのか、とも思う。その間、八重に嫌われはしたが、嫉妬などされたことはなかった。

「そうだ。お前は、あれに似ているかもしれん

「母上に？」

頷く父を見て、義宣はそうだろうか、と内心首を傾げた。父の話を聞き、母に似ていると言わても、義宣は自分の気持ちに説明をつけることなどできなかつた。説明はつかないが、まだ八重を離縁したくないと思つてゐる。

会話を打ち切り、父は太田城へと戻つて行つた。父を送つた後、義宣は太田城にいる八重の侍女に宛てて書状を書いた。吉野が死んだ今、八重の侍女は朝霧といった女だつたはずだ。

八重を離縁したくない。だが、秀吉の心証を損ねたくない。父に言われた通り、義宣は八重を寺に幽閉することにした。いずれ、秀吉の許しを得たら、寺へ八重を迎えに行く。それで、この場を何とかしのぐしかなかつた。

義宣に蟄居、謹慎を命じられてから、八重は一步も奥の局から外には出なかつた。そもそも、義宣に命じられずとも、奥の局から出るつもりなどまったくない。だが、奥にいても表の騒動は伝わつてくる。先月の梅見の宴は、恐ろしい惨劇だつたのだろう。話を聞いただけで、血の臭いが奥まで漂つてきそうだ。

激しい言い争いをしてから、八重は一度も義宣に会つていながら、義宣が太田城で反抗的な諸豪族を暗殺したという話は聞いている。陰湿で凄惨で、あの男のやりそなことだと思い、嫌悪したものだつた。

血塗られた城に八重を留めておくのも、義宣の嫌がらせなのかも

しない。八重を離縁しないと言い、血塗られた城に閉じ込め、義宣は八重を追いつめようとしているに違いない。離縁という手段ではなく、八重の自害という形で、那須家改易に決着をつけたいのだろうか。

だが、正室が自害など、名門である佐竹家には不似合いなのではないか。義宣が、正室の自害という外聞の悪いことを、好んで八重にさせようとしているとは思えない。あの男は、佐竹家という名門が何よりも大事なのだ。そのために、八重を犠牲にすることはあっても、自分が泥をかぶることはないと違いない。

吉野が殺され、多くの血が流された城の奥で、八重は日がな一日何をするでもなく過ごしていた。朝霧が話し相手になってくれるほかは、誰とも会わず、口をきかず過ごしている。少し、気が滅入つてきた。

佐良土で蟄居させられているという兄は、どう過ごしているのだろうか。懐かしい那須の地はどうなってしまったのだろうか。

朝霧は表に呼ばれて、局にはいない。暇を持て余した八重は、嫁いでくる時に那須から持つてきたものを探すこととした。少しでも那須にいた頃の思い出に浸れるものが見たかった。だが、物の管理はすべて吉野に任せていたため、八重ひとりではどこに何があるのか分からぬ。手探りで探してみると、白い打掛を見つけた。これは、嫁入りの際に兄が八重のために仕立てさせた婚礼衣装の打掛だ。懐かしい。兄は、この衣装を着た八重を美しいと言つてくれたものだった。同時に懐剣を渡して、八重が佐竹に嫁ぐ以上は、佐竹を攻めないと約束してくれた。兄からもらつた懐剣を、今も八重は大事にしている。その時は、まだ八重は那須にいて、吉野も隣で笑つていて、兄もすぐそばにいた。あの頃のことを思うと、涙があふれる。

だが、今となつてはこの白い花嫁衣装も、八重にとつては死に臨むための白装束にしか見えなかつた。思えば、佐竹家に嫁いだ時から、八重は死んだようなものだったのだ。八重を佐竹の人間として

認めようとしている姑や家臣。いきなり女中たちに手をつけだし、八重を手籠にした忌むべき義宣。吉野を殺した舅。義宣に罪があつたとしても、その子には何の罪もないというのに、義宣との間にできた子は死んでしまった。多くの人間の血で赤く染まつた太田城。なぜ、八重はこんなところにいるのだろうか。吉野は命をかけて八重を守つてくれたが、今の八重に生きる意味はあるのだろうか。

兄は北条とともに豊臣秀吉や佐竹など滅ぼし、八重を迎えてくれるのだとと思っていた。その兄は、豊臣秀吉のせいで鳥山城を追われ、佐良土に蟄居させられている。兄が八重を迎えて来るということだが、今となつては夢幻に過ぎないと、いつそ八重を佐良土に送つてくれればいいのに。

打掛けを手でなぞり、物思いにふけつていると、廊下を駆ける足音が聞こえてきた。この局にやつて来る人間は朝霧だけだ。朝霧がこちらへ向かつているのだろうが、こんなに慌ててどうしたのだろうか。

「御台様、お屋形様よりの書状が届きました」

「そう。何と書いてあつたの？」

「それが、御台様に耕山寺に移られるようのことです」

「寺へ移れですって？ 今でさえ、わたくしは蟄居させられているといつのに、あの男は、今度はわたくしを寺に幽閉しようとしているのか？」

朝霧は否定も肯定もしなかつたが、細かく震える手を見れば、八重の幽閉が事実であると分かる。義宣は何を考えているのだろうか。寺に幽閉など、このような屈辱に八重はもう耐えられなかつた。血なまぐさい太田城も、どのようなものか知らぬ寺も、もう嫌だ。

「御台様、いかがなされますか？ お拒みになれば、大変なことに」「そうね。そなたの身にも危険が及ぶかもしれない。それは、わたくしとしても避けたいところ」

朝霧が怯えないように、にこりとほほ笑んでみせると、朝霧は明らかに安心していた。吉野が死に、梅見の宴での暗殺があり、朝霧

も心穏やかではなかつたのだろう。

「次郎殿に返書をしたためましょ。朝霧、筆と紙の用意をなさい」

「はい、ただいま」

来た時と同じように、朝霧は廊下を駆けて行つた。何も急ぐ必要

はない。返書など、書くつもりはないのだから。

兄からもらつた懐剣を手に取り、鞘を落つた。懐剣の刃は鋭く光

り、八重の顔を冷たく映し出していた。

那須の女と伊達の女（一十五）

兄からも「た懷劍に映る自分の顔をじばし見て、八重は胸に懐剣の切つ先をあてた。

もはや、生きていたところで何の意味もない。那須に帰ることは許されず、帰る家も失った。兄のもとへ行くことはできない。妹のように思っていた吉野も失った。この身は辱められ、その結果生まれた我が子も死んだ。血なまぐさい城で蟄居、謹慎すら耐えがたいというのに、この上寺に幽閉という屈辱が与えられようとしている。それに、最近では城に須賀川からやつてきたという幼い姫が出入りしている。その姫は、姑の姉の娘らしいが、城に出入りを許されている。その姫は、姑の姉の娘らしいが、城に出入りを許されているということは、もしかしたら義宣は、あの姫を後妻に迎えるつもりなのかもしれない。だから、八重を幽閉しようと言うのだ。離縁はしないと言いながら、後妻を迎える用意をしているに違いない。

ならば、八重に残された道はひとつしかない。多くの血で染まつた太田城を、八重の血でも染め上げるのだ。佐竹家を名門だと誇りに思っている義宣にとっては、妻の自害は名門に傷をつける醜聞に違いない。妻の実家が改易されたことも、耐えがたいに違いないのだから、八重が自害した時、義宣がどのような顔をするのか、想像すると滑稽で笑いたくなつてくる。

義宣は、八重を妻だと言つたが、八重は最初から義宣を夫だとは思つていなかつた。八重の心は常に遠く離れた那須にあつた。佐竹家に嫁いだのも、義宣におとなしく抱かれていたのも、未だにこの城に留まっているのも、すべては兄のためだ。兄に頼まれたから、兄のために八重は義宣の妻になつてやつたのだ。そのことを、義宣は分かつていない。

八重は佐竹義宣の妻ではない。那須資晴の妹だ。

那須の女の覚悟と意地を、義宣に思い知らせてやる。八重は自ら

の力で、那須に帰るのだ。

懐剣を握る手に力をこめ、一気に胸に突き刺した。血が飛び散り、白い婚礼衣装を赤く染めるのを、八重は見た。あれは、婚礼衣装ではない。血染めの死装束だ。

「御台様」

朝霧の絶叫が響いた。だが、その声は遠く聞こえる。走り寄つて来た朝霧は、涙を流してうろたえているようだつた。

「御台様、何ということ。わ、わたし、人を呼んで参ります」

「朝霧」

「は、はい」

「あれを、次郎殿に」

「御台様のご婚礼の時の、お屋形様に、お渡しすればよろしいのですね？」

「あれは、わたくしの死装束よ」

「必ず、お屋形様にお渡しいたします、御台様」

血に染まつた婚礼衣装を指差すと、朝霧は八重のその手をとつて、何度も頷いた。八重に近寄り、手を取つたせいで朝霧の小袖も八重の血で染まつっていた。

「朝霧、懐剣を抜いて、止めを」

「そんな、わたしにはできませぬ。御台様、お医師を呼べば、きっと

」

朝霧が涙を流して首を振る間にも、八重の体からは血が流れ、命は徐々に削られていく。朝霧には、八重に止めを刺すことはできなそうだ。苦しみに耐えながら、八重は自ら懐剣を再び握り、胸から抜こうとした。

「佐竹の者ども、那須の女の覚悟を、思い知るがいい。わたくしが、御家の行く末を見守つてくれる」

佐竹の者に与えられた辱めを、八重は決して忘れない。八重の血とともに、八重の思いはこの城に染みつき、佐竹の者を苦しめるだろう。だが、八重の魂は佐竹になど縛られない。遠く懐かしい那須

へと帰るのだ。

息は苦しかつたが、それだけ言い放ち、八重は胸に刺さっている懐剣を引き抜いた。血が勢いを増して流れ出す。朝霧の悲鳴が聞こえたような気がした。

遠のく意識の中、八重は寿龜山と鳥山城、そこに流れる那珂川を見た。幼いころに兄と遊んだ、懐かしい那須の景色だつた。

八重が自害したという知らせを、義宣は信じられなかつた。だが、太田城にいる父からの知らせなのだ。父が、義宣に八重の死を偽るはずがない。

心臓を驚撃みにされたようだ。心臓が早鐘を打つてゐる。八重の死を聞いた時、一瞬頭の中が真っ白になつた。何も考えられず、何も聞こえなかつた。時が止まつたようだつた。

落ち着いてくると、すぐにでも太田城へ行つて真相を確かめたい気持ちが浮かんできたが、それと同じくらいに、なぜこののような時に自害などするのか、という憤りもあつた。今の義宣は危うい立場にいるのだ。妻が自害したと秀吉に報告したら、何と思われるか分かつたものではない。だが、それ以上に信じられないという思いが強かつた。

水戸城に父がやつて來た。八重の死について、義宣と話をするためだらう。

「御台は、本当に自害したのでしょうか？」

「そのようだな。わしは、直接自害する瞬間を見たわけではない。だが、部屋の状況から考へるに、あれは自害以外ありえぬ。御台の部屋は、血で赤く染まつていた。御台の側にいた侍女は、病死と言い張るのだが、それは嘘だらう。病ではあるようにならぬ

「遺書は、あつたのでしょうか？」

「いや、見つかっておらぬ。だが、あの侍女が遺言を聞いた可能性はある。決して口を割らぬのがな。口を割らぬということは、遺

言があつたとしても、良い遺言ではないといつゝじや。聞かぬ方が良い」

「そうですか」

遺書がないのならば、八重の自害は以前から計画していたものではなく、突発的なものだったのだろうか。そうであつてほしい。

「御台の顔を、見に行つてはなりませんか？」

「やめておけ。殿下が何と思いになるか分からぬ以上、下手に動かぬことだ」

「はい」

「明日、御台の側におつた侍女を連れてこよう。御台の死体のそばで泣いていたのだ。葬儀の手配も、わしが進めておく」

「分かりました。お願いいいたします」

頭を下げるとき、父は葬儀の準備に取り掛かるため、太田城へと戻つて行つた。ひとり残された義宣は、呆然と座り込んでいた。考えることは多いはずだ。秀吉や三成にどう報告するのか。葬儀はどうするのか。家臣たちにはどう説明するか。京にいる母にはどう言つか。だが、何も考えられない。眠つてしまいたいと思つたが、眠ることもできなかつた。

考えが頭の中を巡つてまとまらない。だが、ひとつだけ義宣の頭の中から決して離れない考えがあつた。秀吉に何と思われるのか。これから佐竹家はどうなるのか。そのことが何よりも気がかりだつた。なぜこのような時に自害をするのだ、と八重に対する憤りを覚える。

八重の死を悼む気持ちがないわけではない。だが、生きている間も義宣は八重が憎かつた。死してからも義宣を苦しめるのかと思うと、やはり憎いと思うのだ。

夜が明けるまで、義宣は一睡もできなかつた。日が昇り、太田城から八重の侍女がやつてきたと知らせを受けた。やつてきた侍女は、朝靄だつた。手には、血で染まつた白い打掛を持つてゐる。その打掛を、義宣は知つていた。八重と結婚した時に、八重が着ていた婚

礼衣装だ。

朝霧は平伏して、義宣に打掛を渡した。その打掛を手に取り、血の跡を指でなぞる。朝霧がわざわざこの打掛を持ってきたということは、八重が渡すように命じていたのだろう。血で染まった白い打掛。まるで、切腹した武士の死装束のようだ。

そう思つた時、義宣は、はつとした。そうか、八重は自分の意地を通るために自害したのだ。那須の女としての意地を通るために、死を選んだに違いない。以前、八重は言つていたではないか。自分の力で那須に帰る、と。それは、こういうことだつたのだ。そして、義宣にこの血に染まつた打掛を渡したのは、自分は最初から義宣と結婚したとは思つていなかつた、とでも言いたかつたからだろう。何という女だ。どこまで義宣を拒絶し、馬鹿にすれば気が済むのか。この時、義宣は八重の死を悼む気持ち以上に、八重を憎む気持ちが強かつた。八重が憎くてたまらなかつた。

目の前で震える朝霧に、八重の死因を聞くと、朝霧は父が言つていた通り病死だと答えた。おそらく、八重をかばつているのだろう。朝霧の声は震えていた。

怯える朝霧に、この打掛を燃やすように命じた。だが、朝霧は八重の打掛を燃やすのが嫌なようだ。義宣は打掛を掴み、自分で燃やすと言つた。朝霧には、太田城に戻り、八重の持ち物をすべて燃やしてしまえと改めて命じた。八重に関するすべてを、燃やして消し去つてしまひたかった。義宣の剣幕が恐ろしかつたのか、朝霧は慌てて太田城へと戻つて行つた。

朝霧が立ち去つた後、義宣は小姓たちが止めるのも聞かず、手づから八重の打掛を火にくべた。打掛が炎に包まれ燃えるのを、目をそらさずに見つめていた。

「どこまでも、那須の女か」

義宣の咳きは、炎にのみこまれて消えた。八重の打掛は灰となり、風に舞つて飛んでいったが、八重の自害は、打掛に染みついていた血のように、義宣の心の奥底に染みついたようだつた。

その後、三成に妻は病死したと報告すると、秀吉はそれを信じたようだつた。もう那須家のことで義宣に何か言つことはない、と三成からの書状に書かれており、義宣は安堵した。それと同時に、那須家が資晴の子の藤王丸を当主とし、五千石の大名として返り咲いたとも聞いた。だが、義宣にとつてはどうでも良いことだ。妹が死んだと報告する必要もないだろう。那須家と佐竹家の縁は、八重の死の前からとっくに切れている。

家臣たちや母にも、八重は病死したと告げた。八重は、原因不明の病のために上洛していない、ということになつていたのだから、誰もが病死に納得していた。

太田城に戻つた朝霧は、義宣の命令通り八重に関する物はすべて焼いたようだつた。父が立ち会つたと言つているのだから、間違いない。だが、父が取り上げていた八重の懐剣は、どこを探しても見つからなかつたらしい。朝霧の姿も、八重の物を処分した次の日から見えなくなつたと聞いている。

八重の死後、義宣の後妻は、母の姉で義宣にとつては伯母にあたる阿南の養女、蘆名家の血を引く一階堂家の姫がふさわしい、とう話が出た。だが、多賀谷重経がなかば強引に父に頼みこみ、母とともに上洛している人質の多賀谷家の姫と決まつた。

八重の葬儀は、八重を幽閉するはずだつた耕山寺で、密かに行つた。義宣は一度も、八重の死に顔を見なかつた。

開く花（一）

話したいことがある、と言つて訪ねてきたのは義宣の方だつたが、義宣は黙つたまま口を開かなかつた。若瀬の姫に、自分のことを話そうと思つたのだが、自分の胸の内の感情が、うまく言葉にならなかつた。

そもそも、本当に話すつもりがあつたのかも疑わしい。自分のことは、あれだけ可愛がつてそばに置いている金阿弥にさえ、話したことがないのだ。できることならば、何も話したくはない。だが、聞いてほしい。理解してほしい。何も話したくない、といふ気持ちと、誰かに話したくて聞いてほしくてたまらない気持ちが、義宣の中でせめぎ合つ。その結果、義宣は話したいことがある、と言いながら、黙り込んでしまつてゐるのだ。

義宣が黙り込んでいる間、姫も黙つて義宣と向かい合つて座つていた。姫には、母に愛されたかった、と言いながら泣くといふ醜態をさらしてしまつてゐるのだから、自分のことを話すのを恐れる必要はないのかもしれないが、今はまだ言葉にすることができなかつた。

母に愛されなかつた、愛されたかつた、といひとほ口にできても、八重が自害したことは言えそうにない。

「お屋形さま」

姫に呼ばれて、視線を上げた。姫は、義宣がなかなか話しだそうとしないことに、しごれを切らしたのだろうか。だが、そのようには見えなかつた。姫は義宣に微笑みを向けていた。

「わたしの話も、聞いてくださいますか？」

「ああ、聞かせてほしい」

姫の申し出に義宣は頷いた。自分のことは話せそつにない。それならば、姫の話を聞き、姫のことを知りたいと思つた。

「ありがとうございます。わたしの父は、蘆名盛隆。母は大御台様

の姉であり、養母の妹に当たる伊達家の姫でした」

姫は、自分の生い立ちをゆっくりと話し始めた。両親のこと、姉や妹や弟のこと、養女に出された時のこと。その時々に自分が何を考え、何を思い、これまでの時を過ごしてきたのか、義宣に伝えようとしているようだつた。

「養母は、わたしを養女に迎えて、婿を取らせて、一階堂家を継がせるつもりでした。その時、一階堂には男子がいませんでしたから。わたしが養女に出される前に、父が家臣に殺されました。なぜ父が殺されなければならなかつたのか、その時のわたしには分かりませんでした。ただ、恐ろしくて、悲しくてたまらなかつた。後になつて、父は痴情のもつれで家臣に殺されたのだという噂を聞きましたが、わたしは信じません」

義宣も、蘆名盛隆が家臣に殺された理由は、痴情のもつれだと聞いていた。以前、父が蘆名盛隆をひいきにしていた時は、父が盛隆に懸想したのではないか、などという根も葉もない噂も立つたものだつた。盛隆はおそらく男色家であつたために、そのような噂が立つのだらうと思つていたが、姫にとつては優しい父親だつたに違いない。

「その後、須賀川に養女に出された時は、父の死後まもなくということもあり、わたしはとても悲しく辛かつたのです。ですが、養母は厳しくも優しく、本当に母親のように接してくれましたから、悲しみも辛さも、消えていきました」

「そうか」

「けれど、その時も長くは続かず、伊達政宗によつて蘆名家は滅亡、二階堂家も滅ぼされました。最初、わたしたちは政宗に保護をされたのですが、わたしはちつとも嬉しくはなかつた。政宗は、わたしの実家と今のはを滅ぼした者。それが戦国の世の常といえども、今でも、わたしは政宗を憎いと思います。その後は、『ご覧の通り、こうしてお屋形さまのもとでお世話になつております』

姫が話したことのほとんどは、起こつた出来事として義宣も知つ

ていた。姫が今までどのような道を歩いてきたのか、人づてに聞いた話で理解していた気になっていたが、本人の口から話を聞き、その時の思いを聞き、初めてその時起こった本当のことを知ったような気がした。そして、話をするようになつてから、まだ数月しか経っていない姫のことまで、理解できたような気がした。

姫は、感情を交えながらも、淡々と自分の身に起こったことを話していた。だが、話の内容は淡々と他人人話せるようなものではない。姫は、自分で過去を消化し、現在を生きることのできる人間なのだろう。義宣は、まだ過去が自分の中ではうずくまることもできず、くすぶり続けているところに。

姫にとつて辛かつたはずのことも、すべて話してくれたのだから、義宣も話さなければならぬだろう。義宣が口を開こうとするとき、姫は小さく頭を振った。

「話したくないのであれば、無理にお話しなることはあります。わたしは、あなたにわたしのことを知ってほしかつたから、お話ししたこと。お屋形さまが、わたしにお話になりたいことがあるのなら、『自分がお話しても良いと思つた時に、お話しくださいませ』

「すまない。俺の方から話したいことがあると言つておきながら」「いいえ」

姫の手が義宣の手に重ねられた。その手を義宣は握り締めた。姫の手はあたたかかった。義宣の冷たい手も、あたたまるよつだつた。

「そうだ、大事なことを言い忘れておりました」

「何だ？」

「わたしの名は、祥と申します、お屋形さま」

「さち？」

「瑞祥の祥と書きます」

「良い名だな」

「ありがとうございます」

女の名は、その女の家族や側近く仕えている侍女など、いく親し

い限られた人間しか知らないものだ。義宣も、名を知っている女は少ない。母と妹、妻のほかには、以前名を聞いた侍女くらいしか知らない。八重に仕えていた吉野も朝霧も、八重がつけたものだらうから、顔を合わせて話をしていても、義宣は名を知っているわけではなかつた。そもそも、昔は女の名を問うことは、求婚と同義だったはずだ。つまり、女が自らの名を明かすということは、男に対しても心を許したことになるのではないだろうか。

岩瀬の姫は、祥という名を義宣に告げた。祥は義宣の側室となり、義宣を夫として認めたのだ。

「祥、俺の名は、義宣だ」

「ええ」

「義宣と呼んでほしい」

「え？ ですが、それは大層無礼にあたるのでは？」

「俺が、そうしてほしいんだ。もともと、元服の時、俺の名は義憲になり、ともに元服した北家の又七郎が義宣になるはずだつた。だが、俺は又七郎の方が羨ましく思えて、交換してもらつた。父や家臣たちは笑っていたな。義宣」という名は、俺が自ら選んだものだ。だから、その名で呼んでほしい」

祥が自らの名を義宣に預けたからか、義宣も祥に義宣という名で呼んでもほしかつた。金阿弥に、義宣と呼ばせていたのも、祥に話したのと同じ理由からだつた。

義宣の要望に祥は戸惑つてゐるようだつたが、義宣の手を握り返し、少し照れくさそうに笑つた。

「では、一人きりの時だけ、そう呼ばせていただきますね、義宣さま」

その夜、義宣はそのまま祥のもとで過ごした。その夜以来、義宣は以前よりも頻繁に祥の部屋を訪れるようになつた。

開く花（一）

今まで夜が更けてから祥のもとへ通っていたが、あの夜以来、義宣は日中も時間の許す時は、祥のもとへと通つた。特に何か用事があるわけではない。古田織部に習い、多少は自信のある茶の湯を振舞つてみたり、他愛ない話をしたりするだけだが、以前とは違う空気がそこには存在しているようだつた。それが義宣は心地よかつた。可愛がつている金阿弥と二人でいる時とは、何か違うものを感じるのである。

祥のもとへ頻繁に通うようになり、義宣は祥の部屋が質素であることに気がついた。下河辺の館から呼び寄せただけであるため、必要最低限の荷物しか持つて来てはいないのだろうが、常陸一国の領主の側室にしては、あまりにも質素だった。

「吉瀬、長持や唐櫃などは、下河辺の館では足りているのか？」

祥は質素儉約を好んでいるのか、それとも下河辺の館への配慮が今まで足りなかつたのか、どちらなのか判断がつかなかつたため、直接祥に聞いてみると、祥は首を傾げた。伯母と、側に控えていた侍女の鏡田が顔を見合させていた。

「わたしは特に不自由ないと思つのですが、お養母さまはいかがお思いですか？」

「そうですね、確かに不自由はしていません。もともと落城後、あちこちに世話になつた私たちに持ち物は少ないのでですから」

「しかし、そのお荷物が少ないということ自体が、わたくしは問題だと思いますよ。後室御前も姫様も最低限の衣服と調度品しかお持ちではないのです、お屋形様」

「鏡田、そのようなこと、お屋形さまに申し上げなくとも良いではないの？」

どうやら、祥は不自由を感じていらないらしいが、鏡田はもう少し衣服も調度品も整えてほしいと思っているようだ。それは当然だろ

う。いくら落城し、滅亡したといえども、祥は一階堂家の姫なのだ
から、それに見合つただけの整えはほしいはずだ。

「そうですね。せめて、貝合わせの貝桶はほしいと思つていたので
すけれど、義宣殿の側室となつたのですから、これももう必要はあ
りません」

「貝桶ですか、伯母上?」

「ああ、氣を悪くなさらいでください。私は、もともとこの子に
婿を取らせて、一階堂家を再興させたいと思っていたのです。婚礼
用に、下河辺でも貝桶くらいは用意しておきたいと、以前思つてい
ただけのこと」

貝桶は、嫁入りの際に重要な役割を果たすものだった。嫁の長持
や唐櫃などとともに花嫁行列の前方を行き、嫁家に到着してからは、
貝桶を嫁の実家の方から婚家へ渡す、貝桶渡しの儀が取り行われる。
貝桶は、貝合わせに使う貝が入った桶で、貝合わせの貝は一枚貝で
あるため、対になる貝がひとつしかない。そのことから、貞淑さの
象徴とされている。

祥の養母である伯母が、いつか祥が誰かと婚姻を結ぶ時のために、
貝桶を用意しておきたかったというのは理解できる。その話を聞いて、
祥を側室に迎えたものの、目に見える形で祥との関係を示したこと
はないのだと気づいた。

側室を迎えたところで、正室を迎えるような嫁入り行列も、三日
に渡る祝言も執り行うことはない。だが、祥は本来側室に迎えるよ
うな家柄の姫ではなかつた。伯母の言つたとおり、婿を迎えて一階
堂家を継ぐ立場にある姫だつたのだ。しかも、母の姪であり、義宣
にとつては従妹でもある。そのことを思うと、形だけでも祝言を挙
げて、側室として迎えるべきである気がしてきた。

「分かりました。岩瀬にも伯母上にも、私の配慮が足りなかつたよ
うです。急ぎ、必要と思われるものを水戸城へ用意させましょ
う。今度帰国する時に、姫も伯母上も私とともに帰国し、下河辺の館で
なく水戸城内に住んでもらうことにします」

「まあ、義宣殿、私はそのようなつもりで言つたのでありませんよ。年寄りの戯言でしたのに」

「お屋形さま、わたしたちは今的生活で十分なのです。どうか、お気遣いなさらないでください」

祥も伯母も慌てていたが、義宣は決めたのだ。祥には、一階堂家の姫として、義宣の側室として相応しい待遇を与えるければならない。衣服や調度品が足りないというのならば、新調させるまでのことをだ。祝言も執り行う。もっとも、あくまでも祥は側室なのだから、正室を迎えた時ののような盛大な祝言は行わない。貝桶渡しの儀と式三献を、奥の女たちだけで行えば良いだろう。それ以上のことをしては、正室としての琳の立場がなくなってしまう。

祥のもとを去り、義宣は表の自室に戻った。そこでは、宣政と政光、それに金阿弥が義宣に与えられた仕事をこなしていた。金阿弥は宣政や政光に比べるとまだ子どものように思えるが、二人に質問をしながら、よく働いている。さすが、神童と呼ばれただけのことはある。義宣に気づくと、三人は手を止め、頭を下げた。

「内膳」

「はい」

「街へ出て、貝桶と長持を用意せよ。それに、扇と白い装束も必要だな」

「貝桶に長持、白い装束。妹姫様のご婚儀がお決まりですか？」

「いや、違う。入れる紋は月丸扇ではない。三つ盛り亀甲花菱の紋だ」

政光が妹のなすの嫁入り道具の支度だと思つても無理はない。なすは、幼いころに江戸家から連れ戻して以来、どこにも嫁がずに常陸に残っている。もう今年で十八歳になつた。金阿弥と同い年だ。政光に言われて、なすの嫁ぎ先もいい加減決めなければならないと思つ出した。

「三つ盛り亀甲花菱の紋と言つますと、岩瀬御台様のためのものでしょうか？」

「ああ、そうだ。形だけだが、祝言を行うことにした。相手は二階堂家の姫だ。それに相応しい礼を尽くさねばな」

「お任せください」

政光は義宣の命を受け、街へと出て行つた。残つた宣政は仕事に戻つたが、金阿弥は義宣を見上げていた。その表情は、何か義宣に訴えているようだつた。

「どうした、金阿？」

「いいえ、何でもありません。失礼いたしました」

義宣が声をかけると、金阿弥は目を逸らし、宣政と同じように仕事を戻つた。その姿を見て、宣政や政光に比べればまだ子どもだと思つていたが、金阿弥ももう十八歳になつたのだと改めて思つた。ついこの間まで、小さく可愛らしい子どもだったと思うのだが、今となつては同朋にしておくのが気の毒なくらいに成長している。金阿弥と同じ年ころの譜代の子弟は、とつ々に元服を済ませて、新たな名を名乗つているのだ。妻を迎えている者もいる。

義宣の気持ちとしては、いつまでも金阿弥をこのままそばに置いておきたかった。義宣の心の一一番近くにいるのは金阿弥だ。だが、それは無理な話だつた。金阿弥はこれから大人になっていく。義宣の我今まで、今まで大人になる機会を失わせてきたのだ。そろそろ、髪を伸ばさせる時期が来たのかもしれない。どこかの家から妻を迎えるかも、決めておいても良いだろう。

政光の妻は、義宣の元服の際に神馬を牽く役割を担つた馬場政直の娘だ。宣政は、義宣に仕え始めた時には、既に妻を娶つていたため、譜代家臣の娘を妻にはしていない。現在、追放中の金阿弥の兄、憲忠もまだ妻を娶つていながら、政光同様譜代家臣の娘を娶らせるつもりだ。金阿弥の妻も重臣の娘にしたい。

祥との祝言と同時に、金阿弥の将来のことも考えつつ、義宣は母に祥と祝言を挙げるつもりだと告げた。母は大層喜んでいた。琳のもとにも事情を説明しに行つたが、琳は浮かない顔のまま、小さく頷いただけだつた。祥との祝言は、祥を正室に迎えるものではなく、

一階堂家の姫に対する礼であり、琳の地位を脅かすものではないと言ひ聞かせたのだが、琳の表情は晴れなかつた。国許にいる父には、後で報告の書状を出せば良い。

祥と伯母に祝言のことを伝えると、祥は琳に悪いと遠慮していたが、鏡田は喜んでいた。伯母も口には出さなかつたが、喜んでいるようだつた。それは祥にも分かつたらしく、伯母と鏡田の様子を見ると笑顔で頷いた。

義宣が命じたすべての物を政光が整え終えると、吉日を選んで祝言の日取りを決めた。仲人は、祥の侍女の鏡田と、母の侍女の小大納言ということにした。母と伯母以外に、父の名代として伏見屋敷にいる弟の彦太郎を参加させ、一門を代表して義久も祝言に参加させた。奥の女たちだけで行うつもりだつたが、家のことであるため、一門の誰かは参加させるべきだと考え直し、ともに上洛していた義久を参加させたのだ。

祝言の日は、花嫁行列がやつてくるわけではなかつたが、松を組んで火を焚かせた。鏡田の手から小大納言の手へ、義宣が用意した二階堂家の家紋入りの貝桶が渡され、貝桶渡しの儀が行われた。その後、祥が着座している向かいに義宣が座つた。白い打掛をまとつた祥は、緊張しているのか、頬をかすかに染めていた。その様が初々しく、好ましかつた。

小大納言と侍女たちの手によつて式三獻が行われ、義宣と祥の祝言は無事に終わつた。本来ならば、返礼、色直しとまだ一日間続くが、側室を迎える形だけの祝言だつたため、一日で終えたのだ。

祝言の後、義宣と祥は寝所に入つた。二人で床につき、ようやく祝言はすべて終わった。こうして、祥は改めて、義宣の側室となつたのだった。

開く花（一）

義宣から夜に呼び出されることが、ここ最近まつたくなかつた。義宣は、岩瀬の姫を側室に迎えると言つていたため、その姫のもとへ通つていて、金阿弥に構う時間がないのだろうと思つていた。それでも、義宣は何度も金阿弥だけだと言つて、何年も一人の時間を過ごしてきたのだから、これは一時的なもので、いづれ以前と同じような日々が戻つて来るのだと思つていた。

だが、義宣は見せかけの側室だと金阿弥に言つていたにもかかわらず、頻繁に岩瀬の姫のもとへ通つていた。夜だけではなく、日中も足を運び、親しげに言葉を交わしているのを見たこともある。その間、義宣は金阿弥を寝所に呼ぶことはなかつた。

義宣は、金阿弥のことなど、もう何とも思つていらないのだろうか。金阿弥や宣政がいる前で、義宣は政光に貝桶や長持を用意するよう命じた。それが嫁入り道具だということくらい金阿弥にも分かる。金阿弥も、政光と同じように、義宣の妹のためのものだと思つた。だが、違つた。それは、岩瀬の姫のためのものだつた。義宣のもとには岩瀬の姫が嫁入りするための道具だ。

見せかけの側室に、それだけの礼を尽くすはずがない。義宣が最近、岩瀬の姫のもとへ足繁く通つていることと合わせて考えれば、義宣が岩瀬の姫を見せかけではない、正式な側室として迎えようとしていることはすぐに分かつた。義宣が、岩瀬の姫に対して特別な思いをかけていることも分かつた。

なぜ、義宣はそこまで岩瀬の姫に思いをかけるのか。金阿弥のことはどう思つているのか。義宣の考えが分からず、ただ辛かつた。義宣に何か言いたかつたが、何も言えなかつた。金阿弥は義宣を問い合わせられる立場ではないのだ。

その後、義宣は岩瀬の姫と祝言を挙げた。お前だけ、と義宣が金阿弥に言い続けた言葉は偽りだったのだろうか、と思つた。ついこ

の間まで、三日にあげず呼び出されていたのが嘘のようだ。岩瀬の姫を側室に迎える前、姫を側室に迎えたとしても、金阿弥との関係は変わらないと義宣は言つていたということ。寝所に呼ばれることを望んでいるわけではない。ただ、義宣との変わらぬ関係を望んでいるだけだ。

はやく元服を迎へ、宣政や政光のよつこもつと義宣の役に立ちたといふ思いももちろんあるが、今はまだ義宣だけの金阿弥でいたかつた。できることならば、元服を迎えてもこの関係を終わりにしきたくない、と心の片隅で密かに思つてさえいるのだ。

一度も寝所に呼ばれないまま、義宣と岩瀬の姫の祝言が終わり、しばらく経つた頃、義宣から久々に声がかかった。やはり、義宣には政景が必要なのだろうか。義宣は、金阿弥との関係を終わりにするつもりがないのか。お前だけ、という言葉は信じてもいいのだろうか。信じてもいいに違いない。義宣が金阿弥を呼ぶということは、まだ金阿弥は必要とされているということなのだ。仕方のない人だ、と思いながら寝所へ向かつた。

「殿、梅津金阿弥にござります」

声をかけると、義宣から入るように促された。襖を開けて寝所に入ると、義宣は夜着ではなく平服のまま金阿弥を待つっていた。どういうことだらう。

「殿？」

一人きりの時に呼ぶように言われた呼び方で呼ぶのは憚られた。今日の前にいる義宣は、金阿弥だけの義宣ではなく、佐竹のお屋形様だった。

「今夜は、お前と話がしたいと思つて、呼び出したんだ

「そうですか」

「金阿弥、今年でいくつになつた？」

「私は、今年で十八になりましたが」

何を聞いているのだろうか。金阿弥の年齢は義宣の妹と同じなのだから、義宣が忘れているはずがない。義宣の考えが分からぬ。

金阿弥が首を傾げると、義宣は持つていた扇を開いたり閉じたりして、ぱちりと音を鳴らした。

「そろそろ、髪を伸ばしても良い頃だろ？」

髪を伸ばす。それは、金阿弥に元服の準備をしろと言つてゐるのと同じだ。同朋は剃髪し主君に近侍している。髪を伸ばすということは、もはや同朋ではいられないということだ。これが何を意味するのか、金阿弥は考えたくなかつた。

「名も、金阿弥のままではな。新たな名乗りを考えた。髪が伸び始めたら、茂右衛門もえもんと名乗るがいい。お前の兄は半右衛門だからな」「茂右衛門ですか？」

「もう十八なのだから、妻を迎えてもおかしくない年である。髪が伸びたら、山方対馬守の娘と婚約しろ。対馬は分かるな？」

「はい。殿の傳役でいらっしゃった対馬殿ですね」

「ああ。対馬の娘は、今年で十歳だそうだ。まだ妻とするには幼すぎる。今のところは婚約ということにして、娘が十三歳を過ぎたら正式に結婚すればいいだろう。どうだうか？」

「対馬殿が、私で良いとおっしゃるのなら」

「それは良かつた」

新たな名乗り。山方久定の娘との婚約。いづれは、金阿弥も元服し、妻を迎えることは分かつていて。だが、気持ちがついていかない。義宣は決定的な言葉を言わない。だが、義宣はどのような意図で金阿弥にこの話をしているのか、考えたくないが金阿弥にも分かっているのだ。

金阿弥が義宣の言葉に頷き、山方久定の娘を妻に迎えることを認めるとい、義宣は満足げに頷いた。そんな義宣を金阿弥は見たくなかった。

「金阿」

「はい」

「お前は、もつこに来なくていい。俺は、もつお前をここには呼ばない」

聞きたくなかった言葉が、義宣の口から伝えられた。今までの話で、もうここには来なくていいと言われるのだろうとは思っていた。認めたくなかった。信じたくなかった。考えたくなかった。だが、聞き間違いではなかつた。

もう寝所に来なくていいといつゝとは、金阿弥との関係を終わりにするということなのだ。なぜ、義宣は突然そんなことを考えたのだろうか。金阿弥に髪を伸ばすように言って、新たな名乗りも考えて、許嫁まで決めて。金阿弥にとつては、すべて突然のことのように思えた。

岩瀬の姫と祝言を挙げたからだろうか。岩瀬に姫を愛すようになつたから、金阿弥など不要になつたのだろうか。そんなに、岩瀬の姫にほれ込んだのだろうか。政景を寝所に呼ばなかつた間に、何が起つたというのだ。わずかな期間で、義宣と岩瀬の姫はどのよつな関係を築いたというのだ。金阿弥と義宣の六年以上かけて築き上げてきた関係は、岩瀬の姫の数ヶ月に劣るといつゝのか。

義宣はまっすぐに金阿弥を見つめている。金阿弥をもうここには呼ばないと言つた言葉は、嘘ではないのだと思い知らされた。

「良かつた

「何だと？」

「私からは、はやく髪を伸ばしたいだなんて、到底言えませんからね。周りが元服していく中、私だけいつまでも剃髪した頭では、肩身が狭かつたのですよ。本当に、良かつた」

俯き、袴の裾を握り締め、何とか一息に言い切つた。しつかりと言いつたつもりだつたが、思った以上に声が震えていた。涙が目にたまつていく。このままでは、こぼれ落ちてしまいそうだつた。義宣には涙など見られたくない。そもそも、泣く理由などないはずなのだ。

「失礼します」

絞り出すように、なんとかそれだけを口にして、逃げるよう政景は義宣の寝所を飛び出した。政景の名を呼ぶ義宣の声が聞こえた

が、無視をした。深夜だということなど構わず、足音を大きく立てながら、足早に歩いた。早く、義宣の寝所から遠ざかりたかった。

歩いている間に、涙が頬を伝つて流れ落ちてきた。手で拭つても、一向に止まる気配がない。何度も手の甲で拭うつむいて、擦れて目が痛くなつたが、そんなものは気にならなかつた。

悲しかつた。悔しかつた。寂しかつた。空しかつた。腹が立つた。だが、やはり悲しいという気持ちが一番大きいような気がする。はやく大人になりたいと願つたこともあつたが、今は新たな名乗りも髪を伸ばすこともまったく嬉しくない。

お前だけ、と言つたのに。何度もそう言つて抱きしめて、口を吸つて、体を重ねてきたのに。全てが嘘のように思えて、政景は廊下の隅に座り込み、膝を抱えて涙を流した。

だが、何故泣いているのか、何故こんな気持ちになるのか、その理由は分からなかつた。気づきたくなかった。

開く花（四）

金阿弥に茂右衛門と名乗るように言い、山方久定の娘を許嫁にするように命じてからも、義宣の態度は変わらなかつた。変わつたのは、金阿弥という名が茂右衛門になつたことと、それに伴い同朋から祐筆に出世したこと、寝所に呼ばれなくなつたことだけだ。

それ以外のことと、義宣の茂右衛門に対する態度は変わつていない。今までと同じように、側において重用してくれてゐるし、先輩である宣政や政光と同じように様々な仕事を任せてくれる。そのことが茂右衛門は嬉しかつたが、同時に恨めしかつた。

いくら義宣の側にいても、茂右衛門は以前の金阿弥ではない。義宣には金阿弥だけで、金阿弥には義宣だけだったあの頃とは違うのだ。茂右衛門は今でも自分には義宣だけだが、義宣には岩瀬御台といふ人間が現れてしまつた。義宣は、茂右衛門だけの義宣ではなくなつた。

義宣は、何度も金阿弥だけだと言つた。俺にはお前だけだ、と何度も言つたではないか。だから、何も変わらない関係がずっと続いて、金阿弥は義宣のもので、義宣は金阿弥のもので、義宣には金阿弥がいなければ駄目なのだと、ずっと思つていた。

だが、違つたのだ。義宣は変わつていく。岩瀬御台を愛したから、という身勝手な理由で茂右衛門を突き放し、置き去りにして、変わつていく。茂右衛門は何も変わらないのに、義宣は変わつてしまう。義宣は、茂右衛門に岩瀬御台のことは何も言わなかつたが、岩瀬御台を愛したから茂右衛門が不要になつたのだと云ふことくらい、言わねずとも分かつてゐる。

精一杯の虚勢を張つて、義宣が岩瀬御台を愛したことは良いことだと自分に言い聞かせた。事実、良いことだと思つてもいるのだ。これで義宣には世継ぎが生まれるかもしない。良いことだ。そして、これはごく当たり前のことだ。茂右衛門もいづれは山方久定の

娘と正式に夫婦となり、子をなし、義宣だけの金阿弥ではなくなる。久定の娘との結婚は父も喜んで承諾したため、茂右衛門と久定の娘は許嫁となつた。

分かつてゐる。いつまでも子どもじみたことを言つて、黙々をこねても仕方がない。だが、違う。そのような問題ではない。これは全く違う問題だ。子どもがいすれは大人になるだとか、いつかは終わりが来るのだとか、そのようなことではないのだ。

宣政、政光と茂右衛門を集め、今後の世の流れがどうなるのか議論をしている義宣を見る。義宣は、茂右衛門を突き放したことなど忘れたかのようだつた。まるで、金阿弥を可愛がつていたことまで忘れてしまつたように見える。

「太閤殿下は、近頃お加減がすぐれぬらしい。寝つきりだという噂も耳にしている」

「しかし、醍醐で盛大な花見が行われた時は、まだお元気だったのでは？」

「ああ。俺も殿下のお姿を拝した。お元気そうに見えたのだが、あの花見以来床に臥すことが多いそうだ。治部殿は心配無用と言つているが、実際のところはどうなのだろうな」

義宣と政光の会話も、茂右衛門の耳には半分ほどしか入つていなかつた。秀吉の体調の話をしているといふことは、秀吉亡き後のことをついて義宣は話したいのだろうか、とぼんやりと思つた。

「いのよなことを申し上げるのは、恐れ多いことではありますが、仮に殿下がお隠れになつたとしても、秀頼様がいらっしゃる限り、安心なのではありませんか？」

「右近殿、何をのんきなことをおつしやるのですか。秀頼様は幼いのです。幼君を奉じるふりをして、自らが権力を握ろうとする輩がおらぬとは限りますまい。古の献帝と董卓など良い例です」

「内膳の言つとおりだ。治部殿が秀頼様の董卓になることはありえないが、董卓や曹操の座を狙う人間は少なからずいるだろうな。茂右衛門はどう思う？」

「あ、はい、そうですね」

政光の指摘に苦笑する宣政を見ていたのだが、義宣に声をかけられて茂右衛門は現実に引き戻された。今は、義宣との過去を回想し、感傷に浸る場ではない。何を考えていたのだろう。そもそも、義宣と茂右衛門の間には何の契りもなかつたというのに。たとえ茂右衛門が、自分の義宣への思いは誠なのだと、その証として腕に刀を突き刺したとしても、この結果が変わっていたとは思えない。

「私も内膳殿のおっしゃるとおりだと思います」

「茂右衛門にまでそう言われると、私も立つ瀬がありませぬな」

「まったくだ。右近があの治部殿と同い年とは思えん」

「治部様と比べられては、かないませぬ。殿、どうかご勘弁を」

宣政の一言に義宣は笑っていた。政光もかすかに笑みを浮かべている。茂右衛門も、思わず笑ってしまった。宣政は照れ臭そうに頭をかいている。茂右衛門より二十一歳も年上でありながらも、少し抜けているところのある宣政が茂右衛門は好きだった。義宣も政光も茂右衛門と同じだろう。政光の政の字は、宣政から取つてつけられたものだった。

「まあ、しかし、今日明日殿下がお隠れになるわけではなし。異変が起きたら、治部殿が知らせてくださるだろう。その際は、俺は治部殿に従うつもりでいる。治部殿には一方ならず世話になつてはからな。一門衆や譜代の連中が、その時に何を言つてくるかは分からんが、俺の気持ちはこのようなものだ」

「私も殿のお考えに賛成です。治部様には、私もお世話になります。頭の堅い連中には、殿や治部様のようなお考えは理解できぬかもしけませんが」

義宣と政光の言葉に、宣政と茂右衛門も頷いた。それを見ていた義宣は、何か思い出したのか、はつとして茂右衛門の方を向いた。それに、茂右衛門は思わずびくりと肩を震わせてしまった。

「茂右衛門、半右衛門のことなのだが、あの喧嘩沙汰から三年が経つたことだし、俺が岩瀬を側室に迎えた祝いに、半右衛門を呼び戻

そうと思つて常陸の又七郎に書状を出してみた。又七郎からの返書が届いたのだが、半右衛門の奴、常陸すでに妻を迎へ、今では女と男一人ずつ子までいるのだそうだ。まったく、出奔、追放という扱いにしていいというのに、何をしているのだか

「しかし、半右衛門に嫡男が生まれたのはめでたいことでしょう」

「そうだな。俺は、半右衛門にも譜代の娘を娶らせたかったのだが、北家の家臣の娘を妻に迎えるとは。俺の譜代と浪人の融合策はこれで一つ失敗だ」

兄の結婚と嫡男の誕生は嬉しかつたが、岩瀬御台を側室に迎えた祝い、という言葉が茂右衛門の胸に刺さつた。義宣の心は、茂右衛門から遠く離れ、今はもう岩瀬御台のもとにあるのだと思い知られた気がした。

「半右衛門は見つけ次第切腹、と一応約束しているのだから、妻子を連れての帰参は先送りにせねばなるまい。茂右衛門や梅津家の者には悪いが、半右衛門の帰参はもう数年待つてもらいたい」

「帰参が許されるだけでも、ありがたきこと存じます。半右衛門の命があるだけで、梅津の者どもは喜んでいるのですから」

「ならば良いのだが。ああ、それから、常陸の対馬から茂右衛門宛ての書状が届いている。後で目を通しておけ」

義宣から書状を渡され、茂右衛門は懐にしまいこんだ。その後は、秀吉亡き後の世の流れについての話は出ず、譜代と浪人出身の家臣の融合策や、常陸にいる兄の話などで盛り上がつた。日が暮れ解散となり、茂右衛門は与えられた部屋に戻り久定からの書状を取り出した。

久定の書状の内容は、茂右衛門が祐筆に出世したことと新たな名乗りをもらつたことの祝いと、久定の娘との婚約が成立したことを喜ぶものだつた。久定は義宣の傳役だつたため、浪人出身の茂右衛門と娘の婚約も、義宣の命だと思えば承諾したのだろうが、内心は喜んでいるはずがない。茂右衛門は義宣に重用され、可愛がられてもいたが、譜代家臣たちがそれをよく思つていなかつたことは知つ

ている。

久定の書状を読み終えると、もう一枚紙が入っていることに気づいた。開いてみると、かな文字で書かれた文だつた。字のおぼつかなさから考へるに、久定の娘が書いたものだらう。十歳の少女が書いたものであるため、一部読みにくい箇所はあつたが、文章の内容は少女らしい明るく初々しいものだつた。

いきなり許嫁だと言われて困惑しているが、いづれ茂右衛門に会う時を楽しみにしている。茂右衛門のことをよく知らないので、できれば文を送つてほしい。その前に、まずは自分のことを知つてほしいと思つたので、父の書状と一緒に文を送つてもらつた。

久定の娘からの文の内容は、大体そのようなものだつた。ほかに、茂右衛門との婚約を告げられてから見た夢の内容が書かれていた。春はとうに終わつたのだが、久定の娘が見た夢は春の晴れた景色だつたそつだ。

文を読み終えると、最後に、はな、と名が書かれていた。久定の娘は、はなという名らしい。夢に見たという春の景色と、はなという名が重なつて、茂右衛門の中で、はなは春の似合つ少女のように思えた。

返書を出さなければなるまい、と思い茂右衛門はすぐに筆を執つた。久定へ婚約の礼を述べる書状を書き、はなにもやさしいかな文字で文の返事を書いた。その文の最後に、はなの見た夢から連想した句を書いてみた。義宣は連歌が苦手なようで、滅多に連歌の興行はないが、茂右衛門は和歌や連歌が好きだつた。

春にはるかさなる世々の久しだよ。

子ども相手に、わざわざ夢想の句まで書き添えて、何をしているのだろうとも思う。だが、これは義宣が茂右衛門に望んだことなのだ。茂右衛門を突き放し、自分は岩瀬御台を愛し、茂右衛門に妻を娶れと言つた。茂右衛門の気持ちなど、まったく考えてくれなかつた。

それが当然のことなのだと分かつてゐる。はなへの文を書きな

がら、義宣への思いを心の底に封じ込めようとした。もともと茂右衛門は義宣の家臣だった。そのことが変わったわけではない。今も昔も、茂右衛門は義宣の家臣で、それ以外の何者でもなかったのだ。

ただ、茂右衛門が少し思い違いをしていただけのこと。

義宣と茂右衛門は何も変わっていない。昔から、今でも主と家臣といつだけだったのだ。

開く花（五）

近頃、琳の体調がすぐれなかつた。吐き氣を訴え、何も食べたくないと言ひ口も珍しくはなかつた。琳が人質として佐竹家に送られる以前から、琳のそばにいた昌は琳のことが心配でならなかつたが、この体調の変化は、懷妊の兆しとしか思えなかつた。

琳に、医師に診てもらうようにすすめると、琳は最初嫌がつっていたが、昌の説得によつて医師の診察を受けた。結果は、昌が思つていたとおりだつた。琳は妊娠していた。義宣の子どもだ。男だろうが女だろうが、義宣にとつて初めての子ということになる。

「御台様、おめでとうございます。早速、お屋形様と大御台様にお知らせしなくては」

「お昌、ありがとう。でも、私怖くもあるの。お屋形様のお子を私が身ごもつたなんて」

「何を仰せですか。」このお子は、御台様のお子でもあるのですよ。昌は御台様のお子がお生まれになるのが楽しみ。孫ができるような気持ちです

「まあ、お昌つたら。随分若いおばあさま」

昌は琳よりも一回り年上だが、さすがに琳の言うとおり、この年では若い祖母だろう。初めての妊娠に浮かない顔をしている琳を励まそうと言つたのだから、琳の顔に笑みが浮かんで昌は嬉しかつた。琳が義宣の子を身ごもつたことを怖がるのは、初めての妊娠といふこともあるだろうが、この子が佐竹家当主にとつて初めての子であることも原因だろう。先の御台には子ができなかつた。琳は義宣の妻になつて、今まで大御台に何度も子ができるのかと催促されてきたのだ。自分の子ができたことに対する喜びよりも、佐竹家の当主の子どもを身ごもつたことへの重圧の方が、今の琳の心を占めているのだと思う。

それに、義宣は新たに迎えた側室と祝言を行つてゐる。そのこと

も琳の心を痛めさせ、浮かない表情の原因になつてゐるに違いない。

側室の姫は名門と言われた一階堂家の姫で、義宣の従妹でもある。それに比べて琳は、佐竹家に従つ多賀谷家の姫で、もともとは人質として差し出されていたのだ。肩身が狭い思いをずっとしてきた。義宣は岩瀬の姫を側室に迎えてからも、琳のもとへ足を運んではいるが、回数は岩瀬の姫よりも少ないようと思える。

「では、昌は大御台様をお呼びして参ります。その後で、お屋形様にもお知らせしましょう」

「お願ひね」

昌が大御台の侍女の小大納言に琳の懐妊を伝えると、小大納言は昌の言葉が信じられなかつたようで、間違いないかと聞き返してきた。信じられないのも無理はないだろう。先の御台を迎えて以来、十年以上義宣には子ができることがないのだから。小大納言から話を聞いた大御台は、小躍りでもしそうなほどに喜んでいた。昌が懐妊したわけでもないといふのに、昌の手を取つて、よくやつてくれた、と言つた。そして、急いで琳の部屋へと向かつた。その後ろを昌は小大納言とともに従つた。

「御台、おめでとう。よくやつてくれた。三年前に蘆名の盛重には嫡男が生まれたが、義宣にはまだだらうかと首を長くして待つていたのだよ」

「大御台様、ありがとうございます」

「これでお家も安泰でござりますね、大御台様」

「そのとおりだ、小大納言」

琳に子ができるいかと催促していた時の態度が嘘のように、大御台も小大納言も相好を崩している。その喜びよつて、琳はますます戸惑つてゐるようだつた。

「この子が男でも女でも、私は嬉しい。名はなんとつけようか。男ならば徳寿丸で決まりだけれど、女ならばどのような名が良いだろうか？」

「大御台様、お氣がはやすぎでございましょう。第一、お子のお名

前を決められるのはお屋形様と御台様ですよ」

「ああ、すまないな、御台。小大納言の言うとおり。年寄りの戯言
と思っておくれ。義宣の子が生まれるのが嬉しくて仕方がないのだ」

「いえ、大御台様にお喜びいただけて、私も嬉しいです」

「本当に良かった。先の御台には子ができなかつた。義宣が手をつけた女たちも、誰も身ごもることはなかつた。義宣には種がないのかと思っていたが、それは違つたようだ。あの女たちが石女だつたのだろう」

大御台は嬉しそうに笑みを浮かべながら話をしているが、琳は口で言うほど嬉しそうではなかつた。大御台の言葉が琳の胸に刺さつているのだ。大御台は悪氣があつて言つているのではないだろうが、先の御台を石女と言うことはないだろう。琳も身ごもることがなければ、大御台にそう言われていたのだと告げているようなものだ。大御台は琳に対する配慮が足りない。何人もの女と関係を持ちながら、今まで一人も身ごもることがなかつたのだから、義宣に何か問題があると考える方が道理だ。

だが、琳は不義密通を働いてなどいないので、義宣の子ができる以上、今までの女に問題があると考えるのも仕方がないのかもしない。義宣は大御台の息子だ。息子に問題があるとは思いたくないのだろう。

ひとしきり喜んだ後、大御台は琳に体調に気をつけるよう助言を与え、去つて行つた。大御台と小大納言が去るのを見送つて、昌が部屋に戻ると琳は小さくため息をついていた。

「御台様、お加減がすぐれないのですか？」

「違うの、そういうわけではないけれど。私がお屋形様のお子を身ごもつたということが、どういうことなのか。それを使うと、何とか苦しくなつてきて。大御台様のお話を聞いて初めて気づいたのよ。お屋形様が、私が不義密通を働いたから身ごもつたのだとお思いになつたらどうしよう」

「まさか。御台様が不義密通など。お屋形様がお思いになるはずあ

りません。もし、やのよつなことを聞こ出す者がいたら、畠が「いらっしゃめてやります」

「うん、ありがと、お畠。そつよね、お屋形様は、きっとお喜びになるわよね」

田が暮れた後、義宣に琳のもとへ足を運んでくれるよう話をしに行くと、今夜は岩瀬の姫のもとへ行く予定がなかつたのか、義宣はすぐに琳のもとへやつて來た。

「琳、俺に話したいことがあるやうではないか。畠から聞いたぞ。何か、奥で不都合でもあつたか？」

「い、いえ。そのよつなことは、ありません」

「では、何だ？」

「は、はい。あの」

義宣は琳に対して、高圧的な態度で接しているわけではない。だが、人質時代に佐竹家の当主に逆らつてはいけない、と思い続けていたことが今でも琳の心を支配しているようで、琳は義宣の前に出るとおどおどしてしまつのだ。義宣も、そのあたりを理解して、もつと琳に対して優しく接してくれればいいのに、と畠は常に思つている。

「私、お屋形様の子を、身じこもりました」

絞り出すように琳が告げると、義宣は田をまくるとしていた。義宣も琳の言葉が信じられなかつたのだろう。

「琳、それは間違いないのか？」

「はい。お医師に診ていただきました。間違いないとのことです」

義宣の反応がない。琳は恐る恐る義宣を見上げた。畠も義宣の表情を見ている。義宣は、何とも言い難い表情をしていた。琳の懷妊が信じられない、といつよつな、懷妊を喜ぶような、驚きと喜びが入り混じつたような表情だった。だが、琳の不義密通を疑つてはいるには見えたかった。

「琳」

「はい」

「何と言えばいいのか。俺にとつても初めてのことだ。体をいとえよ」

「あ、はい」

「めでたい。すぐに国許にも知らせよ。明日は祝いの宴でも開こうか」

「お屋形様、御台様はお体に気をつけなければならないのです。宴の席は、少々」

「そうか、そうだな。体をいとえと言つたのは俺だというのに。すまん。それにしても、俺の子か。言われても信じられないな」

小さく笑みを浮かべ、義宣は琳の腹に手を当てた。その様子に、ようやく安心したのか琳も笑顔を見せた。琳の笑顔を見て、昌も安心した。どうやら、義宣は琳との間に子ができることを、喜んでいるようだ。ただ、長年子ができなかつたため、義宣も戸惑っているのだろう。もしかしたら、義宣は大御台とは違い、自分に種がないと思っていたのかもしれない。

「私も、信じられません。私の中に新たな命が宿っているなど」

「まったくだ。腹が大きくなってくれば、実感もわくのだろうか。そういうえば、多賀谷の義父上は弟の彦太郎を養嗣子に迎えたいと以前から父に打診していたな。俺の子ができた祝いに、弟を多賀谷家の養子に出してもいいかもしない」

「まあ、まことですか」

多賀谷家は琳の兄の三経が家督を継ぐはずだつたが、重経は何を考えているのだろうか。佐竹家から養嗣子を迎えるということは、三経は廢嫡になるのだろうか。琳は父である重経の希望がかなえられることに喜んでいて、兄のことまで気が回っていないようだ。それも仕方がない。琳は人質に出される前から重経を恐れていた。夜更けまで琳を起こしてては、腹の子にさわるかもしれない、と義宣は弟の彦太郎の多賀谷家入りについて少し話をすると、琳の部屋を出て行つた。昌は義宣を見送るために、義宣に従つていたが、琳の部屋からだいぶ離れると、義宣は立ち止まって振り返つた。

「昌、琳の懷妊は母上には知らせたのか？」

「はい。大御台様、小大納言殿にはすでにお知らせいたしました」

「そうか。岩瀬は知っているのだろうか？」

「いいえ。わたくしはお知らせしておりません。大御台様が岩瀬のかみ様にお知らせなさつたかもしれませんが」

「母上が伯母上に、か。分かつた。昌、岩瀬には琳の懷妊をまだ知らせずとも良い。しばらくは、内密にしておけ」

義宣の言葉に、昌は衝撃を受けた。琳の懷妊を知った時の義宣の何とも言い難い表情は、岩瀬の姫へ何と説明するか思案している顔だったのだろうか。内密にしておくということは、どういうことなのだろうか。岩瀬の姫に知られては、何か問題があるというのか。

「はい、仰せのままに、お屋形様」

義宣に真意を問い合わせたかったが、琳の侍女という立場の昌には、そのようなことは許されない。この場合は、義宣の命に頷いて琳のもとへ戻った。だが、義宣への不信感は昌の心に深く刻み込まれた。もともと昌は、琳に優しい態度で接することのない義宣のことが、琳の夫とは言え好きではなかつたのだ。

部屋に戻ると、琳は大御台にも義宣にも懷妊を喜ばれたことで、よつやく少し安心したように見えた。その琳に、義宣が岩瀬の姫には懷妊を内密にするようにと言わされたことなど、言えるはずがなかった。

開く花（六）

岩瀬の姫には琳の懷妊を知らせぬよう、義宣に言われてから、昌は義宣の行動に注意するようになつた。義宣が何を考えて、昌にこのことを命じたのか分からぬ。分からぬからこそ、昌は不安だつた。

義宣は、琳の懷妊を確かに喜んでいた。だが、岩瀬の姫のもとへ通うこともやめなかつた。岩瀬の姫の部屋から出てくる義宣を、昌は何度も見ている。岩瀬の姫の部屋から出てくる義宣の表情は、琳には見せないものだつた。その時の義宣の雰囲気から、まだ義宣は岩瀬の姫に琳の懷妊を告げていないよつに思えた。

義宣が岩瀬の姫を寵愛していることは、誰の耳にも明らかだつた。側室に過ぎない姫のために、形だけの祝言を挙げ、三日にあげず通つてゐる。いまだ子ができぬことがおかしいと思えるほどだ。

そもそも、義宣は琳が妻になる前、先の御台が存命中の間も側室を置いたことはなかつたはずだ。女中に手をつけていたといふ話を聞いたことがあるが、どの女も正式な側室にはならなかつた。家臣たちに側室を迎えることをすすめられたため、岩瀬の姫を側室にしたのかもしれないが、わざわざ祝言まで挙げているのだ。岩瀬の姫は義宣にとつて特別なのだろう。側室にすぎないはずなのに、岩瀬の姫は岩瀬御台などと呼ばれている。

そこまで義宣に寵愛されている岩瀬の姫に、琳の懷妊を内密にするといふことは、義宣に何か考えがあるとしか思えなかつた。昌の考えすぎなのかもしれないが、義宣は琳の子を岩瀬の姫の子ということに対するつもりなのかもしれない。女中の誰かが産んだ子ということにして、岩瀬の姫の子にしてしまうかもしない。そして、それを機に琳を側室に格下げし、岩瀬の姫を正室にしようとしたとしても、あり得ない話ではないように思える。

義宣は、あくまでも正室は琳であり、岩瀬の姫の存在は琳の立場

を脅かすものではないと言つてゐるが、どこまで本気で言つてゐるのか分かつたものではない。昌は、琳には内密で岩瀬の姫のもとへ行くこととした。義宣には口止めされているが、岩瀬の姫に琳の懷妊を告げるつもりだ。義宣が何か行動に移す前に、岩瀬の姫にも琳が義宣の子を身にもつたのだと知らせておけば、琳の立場を守ることに繋がるだらう。考えすぎだとは思つただが、昌は黙つていられなかつた。

昌が岩瀬の姫のもとを訪れると、姫は快く昌を招き入れた。姫の部屋には、姫の侍女と養母である一階堂後室もいた。琳の懷妊を告げるには、ちょうどいい。

「わたくし、御台様にお仕えする昌といつものです。本田は、突然の訪問にも関わらず、お招き入れくださりありがとうございます」

「いいえ。お昌殿には、一度お会いしていますね。御台さまは、お元気ですか？」

「ええ、それはもう

岩瀬の姫の言つとおり、昌は一度姫に会つたことがある。姫が側室に迎えられた時、琳のもとへ挨拶に来たのだ。その時以来、久しぶりに見た岩瀬の姫の顔を見たが、岩瀬の姫は特別美しいというわけではなかつた。何が義宣を惹きつけるのか、昌には分からぬ。身びいきだが、琳の方が顔立ちは可愛らしいと思つ。

「ところで、本田はどのような用向きでいらっしゃったのでしよう？」

そばで控えていた岩瀬の姫の侍女が口を開いた。侍女は、昌の突然の訪問を不審に思つてゐるようだつた。

「特別、用事があるというわけではないのですよ。ただ、岩瀬の姫様がご存知ないことを、わたくしは知つてゐるようですが、お教えするべきかと思いまして」

「わたしの知らないこと? 何でしちゃうか?」

「まあ、岩瀬の姫様は本当にご存知ないのですか?」

「お昌殿、姫様に対して、少々無礼なのではありませんか?」

「鏡田、わたしは気にしていないわ」

昌の言葉に、鏡田と呼ばれた姫の侍女はかすかに怒りを見せたが、姫はそれを制した。昌の態度よりも、昌が知つていて自分が知らないといふことの方が気になつてゐるようだ。姫は昌の礼を欠いた物言いにも気を悪くすることはなかつたし、昌に笑みを向けている。だが、その円満そうな人柄が、昌はかえつて気に障つた。

「無礼なのはどちらでしょうか、鏡田殿」

「どうということですか？」

「岩瀬の姫様は、お屋形様の側室というお立場にも関わらず、家中において岩瀬御台様などと呼ばれていらっしゃいます。これは、御台様に対しても、無礼甚だしいではありませんか」

「お昌殿、何をおっしゃるかと思えば」

「姫様がお屋形様の従妹でいらっしゃるからでしょうか？それとも、蘆名家の姫であり、一階堂家の姫でもいらっしゃるから？そんな姫様は、側室であつても御台様と呼ばれて構わないということでしょうか？」

岩瀬の姫に対して文句を言いに来たわけではなかつたのだが、昌はこのことを以前から思つてゐたのだ。一度言葉にしてしまつと、止まらなかつた。鏡田は昌の言葉に怒りをあらわにしているが、岩瀬の姫も一階堂後室も黙つて昌を見つめていた。

「御台様は、幼い頃からずっと佐竹のお家の人質でした。先の御台様が亡くなられたあと、まだ十を過ぎたばかりの幼い姫様が、お屋形様の御台様になりました。御台様のご実家は、結城家に従いつつも佐竹家に従つておりました。お父上が背信なされば、妻といえども御台様はきっと斬られましよう。先の御台様はご病死ということになつてますが、実は自害なさつたとか、お屋形様が死に追いやつたのだと、そんな噂も御台様はご存知です」

昌が岩瀬の姫に向かつて、琳がいかに佐竹家で心を痛めて暮らしてきたのか説いていると、廊下から足音が聞こえてきた。その足音は、岩瀬の姫の部屋に近づいてきている。急いでいるようだつた。

「岩瀬殿、こちらに私の侍女が参つたと伺いました。お部屋に入つてもよろしいですか？」

「御台様。鏡田、御台様をお通しして」

足音の主は琳だった。琳にはここへ来ることを告げなかつたが、誰かが昌の姿を見て、今までの話も聞いていたのだろう。琳は青ざめた顔で、昌の袖を引き、帰ろうと目で訴えたが、昌はまだ肝心なことを言つていないので、琳とともに戻るわけにはいかなかつた。

「御台様はお屋形様には一切逆らわず、従順でおとなしい妻でいらっしゃいました。それなのに、なぜ貴方様の方がお屋形様には可愛がられるのか」

「お昌、岩瀬殿に何を言つているの。お屋形様がどう思われるか」「貴方様はお屋形様に可愛がられている。しかし、お屋形様のお子を身ごもられたのは、御台様でござります。貴方様ではありません」

「お昌、もうやめましょう」

琳は昌の袖を握り締め、これ以上岩瀬の姫に対して無礼なことは言わないでほしいと訴えている。義宣が可愛がつてゐる岩瀬の姫に無礼を働いて、義宣の機嫌を損ねることを恐れているのだろう。岩瀬の姫は何も言わなかつた。昌の無礼に怒つてゐるようには見えなかつた。ただ、呆然としている。

「え？」

一瞬の沈黙の後、岩瀬の姫は小さく呟いた。驚きのあまり表情が固まつてゐる。それは、二階堂後室も鏡田も同じだつた。この三人は、義宣から何も告げられていなかつたのだから、当然の反応だろう。だが、驚いてゐるのは琳も同じだつた。琳は、義宣が琳の懐妊を岩瀬の姫には内密にしようとしていたことを知らなかつたのだ。

「あなた、お屋形様から何も聞いていないのですか？」

岩瀬の姫の沈黙は、何よりも雄弁な沈黙だつた。琳は黙り込む岩瀬の姫を見て、悲しそうな顔をしたが、同時にわずかばかりの喜色も浮かんでいた。

「お昌殿とおつしゃいましたか。貴方が何のためにここへ来たのか、

よく分かりました。御台様、娘の分も、私からお祝い申し上げます。

後日、娘とともにお祝いの、挨拶に伺わせてくださいませ。お昌殿

が教えてくださらなければ、とんだ無礼を働くところでした

「ありがとうございます、岩瀬のかみ様。こちらこそ、昌の無礼の

数々、お許しいただけましたら幸いです」

「後室御前、よろしいのですか?」

「鏡田、落ち着きなさい。よろしくですね、お祥?」

「え、ええ。御台様、おめでとうございます。お昌殿、教えてください」と

さつてありがとうございました

岩瀬の姫は何とかそれだけ言い、頭を下げた。それに琳も目礼を返し、琳と昌は岩瀬の姫のもとを去った。

「お昌、今日のことを、私はお屋形様に言わない。きっと、の方も言わないと思つ。の方は、そういう方だと思うの」

「昌もそう思います。御台様、差し出た真似をして、申し訳ありませんでした」

「うん。こんなことは、もう一度としないで。けれど、お昌が私のことを思つて行動したのだということは、分かっているから」

「申し訳ありません」

「お昌」

「はい」

「私、の方に、御台様と呼んでほしくなかつた。側室なのに、御台様と呼ばれる人に、御台様と呼ばれたところで、私は自分がみじめに思えたわ」

琳の涙が、ぽつりといぼれ落ちた。静かに涙を流す琳の肩をそつと抱いた。琳の肩は細く頼りない。まだ十六歳の少女だというのに、この身には佐竹家のお世継ぎを宿しているのだ。義宣にとつて初めての子は、琳の子どもだ。岩瀬の姫の子ではない。

琳の涙を見て、昌は岩瀬の姫を寵愛し、琳を不安にさせたる義宣を恨めしく思つた。同時に、琳を脅かすすべてから、琳を守るのだと改めて決意した。

開く花（七）

琳の懷妊を知つてから、義宣は常陸に追放していた憲忠を呼び戻すことにした。譜代家臣たちは、憲忠の帰参にあからさまに嫌な顔をしていたが、琳の懷妊による恩赦だと告げると、世継ぎの存在にすっかり舞い上がってしまい、憲忠のことなどじうでもよくなつたようだつた。伏見の佐竹屋敷に帰参した憲忠を見て、茂右衛門は喜んでいた。茂右衛門は、ここ最近氣落ちしているよつだつたので、心配していたのだ。

「帰参のお許し、かたじけなく存じます。殿のため、『恩に報いるため、それがし身を粉にして働きます』

「呼び戻すのが遅くなつてしまい、悪かつた。だが、追放したはずのお前が、常陸で妻を迎え、子をなしているのが悪い」

「は、はあ。その、何と申し上げればいいか」

義宣が意地悪く言つと、憲忠は申し訳なさそうに俯いてしまつた。政光と宣政は苦笑していたが、茂右衛門は兄のその様子が恥ずかしかつたのか、そつぽを向いていた。

「まあ、いい。子の誕生はめでたいことだ。俺にも、ようやく子ができる。そういうえば、内膳も妾が身ごもつたと言つていたな？」

「はい」

「互いに、男が生まれるといいのだが。いや、女であつてもいいんだ。半右衛門、常陸の父の様子はどうだ？」

「北城様は、それはもうお喜びで、それがしに上洛したら燈明寺に寄進をするように命じられました。北城様は、燈明寺に随分と熱しに帰依なさつているのですな。此度の『ご懷妊も、そのご利益とお思いなのでしょうか？』

「燈明寺か。俺も話には聞いている。父は数年前から、上洛のたびに足を運んでおられるらしい。噂では、俺と同じくらいの年の女と会つていて、それは父の女なのだと、隠し子なのだとか言われて

いるな。くだらん噂にすぎないが」

憲忠の話によれば、父は京の燈明寺への寄進だけではなく、領内の神社や寺も再建を行つてゐるらしい。孫ができ、何か思うところでもあつたのだろう。無事の誕生を願つてのことなのかもしない。義宣も子が無事に生まれることを願つてゐる。もちろん、琳の体のことも心配だ。

琳の懷妊によつて、義宣は琳の父である多賀谷重経が以前から望んでいた、弟の彦太郎の多賀谷家入りを決めた。今回、憲忠が持参した父からの書状によると、父も異存はないらしい。三成に伺いを立てたところ、そちらも異存はないと許しが出た。まだ彦太郎は正式に多賀谷家の養嗣子になつたわけではないが、琳の妹との婚儀を進めているところだ。

重経は居城である下妻城周辺を自領とし、鬼怒川以西の地を長男の三経に与えるつもりのようだ。三経は佐竹家を頼りにする重経とは違い、結城氏への臣属を望んでいるらしく、彦太郎が養子に入ることで、多賀谷家は一つに分かれることになる。多賀谷家の嫡流は、あくまでも三経なのだそうだ。

彦太郎と琳の妹との婚儀の話をすると、琳は父の希望が叶つたことを喜んでいた。少しでも心が軽くなつたのなら、体にもいいだろう。琳の腹は、よく見ると膨らんでいるような気もする。

だが、初めての子に喜んでばかりもいられなかつた。醍醐の花見以来、床に就くことの多くなつた秀吉だが、近頃では起き上がることも難しくなつてゐるのだそうだ。体のあちこちの痛みを訴え、涙を流していると聞いている。誰も口には出さないが、秀吉に死が間近に迫つてゐることは明らかだつた。

自分の死後のために、秀吉は五人の大老と五人の奉行を新たに置いてゐる。五大老の一人だつた小早川隆景亡き後は、上杉景勝が大老となつた。上杉家と佐竹家は、先代の謙信のころから誼を通じてゐる。義重は謙信から刀を贈られており、その刀を大層大事にしていた。義宣に家督を譲る時に刀とともに譲られた。その刀は長いば

かりで、使い勝手が悪かったため、義宣は刀を短く加工して脇差しにしていた。その方が使いやすかつたのだ。そのことを知った時の父の落胆ぶりはすさまじいものだつた。武士の魂に何をするのだ、と怒鳴られたものだ。

そのような縁があつて、代替わりをした現在も、義宣と景勝は良好な関係を築いていた。景勝が大老になつた時は、祝いの言葉を述べに上杉屋敷まで出向いている。その時の景勝の話では、秀吉はもう一月もつかどうか、というほど病状が進んでいるようだつた。

その後、上洛している大名たちは伏見城に集められ、秀頼への忠誠を示すために血判誓紙を作成させられた。同時に、大名同士の私婚禁止、同盟禁止などの新たな政令も定められた。このような誓紙を何枚作つたところで、どれほどの効果があるものか、とは思うが、義宣も親指を切り血判を押した。秀頼へ変わらぬ忠義を誓うこと自体には、異存はない。諸将が血判を押していくところを、三成が監視していたのだが、三成は以前見た時よりもやつれていた。それに反するように、五大老の中の最有力者である徳川家康は、福々しさを増してこるようだつた。

誓紙を提出し、屋敷へ戻るゝとすると、三成に呼び止められた。

「佐竹侍従殿、此度は奥方の『ご懷妊』、おめでとうございます」

「ありがとうございます。」ちらりと、弟の多賀谷家への養嗣子の話、「ご承諾かたじけない」

「いえ。」この話をした時、ちょうど殿下は『ご加減』がよろしかつたのですよ。佐竹侍従の好きなように、との仰せでした

「殿下の『ご加減』は、それほどまでによろしいのですか？」

この聞き方は、秀吉に対しても無礼にあたるかもしれないが、話に聞いているよりも秀吉の具合がよさそうなので、義宣は驚いたのだ。

「稀には。しかし、ほとんどの場合は佐竹殿もお聞き及びのとおりござります」

三成はこめかみを押さえてため息をついた。ほとんど寝ていないのである。目の人には隈がくつきりと浮かんでいる。

「殿下は、しきりに内府に秀頼様のことをお頼みしておられるが、内府がどう思つていいことやら。涙を浮かべて、殿下のお言葉に領いてはいるのですが。佐竹殿は、内府と隣国でしたな。内府には、くれぐれもご用心なさいませ。あの狸、何をしてかすか先が読めぬ『忠告、痛み入ります』

家康を警戒するようにと告げると、三成は忙しそうにその場を去つて行つた。おそらく、昵懇にしている大名たちに家康を警戒するようになつて回るつもりなのだろう。秀吉の死期が迫り、三成は秀吉に次ぐ実力者を警戒している。義宣は、家康のことはあまり好きではないが、三成のような警戒心を持つてはいなかつた。義宣が家康を好いていないのは、ただ単に源氏を称して大きな顔をしているから、という個人的な感情によるものだつた。だが、隣国が家康の治める大国であるということに関しては、義宣も警戒心を抱いてゐる。家康が何か考え方起こし、攻め入られたら到底太刀打ちできない。三成に言われた通り、義宣ももう少し家康を警戒した方がいいのだろう。

屋敷に戻ると、祥の侍女の鏡田から、祥が義宣の渡りを待つてゐる、と告げられた。ここ数日、祥は義宣の渡りを自ら願つてゐる。琳の懷妊が分かつてからも、以前と変わらず足を運び、以前と同じ態度で接しているのだが、どうしたのだろうか。祥にも、特に変わつた様子は見られなかつた。いつも通り、義宣を笑顔で迎えていたはずだ。

母と小大納言には、祥たちにはまだ琳の懷妊を告げぬようにと口止めしてあるし、琳や昌が祥にわざわざ告げに行くはずがない。こちらも口止めをしてあるのだ。

秀吉の死が迫り、心に余裕をなくしつつある状況で、祥に琳の懷妊を知られたくなかつた。

今まで、鏡田に祥の願いを告げられても、多忙を理由に断つたが、そろそろ祥のもとへ行つた方がいいかもしない。今日は登城して身も心も疲れているが、祥の顔を見れば疲れも癒えるだろう。

琳の懷妊は嬉しいが、それと祥を可愛いと思うことは別だ。

今夜は祥のもとへ行くと告げると、鏡田は頷いて、急いで奥へと戻つて行つた。

開く花（ハ）

昌が御台の懷妊を祥に告げに来てから数日後、祥は養母とともに御台に祝辞を述べに行つた。御台は、昌の行動を詫び、昌も謝罪の言葉を口にしていたが、昌の表情にはどこか勝ち誇ったような印象を受けた。

その後、大御台のもとへも祝辞を述べに行くと、大御台は祥たちが知るよりも以前から、御台の懷妊を知っていたらしく、早く孫の顔が見たいものだと、喜んでいた。どうやら、奥の女たちの中で、御台の懷妊を知らなかつたのは、祥と養母と鏡田だけだつたらしい。義宣が口止めしていたのだろうか。

「まったく、あのお昌という女は、姫様に対して無礼でしたこと。御台様は、『自分の侍女の監督もできぬのでしょうか』

「鏡田、もうお昌殿のことを言つのはおやめなさい。きっと、鏡田もわたしが同じ立場に立たされたら、お昌殿のことを言えぬようなことをしたと思うわ」

「それは、そうかもしだませぬが。それにしても、お屋形様もお屋形様です。何故、姫様に御台様のご懷妊を内密になさうとしたのか」

先日の騒動以来、鏡田は昌と義宣に對して腹を立てていた。祥も、昌の言動を良いものだとは思えなかつたが、それよりも義宣が祥に御台の懷妊を内密にしていたことが心に引っかかつてゐる。

「お養母さま、お屋形様はなぜわたしに内密になさうとしたのでしょうか？ 殿方とは、そのようなものなのでしょうか？」

「さて、それは私にも分かりかねます。亡き夫には側室がいませんでしたし、何より私は女の身ですからね」

養母に助けを求めたかったのだが、はぐらかされてしまった。これは、自分で考へる、ということだ。確かに、義宣と祥の問題で養母に助けを求めたとしても、養母は義宣ではないのだから、どうす

ることもできない。

「お祥は、義宣殿に御台様の「」懷妊を内密にされて、どう思つたのですか？」

「わたしですか？最初は、なぜだらう、とひたすらに思つていました。本当に、なぜなのか分からぬのです。今は、疑問に思つだけではなく、悲しいと思つてもいます。」

「それは、何故ですか？」

「わたしはお屋形様を愛しい」と思つていて、きっとお屋形様も同じ気持ちでいらっしゃるのだろうと、思つているからなのだと思います。」

「そうですよ。事実、お屋形様の「」寵愛が深いのは、御台様よりも姫様です。誰が見ても分かることではありませんか」

「鏡田、そのような言い方は、よろしくありませんね」

「申し訳ありません、後室御前」

鏡田の言つように、義宣にそこまで深く寵愛されているのかは分からぬが、少なくとも義宣と祥は、互いのことを他人とは違った存在だと思つてゐるはずだ。少なくとも、祥は義宣を特別な存在だと思つてゐる。腹を立てたこともあつたが、母の愛を求めて泣いた義宣を、愛しいと心から思つてゐるのだ。義宣も、祥のことを憎からず思つてゐるといふことは伝わつてくる。だからこそ、義宣の考えが理解できなかつた。

義宣が何を考えているのか知るために、義宣と話がしたかつたのだが、義宣は多忙を理由に祥と会おうとはしなかつた。鏡田に何度も義宣への取り次ぎを頼んでいるが、義宣の渡りは実現してゐない。確かに忙しいのだろう。奥にも秀吉の病状が悪いといふ話は聞こえて來ている。だが、多忙だけが理由なのだろうか。大御台の話と御台の態度から判断するに、義宣は御台の懷妊を知つてからも、祥のもとへ普段と変わらぬ様子で足を運んでいた。義宣の渡りがなくなつたのは、昌が祥のもとへ来てからだ。

偶然なのかもしれないが、御台のことがあり、祥に顔を合わせたく

なくなつて、義宣が祥の希望に応えてくれないのかもしれない、とも思えた。

だが、祥は義宣と話がしたい。一時でいいから時間を作ってくれないか、と何日も前から頼んでいる。それでも義宣は、なかなか会いに来てくれなかつた。何度も義宣へ話を通しに行く鏡田は、口を重ねることに不機嫌になつていつた。

そのような日を何度も重ねるうちに、毎日不機嫌顔で奥に戻つて来る鏡田が、満足げな表情で戻つて来た。今夜、義宣の渡りがある。突然のこと驚いたが、祥は自室で義宣を待つた。義宣に尋ねたいこと、言いたいことを胸の内で整理していくうちに、足音が近づき、部屋の前でぴたりと止まつた。

「祥、久しうりだな」

襖が開けられ、義宣の声がした。義宣の機嫌は悪くなさそうだったが、どこか疲れているような気がする。

「義宣さま、お話ししたいことがあります」

「突然だな。それは、今夜話さなければならぬのか?」

祥が真剣に話があると言つているのに、義宣は面倒そうに苦笑した。疲れているから、祥の話を聞くのは面倒だと思っているのだろうか。祥は、大事な話があるから何日も義宣に来てほしいと頼んでいたのだ。今夜話さずに、いつ話すというのだ。義宣の機嫌が悪くなるかもしれないが、祥は構わず話を続けた。

「御台さまのことについて、お話ししたいのです」

「御台?」

何事もないようにふるまつてゐるが、一瞬義宣の眉がぴくりと動いた。祥はそれを見逃さなかつた。

「御台さまのご懐妊、おめでとうござります」

そう言つて頭を下げるため、祥には義宣の顔は見えなかつたが、室内の空気が一瞬にして変わつたのは分かつた。義宣に肩を掴まれ、顔を上げられた。義宣の顔には、焦りと苛立ちが見えた。

「誰から聞いた」

「自然と耳に入りました」

「自然と？」

眉間に深い皺を刻み、不機嫌そうに義宣はため息をついた。もしかしたら、祥の言葉を嫌味だと思ったのかもしない。そう受け取られても仕方がないかもしねいが、祥は義宣に子ができることは本当にめでたいことだと思つてゐるのだ。義宣にとっては初めての子で、佐竹家にとつては大事なお世継ぎになるかもしねいのだから、めでたいと思わないはずがない。

ただ、義宣が御台の懷妊を知りながら、それを祥に隠そつとしていたことが問題なのだ。

「義宣さま」

「何だ」

「どうして、わたしに教えてくださいなかつたのですか？」

「何を」

「御台さまが、『懐妊されたことです』

祥が何を言いたいのか分かつてゐるくせに、逃げるようこ、何を、と義宣は言つ。なぜ、そこまでして祥に御台の懷妊を隠しておきたかったのか、理解できない。

「……最近忙しかつたから、うつかり忘れていたんだ」

「嘘

「嘘じやない」

「義宣さまは、御台様の『懐妊を知つてからも、わたしのもとへいらっしゃつしゃつていたはずです。その時に、お話しくださればよかつたのに』」

団星をさされたせいなのか、義宣は祥の言葉を聞いて黙り込んだ。あからさまに不機嫌になつた義宣の態度と、この期に及んでも祥に嘘をつこうとすることに、だんだんと腹が立つてきた。

「どうして教えてくださらなかつたのですか？わたしが

「嫌だつたからだ」

「え？」

黙り込んでいた義宣が、祥の言葉を遮りて口を開いた。何が嫌だつたのだろうか。

「お前が、こうして嫉妬をして俺を問い合わせるだらうと思つたから、教えるのが嫌だつたんだ。御台が身ごもつたのは、祥を側室に迎えた後だ。祥を側室にしてからも、俺は御台のところへ足を運んでいた。そのことについてお前は怒つて、俺を責めているんだろう?」

ため息を深々とつきながら、眉間を抑える義宣に、啞然として祥は言葉も出なかつた。義宣は何を言つてゐるのだ。祥がいつ、義宣が御台のもとへ足を運んでいたことに対する嫉妬し、義宣を攻めたというのだ。

「祥が怒るくらいなのだから、御台は泣いているかもしぬないな。あいつに泣かれるのは困る」

口には出さなかつたが、義宣の言葉や態度から、祥のことも御台のことも面倒だと思つてゐるところが伝わってきた。御台と義宣がどのような関係を築いてゐるのか祥は分からぬが、義宣の態度が腹立たしかつたし、自分よりも年下の少女のことが氣の毒に思えた。

「まさか、義宣さまにそんなことを言われるとは思いませんでした」「祥?」

「わたしは、嫉妬してこんなことを言つてゐるではありません。あなたがわたしに何も言つてくださらなかつたことが悲しくて言つてゐる。わたしと義宣さまは、まだ出合つて幾月しか経つていませんけど、時など関係なく、わたしはあなたが愛しいと思つてゐし、あなたもわたしのことをそう思つてくださつてゐると思つていました。わたしたちの間には、確かに信頼と呼んでもいいものが生まれたと思つていました。それなのに、御台さまがご懐妊しているとわたしが知つたら嫉妬をするだらうから、それが面倒だと思われていたなんて、悔しくて、悲しい」

話している間にだんだんと声が大きくなり、最後は叫ぶような声になつてしまつた。それに、話しているうちに感情が昂つてきて、

涙も滲んだ。義宣は冷めた目で祥を見つめていた。

「だから、これが嫉妬しているといふことなんだらう?」

「違うわ」

何も分かつていない義宣の言葉に対し否定の言葉を叫ぶと、浮かんでいた涙が零れ落ちた。一度零れてしまつて、涙はもつ止まらなかつた。祥の頬を伝い、握り締めた手の甲に落ちる。

「嫉妬ではありません。確かに、義宣さまのお子を身もられた御台さまが、羨ましいという気持ちがないとは言いません。御台様にできて、なぜわたしにはできないのだろう、とも思います。けれど、違うの。わたしが言つているのは、あなたがわたしに隠しごとをなつたこと。しかも、知つたらわたしが嫉妬するだろう、などという理由で。それが、悔しくて悲しいのだとわたしは言つているのです」

涙ながらに訴える祥に、義宣はため息をついた。今日だけで、いつたい何度も義宣はため息をついた。祥に一瞥を投げ、義宣は立ち上がった。

「義宣さま」

まだ話は終わっていない。引き留めようと/orして義宣を呼んだのが、義宣は振り向くことはなく、ただ襖の前で一度立ち止まつた。

「これだから、女は面倒なんだ」

小さく呴かれた言葉には、お前だけは違うと思つていたのに、といつ響きも含められているような気がした。その言葉は、祥にとって衝撃だった。義宣にとつて、祥は一体何だったのだ。

「どうして」

振り向こうとしない義宣の背中に、どうして、と言葉を投げかけ

る。それでも義宣は振り向かなかつた。

「どうして、あなたは互いに理解しようと、歩み寄ろうとなさらないの。どうして、すぐにごく自分の殻に閉じこもるの?」

祥は、義宣の性格には多少の難があると思いながらも、それも義宣という人間の一部なのだと思います。義宣を愛しいと思つていた。義

宣も、祥にどのよつたな面があつても、それも含めて祥を憎からず思つてくれていいのだと思っていた。そうでなければ、自分の頬を叩いた女を、側室にするだらうか。だが、義宣は自分に都合が悪くなると逃げよつとする。なぜ、話しあおつとしないのだ。歩み寄るうとしないのだ。自分の思い通りにいかなければ、もつどりでもよくなつてしまふのか。話をする価値すらないと義宣は思つているのか。悔しい。悲しい。所詮、祥など義宣にとつてその程度の存在なのだと思い知られたようだ、悔しくて悲しくてたまらなかつた。襖が開いて、閉じる音がした。急いで廊下に出てみたが、義宣はもう、いなかつた。

開く花（九）

義宣と口論をしてから、義宣は一度も祥のもとを訪ねようとしなかつた。以前、祥が義宣の頬を叩いた時も、義宣は祥のもとへしばらく来なかつた。あの時と同じだ。

義宣との口論のことを、祥は養母にも鏡田にも知られないようにしていたが、義宣の渡りがないことで、義宣との間に何かがあつたことは知られてしまつてゐるだろう。なるべく表情や態度に出さないようにはしてゐるつもりだが、祥の様子もおそらくここ数日おかしいのだと思う。養母も鏡田も、いつも心配そうに祥を見ていた。

「姫様、先日のお屋形様のお渡り以来、お元気がないようですが、何かあつたのですか？ わたくし、心配でなりませぬ」

「鏡田、ありがとう。心配をかけてごめんなさい。もしかしたら、わたしはお屋形さまに嫌われてしまつたのかもしれないわ」

「お屋形様が姫様をお嫌いになる？ そのようなこと、信じられません。そうですよね、後室御前」

「ええ。私もお祥の話に驚きました。義宣殿はお前のために形だけとは言え、祝言まで挙げてくださつた。その義宣殿が、どうしたといつのでしよう？」

顔を見合させて首を傾げる一人に、嫌われてしまつたかもしだい、などと簡単に言うべきではなかつたのだと思った。だが、誰かに行き場のない自分の気持ちを聞いてほしいという思いもあつたのだ。養母と鏡田ならば、祥の話を聞いてくれる。

「わたし、お屋形さまに御台さまのご懐妊を黙つていた理由をお尋ねしました。お屋形さまは、最初忘れていたのだとおっしゃいましたが、わたしが問い合わせたら本当のことをお話しくださつた。お屋形さまは、わたしが御台さまのご懐妊を知って、嫉妬をするのが嫌だつたのだそうです。泣いてすがりつとしたわたしに、お屋形さまは、だから女は嫌なのだ、と」

思い出して言葉にするつむじ、あの時の悲しさと悔しさが蘇ってきた。祥を見る義宣の田には、祥に対するあたたかい愛情のようなものを感じられなかつた。面倒なことになつた、と思つていてしか伝わつてこなかつた。

「何と酷いおつしやりよつでしょ。姫様は何も悪くないではありますか。そもそも、御山様の『懐妊を内密に』よつとなさつたお屋形様が悪いのです。それなのに、これではまるで姫様が悪によつに聞こえます」

「鏡田、ありがとう。けれど、わたしの話はわたしに都合のいいように話しているだけだと思つわ。きっと、お屋形さまのお話を聞いたら、また違うのだと思つ」

「そうどうしても、お屋形様のお言葉はあまりにも酷い。姫様、お屋形様のような殿方は、おそらくずっとそのまま『いや』ですよ。真剣につきあつて、痛い目見るのは女の方と決まつています。わたくしは、お屋形様にこれ以上深入りなさるのはどうかと思います」鏡田が祥を心配してくれる気持ちはあるがたいし、言いたいことは分かる。義宣のあの性格は、一朝一夕で改善されるものではないだろうし、これ以上深入りして傷つくのは祥だけなのかもしない。だが、なぜ義宣は祥にあのようなことを言つたのか、何を考えていたのか、今は何を思つているのか、知りたいと思う。義宣が祥のことをどう思つて、あの行動と言葉に至つたのか、それを知らなければ、祥は納得できなかつた。

「お祥は、どうしたいのですか？ 鏡田の言つとおり、義宣殿とは距離を置きたいと思いますか？」

「いいえ

「まあ、姫様

「確かに、わたしはお屋形さまのお言葉に傷つきました。もうあの方のことなど知らない、と思わなかつたと言えば嘘になります。しかし、わたしはまだ諦めたくないのです」

「諦めたくない、とは？」

「鏡田の言つとおり、これ以上お屋形さまに深入りすれば、わたしは傷つくるかもしません。嫌な思いもするでしょう。しかし、わたくしはまだ何も分からぬ。お屋形さま自身のことも、わたしのことなど思つていらっしゃるのかも。今ここで、わたしがお屋形さまのことを諦めてしまえば、お屋形さまは一度とわたしのもとへはいりつしゃらないと思います。それが、わたしは嫌なのです。自分でも、なぜなのか分かりませんが、わたしはまだ、お屋形さまが愛しい」

泣きたい訳ではなかつたのだが、涙があふれてこぼれ落ちた。涙を拭おうとするが、祥の手が届くよりも先に、養母に涙を拭われていた。

「お祥、相手を愛しいと思う心は、理屈ではありません。自分でどうにかできるものではないのです。お前が義宣殿を愛しいと思う気持ちが少しでもあるならば、諦めるのはお止しなさい。お前は、義宣殿を理解したいのでしょうか？ なりませ、辛くとも話し合わなければなりません。わあ、もう泣かないで。お前が泣くと、私も鏡田も悲しくなります」

「ありがとうございます、お養母さま」

義宣のことを諦めたくないといつも気持ちは真実だ。だが、実はもう義宣のことなど考えずに、このまま終わりにしてしまおうかとう考へが、心の片隅にあつたことも否定できない。養母の言葉で、祥の心は決まった。たとえどんなに傷ついても、納得できる答えを見出すまで、祥は義宣を諦めない。

理由など分からない。自分でも、やめておいた方がいいとも思つ。だが、祥は義宣のことが、今でも確かに愛しいのだ。

祥に泣かれてから、義宣は琳のもとへ真相を確かめに行つた。祥に琳の懷妊を知られたのは、昌が祥に教えたからだと思ったのだ。だから、琳も義宣が祥に内密にしようとしたことを知つて、泣いて

いるのではないかと思つた。

だが、琳も昌も特に変わった様子は見られなかつた。義宣も、そんな二人に祥に教えたのかと聞くことはできなかつた。琳は義宣を恐れているのだから、もし義宣が機嫌を悪くするようなことをしたのならば、必ず態度に現れるはずだ。その琳の様子がおかしくないということは、この二人は何もしていないということなのだろう。

琳の腹は、前に見た時よりも膨らんでいた。腹の中の子は、確実に成長しているのだ。今の琳に負担になるようなことは言つべきではない。祥のことは、何も言わなの方が多いはずだ。体を大事にするように告げると、琳はかすかに微笑んで頷いた。

祥の言つたとおり、おそらく自然と耳に入つたのだ。人の口には立てられない。いくら義宣が口止めをしたところで、いずれ知られてしまつていたに違ひない。それが、思わぬ形で、予想以上に早く知られてしまつただけのことだ。

だが、祥にはなるべく知られたくなかった。知つてしまつたら、祥は琳のもとへ通つっていた義宣に対し、怒るに決まつてゐる。昔、手をつけた女たちはそうだつた。側室にしてほしいとせがまれたり、ほかの女とも関係を持つていると知ると泣き喚いたりした。だから、女は面倒だと思っているのだ。祥も女である以上、ほかの女たちと同じなのだろうと思つていた。義宣の予想は外れなかつた。祥は泣いていた。

祥は、八重とも琳とも違つた、優しい女だつた。そのことに、もしかしたら祥はほかの女とは違うのではないか、という期待があつた。だが、結局は祥も女であることに変わりはなかつたのだ。

落胆する気持ちが強いが、義宣は祥の言つた、義宣を愛す、といふ言葉も忘れられなかつた。確かに、その言葉通り祥は義宣を愛していたように思う。それが、義宣は心地よかつたし、癒されていた。そのことを思い出すと、祥を泣かせてしまつたことに対する罪悪感を覚えもする。

謝つた方がいいのだろうか。どうやら、義宣は祥を怒らせて、泣

かせてしまつたらしい。謝つて祥の気が済むのならば、謝りつゝ思
う。やはり、祥がいなければどこか寂しい。

あの夜以来、しばらく祥のもとへは足を運んでいないため、気ま
ずさはあつたが、義宣は鏡田に祥のもとへ行くと云えるように命じ
た。鏡田の態度は常と変わらなかつたが、どこか義宣に対する冷た
さを感じた。

開く花(十)

祥の部屋の前までやつてきて、義宣はためらつていた。謝らなければならぬだらう、と思いやつて来たのだが、何と言えばいいのか分からぬ。思い返せば、他人に対しても自分の非を認めて謝つたことなど、ほとんどないような気がする。そもそも、そこまで他人と深く関わりあつてこなかつたのだ。このような時、どうすればいいのか分からぬ。

とりあえず、ここで突つ立つても始まらないことは分かる。

裸に手をかけて開くと、祥の背中が見えた。

「祥」

声をかけても、祥は振り返らなかつた。真つ直ぐに伸ばされた背中はかすかにも動かず、義宣の存在を無視してゐるよつとも見えた。「祥、怒つてゐるのか？」

怒つてゐるから振り向かないのだらう。怒つてゐるか、と聞いても祥は全く反応しなかつた。これは、本氣で怒らせてしまつたようだ。以前、祥を怒らせて頬を叩かれたことがあるが、その時とは様子が違う。静かに深く怒りに燃えているように見える。

「先日は、すまなかつた」

祥には見えないが、わずかに頭を下げて謝ると、祥の背中が動いて、義宣の方を向いた。真剣な目に真つ直ぐ見据えられる。自分が酷く悪いことをしたような気持ちになつた。

「義宣さま」

「何だ？」

「あなたは、『自分がなぜ謝られているのか、理由を分かつていらつしやるの？』

「お前を泣かせたからだ」

祥を泣かせたから、謝らなければならないと思つた。だから謝つてゐる。だが、その答えに祥は表情を曇らせた。謝れば祥の気が済

むだらうと思ったのだが、それだけでは許されないのだろうか。ほかに、祥は何を望むというのだ。義宣は祥に落胆したものの、自分の非を認めて謝罪しようとしているといつのこと。

「では、なぜわたしが泣いたか、その理由はお分かりですか？」
「それは、俺が、御台さまが身いもつたことを祥に教えたからだろう？」

「わたしが、御台さまの『懐妊を内密にされて、なぜ泣いたのか。その理由はお分かりですか？』」

「同じことを聞いてどうする？ 俺が教えたから、泣いた。そうだろう？」

「そうですか」

そうですか、とはどういふことだ。確かに祥は、義宣が琳の懐妊を教えたことを怒って、泣いていたはずだ。違うと否定していくが、その怒りには琳に対する嫉妬もあるのだと義宣は思つてゐる。違うのだろうか。ますます表情を曇らせる祥に、義宣は眉間に皺を寄せた。自分は何か間違つたことをしているのだろうか。間違つてゐるのだとしたら、何が間違つてゐるのだ。

「今日は、もうお帰りください」

「何故だ？」

田を伏せて再び義宣に背を向けようとした祥の肩を、義宣はとつさに掴んだ。祥は悲しげに義宣の田をじつと見つめる。その田は、義宣を責めているようだった。謝つているのに、なぜそんな顔をされなければならない。

「あなたは、わたしが泣いた理由も分からず『謝つていらっしゃるからです。ただ形として謝つているにすぎません』

「そんなことはない」

今まで女に泣かれることは面倒だと思つていた。謝らうと思つたことなどなかつた。だが、祥は違うのだ。謝つて、関係を修復したいと思つた。祥がいないのは寂しいと思つた。だから謝つてゐる。「義宣さまは、どうしてわたしに謝罪なさるの？」

「お前を泣かせたからだ」とやつをも言つただろう。

「そりでなくて、謝ることにどうのよつた意味があるのですか？」

「お前との関係を修復したいと思つたからだ」

「修復とは？」

「以前と同じよう、俺の側についてほしい」

「そうですか」

まだ。そうですか。最初から、どうも祥との会話が噛み合つていらない気がする。それはなぜだ。なぜ、祥は義宣が謝つているというのに、その謝罪を受け入れようとしない。義宣の考える謝罪と、祥の要求する謝罪は違うのだろうか。

「義宣さま」

「何だ？」

「あなたは、あなたを愛しているわたしが好きなのね

「どういう意味だ？」

「あなたにとって、都合のいいわたしが。心など捨てて、あなたを愛するわたしが好きなのですね」

「何だと？」

「以前のよう、とは、あなたを愛するわたしに戻つてほしいといつ」と？

何を言つてゐるのだ。謝りに来たのに、かえつて話が拗れている。祥は、何に怒つているのだろうか。分からぬ。何を言えばいいのか、どうすればいいのか分からぬ。義宣にとって都合がいいとはどうこういことだ。心を捨てると、義宣は一度も言つていないではないか。

「わたしはあなたを愛しく思つています。だから、あなたに嫉妬をするだらうと思われて、面倒だと思われて、それが悲しくて、悔つて、情けなくて泣いたのです。わたしは傷つきましたが、怒つているわけではありません。結局あなたは、それを分かつてくださらなかつたのね」

「祥

「あなたが好きなのは、あなたを愛しているわたし。それも、あなたにとつて都合のいい愛し方をするわたし。わたしの心をすべてあなたに捧げて、嫉妬もしなければ、あなたにとつて都合の悪いこともしない。ただ、わたしはあなたを愛するだけ。そんなわたしを、あなたは求めているのでしょうか。それでは、心の存在しない人形と変わりありません。義宣さまのわたしに対する要求は、あまりにも大きすぎます」

「俺は」

「何ですか？わたしの言っていることは、間違いですか？ならば、言葉で説いてください。態度で示してください。あなたはわたしに愛を望んだ結果、ただ奪おうとしているに過ぎないのではないということを。あなたもわたしを愛しいと思つてくださっているのだと」何か言いたかったが、言葉が出てこなかつた。何を言つても言い訳にしか聞こえないだろうし、そもそも言い訳すら思ひ浮かばない。何を言えばいいのか、本当に分からぬのだ。祥は何を言つている。義宣は祥を人形とは思つていないし、祥から何かを奪おうとは考へてもいられない。確かに、以前はもののように扱つたこともあつたが、祝言を挙げてからは、大事にしてきたつもりだ。それに、傷ついたのは祥だけではない。義宣も同じだ。

言葉に詰まつた義宣を見て、祥は悲しげな顔のまま苦笑したように見えた。その表情は、悲しげだつたが、どこか義宣を憐れむようでもあつた。

「結局、義宣さまは誰よりも自分が好きなのだわ」

その一言に、胸を刺されたような気持ちがした。違う、と言いたかつたが、否定の言葉はなぜか口から出なかつた。祥の肩を掴んでいた手から力が抜けた。祥は目を伏せて、義宣から視線をそらした。祥の目には涙が光つてゐるよう見えた。

「悲しいわね」

この言葉が義宣に対して言つたものか、それとも祥自身に対して言つたものか、どのような意味を持つのか、分からなかつた。目を

伏せた祥からは義宣と話し合ひの意思を感じられず、義宣もこれ以上話す言葉が見つからなかつたため、何も言わずに部屋を去つた。祥の部屋を出てから、ずっと頭の中で、悲しいわね、という祥の言葉が響いていた。今後どうすればいいのか、義宣にはまったく分からぬ。非を認めて謝罪したはずなのに、かえつて祥にまた泣かれてしまった。なぜ、このような結果になつてしまつたのか、理解できなかつた。

はなどの婚約が成立した時、はながらもらつた文に返書を出すと、はながらまた文がきた。はなの文は、字がのびのびとしていて、紙いっぱいに書いても、まだ書き足りないというほどに、たくさんのことが書かれている。内容は、どれも幼い少女らしく、日常の些細な出来事や近況なのが、そこから読み取れる天真爛漫さに、茂右衛門は微笑ましい気持ちになっていた。

はながらの文はまだ二通目だが、たつた二通からでもはなの人柄が見える。はなは、まだ見ぬ許嫁である茂右衛門を、一心に慕っているようだ。はやく会いたい、と結びには書かれている。そんな文を見ると、何だかむず痒い。もしかしたら、幼い金阿弥だった頃の茂右衛門を見る義宣の気持ちというのは、このようなものだったのかもしれない。今思えば、金阿弥だった頃は、おかしいくらいに義宣を慕っていた。

お前だけ、といつ言葉を信じて、金阿弥にも義宣だけだと思つていた。何と幼く盲目的で、愚かだつたのだろうか。

「茂右衛門」

「兄上、何がご用ですか？」

はながらの文を懐にしまい、茂右衛門は顔を上げた。兄にはなの文を見られると、冷やかされるのだ。自分も妻には惚れぬいているくせに、許嫁ができた茂右衛門を冷やかして楽しんでいる。

「いや、俺ではない。殿がお呼びだ」

「殿が、私を？」

何か茂右衛門に言いつけの仕事があるのだろうか。義宣は、茂右衛門を突き放した後も以前と変わらずに、茂右衛門を重用してくれている。だから、突然呼び出されることは珍しくない。だが、兄に茂右衛門を呼ぶように頼むくらいならば、兄に仕事を言いつければいいはずだ。何か、別の用事のような気がする。

呼び出しに応じて義宣のもとへ行くと、茂右衛門が声をかける前に義宣に手を引かれ、部屋に引き入れられた。突然引っ張られ、茂右衛門は転びそうになってしまった。だが、義宣の腕に抱きとめられたため、茂右衛門が転ぶことはなかった。

なぜ、義宣は茂右衛門の手を引き、抱きとめるのだ。まるで、金阿弥だった頃のようではないか。義宣は、何を考えている。

「失礼いたしました、殿」

頭を下げ、義宣の腕から抜け出そうとしたが、義宣は茂右衛門を放そうとしなかつた。驚いて顔を上げると、義宣は思い悩んでいるようだった。

「殿」

「何だ？」

「なぜ、私をお放しにならないのですか？」

「放したくないからだ」

「なぜ、私をお呼びになったのですか？」

「やはり、俺にはお前だけだからだよ」

そう言つて義宣は、茂右衛門を抱きしめようとする。茂右衛門は何とか腕を突つ張り、義宣の腕から抜け出した。一体、何のだ。義宣は何がしたい。俺にはお前だけ、だと。その言葉を信じてきた金阿弥を捨てて、はなの許嫁である茂右衛門にしたのは誰だ。今更、何を言つているのだ。義宣の理解できない言動に、茂右衛門の心は乱れた。

「もう、私のことは呼び出さないと言つたのに」

「ああ、そう言つた。だが、それは寝所に呼ばないと言つただけのことです、ここに呼ばないと言つていない」

「それは、屁理屈というものです」

「茂右衛門？」

「いい加減にしてください。私のことを、馬鹿にしないでいただきたい。私は貴方の玩具ではありません。都合のいい時だけ構うなんて、やめてください。昼間から呼び出して、何をお考えですか。私

がいつまでも僧形でいるのが不憫だと、貴方は私に髪を伸ばさせたのではないのですか？」

「それは、そうだが」

義宣はきまり悪そうに眉を寄せた。いい加減にしてほしい。なぜ、茂右衛門がこんなことまで言ってやらなければならないのだ。何のために、もう茂右衛門を寝所に呼ばないと決めたのだ。岩瀬御台を愛しているからではなかったのか。それが、義宣が見つけた幸せだったのではないか。あつさりと茂右衛門を部屋に呼んで、そんなものだったのか、義宣の気持ちは。

「私はもう大人です。貴方だけの子どもではありません。私を大人にしたのは、貴方です。それなのに、貴方は勝手です。私の気持ちを考えたことなど、ないのでしょう。今でも、私が貴方だけの金阿弥だと思っていたのですか？」

「俺は今でも、俺のことを一番理解しているのはお前だと思つている」

「私も、今でも貴方のことを理解できているとは思います。だからこそ、あなたは酷いお方だと言つのです」

「酷い？」

「ええ。貴方は、私を可愛がつてくださいました。しかし、それは貴方を一心に慕う私が可愛かつただけなのです。そして、私も同じでした」

義宣は、本当にどうしようもない人間なのだ。弱くて自分勝手で無神経だ。茂右衛門のことなど、何も考えていない。だが、茂右衛門も同じだ。金阿弥だった頃は盲目だった。義宣と何も変わらない。そんな二人が、これ以上の関係を築けるはずがなかつたのだ。義宣に突き放されて、はなと文のやり取りをして、少しずつ分かつてきた。

義宣は今後、岩瀬御台と新たな関係を築くのだろう。御台には子もできた。御台とも、茂右衛門とは違う関係を築くはずだ。茂右衛門も、まだ見ぬ許嫁と義宣とは違う縁を結びたいと思う。

「お呼びになるのなら、私ではなく岩瀬御台様になさってください」「その岩瀬と、喧嘩のようなものをした。なぜ、このようなことになったのか、俺には理解できない。だから、お前を呼んだんだ」

「そうでしたか。やはり、貴方は何と酷いお方なのでしょう」「なぜだ、茂右衛門？」

「ご自分でお考えください。私は、仕事に戻ります。許嫁に文の返

書も書かなければなりません」

「お前は、まだ見たこともない、何度か文をもらつただけの許嫁を、愛しているというのか？」

「分かりません。殿のおっしゃる通り、まだ相手のことを私はよく知らないのですから。だからこそ、理解したい、歩み寄りたい、そのための努力をしたいと思います。私だけでも、相手だけでも、この努力は実を結びません」

義宣は黙り込んでしまった。眉間に深く皺を刻み、ますます思い悩んでいるようだ。義宣は自分が酷いことをしている自覚がない。おそらく、岩瀬御台との喧嘩というのも、義宣に原因があるのだろう。義宣が自分自身で、何が悪いのか、なぜ嫌われてしまったのかもしれないのか、気づかなければ意味がないと思つ。

失礼します、と言い残して茂右衛門は部屋を去つた。義宣には散々偉そうに無礼なことを言つたが、そんなことを言えるのも、義宣が茂右衛門を処罰することはないだろう、といつおこりのためだ。茂右衛門も、まだ義宣から完全に離れることができていない。これが、純然たる主と家臣としての絆となるように、茂右衛門も義宣も努力をしなければならないだろう。

はなからの文を取り出して、茂右衛門はじっと眺めた。仕事が終わつたら、すぐに返書を書こう。まずは、許嫁と新たな関係を築くことから始めるのだ。

開く花(十一)

謝罪を行つたのに祥に受け入れられず、茂右衛門に慰めてもらおうと思ったら、茂右衛門にも拒絶されてしまった。二人とも似たようなことを言つていた。自分は義宣にとつて都合の良いだけの人間ではないのだと、言つていたのだと思う。

祥に言われただけならば、生意気なことを言う女だ、くらいにしか思わなかつたかも知れないが、長年そばに置いていた茂右衛門にも言われてしまつた。義宣は一人がそう感じるような言動をしているのだろう。

思い返してみれば、義宣が祥に琳の懷妊を知られたくなかった理由というのは、祥に嫉妬をされたくなかったからだつた。女というのは醜い嫉妬をするもので、それが面倒だという思いは確かにあつた。だが、それ以上に、祥にはひたすら義宣を愛し慰めるこことを期待していたのかも知れない。おそらく、ほかの女とは違う、觀音のような女であることを期待していたのだ。

茂右衛門も、もともと金阿弥をそばに置いたのは、自分だけを見つめる無垢な存在を手に入れたかったからだつた。何も知らない子どもだつた金阿弥に手をつけて、後戻りできないようにして、最後は捨てたようなものだ。茂右衛門は、祥が義宣の前に現れたから捨てられたと思っていてもおかしくない。義宣自身は、金阿弥だつた茂右衛門を早く大人にしてやろう、という気持ちから元服させたのだと思つていたが、祥の存在が影響していたのだろう。

この義宣の考えが、祥のことも茂右衛門のことも傷つけたのだとは思うが、それ以外にどうすればいいのか義宣は分からなかつた。愛してほしい、自分で見てほしいと望んだ結果なのだ。ほかに、どうすれば愛情も相手自身も手に入れられるというのだ。まったく分からぬ。

昔、奥の女たちに手をつけた時と同じなのだと思う。あの時、女

のことなど考えていなかつた。自分勝手に、一時の安らぎを求めていただけだつた。今も、祥のことも茂右衛門のことも考えていなかつたから、一人とも傷つけてしまつたのだろう。

奥の女たちに手をつけていた時、ある女に、悲しい、と言われたことがあつた。あの女は、あの後どうしているのか分からぬが、祥も同じことを言つていた。妹のなすには、義宣はずるいと言われたこともある。

昔を振り返ると、今まで義宣は自分本位に他人を傷つけてきたような気がする。八重のことも、傷つけて追いつめていたに違いない。

自分本位に愛情を求めるこの何が悪い。それ以外にどんな方法があるのだ。義宣を理解できない方に問題があるのだ、と開き直りたい気持ちもある。だが、開き直つてしまつたら、もう一度と祥は義宣に微笑みかけてくれないだろう。それどころか、義宣に顔を見せてもらくれないかもしれない。それは嫌だつた。

祥が義宣のことはどう思つているのか、それを思うと恐ろしかつた。今すぐ祥のもとへ行って謝りたいが、祥は義宣の謝罪を受け入れないだろう。どうすれば、祥は義宣を許してくれるのだろうか。祥は義宣に対して怒つているわけではないと言つていたのだから、許しを請うこと自体が間違つているのかもしれない。

茂右衛門に、義宣は酷いと言われた。それは、人を心のない玩具のように扱つていたからか。そうではないということを、祥に示せばいいのか。祥は、祥を愛しく思つていてるのだと言葉と態度で示せと言つっていた。ならば、それを示せばいいのだろうが、方法が分からぬ。愛しいと思ううといふことは、どういうことだ。

祥には、なぜ歩み寄ろうとしないのだと言われた。茂右衛門は、許嫁と理解し合い、歩み寄りたいと言つていた。義宣は以前、祥に自分のことを話そつとして、結局話せなかつた。今こそ、あの時話せなかつた義宣の過去を、祥に話す時ではないだろうか。義宣も、茂右衛門が許嫁と理解し合おうとするように、祥と理解し合つべき

なのだと思つ。

義宣の話を祥が聞いてくれるかは分からぬ。だが、祥の言つて
いた、歩み寄ると言つことは、こういうことなのではないか。今ま
で誰にも話したことのない義宣の過去と思いを、祥に理解してほし
い。それ以外、取るべき道が見つからなかつた。

祥には、母に愛されなかつたのだと話したことはあつたが、八重
のことは何も話していなかつた。祥だけではない。誰にも、八重の
ことは話せなかつた。話すだけではなく、八重が死んでから、八重
のことを考えることすらほとんどなかつた。思い出すのが辛かつた
のだ。

八重の死、八重との生活、八重のすべてがいまだに義宣の心を苦
しめる。だから、意図的に八重のことは考へないようにしてきた。
その八重のことを、祥に話す。話して、何が変わるかは分からな
い。だが、どうすればいいのか分からぬのだ。分からぬのなら
ば、思いついたことを実行するしかない。

夜が更けてから、義宣は祥の寝所に向かつた。向かうことを告げ
てはいられない。鏡田に取り次ぎを頼めば、また嫌な顔をされるのだろ
うし、何より今夜渡ると宣言するのは恐ろしかつた。まるで夜這い
のようだが、奥の者たちを起こさないようにそつと歩いた。だが、
今夜は満月だ。この明るさでは、誰かに見つかってしまうかもしれ
ない。

祥の寝所の近くまで来て、義宣は足を止めた。祥が寝所の外で月
を眺めていた。こんなことが、少し前にもあつた。祥が義宣に対し
て、わたしがあなたを愛すわ、と言つた翌日、義宣が祥の寝所へ向
かつた夜のことだ。あの時、義宣は話したいことがあると言つてお
きながら、結局何も言えなかつた。祥は、話したい時に話せばいい
と言つてくれたのだつた。まるで、あの夜の続きのようだ。

義宣の気配に気づいたのか、祥が義宣の方を見て、驚いた顔をし
た。祥の隣まで歩いて行く間、祥の目はじっと義宣を見つめていた。
「以前も、こんなことがあつたのを覚えているか？」

「ええ、もちろん。あの時は春で、今は秋になつたという違いはありますか」

「そうだな」

義宣は立つたまま、祥の顔を見ていた。月に照らされた祥を見ていて、義宣は跪いてしまいたいような気持ちになつた。

「祥」

「はい」

「話したいことがある」

祥はまっすぐに義宣を見つめている。その視線の強さに、思わず目を逸らしたくなるが、義宣も祥を見つめ続けた。

「聞いてくれるか？」

「はい」

頷いて祥は立ち上がり、義宣を寝所の中へと招いた。障子は開けたままにしたので、部屋の中にまで月明かりが入ってくる。祥は義宣に座るよう勧めたが、義宣は立つたまま、義宣を招いた祥の手を握り締めた。

「俺には、今の御台の前に妻がいた。那須の女だつた」

「ええ。存じております」

八重の話は、のんびりと座つてできるわけがない。祥の手を握つたのは、義宣が不安になつたからだ。突然何を言い出すのかと、祥は驚いているかもしれない。

「こんなことを、祥に言つるのはおかしいとは思つ。気を悪くするだろう。だが、言わせてくれ。あの女は、美しかつた。誰よりも美しいかった。俺は、あの女以上に美しい女を知らない。冷たく誇り高い、美しい女だつた」

「義宣さま？」

自分でも、何を言つていいのだろう、と思う。だが、止まらなかつた。今まで形にすることを避け続けてきた八重に対する葛藤、苦しみ、思いがうまくまとまらずに胸につかえている。いきなり、昔の妻は美しい女だつたと言わても、祥は何と反応すればいいのか

分からないだろ？

「だが、あの女は死んだ」

義宣の手が細かく震えた。声も震えているようだ。絞り出すような声しか出ない。祥は眉を寄せ、黙つて義宣の顔を見つめていた。

「俺が、死なせたようなものだ」

祥の手を強く握りしめ、義宣はその場に膝をついた。祥がどのような顔をしているのかは分からぬ。何を思ったかは分からぬが、息をのむ気配がした。

八重は太田城で自害した。遺書はなかつた。八重の侍女の朝霧から遺言のようなものは聞いたが、義宣に血に染まつた婚礼衣装を渡すように言つていただけだつた。どこまでも那須の女だと言い張るかのような八重が、憎かつた。たまらなく憎かつた。

だが、同時に、心の奥底で思い続けていたのだ。目を背けて考えないようにしていただけで、ずっと思つていた。八重は自害したが、義宣が死なせたようなものなのだと。義宣が、八重を殺したようなものなのだと、思つていた。

膝をつきつねだれる義宣の肩に、祥の手がそっと置かれた。握り締めていなかつた方の手が置かれたのだ。顔を上げると、祥は義宣の視線に合わせるようにしゃがみこみ、困惑の表情を浮かべていた。

「義宣さま、どうか落ち着いて。順を追つて、わたしにお話しくださいませ」

八重のことを思い出して、落ち着いてなどいられるか、と思つたが、祥の言つとおりだ。感情に任せて話すだけでは、祥に何も伝えられないだろう。落ち着いて話するために、その場に腰を下ろした。祥も向かい合つてその場に座つた。手は、まだ握り締めたままだ。

「先の御台は、名を八重といった。俺がわずか三歳の時に決められた許嫁だった。家の問題で、実際に結婚したのは十六になつてからだつたが」

「お八重さまは、那須家の姫さまでいらっしゃいましたね」

「ああ、そうだ。家臣の中には、なぜ那須家の姫が俺の妻になるのだ、と反対している者もいたようだつた。だが、俺はそんなことはどうでもよかつた。年上の妻の美しさに、年若かつた俺は目を奪われたものだつた」

今でも八重の嫁入り姿が目に浮かぶ。白い打掛がよく似合つていた。その打掛は、六年後に八重自身の血で赤く染まつた。そして、義宣の手で燃やしたのだ。

「八重は、妻として確かに俺に体は開いた。だが、心はいつまでも那須の女のままだつた。俺に心を開いたことなど、一度もなかつた。微笑みかけたことも、なかつた。那須から同行している侍女には、いつも笑みを見せていたといふのに。母が中務に命じて密かに政宗を救つた時も、八重は慰めるどころか、自分の兄は戦に負けることなど無いのだと言つていた。それから数年経つて、再び母が中務に命じて政宗を助けた時も、八重は俺を拒むだけだつた。その憂さを

晴らすために、俺は、奥の女たちに手をつけて、女の柔らかさを求めた。まあ、空しいだけだつたがな」

義宣が自嘲するように笑うと、祥は悲しそうに眉をひそめた。

「八重は、そんな俺を汚らわしいと言つた。触れるなと言つた。俺は結局佐竹という名門が何よりも大事なのだと、八重は言つた。祥にも同じことを言われた」

祥はかすかにうなずいた。祥も、まだあの時のことを覚えていたのか。義宣は、祥が八重と同じことを言うのだから、随分と衝撃を受けたのだ。

「俺は、八重を無理やり抱いた。なぜ、この女はここまでかたくなに俺を拒むのか、と頭に来たのだった。憎かつた。たまらなく、八重が憎いと思つた。だが、俺が無理やり抱いても、八重は誰よりも美しかつた。むしろ、俺は八重が恐ろしくなつた。それからしばらくは八重の顔を見なかつた。あいつは、病と称して誰とも会おうとしなかつたんだ」

病と称していた八重だが、実際は仮病だつた。侍女の吉野が不義密通を働き、子をなした。それを八重は隠そうとしていたのだ。その吉野は、父に出奔しようと見られ、斬られた。吉野の子は、父がどこかに墓を建てたはずだ。

祥は眉をひそめたまま、黙つて義宣の話を聞いていた。義宣も、祥に返事を求めるこどもなく話し続けた。

「その後、八重の実家である那須家は改易された。妻の実家が改易され、俺は太閤殿下に離縁を迫られた。だが、不思議と、俺は八重を離縁する気には一度もならなかつた。だから、俺は八重を太田城に謹慎させた。八重がいる間に、太田城で南方の館主を謀殺したこともあつた。八重のいる太田城を、俺は血に染めた。それから二月後、今度は八重の血で、太田城は赤く染まつたのだった」

祥の手を握り締めたまま、義宣は俯いた。八重の血で赤く染まつた打掛けが脳裏に浮かぶ。義宣が最後に見た八重の顔は、怒りに燃え、義宣を憎むものだつた。

「俺が、八重を追いつめたんだ。無理やり抱いて、屈辱を与えた。

謹慎をさせた時、あいつは俺を憎んでいた。屈辱を感じていたのだろう。その上、寺へ幽閉しようとしたのだ。あの誇り高い女が、死を選ぶのは当然だ。だから、俺が八重を殺したようなものなんだ」

ついに言つた。他人に八重のことをするべて話した。義宣が八重に抱いていた思いも、何もかもすべて。祥はどのような顔をしているのだろうか。呆れているかも知れない。

「それから、今は茂右衛門と名乗つているが、金阿弥と出会つた。俺は、俺だけを見つめる存在が欲しかつた。だから、幼かつた金阿弥をそばに置いた。そして、抱いた。今は、もうそんな関係ではなくなつたが」

俯いたまま、茂右衛門との過去の関係も話した。金阿弥は、八重を失つた時に、ちょうど義宣の目の前に現れたのだった。義宣は、金阿弥の純粋さにどこか救われるような思いがあつた。だが同時に、幼い子どもにそんなことを求める自分を、醜いとも思つていた。

茂右衛門のことも話し終えると、義宣は目を瞑つて口を閉ざした。祥が何と言つのか、それを待つていた。祥の言葉を待つ間の沈黙は、さほど長くなかったのだろうが、義宣には随分長く感じられた。

「義宣さま」

「何だ？」

「あなたは、お八重さまに恋をなさつていたのね」

「恋だと？」

思いもしない言葉に驚き、思わず顔を上げた。祥は悲しげな表情のまま、義宣をまっすぐに見つめている。

「ええ。あなたは、お八重さまのことが誰よりも好きだった。だから、すべてを欲して、執着していたのだと思います」

「俺が、八重に惚れていた」

「けれど、お八重さまを欲した結果、あなたは奪うことしかできなかつた。わたしは、そう思います」

「八重のことが、好きだったのか」

自分が八重に惚れていたと言つことが信じられず、確認するようになっていた。呟くたびに、それは事実であるような気がしてくる。今まで見てきたどの女よりも、八重が美しいと思つのは、義宣が八重に惚れていたからなのか。八重に拒絶されて、無理やり抱いたのも、八重のすべてが欲しかったからなのか。

「義宣さまにとつて、お母上との問題も大きいけれど、一番の問題は、お八重さまなのでしょうね。お八重さまに愛されなかつたことが、お八重さまに自害されたことが、今でもあなたの心を苦しめていふ」

惚れていたから、離縁しようとは思わなかつたのか。自害されたことも、ここまで義宣を苦しめるのか。

涙があふれ出した。八重のことを思つと、涙が流れ出す。その涙を、祥がそつとぬぐつた。

「俺は、八重が好きだつた。この世の誰よりも。今更、分かつた。だが、どうすればいいのか、あの頃の俺はまったく分からなかつた。自分の気持ちを、持て余していたのだな」

「お八重さまを失つて、義宣さまをとても苦しまれたと思います。けれど、今わたしにこのお話をなさつたのは、なぜですか？」

「祥に、俺のことを知つてほしかつた」

「わたしに慰めてほしかつたの？」

「違う。祥は、自分のことを俺に話してくれただろう？話したくないことも話してくれたと思う。だから、俺も誰にも話せなかつたことを祥に聞いてほしかつた。俺は、祥の話を聞いて、祥のことを理解したと思った。俺のことも、理解してほしいと思つたんだ」

「今でも、わたしが御台さまに嫉妬して怒つてているとお思いですか？」

「もう、思つていない。すまなかつた、祥。俺は、これからどうすればいい？どうすれば、お前の言った、歩み寄るということができるのだろう？分からんんだ」

助けを求めるように、祥にすがつた。義宣の頬に、あたたかいも

のが触れた。祥の手が、義宣の頬を包み込んでいた。

「分からなかつた、という理由で、あなたがこれまでなさつてきたことが許されるのか、わたしは分かりません。わたしはお八重さまや、義宣さまのお手がついた女たちではありませんもの。ただ、わたくしは、今までの義宣さまを悲しいと思います」

「悲しい？」

「はい。これからどうすればいいのか、それはわたしにも分かりません。わたしも、独りよがりな考え方で、あなたを傷つけたのかもしれませんし」

祥が目を伏せる。そんなことはない、と言いたかった。だが、言つてはいけないような気がした。

「義宣さまの問いに、わたしは答えを持ちません。ただ、望みを申し上げることはできます」

「何だ？」

「奪う恋ではなく、『与える愛を知つてください。悲しい過ちは、繰り返さないで。わたしがあなたを愛すわ。だから、あなたは、お母上や御台さま、生まれてくるお子、茂右衛門のことを愛してください。できれば、わたしのことも愛していただけだと嬉しいのですけれど』

母に愛されなかつたと嘆いた夜、祥は同じ言葉を義宣に『与えた。

あの時から、祥は義宣に愛を『与えていたのだ。胸が詰まる。祥が義宣に与えているものを、義宣も人に与えられるのだろうか。分からぬ。だが、努力をする。今まで、八重や手をつけた女たちだけではなく、母にも茂右衛門にも祥にも、自分は何も『与えることはせず、ひたすらに求めていただけだつたのだろう。それは、ただ空しいだけだつたのだ。

八重に抱いた気持ちが恋だと言うのならば、祥には八重とは同じ恋という感情は抱いていない。だが、八重に抱いた暗く激しい感情とは違う、あたたかい感情を祥には抱いている。これが、愛するということなのだと思います。

「祥

「はい

「好きだ」

「わたしも、義宣さまが好き」

祥の目からも涙がこぼれた。今度は、義宣が祥の涙をぬぐつた。
祥の腕を引くと、祥は義宣の胸に体を預けた。腕をまわして、抱きしめる。

あたたかさが、体の奥までしみ込むようだった。

開く花（十四）

祥の胸に顔を埋める。義宣の髪が肌に刺さるのか、くすぐったそうに祥は身じろぎした。そのかすかな動きも、愛しいと思つ。

肩に手をかけ、襦に押し倒すと、祥はまるで処女のように恥じらつた。祥の裸を見るのは初めてではない。今まで、何度も情を交わしてきている。祥が恥ずかしがつたため、開けていた障子は閉めたが、月明かりが入るように隙間をわずかに開けていた。

かすかな明かりだとしても、自分の姿が映されて恥ずかしいのだろうか。初々しい反応が可愛い。

「祥」

「義宣さま」

互いの名を呼び、唇を合わせる。何度も口を吸つていううちに、祥の腕が義宣の頭を抱くよう、首にまわされていた。口を吸い、唾液が混じり合つると同じよう、義宣と祥の体もひとつになつていいくような気がした。

なぜ、祥を傷つけ、突き放すようなことが言えたのだろうか。祥は、今までもずっと義宣に愛を注いでくれていたといつのに。そのことが分からなかつたのだから、何と愚かなのだろう、と思つ。茂右衛門に、義宣は酷い、と言われたが、そんな言葉では片づけられない。

「好き」

唇を話した瞬間、小さな声で囁かれる言葉に、義宣は泣きたくなつた。なぜ、祥は今でもこうして、義宣のそばにいてくれるのだろう。

胸を掴み、肌を撫でていくと、小さく喘ぎながら、祥の体はだんだんと紅潮していく。赤みを帯びた白い体と、襦に広がる黒髪に目を奪われる。綺麗だった。祥は、綺麗だ。

祥の体に沈み込み、ひとつになるように、義宣は祥を抱いた。祥

のあたたかさに、体だけではなく、心も満たされていた。

一つの襦に二人で横になると、祥は甘えるように義宣の腕の中に収まつた。義宣は、黙つて祥の髪を撫でていた。そうしてみると、おだやかな気持ちになつてくる。祥の髪を撫でながら、今後祥をこのまま伏見に置いておくべきなのか考えていた。

祥は側室なのだから、伏見屋敷に置いておく必要はない。伏見の奥は母と琳のものなのだから、祥は常陸に帰した方がいいのかもしれない。琳は子を身ごもつているのだし、これ以上祥を伏見に置いておくのは、琳のためにもよくないような気がする。祥とともに伏見屋敷に来ている伯母も、常陸に帰つた方が、気が楽だとも思う。だが、せつからく祥とともに生きていくつと思つたのに、常陸に帰れ、というのは酷いだろうか。今までの義宣ならば、そばに置いておかなければ安心できなかつたが、今ならば離れていても大丈夫だと思える。もちろん、多少の不安は感じるが。

「どうかなさつたのですか？」

襦に横になつてから黙つたままの義宣を不審に思つたのか、祥は義宣を見上げてきた。

「考え方をしていた」

「まあ。わたしは、まだ義宣さまとの余韻に浸つておりましたのに、もう考え方ですか？」

「祥のことを考えていたんだ」

「本当？」

「何というか、楽しい考え方ではない」

常陸に帰らせた方がいいか考えていたのだから、楽しい考え方ではない。何と切り出せばいいか、なかなか思い浮かばない。仕方がないので、義宣は考えていたことをありのままに話すことにした。

「祥、伯母上とともに、常陸に帰らないか？」

「常陸に？」

「俺は、祥が嫌いだから言つてはいるのではない。それは、分かつてくれると思うが」

「ええ、もちろん」

「御台が身ごもつてゐるだらう。伏見に祥を置いておけば、気が休まらないかと思つてな」

「義宣さまの考へてゐることだが、何となく分かつたよつた氣がします」

祥は体を起こして夜着を整えた。義宣を見つめる祥の目は静かで、義宣の考へに反対してゐるわけではないようだ。

「では、わたしは養母と鏡田とともに、下河辺へ帰ることにいたしましよう」

「いや、下河辺の館ではない。前に、伯母上にも言つただろう。今度帰国したら、水戸城内に住んでもらうと」

「では、水戸のお城に？養母とともに参つても、よろしいのですか？」

「ああ。まず、国に書状を送つて、城内を整えさせる。それから、伯母上たちと帰ればいい」

「分かりました。では、お子が無事にお生まれになるよう、水戸でお祈りしながら、義宣さまのお帰りをお待ちしております」

祥が頭を下げる。髪が頬にかかつた。その髪を耳にかけて、義宣は祥の頬を撫でた。その手に、祥の手が添えられる。

「いつになるかは分からぬが、俺が帰国した時、八重の墓に一緒に行つてくれるか？俺は、八重が死んでから一度も墓に手を合わせていない」

「ええ、参りましたよ。でも、何だか少し妬けてくるわ」

ふふ、と笑つた後に、祥は口許を手で隠し、目を伏せた。はつとしたようだったが、どうしたのだろうか。

「お亡くなりになつた方に嫉妬をする女は、お嫌いですか？」

「まさか。祥の方こそ、いい加減俺に愛想を尽かさないか？」

「いいえ。あなたが愛しい」

義宣も祥が愛しい。たまらなくなつて、義宣は祥を抱きしめた。祥の手も義宣の背に伸ばされる。祥を大事にしたい。愛しい。目が

合つと、どちらともなく唇を重ねた。

これが、幸せというもののなだと思った。

それから半月後、祥は伯母と鏡田とともに常陸へ向けて発った。水戸城内を整えるように命じた書状はまだ届いていないだろうが、祥たちが到着する頃には、城内も落ち着いているはずだ。

出立前、伯母は祥から話を聞いているのか、義宣を見て笑った。鏡田は、まだ怒っているようで義宣に対する態度が良いとはいせず、祥に注意されていた。義宣が祥にしたことを思えば、鏡田の態度はもつともだ。

祥は別れ際、無事に子が生まれて、母子ともに健康であるように、と祈りを口にし、伏見を去つて行つた。秀吉の容体が芳しくない状態では、いつ帰国できるか義宣は分かつたものではない。次に会う時までのために、祥の顔をじっと見つめた。祥も義宣を見つめ、微笑んでいた。

祥の一行を見送り、屋敷に戻ると、ちょうど茂右衛門と会つた。茂右衛門には祥の出立の手配をさせていたのだ。よつやく、仕事が一段落したのだろう。

「岩瀬様は、無事に」出立なさつたようですね」

「ああ。次に会えるのはいつになるのやら」

「ならば、ずっとおそばに置かれればよろしかつたのに」

「それは、駄目だ」

義宣の言葉を聞いて、茂右衛門は目を丸くした。この間まで義宣のそばに置かれ続けていた茂右衛門にしてみれば、信じられない言葉だったのだろう。驚いた後に、茂右衛門はにやりと笑つた。元服してから、茂右衛門は少し生意氣だ。だが、その生意氣なところも義宣は気に入つてゐる。

もう昔のような関係ではなくなつたが、今でも茂右衛門はほかの家臣の誰よりも特別だった。

「そうですか。では、私はほかにも仕事がござりますので、失礼いたします」

礼をして義宣の前を去ろうとする茂右衛門を呼びとめて、すまないと言謝ったかった。だが、今まで義宣が茂右衛門にしてきたことは、謝つて済むものではなかつたし、謝るべきではないような気もする。謝つて樂になるのは、義宣だけだ。

茂右衛門を呼びとめようとした手を下ろし、義宣は琳のもとへ足を運んだ。腹の中の子が急激に成長するわけはなく、琳の様子はあまり変わっていないようだつた。だが、琳が言つには、この間腹の中の子が動いたらしい。義宣も琳の腹に手を当ててみたが、よく分からなかつた。

祥が常陸へ向けて出立してから半月も経たないうちに、三成から急の知らせが届いた。それは、秀吉が伏見城で息を引き取つたことを伝えるものだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9993t/>

道程

2011年8月19日19時35分発行